
神の代行者にされし者

ヴェルク・ネオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の代行者にされし者

【Nコード】

N9325N

【作者名】

ヴェルク・ネオ

【あらすじ】

気がつくと俺は知らない場所にいた。そこで見知らぬ男に魔法少女リリカルなのはの世界の神の代行者になって世界を好きなようにしろだと？

プロローグ1（前書き）

この作品は文才0の私の初めての作品です。

何も知らない主人公がいきなりなのは世界の神の代行者になる話です。

オリ主チート最強ものです。

それでもかまわないという人はお読みください。

プロローグ1

目が覚めると周り全てが真っ白い空間で誰もいなかった。

「あれ、何で俺こんな所にいるんだ？」

「それはわたしがあなたを神の代行者に選んだからですよ」

「へ！？」

声が聞こえてきた方に顔をむけると20代後半くらいに見える見知らぬ男が立っていた。

……周りに誰もいなかったはずなんだがな

「お前は誰だ？　そして神の代行者？　なにそれ、美味しいのか？」

「私は神です！　そうです！　美味しいです！　では頼みました」

見知らぬ男は俺に背を向けここから去ろうとする。

「いや、ちょっと待て。冗談を本気にするなよ！　あと、あんた頭大丈夫か？　中二病か？」

……美味しい神の代行者ってどんなんだよ！？
ああ、この男、あれか。中二病の末期だな。

「失礼な人だな！ 大丈夫ですよ！ いきなりそんなこと言うてくる貴方こそ、初対面の人にそんなこと言うなんて失礼ですよ！」

「いや、だって神の代行者とかいきなり言われたらなあ……」

「あ、そうでした。説明してませんでしたね。では証拠をみせましょう」

男はそう言うといつのまにか持っていたナイフを俺に向かって投げつけた。

俺はいきなりすぎてまったく反応できずにナイフは腹を貫通し刺さった。

「な、なにを……」

なんて奴だよ、こいつ！ いきなりナイフを刺すなんて……

俺こんなところで死ぬのか…… 短い人生だったなあ……

「オーバーなひとだなあ。傷一つついてないのに。演技上手いですな」

は！？ お前がナイフ刺しておいて何を！ と男に対する怒りがわき出てきた。

「ふざけるな！ お前がナイフを刺したんだろうが！ 何が演技だ！ この中二病が！」

「誰が中二病だ！ それにナイフで刺されたのに普通に喋れるのをおかしいとは思わないんですか？ 自分の腹部を良く見てみなさ

い！」

俺は言われて自分の腹を見た。ナイフは俺の腹にざっくり刺さっている。

……あれ？ 血が出てない？ それにまったく痛みを感じてないな、言われてみれば……

「な！？ なんで俺ナイフで刺されたのに平気なんだ!？」

「どうです？ これが神の代行者の力です。普通の人間なら致命傷でも

神の代行者なので死なないんです。これで私が頭がおかしい人でも中二病でもないとわかりましたか？」

男が無茶苦茶偉そうにふんぞり返って言った。

「……………」

普通なら戯言だと聞き流すんだがな……

腹にナイフがざっくり刺さっていても血が全く流れないその事実があるので俺は反論出来なかった。

「沈黙は肯定ととらせてもらおうよ。他の詳しいことは今からあなたの頭の中に直接インプットします。それであなたの疑問に思っていること全てが分かりますので……あ、でもその前にナイフ抜いたらどうですか？ 刺していてなんですけど……すごくシユールな光景なので……」

確かに……自分で見てもなんかシユールだ……

血がでてないだけお化け屋敷の落ち武者とかよりも逆にきもいか

も……

ってことは俺、落ち武者以下！？とか思いながら腹からナイフを抜こうとして
ナイフを握って引くとほとんど力を入れてないのにスポツと抜けた。

ナイフを抜いた後、頭が割れたかと錯覚するような激しい頭痛が俺を襲った。

「!?!? ぐ、ぐわあああああ!?!」

俺はその痛みに耐えられず悲鳴を上げた。その時に手に持っていたナイフを落としてしまった。

「インプット終わりましたよ。これで神の代行者が何かわかったでしょ?」

俺は自分の知らないはずのこと……いや知らなかったはずのことと言った方がいいだろう。

知らなかったはずのことを知っている。

確かに俺の記憶にまったくないことがすごく鮮明にわかる。

神の代行者とはその名の通り、神の代行を務める。

神の代行者になった者はその世界を見守る義務があるらしい。

しかし別に世界をどのようによつといい。

「なあ、別に好き勝手にいいなら世界を放っておいても問題ないんじゃないか?」

世界を無茶苦茶にしていいたら神がいよつがいまいが関係ないだろ?」

「いえ、それがああるんです。実はこの世界にはたまに他の世界から異物が来ます。その異物は世界を無茶苦茶にすることが多いので退治して下さい。この世界以外の物がこの世界を崩壊させるのだけは止めて下さい。後は好きにしていいますから。これで何をすればいいか、わかりましたか？」

「ようするに異物さえ倒しておけば何やってもいいってことだよな？」

「ええ、あと足に刺さってるナイフを抜いてください」

言われて足を見るとナイフが足に刺さっていた……

俺、足にナイフが刺さっているのに言われるまで気づかなかった

……

俺はしゃがんでナイフを足から抜いた。

「……確かにわかったが最初にナイフを突き刺す必要あったのか？ 最初から頭の中にインプットすれば普通は信じるぞ。それでも信じなければナイフを刺す、それからでも遅くはなかったんじゃないか？」

「……そうですね」

俺は男を白い目で見た。いきなりナイフを刺されたんだからしかたないだろ！

あんなもん、臆病者ならトラウマもんだぞ！

「まあ、いいじゃないですか。わかったんですから」

「こいつ、全く反省してないな……」

「……いや、お前なあ、分かったらいいもんじゃな……」

「じゃあ、後は説明役がいるんで詳しいことはその子に聞いて下さい。じゃあさようなら」

俺の皮肉は全て話し終える前に素晴らしいスルースキルで無視された……

そついい残し男は煙の様に消えていった……

なんて奴だよ、あいつ……

プロローグ1（後書き）

始めましてヴェルク・ネオです。

主人公の名前や能力は次の話で書くことにします。

駄文ですが、出来ればこれからもこの作品をよろしくお願いします。

プロローグ2（前書き）

今回で主人公の名前と能力の説明です。

プロローグ2

俺は今、男が去る時に、説明係が来ると言い残したので待っている。

でも、だいぶ待つてるのに一行に来る気配ないじゃないか！俺がイライラしていたが

「どうも、待たせてすみません」

後ろからそんな声が聞こえた。やっと来たか……

振り向くと見た感じ15、6歳くらいでピンクの髪の毛のきれいな女の子が立っていた。

「始めまして、ミラと言います。さっそくですがあなたの名前を決めてください」

「いや、決めるって俺にはOOOOって名前が……って名前が言えない！？まさか！？名前を一字以外盗られたのか！？」

「それなら一字分の名前は言えるでしょう…… 神の代行になるまでの名前は使えないんです。なので新しい名前があるんです」

なん……だと…… 名前が使えないだ！？

だが、そんなことをクヨクヨしても仕方ないか……

いや まだだ！一字変えれば名前が言える筈だ！

俺の名前はOOO也だ！……変えた部分しか言えないだ！？

「一文字しか変えないんじゃない意味ないでしょ……諦めて新しい名前を付けた方がいいと思いますよ」

た、確かに……俺は諦めて言われたとおりに新たな名前を考え始めた。

……名前なあ……どうせならかつこいい名前をつけるか。考え始めてから5分くらい経ってミラが口を開いた。

「では、考えている間に能力の説明をさせてもらいます。まず始めに言っておきますがあなたが神の代行者になる世界は魔法少女リリカルなのはというアニメの世界です。なので魔法を使えます。その世界の基準で言うとSSSを遥かにこす魔力を所有することになります」

え？ 今、なのはって聞こえたような……でもあれはアニメだから世界なんてあるのか？

聞き間違いかもしれんな。もう一回、聞いてみるか。

「……すみません。どこの世界かもう一回、言ってください」

「……もう一度だけ言います。あなたが神の代行者になる世界は魔法少女リリカルなのはというアニメの世界です！」

「それは本当なのか？ 嘘でしたっていうオチじゃないですか？」

「本当です」

な、なんだと！？ なのはの世界だと！？

……夢じゃないよな。俺は頬をつねってみる……痛い！

夢じゃないってことはなのはやフェイトに生であえるのか！？
な、何だと！？ 信じられん……しかも魔力もsssごえだと！？
チートじゃないか！

「他に何か欲しい能力などリクエストがあれば手にいれられますか？」

……ただでさえチート級なのにさらに自分の好きな能力を手に入られるだと！？

「な、ならスパロボに参戦したことのある全機体のバリアジャケツトにパイロットの能力、ティルズの魔法や技も使えるようにして、あと機体改造MAXで強化パーツつけ放題、精神コマンド使い放題で」

俺はスーパーロボット対戦とティルズが特に好きだった。

なので、それらの能力が欲しかった。

でも、全ては無理だろうなあ。たぶん、条件付きとか何かの制約があるだろうなあ……

「わかりました。で名前は決まりましたか？」

……スルーですか？ 冗談抜きでさっき言った力が使用できるのか！？

「……さっき言ったチート能力全部使えるのか？」

「はい。問題ありません。全て使用可能です」

い、いよつしやああああ！ これで原作を俺ごのみに変えられるぜ！
まず、管理局潰しだろ。それから…… おっと危なかった。
危つく自分の名前を考えるのを忘れるところだったぜ。

今決めた名前がこれから俺の名前になるんだよな。

変な名前はつけられないな…… 一生の恥になりかねん……
なら、俺のかつこいいと思ったキャラの名前でいくか。
しかし、そのままでは芸がないな…… なら二つの名前をくっつけ
るか。

俺は意を決して口を開く

「ジーク・クラインだ」

ちなみにくつつけたのは超重神グラヴィオンのキャラと鋼鉄ジークだ。

サンドマンかつこいいからな〜 ジークは台詞が最高だ。

「ジーク・クラインですね。わかりました。では神の代行者の仕事がんばってください」

俺の名前が決まるとミラがそう言った

すると俺の足元にいきなり穴が出来た……

「まさか……」

「さようなら〜」

「落ちるのかよ〜!?!」

俺は出現した穴に落ちて行く。

……地面に当たった時痛いんだろっなあ……
俺は落ちながらそんなことを考えていた……

プロローグ2（後書き）

次回から原作ブレイクが始まります。
よろしくおねがいます。

「話　いきなりすぎるだろ!？」

気がつくと俺はどこかの公園に倒れていた。

「あれ?どこどこ?私は・・・ジークか」

俺の名前〇〇〇〇じゃなくなっただよなあ・・・

あれ?どこどこだ?俺、確か穴に落ちて、それから……

「ここは海鳴市ですよ」

「海鳴市?　そ、それってまさか魔法少女リリカルなのは……」

「そうです。その海鳴市です」

な、なん……だと……!?!?　……あれ?　でも、俺、誰と喋ってるんだ?

「あれ、なんで誰もいないのに声が聞こえるんだ?」

「いや、いますよ。ここですよ」

だが、周りを見渡しても人はいなかった。

「腕です。腕を見て下さい」

その言葉で声が俺の腕から聞こえることに気がついた。
見てみると今まで見たことのない腕時計がついていた。
あれ？ こんな時計もってなかったはずだぞ……

「どうも、私はさっきお会いした男の人格がコピーされたデバイスです」

人格コピーについて俺は聞いたことがあったので

「人格コピー？ それは確かガオガイガーのロボットのAIのことか？」

人格コピーで思いついたからだ。ゴルディマーズだったっけなあ。

「そうです。それとほぼ同じだと思ってください」

「じゃあ、もう一つ、デバイスってなのは世界の魔法使うためのやつ？」

「そうです。ちなみにコピーしたのはあの時のナイフをあなたに刺した男の人格コピーです。これからあなたが能力を使うときのサポートなどを中心にさせていただきますのでよろしく「きゃあああ
あ「お……」

デバイスが言い終える前に女の子の悲鳴が聞こえてきた。
あれ？ この声ってもしかして……

「おい、いまなのは世界の原作で言うところへん何だ？」

「高町なのは魔法少女になる所ですね」

「つてことはこれはなのは悲鳴だよな？」「そうなりますね」……
「なんだと！？　これは見逃すわけにはいかない。」

俺は悲鳴のした方向に一目散に走りだした。

なのは魔法少女になる所を見たいからだ。

悲鳴が聞こえてきたであろう場所にたどり着いた。

そこでは小さい少女　なのはが黒いどろどろした物体2体にお
そわれていた。

変身見れなかった……　チクショー！　あれ？　何か違和感が……

「そうだ！　あの黒い物体って一体じゃなかったっけ？」

俺の記憶が正しかったら一体だけだったと思うんだが……

「もうすでに世界に異物が紛れ込んでいるみたいです……あいつは本当は一体だけだったので高町なのはが封印できていましたが1対2では負けてしまいかもしれません」

「な、なんだと！？　まずいぞ！　こうしてはいられない！」

俺の腕時計が話したことを聞いた瞬間、俺は走り出した。

「どうするつもりですか？」

「決まっているだろ！　助けるんだ！　こんなの目の前でみてるるかよ！　こんな当たり前のこと聞くんじゃない！」

「マスター待ってください！ あなたはまだ能力を何も使えないんです。今行ってもむしる足手まといになるだけです」

「そんな！？ じゃあこのまま見ておけっというのか！？」

「ちがいます。私に名前をください。名前をもらえればバリアジヤケットをセットアップできます。そうすればあんなの簡単に倒せます」

「おまえの名前をつけたらあの怪物を倒せるってことか？」

「はい」

「あんな黒いスライムどうやって倒すんだ？」

「マスター、あなたは自分のチート能力を忘れたんですか？ 私の名前を決めてもらえれば使えるようになります。そうすれば、あんな奴、余裕綽々、油断大敵ですよ！」

あきらかに言葉の使い方、間違ってるよな……

本人は能力が使えるれば余裕ですって言いたいんだろうけど……

名前か…… どういう名前がいいかなあ……

でも、あんまりじっくり考えていたら、なのはがやられてしまうかも……

しかたない、俺の名前を決めた時と同じようにするか。
あまりいい名前じゃなくても恨まないでくれよ。

「ソル…… ジガン……」

「すいません、もう一度言ってください」

「世界の闇を消去する、ソル・ジガンだ」

ちなみにソルは世界の闇を照らし、消滅させる太陽。

ジガンはスパロボOGの最強の盾　ジガンスクードだ。

命名の理由は弱き人々の盾となる力を持ったデバイスになって欲しいという俺の望みからだ。

「わかりました。素敵な名前をありがとうございます。ではセツトアップしてください」

俺がつけた名前に満足してくれたようだ。よかったぜ！

「名前を言えはいいんだな？」「はい」よし、ソル・ジガン・・・セツトアップ！」

俺は叫んだ。俺の周りを眩いばかりの光が包む。

光が消滅したら俺は青の基調とした二本の角を持つ二足歩行の機体。

ゲシュペンストMK-?の姿になっていた。

「これは……　スパロボの……」

体から力がわいてくる、これなら行ける！

「いきましようマスター。少女をたすけましよう」

「ああ！」

そう答えて俺はなのはが現在戦っているところへ突っ込んだ。

ユースサイド

僕は今黒い物体となったジュエルシールド2体に襲われている少女・
・なのはを応援している。

最初は一体だけで勝てそうだった。

だけど、封印の呪文を唱えている間にもう一体が出てきて邪魔を
してそこからは完全に不利になった。

なのはが戦闘が初めてなので簡単にジュエルシールドに接近されて
しまう……

しかし体当たりはバリアで防げる。

でも封印しようとしたらもう一体が邪魔をする。

堂々巡りだ。このままじゃいつか押し切られてしまう。

そう考えていたら黒い物体が二体同時に前後から突っ込んできた。

なのははどっちに対応すればいいかで混乱している。まずい！

僕はなのはが体当たりを食らう瞬間目をつぶってしまった。

しかし目を開けると黒い物体二体を片手ずつ押さえている青い口ポット？ がいた。

ユノsideout

なのはのいる場所へたどり着いた時、なのはは二匹の物体の前後からの体当たり直撃を受けそうだった。

俺はなのはが物体の攻撃に直撃するすんでのところまでその二体をうまく片手ずつで抑えていた。

そして俺は顔をなのはの方へ向けた。

「（なんとか間に合った・・・）怪我はないか？」

「え！？は、はい」

「俺があいつらを抑えるからその間に封印してくれ」

「は、はい。わかりました。」

俺が喋るとなのはは少し驚いているようだった。

まあ、しかたないだろうなあ　いきなりロボットが喋ったんだからなあ。

だけど長々と話をしている暇はないよな……　説明は省くとするか……

ジークは物体達の方を向いた。

「……行くぞ」

俺は片手ずつで抑えていた物体たちを持ち上げて地面に叩きつけた。

すると黒い物体は二体とも破裂し分裂して小さなスライムみたいになって周りに飛び散った。

しかし、俺達の目の前で小さなスライムが集まって元の形になり始めた。

そして二体だった黒い物体は一つになった。
しかし、大きさは元の2倍近くの大きさだ。

「にやあああ！大きすぎるよ！？」

なのはが叫ぶ。

……確かにでかいな。　だが、この状況では一対二よりは戦いやすいな。

強い技で一撃できめてやる！

「一体になつたならむしろ好都合だ」

俺は電気を体にまとい高く飛び上がり
物体に向けて急降下し

「くられ、究極！ ゲシュペンストキイイイイック！！」

急降下の速度を利用しての飛び蹴りを黒い物体におもいつきりぶち当てた。

すると黒い物体は破裂し分散し、また欠片達が集まり元の形になった。

だが、さっきの一撃で異物は消えたらしく残ったのは合体するまでの一体分の大きさだった。

ダメージは残ってるらしく、動きも遅くなっている。
チャンスだ！

「いまだ！ 封印しろ！」

「リリカル、マジカル、ジュエルシード封印」

レイジングハートから桃色の光線が何本か飛び出して物体に絡みついた。

そしてレイジングハートに光の翼がはえた。

「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル21……封印！」

なのはは呪文を唱え終えた。

黒い物体は新たにレイジングハートからでた光に貫かれて桃色に
発光して消滅した・・・

一話 先が思いやられる・・・(前書き)

正直ちょっと無理やりかなと思いました。
だが後悔はしてない。

二話 先が思いやられる・・・

俺はなのはがあのジュエルシード達……一体は異物か……を封印が成功するところを見ていた。

封印が終了してジュエルシードが一つ物体が消滅した所の落ちていた。

思ったほど強くなかったな、強そうなのは見た目だけか……

まあ見かけより強いと困るけどな

……メカノイドやばかったなあ……見かけ弱そうだったのに……

と考えていたら

「あの、助けてもらってありがとうございます」

なのはが話しかけてきたからだ。まさかアニメキャラと生で話せる日が来るとは……

話したい、凄く話したい！……でも今はゆっくり話している余裕はないなあ

「何、たいしたことはしてないさ。それよりもここから早く離れたほうがいいんじゃないか？

だんだんパトカーの音が近づいているぞ。」

まあ、こんなに派手に戦って来ないほうがおかしいけどな。

だって道路はえぐれてるし、塀は一部が粉々になっている。逆にいままで人が来なかったのが不思議なくらいだ。

「にゃああああ！ 本当だ早く逃げないと！」

「じゃあな。」

あせっているのはを尻目に俺はそう言ってここから去ろうとしたら、

「待つて、私はなのは、高町なのはです。あなたは？」

なのはが名前を聞いてきた。

やべー、フェイトに名前を聞くシーンを思い出してしまった。

「…………デュオ・マックスウェルだ。じゃあな、なのは」

そう言って俺は今度こそ、ここから去った。

「マスター、何で偽名なんて使ったんですか？」

バリアジャケットを解除して近くにあった公園で一息ついているとソルが話しかけてきた。

「原作を変える為だ。名前が知られてしまうと困ることをするかもしれないからだ」

「何するつもりですか？ 教えてくださいよ？」

「もうちょっと後で出来るか確認してからいつてやるからそれまで待ってくれ。悪いが俺は机上の空論は嫌いなんだ。出来るという確証がないから言う気はない」

「（むう、気になるけど教えるきなさそうですね）わかりました、でもなるべく早くおしえてくださいよ！」

「ああ、わかってるさ。でも今気づいたんだが、俺帰る家ないよな。しかも金ないしこれからどうしよう、とりあえず今日は野宿するしかないのか・・・」

俺は途方にくれていた。せめて野宿か……寝袋があればなあ……

「安心してくださいマスター、こんなこともあるつかと家や金銭関連についてはなんとかかしています。」

なん・・・だと・・・？

「何！？本当か、ソル！？」

「はい、しかも金銭は日本の年間国家予算以上あり、家は豪邸を用意しました。しかも鍵をもっていなければ、泥棒どころかネズミ一匹入れないセキュリティシステムです。」

なんだと！？ 家があるどころか豪邸？

しかも国家予算？ やべ〜 家なき子からイッキに超大金持ちじゃない。

スツゲー嬉しい！

あれ？ でもどうやったんだろう？ ……まあいいか。細かいことは気にしないでおう。

「ナイスだ！ ソル。」

「恐れ入ります。ではその豪邸に行きましょう。」

そして歩くこと20分くらいで着いた。

思ったよりなのは達の家にも近いしすごくいい場所にあるな。ソルって以外と出来る奴なのか？ と思っていたが……

「じゃあ、ソル、鍵を貸して」

「あつ……すいません。中に置いてます。」

「はあ、しかたないなあ。じゃあ無理やり入るか。「やめておいた方が……」別に自分の家なんだからいいじゃないか」

俺は門のドアノブに手を掛けた。鍵はかかっついていなくて簡単に門は開いた。

「あれ？鍵かかってないじゃん。よかつた〜」マスター危ない！「っ！」

なんとドアを開けたら前に大砲がありディバインバスター顔負けの光線が飛んできた。

「マスター！ ドアを閉めて！ 早く！」

「うわっ!?!」

なんとか紙一重で光線が当たるまえにドアを閉められた。

光線はドアに当たった瞬間消滅した……

無茶苦茶驚いた…… だってドア開けたら光線が飛んでくるなんて誰が予想できるんだよ！

誰でもあせるわ！ なんだよ、今のは!?!

「なんだこれは！ ソルどういうことだ!？」

「さつき言ったじゃないですか。鍵を持ってないとネズミー匹は入れないって……しかもあんなの序の口ですよ。SSオーバーの魔導師でも鍵のある最深部に入れないようになっていきます。

最深部には未来の情報がありますから盗まれるとまずいので……」

そ、そんな…… 何でそんな大事な鍵を忘れるんだよ!？
……やっぱ、訂正、こいつ役に立たない。

「しかし、目の前に自分家があるのに入れないなんて……なんとかならないのか? ソル」

はあ〜 せつかく家に入ったと思ったのに……
ネズミー匹入れないんじゃない? 侵入も出来そうにない……
パスワードを忘れたときくらい絶望的だ……

「いえ、入る方法があります。」「な、なんだと!？ 本当か!？」
はい」

「な!？ この超時空要塞化している豪邸にどうやって入るんだ? 秘密の抜け道でもあるのか?」

「いえ、秘密の抜け道はありません」

「じゃあどうやって?」

「それはですね……」

ソルに豪邸　自分の家にどうやって入るかの方法について聞いた。

何で自分の家に入るだけでこんな危険なことしなければなら
ないんだよ！

はあ〜　　俺は肩を落としながらその作戦を実行しようとした

……

一話 先が思いやられる・・・(後書き)

どうでしたか？

次回にどのように原作ブレイクするか明らかになります。

人物紹介と能力紹介

登場人物の説明・能力紹介など。

ジーク・クライン

神の代行者にされた男。正確は基本的に落ち着いている。

しかし、目の前で困っている人がいると放って置けない。

そういうときはむしろ熱血漢になる。

身長 デフォルトは175cmだが自分の年齢や姿を変えることが出来るのでよく変わります。

デフォルトの容姿は若干中性的で茶髪、髪の長さは首にちょっと掛かるくらい。

ぶっちゃけTOGのアスベル。

能力

1・・・スパロボ参戦機体の全てのパイロットの能力を使える。

たとえば某ガンダムファイターの能力でもものすごい身体能力になる。

炎を自在に操るなど（灼熱のファイヤーゴール！）

2・・・テイルズの術や技をすべて使用できる。

ただし、武器がないなどで実際はソルをセットアップしないとほとんど使えない。

3・・・スパロボの強化パーツを好きなだけ付けれる。

4・・・スパロボの精神コマンド使い放題（ただし気力を上げるコマンドは使えない）

この能力を使用した時には<>によって表示される。

例<必中> <ひらめき>など。 超チート能力。

3、4についてはスパロボ参戦機体のバリアジャケット発動中のみ使用可能。

5・・・???

まだ明かせません

この5つです。
ちなみに魔力はSSSを余裕で超えています。

ソル・ジガン

この世界の神の人格がコピーされた腕時計のデバイス。

高性能で優秀だが詰めが甘いのでジークには優秀だとはあまり思われていない。

しかし、信頼されてないわけではない。

セットアップした際のバリアジャケットには大きく分けて2つの種類がある。

1つ目・・・スパロボの参戦機体のバリアジャケット（このバリアジャケットは任意で変更可能だが一度機体をバリアジャケットにすると5分は変更が効かない。）

この時はその機体の技や能力が使える。

だが戦いたくないときなど気合が入っていないと使えない技もある。

なので基本的に戦闘が始まってすぐのは強い技を使えない。
しかし、気持ちが高ぶっていると最初から使える。

2つ目・・・テイルズのバリアジャケット。

モードに剣士、魔法使い、精霊召喚師、魔法剣士、格闘家の5つがある。

(ただし、空を飛べるのは魔法剣士のみ)

以上です。

三話 これからの予定（前書き）

今後のことについてです。

まあ少し変わるかもしれませんがね。

三話 　　これからの予定

ジークside

はあく家に入るのにここまで苦勞するとは思わなかった……
ん？どうやって入ったかって？　　まずソルにバリアジャケット
の変更方法について教えてもらい

EVA初号機になつて<鉄壁>をかけた。そして襲いかかつてく
る光線の嵐の威力全て4分の一にした。

そして全てのビームをATフィールドで防いで何とか中に入れた。
……それでも十分怖かつたけどな……　　だって四方八方からビ
ムが飛んで来るんだぞ！？

中に入ると今度はバリアが張つてあつた。

それをマゴロクEソードでぶつた切り、鍵をゲットした……と言
う訳だ。

ホームアロンで家に侵入した奴らの気持ちがあつたぜ……

自分の家侵入大作戦が成功してしばらくたつた後。

「さてと、ソル　ここにコンピューターはあるか？」

「ありますけど、何するんですか？」

「管理局のネットワークをハッキングする。これで管理局の闇を
すべて調べる。確か原作では、違法研究を自分で定めておいて、こ
っそりやっていたからな」

「調べてどうするんですか？」

「研究施設を破壊してできないようにする。俺は神の代行者だろ？こんなこと許しておけない。俺には力があるんだ、それらを止めれるだけのな」

「マスター・・・そこまで考えていたんですか。わかりました、こちらです」

ソルは俺のパソコンを使う動機に納得してパソコンのある所に案内した。

案内された所には小さな小屋くらいの大きさのサーバーとパソコンがあった。

でかいな…… まあ、感心しててもしかたないか。それにでかくて高性能な方が今からやることにはいいしな。

俺はキーボードの前の椅子に座った。

「さて、でははじめますか」

俺はスーパーコーディネーターの能力を取得してハッキングを始めた。

うわ~~~~ 管理局の闇が出てくる出てくる。

人造魔導師を造って子供の頃から戦闘訓練をつまし教育することで管理局の忠実な駒にする計画。

スカリエツィや他の科学者の違法研究の援助。

力でおどして現在の第17管理世界を無理やり管理世界に登録など。

本当に腐ってんな管理局…… すっげー呆れるわ。

「凄い量ですね。こんなにあるんじゃないですか？」
「人で止めるのは到底無理だと思いますが？」

ソルが痛い所を突いてくる。

「俺だっつてわかってるさ、いくら一人でがんばっても個人では限界があることくらいな」

「じゃあ、どうするんですか？」

「とりあえず原作でアースラが出てきて管理局と接点を持つまでは個人で違法研究施設を潰すのと異物を倒すこと以外は特に何もする気はない。原作ブレイクもストーリーを大きく変えないようにしようと思っ」

「なんでですか？」

「できることが特にないからだ。 アリシアを助けようとも思っただが、死んだ人は蘇ってはいけないんだ。死ぬのは自然の摂理だからな。それに逆らってはいけない。それにそんなことをすれば管理局がアリシアを連れ去り研究材料にしようとするのが目に見えている。だから助けるのはプレシアだけだ」

「そうですか。わかりました」

管理局を潰すなら内部から潰さないとな……

だって、あれでも地球の警察と同じなんだぞ！

なくなったら犯罪が凄く増えるだろうな、捕まる心配がなくなるから……

「あと聞きたいんだが、異物がこの世界に現れたら分かるのか？」

「はい、私のレーダーに反応します。（＜今は＞ですけどね。（」

ふう、よかった〜 異物がこの世界に現れても分からないんじゃないかな
どうしようもないからな。

「そうか。なら異物が出たらいつでもすぐに教えてくれよ？」

「わかりました」

それから、しばらく管理局の闇を調べていたら眠くなってきた。

今何時か気になって時計^{ソル}を見ると午前1時を過ぎていた。

どおりで眠いわけだ。なのでソルに寝室の場所を聞いて、もう寝ることにした。

「じゃあ、そろそろ寝るな。おやすみ、ソル」

「おやすみなさい、マスター」

明日からは忙しくなるだろうな。

そう思いながらおれは眠りについた。

それから少し後……

ソルside

マスターは寝てしまったようです。

しかし、原作ブレイクをほとんどしないで世界のことを考えると
は……

これまでの他の世界から来た人では考えられませんね。 ……ま
あいいでしょう。

私はマスターのデバイスです。

マスターについていっただけですから、その結果どのようになろう
ともね。

そうして夜はふけていった……

三話 　　これからの予定（後書き）

どうでしたか。

ソルの何か思わせぶりなところはこれからの話の伏線です。

四話 違法研究？（前書き）

どうもヴェルク・ネオです。

な、なんと私がこの小説を書くきっかけになった作者さまから感想をいただきました。

もの凄く嬉しいです。ありがとうございます。

四話 違法研究？

ジークside

今、俺はとある管理外世界にいる。なぜならこの世界にある違法研究所を潰すためだ。

昨日、管理局のデータをハッキングして調べた時に出てきた違法研究所の中で一番行きやすい場所にあった研究所だ。

どうやって来たかという違う世界どうしをつないでいるゲートを通ってきた。

これは神の代行者に与えられるアイテムだそうだ。

「しかし、どうやって潰すかな？」

「外から攻撃して木っ端微塵にしてはどうですか？」

「あほ、そんなことしたら中の奴ら全員死んでしまうだろ。中には実験対象にされている子供とかがいるかもしれないんだぞ」

俺はソルの意見を木っ端微塵にした。

本当にこいつは何も考えてないな……

ソルの言うこと信じてたら、俺、そのうち酷い目にあつかも。

いや、既に一度あつてるか…… はあ〜

「では、中から入りましょう。ただ気をつけて下さい、侵入者排除システムとか警護している奴がいるかもしれないですから」

「大丈夫だろ。俺の力ならそうそう負けないだろ」

実際、チートだからな。そう思いつつ俺は気を引き締めた。いくらチートでも油断したらやられるかもしれないからな。さてと……

「じゃあ行くか」

「はい」

そして俺たちは違法研究所に入っていった。ドアを破壊し中に入った瞬間、警報機が鳴った。

「侵入者発見、侵入者発見」

警備用と思われるロボットが出てきた。四本足で足についた車輪で動いている。甲殻機動隊のやつみたいだなあ。

数は・・・4機か思ったより少ないな。もっと警備強いと思ってたのに。

まあ、少ないほうが楽だけだな

「まあいいか。ソル、セットアップだ」

「わかりました」

ジークの体が光につつまれ、光が消えた。
すると、そこには服は青でズボンに黒そして籠手を腕に着けてい
る。

肩にはプロテクター、鉄で出来た靴を履いていて左の腰のベルト
に鞘に入った剣がついている。

まるでどこかの騎士団のようなバリアジャケットをまとっていた。

「さてと、こいつらあんまり強そうではないな。武器も見当たら
ないしな。なら弱い技で十分倒せるだろう」

「まあ、マスターならお茶の子さいさいでしょうね」

「だよな？　じゃあ行くか！　くらいな、魔神剣！」

俺は地面を剣で斬って指向性を持った衝撃波を作り出した。

その衝撃波はロボットに向かって行き、命中した、そしてその口
ポットは爆発した。

「まず一機！」

続けてこっちに突進をしかけてきたロボを飛んで回避して

「烈空斬！」

そのまま空中で自分の体を芯にして剣を縦回転させてロボに突撃し破壊した。

「つづけて二機！」

残りの二機は二対一では勝てないと考えたのか俺を間に挟んで二機同時に真っ直ぐに突撃してきた。

俺はそれを上にジャンプして避けた。

すると、残りの二機はお互いにそのまま突進してしまい二機とも爆発した。

こいつら、本当に馬鹿だな。誰がプログラミングしたらこんな馬鹿になるんだ？

「はい、四機 あっけなかつたな」

やっぱり弱かつたな。でも違法研究所って割りに警備薄いな。さっきのロボット4機を倒してから奥に進んでいるが何もでてこない。でもよく考えたら当然か。

本来、取り締まるはずの管理局が擁護してるんだもんな。普通は誰も来るとは思わないよな。

そう考えながらもうしばらく奥に進んでいると実験室らしき広い部屋についた。

そこにはかなりの人数の研究員がいた。

やっと、見つけたぜ。……だが思ったより研究室の設備が普通だな。

違法研究って言うからには人体実験とかしてるとばっか思ってたのに。
そんな形跡どこにもないな。何の違法研究してるんだろ？ 聞いてみるか。

「お前たちはここで何の研究をしていたんだ？ 言え！」

俺は少し殺気を込めて研究員達に言った。

「わ、わかりました。何でも言いますから命だけは助けてくれ！」

話を聞くとここは魔力素質すなわちリンカーコアのない人間に人工的にリンカーコアを生み出す研究をしていたらしく、実験には自分たちのリンカーコアをつかっていたらしい。

まあ別にそういう実験ならやってもいいとは思っけど・・・っていうかこんなのが違法研究なのか？

おそらくは管理局が技術を独占する為だろうな。

まあ、今のところは別に誰も損をしないし人工的にリンカーコアを生み出せば人造魔導師いらなくなるしな。

この研究所はむしろ残しておくべきだろう。

俺はそう結論を出した。だが念のために……

「安心しろ。お前たちは殺さない、ただし研究に人を使用しないこと。この約束を破ったら今度こそお前たちを・・・殺す。いいな？」

さすがに、関係ない人を誘拐などさせるわけにもいかないのて釘をさしておく。

「「「「は、はい「「「」

研究員はすぐに返事した。釘さしたし、大丈夫だろう。

だけど、何か凄い無駄足だった気がするなあ

結局、違法研究とは言えないしなあ。管理局の奴めこつというのは堂々とやれよ……

こつして初の違法研究所潰しは結局ほとんど何もせず帰ってきた

……

四話 違法研究？（後書き）

今回出たバリアジャケットは剣士のバリアジャケットです。

このバリアジャケットは

劇場版TOVのユーリの騎士団時代の服装です。

次は多少原作介入です。

あくまで多少なので原作キャラはでてきません。

五話 テックセッター！（前書き）

私は小説の書き方を分かっていないと感想でいただきました。
なので、全ての小説を一度編集しなおしました。
ストーリーに影響はありませんが状況や登場人物の心情などを付け
足しました。

駄文どころか小説にもなっていないませんでした。
本当にすみませんでした。

これからは気をつけます……

五話 テックセッター！

ジークside

「マスター、異物が現れました！」

違法研究所のある世界から戻ってきて家でしばらくゆっくりしていた。

するとソルがいきなりそんなことを言ってきた。

「なんだと！？ どこに現れたんだ？」

異物が世界になんか影響与える前に倒さないとな。
ここから近いならいいんだが……

「ここ海鳴市です。ちなみに今、ジュエルシードが暴走して大木が現れています」

何！？ よりによってまた原作のジュエルシードの暴走とまったく同じタイミングかよ！？

まあしかたないか。場所が近いことは嬉しいしな。

「よし。いくぞ、ソル」

俺は部屋から出ようとする。

「ラーサ」

ソルが返事してきた。ん？ ラーサってどっかで聞いたことあるような……

なんて走りながら考えている間に現場についた。

「しかしでかい樹だなあ〜」

アニメで見ていた時もあったがやっぱ生はちがうなあ〜
建物とか巻き込んでるしなあ〜と思いながら見ていた。

すると俺の前に植物に顔と触手をつけた全長二メートルくらいの異物が現れた。

「出やがったか」

数は7体か、まあいけるだろう。

あの異物たちテッカマンブレードのラダム獣に少し似てるなあ。
ん？ そうか！ ラーサって確かテッカマンブレードの了解って意味だ。

つーかよく考えたら俺、あのテッカマンブレードに変身できるじゃない！

敵もラダム獣に似てるしな。

「行くぞ、ペガス」ソルです」・・・行くぞソル、テックセッタ
「もういいです」

いや、やっぱりテッカマンブレードっていったらテックセッターだろ。

っていうかテッカマンブレードの変身システムってなのはデバイスに似てるよな。

最初はなのはデバイスとたいして変わらない大きさの水晶で変身するし

後半は人工知能をもつペガスで変身するからなあ……

とか考えている間に俺は水晶に包まれて水晶が消えると胸と肩、額の部分は赤、体は白。

耳はアンテナみたいの上に飛び出している機体テッカマンブレードになった。

俺はそれに感動して

「テッカマンブレード！」

とおもいつきり叫んだ。

「マスター悪ノリしすぎです。」

ソルがそんなことを言ってきた。確かにテンションが上がっているのは否定しないけど……

一度やってみたかったんだよこれ！ ああ、あのBGMが脳内再生されてくぜ

「グギヤアアア」おおつと！？危な！？「」

そんなことを考えていると敵が触手で攻撃してきた。

俺は触手を何とか避けたが危うく串刺しにされる所だった……
やばかった〜 今のはかなりあせったぞ。 感動しすぎて戦闘中
なの忘れてた。

自分がかなり隙だらけだったのを自覚しつつ俺は臨戦態勢に入る
が……

「よし、行くぞペガス。 「もう何いっても無駄ですね」「」

やっぱり、俺は自分がテッカマンブレードになっていることを忘
れない。

なんか聞こえたがもう気にせずいくぜ！

「クラッシュ・イントロード！」

装甲が変形して俺の耳の高さが下がった。

そして、少しでっぱりのあった肩がかなり平たくなるなどの体が
変形した。

全体的にスリムになった体で異物に超高速で突進しその衝撃波で
異物はすべて倒れて消えていった。

「よし、後はなのはに任せて俺は退散す「まだです！ マスター」
る……」

全ての敵を倒し帰ろうとすると俺の目の前にさっきの異物がいた。
ただし大きさは五メートルくらいあるが……

「でかいな。だが、大きさがすべてだとおもうなよ！ >直撃<」
そう言うと俺は一瞬だけ光った。 <直撃>をかけたからだ。

「これで体の大きさなど関係ない！ いくぜ！」

テッカマンブレードのでっばりのあつた左右の肩が貝の様に開いた。

そこには平たい電球のような物が左右四つずつあった。

それらからディバインバスターと同じくらいの太さの青緑色の光線が発射された。

「くらえ！ ボルテツカアアーツ！！」

その光線は真っ直ぐ巨大異物に向かって行き、命中した。

光線は巨大異物を飲み込み光線が消滅すると異物は跡形もなく消滅した。

俺はそれを確認して

「よし、今度こそ終わりだよなソル？」

さすがにもういないとは思うが念の為だ。

「はい。異物の反応はありません」

俺はそれを聞いて安心しつつさっきの遺物のことを思い出していた。

ふう〜 まさか、巨大化するとはな…… ちょっと驚いたぜ。
まあいいか。勝てたんだしな。さてと……

「よし、じゃあ帰るとするか」

「そうですね」

そうしてジークは家に帰っていった。

少し離れた場所でジーク達を見ていた者に気づかずに……

五話 テックセッター！（後書き）

今回でた精神コマンドの説明です。

精神コマンド<直撃>・・・攻撃対象が持っている防御技能やバリ
ア・分身などの防御能力、サイズ差、援護防御を無効にする。

次は今回でたテッカマンブレードの説明です。

テッカマンブレード・・・宇宙の騎士テッカマンブレードの作品
この作品の主人公相葉タカヤが変身した姿
スパロボJ、Wに参戦している。
しかし、ロボットアニメではない。

今回原作ブレイクするといいましたができませんでした。
申し訳ありません。

次回も原作ブレイクは出来ません。すいません……

六話 模擬戦 其の一（前書き）

この模擬戦、実は今後の話の伏線なんですよ。
まあ 誰と模擬戦させるか迷いましたが・・・

六話 模擬戦 其の一

ジークside

「はあゝ 暇だなあ」

今、俺は家でゆっくりしている。

原作ブレイクを開始するのはなのはとフェイトが一度戦ってから
って決めてる。

だから、本当にすることがない。

先週のテッカマンブレードで遺物と戦った時は楽しかったなあ

おい、誰だ？ 戦闘マニアとか言った奴は？

「おい、ソル何か暇つぶしになることとかない？ 異物が出たとか
かでもいいからさ」

「なら、違法研究所を潰しに行くのはどうです？」

「いや、あんまり頻繁に行くと足がつく恐れがあるからなあ。」

「そうですねか……なら模擬戦を試みるのはどうですか？」

「模擬戦だったって相手がいないだろ。」

あいかかわらずこいつは馬鹿だなあ。またどうせ忘れてました、とか言っただろうな。

何かすることないかな

「いえ、いますよ」

「どうせそうだろうなあ…… っってお前馬鹿か！ いるわけないだろ」

「いえ、それがいるんですよ。本当ですよ」

「じゃあ、誰だよ？」

「スパロボ参戦作品の中の機体なら何とでも戦えるプログラムのある部屋があるんですよ」

何……だと……

「本当か！？ ソル？」

「はい。もちろん」

まじで！？ ならあの機体と戦えるのか？

いや、待てよ。ソルのことだまた何か忘れていて結局できないかも……

よし、ここは出来るかどうか、確認してからだ！

「じゃあ、ソル。その部屋に連れてってくれ」

「わかりました」

そうして俺はソルにその部屋に案内されてるんだが…… いくらなんでもおかしいだろ！

この家の地下にあるというので階段で降り初めてもう二十分はたつぞ！？

しかも何か鍾乳洞の中みたいな景色だしどこの洞窟の中だよ！俺はそんな部屋が本当にあるのかと疑い始めた時……

「つきましたよ」

ソルが部屋についたことを俺に知らせた。

見るといかにも未来的な部屋がそこにあった。

部屋自体が機械で出来ているって言えばわかるかなあ？

凄い部屋だな、ここなら本当に模擬戦出来るかも！

「ここで模擬戦が出来るのか？」

「はい。誰と戦いたいですか？」

誰とだつて？ もう決まってるさ。やはりあの人しかないだろ。

「スパロボAPのアクセル・アルマー。機体はヴァイサーガだ」

アクセル面白かつこいいからなあ。誰とでもできるならもちろんアクセルとだつて出来るだろ。

「わかりました。ではそのキャラを思い浮かべてください」

やはり出来るみたいだ。よかつた。ここまで来て出来ないとか
だつたら最悪だつたぜ。

しかし、アクセルのことを思い浮かべる？ 特徴でいいのか？
えーとシャドウミラーの一員。

それから通称アホセルだろ……それから……

アクセルのことを考えていると部屋全体が虹色に輝き始めた。

俺は部屋が虹色に輝くという不思議な現象に目を奪われて周りを見
てしまった。

「成功です」

ソルの言葉に俺は視線を前に移した。

そして、気がつくと俺の前にアクセルがいた

どうやって出てきたんだろ？ 部屋に見とれて見逃してしまった。

「よう、俺はアクセル・アルマーだ」

俺がアクセルを見ているとアクセルが自己紹介してきた。

う、嘘だろ！？ あ、あのアクセルと生で喋れるなんて！？

俺は今、もの凄く感動している

「おい、どうしたんだ？ ジーグ？」

な！？ お、俺の名前を言った！？ やばい、嬉しすぎる。
……あれ？ でも俺自分の名前アクセルに言ったっけ？

「俺は自分の名前言ってないのになんで俺の名前を知ってるんだ？」

俺は質問した。するとアクセルは

「はあ？ 何言ってるんだよ？ お前が自分の能力で俺を呼び「わあああー、そ、そんなことより早く模擬戦を始めましょう」

ん？ 何を言いかけたんだ？ ソルのせいで聞こえなかったぜ。
まあいいや。アクセルと戦えるなんて夢にも思わなかったぜ。
俺は早く模擬戦したかったので些細なことは気にしないことにした。

「セットアップ！ 来いヴァイサーガ！」

そう叫ぶとアクセルに青を基調とし腰の部分に長剣五大剣を装備している。

そして背中には赤いマントを着けている機体ヴァイサーガとなった。

かっこいいなあ〜 なら、俺は！

「いくぞ、ソル。 ソウルゲイン、セットアップ！」

俺は水色と青を基調とし、腹部に緑色の玉がついている。肘にはブレード、頭に二本の角を持った機体ソウルゲインになった。

アクセルがヴァイサーガならやはりこいつだろう。

両方とも俺の好きな機体だしな。

「では二人とも準備はいいですか？」

二人がセットアップし終えたところでソルが言った。

「ああ」「

ソルは二人とも準備がいいのを確認すると

「では模擬戦開始！」

そう叫んだ。こうして模擬戦は始まった。

六話 模擬戦 其の一（後書き）

どうでしたか？

模擬戦も書くつもりだったんですが字数がかなり多くなるので分けてしまおう！

と思って投稿しました。

戦闘を期待してた方には本当に申し訳ありません。

次回、模擬戦です・・・

戦闘描写、うまく書けないなあ

七話 模擬戦 其の二(前書き)

模擬戦、戦闘です。
やっぱ、戦闘描写って難しい

七話 模擬戦 其の二

ジークside

もうすぐ、模擬戦が始まる。ちなみに俺は今回、精神コマンドを使うつもりはない。

一度、自分が反則なしでどれくらい戦えるか試してみたかった。アクセルとヴァイサーガ相手なら申し分ない相手だ。そう考えているとソルが俺とアクセルに

「では、二人とも準備はいいですか？」

模擬戦を始めていいか尋ねてきた。俺はアクセルを見た。アクセルも準備は出来ているようだ。

「「ああ」」

「では模擬戦開始！」

俺とアクセルの返事を聞いてソルは叫んだ。こうして模擬戦は始まった。

「行くぜジーク！ 烈火刃！ うりゃあつー！」

アクセルは苦無^{クナイ}を五本、俺に向けて投げってきた。

あのクナイは当たると確か発火するんだよな？ それなら……
当たる前に破壊してやる！

「当たってたまるか！ 青龍鱗！」

俺は自分に向かって来るクナイを両手の掌に青いエネルギーを収束して打ち出し迎撃した。

その青いエネルギーはクナイを全て消滅させてそのままアクセルに当たった。

少し爆発したが……

「くっ！？ やるじゃないか！」

アクセルは被弾したが、あまりダメージを受けたようではなく、すぐに体制を立て直した。

やっぱり、あれくらいじゃあんまり効果ないか…… まあ、元からあんまり期待はしてないけどな。

「くられ、水流爪牙だ！」

アクセルは体制を立て直した直後に両手のエネルギーを出力してエネルギーを纏った鉤爪を伸ばした。

そして俺に接近してきた。
って体制立て直すのはや！？

「くっ！？ させるかよ！ 白虎鮫！」

俺は驚きながらもエネルギーを両手に収束させてジューグの右手

の鉤爪を防いだ。

しかし技を出すのが遅かった。左手の鉤爪は防げずにバリアジャケツトを切り裂かれた。

その反動で俺は少し後ろに飛ばされた。

「ぐっ、今のは結構効いたぜ…… だが…… まだ戦える！」

俺はそう叫び両手にエネルギーを収束させたままアクセルに殴りかかった。

それをアクセルは両手の鉤爪でそれを受け止め弾いた。

そのまま、俺は拳でアクセルは鉤爪で壮絶な接近戦を展開した。

しかし、五分くらい戦った後、二人はお互いに少し距離をとり向かいあった。

お互いに力がつきかけているのだ。

「な、なあ アクセル、ハアハア、次の一撃で、ハア、終わりにしないか？」

俺はアクセルにそう提案した。

実際、俺はもうあんな壮絶な格闘戦をするような力は残ってない。

さっきまでの接近戦でバリアジャケツトはボロボロで所々ヒビが入っている。

だが、それはアクセルにも言える事だと思う。

「ハッ、ハッ、そう…… だな……、ハッ、ハッ」

やはり、アクセルも限界だった様だな。
よかったぜ。もしかだ余裕があったなら確実に俺が負けていたか
らな。

お互いに最強の一撃を放つため、力をためている。
この一撃で勝負が決まるだろう。勝負だ、アクセル！

「……俺の残りの力全てを込めた一撃、受けて見る！」

俺は両肘についたブレードを伸ばした。

「リミット解除！ 覚悟しろよ！！！」

アクセルは腰についている鞘に入っていた剣、五大剣を鞘からぬ
き鞘を横に投げた。

「行くぞアクセル！ 舞朱雀！」

俺はアクセルに超スピードで突撃した。それと同時にアクセルも
俺に突撃してきた。

そして、あたりは爆風に包まれ、一瞬何も見えなくなった。

「これぞ、奥義 光刃閃」

煙の中からアクセルの声が聞こえてきた。

煙が晴れると俺はソウルゲインのバリアジャケットが一刀両断にされ爆発していた。

俺はその場に倒れた。だが傷は一つもない。バリアジャケットが守ってくれたらしい。

しかし、バリアジャケットが破壊されたのだから敗北は誰の目からみても明らかだ。

「俺の負けか……」

全力を出して負けたんだ。悔いはない。

そう思っていた、すると

「いや、引き分けだ……」

アクセルのバリアジャケットであるヴァイサーガのヒビが大きくなった。

そして、ヴァイサーガは粉々に砕け散り、アクセルの姿に戻った……

これまでのダメージに耐えられなかったらしい。

結局、引き分けという形で俺とアクセルの模擬戦は幕を閉じた。

その後……

「アクセル、模擬戦してくれてありがとな」

「なあに、大したことじゃないさ。また何かあったらいつでも呼
「あ、時間切れです」……じゃあな」

そう言い残すとアクセルは文字通り一瞬で消えた。
何か最後に言いかけてたような…… まあ、いいか。

「いや〜 これはいい装置だな〜 また明日、模擬戦しよう」と

明日は誰と模擬戦しようかなあ〜

「無理です。システムがオーバーヒートしました」

「はあ？ 何で？ どうして？」

「冷却装置をつけるのを忘れてました。」

俺はソルの言葉にかなり落胆した。

またかい！？ 今回は珍しく何もなかったのに……

「復旧にはどれくらい時間が掛かるんだ？」

明後日くらいには直らないかな？ と淡い期待を抱いてソルに尋
ねた。

「最低でも一ヶ月、下手をすれば一生直りません」

俺は絶望した。

そんな〜 はあ、せっかく楽しいこと見つけたとおもったのに……
絶望した！ こんな世界に絶望した！

俺は落ち込み肩を落としながら家に戻るため、部屋を出て階段を登って行った。

ソルside

危なかったです。危うくマスターにどうやってアクセルを呼び出したかばれる所でした。

本当はあの部屋、呼び出すのに関係ないんですけどね。

このままだとまたやりたいとか言いそうなので部屋が壊れて出来ないことにしときますか。

ソルはジークが階段を登っている間、そんなことを考えていた……

七話 模擬戦 其の二（後書き）

どうでしたか？

ソウルゲインの必殺技が朱雀舞なのはエネルギーが足りなかったからです。

八話 計画通りにはいかないもんだな。(前書き)

今回は戦闘はありません。

八話 計画通りにはいかないもんだな。

ジークside

模擬戦の次の日、俺は家で考え事をしていた。今後の原作介入についてだ。

ちなみに今、原作はフェイトとなのはが一度戦った所だ。

そろそろ予定では原作介入し始める時期だ。

だが……

「どうすっかなー 偽名使ってまでやろうとしてたことが出来なかったのが痛いな」

ちなみにしたかったことは

1 管理局のコンピューターをハッキングして、俺が管理局で極秘の任務をしていたことにする。

2 俺の階級をリンディ・ハラオウンより高くしておく。

3 俺の権限でアースラの今後を決める。なのはをフェイトと戦わせ勝たせる。

4 時の庭園でフェイトとプレシアを仲直りさせる。(方法はまだ決まってる。いざとなればアースラに連れて帰り時間をかけて説得する。)

この四つだ。このことをソルに話して管理局のコンピューターにハッキングをしかけた。

しかし、管理局のコンピューターのセキュリティが思ったより厳しかった。

最初の一つめから出来ない…… 取らぬ狸の皮算用してたからなあ。

計画を大幅に変更しないと……

なので……

もう一度、なのはに会って俺もジュエルシードを集めてることにする。

既に海の中からジュエルシードを一つ見つけて出して今、手元にある。

これをなのはに渡して、ジュエルシード集めを手伝うふりをする。実際は、プレシアを助けるために動きながらだから、あまり手伝う気はないが。

よし、それで行こう！

こうして、俺は今夜、なのはに会いに行くことにした。

そして夜八時になって俺は家をでた。

歩くこと二十分、俺はなのは家の近くに来た。

そして、俺はなのはに念話を飛ばした。

俺が今、なのはの家の近くにいること、ジュエルシードを持っていることを伝えた。

そして、なのはに家から出てくる様に伝えた。そして待つこと五分……

なのはが来た。ユーノは来てないか。

「よう、ひさしぶりだな。なのは。」

俺はなのはに話しかけた。だが、なのはは少し戸惑っている。

「え！？ 私、あなたと会ったことありませんよ！？」

その言葉で俺はなのはが戸惑っていた理由が分かった。

そういえば、あの時は……

「あ、そうか。そりゃ分からないだろうな。こないだなのはを助けた青色のロボットが俺だ。」

「あの時のロボットさんがあなたなんですか！？」

なのはは結構、驚いているみたいだ。

やっぱ俺、ロボットとして見られてたのか。まあしかたないか、

あの姿じゃなあ

俺はそう自分の中で結論をだしつつなのはに自己紹介した。

「そうだ。名前はジーク・クラインって言うんだ」

「あれ？ 前にデュオ・マックスウエルって言いませんでした？」

「悪いな。あれは偽名だ。あの時は理由があって本当の名前を言えなかつたんだ」

嘘は言っていないよ。ちょっと真実を誤魔化してるけど。

あれも立派な理由だろ。なのはもやってたし

「まあ、いい。これをお前にやろう。」

俺はジュエルシードをなのはに投げた。

なのはは、危うくジュエルシードを取りそこねて落とす所だった。

軽く投げたのに…… やっぱ運動神経はないんだな

魔力資質はあんなにあるのに……

「あ、ありがとうございます。でも、何でくれるんですか？」

「俺はそんな石ころ要らない。だがそんな危険な物、放っておくわけにもいかんだろう。なのはは欲しいんだろ？」

「は、はい」

簡単に信じるんだな。何で俺がなのはジュエルシード集めをしてるのを知ってるのかとか疑問に思わないのか？ せっかく理由考えてきたのに…… なんか無駄なこととした気分だ。

「あと、ジュエルシード集め、俺も手伝うぜ。また見つけたら持って来てやるし、ジュエルシードが暴走したら俺も行く。まあ多少遅れるかもしれないが……迷惑かな？」

俺はなのはに尋ねた。まあ聞かなくても答えは分かるがな。

「い、いえ！ とんでもありません。よろしくお願いします」

やっぱり予想ど通りの答えか。

「そうか、よかった。じゃあまたな」

そういつて俺は家に帰っていった。これでなのはとは完全に知り合いになったな。

「さて、次は…… 原作ではクロすけが出てくるよな？ ソル？」

「はい」

やっぱりしなあ。そういえばあいつって確か言ってるのが無茶苦茶だったよな。

管理局に力を見せ付けるためにもちよつといじめるか。今後の計画について考えているジীগであった。

八話 計画通りにはいかないもんだな。(後書き)

偽名を使った意味なくね？って感じですよ。
すみません。でも死神はそのうち出します。

九話　　クロノ……お前って奴は……（前書き）

クロノの性格が少し変わってるかも……

スパロボOGジ・インスペクターまであと一日！

すっごく楽しみです。

九話 クロノ……お前って奴は……

ジークside

俺はクロすけが出てくるのを、待っている。

なぜなら、クロノをばこるためだ。

ちなみに今、なのはとフェイトが協力してジュエルシードの暴走を止めた所だ。

俺はそれを少し離れて隠れて見ている。

なのはとフェイトがジュエルシードをかけて勝負しようとする。

なのはとフェイトのデバイスがぶつかる瞬間、奴が出現して二人を止めた。

出てきたな。まっくらクロすけ！

「さて、そろそろか。行くぞ、ソル！」

「わかりました。マスター」

こうして俺たちはKY、いや、もといクロノ・ハラオウンを苛めに行った。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！」

クロノが言った。なのは達は驚いている。俺は現れるのを知っていたので驚かなかったけどな……

はあゝ　出てくるの分かってたからいいけど分かってなかったら何、このKY？　って感じだろうな。

少しくらい、空気よんでくれよ！　……まあ、いい。　苛めさせてもらおう！

「何がストップだ？　ここでの戦闘は危険すぎるだ？　何様だよ、おまえは！」

俺はクロノに気づかれる前に叫んだ。　クロノが驚いてこちらに顔を向ける。

「!？　な、なんだ!？　お前は！」

クロノは俺の姿を見てさらに驚いた。

驚くのも無理はないか。なんせ俺はソウルゲインに既にセツプアップしている。

この地球の文化レベルはあまり高く設定されてなかったはずだからな。

ロボットが活動している、ましてや自我を持ってしゃべるとは夢にも思っまい！

「俺が質問してるんだ。質問に質問で返すな！」

ちよつと殺気をこめて言ったらクロすけが一瞬怯んだ。

「しよせんは、子供か。この程度で怯むとは。」

「なんだと！？ 僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！
公務執行妨害でお前を逮捕する！」

何、言ってるのこいつ？ 俺まだ、何もしてないよな？

「俺は何もしてないんだが…… なのに何で公務執行妨害？」

俺は何をしたか聞いた。少なくともまだ公務執行妨害などしてないぞ。

これからする気だけだ。

「五月蠅い！ 公務執行妨害でお前を逮捕する！」

私怨だけで罪を捏造しようってか、もう怒りを通り越してあきれ
るわ……

まあ、いいか。とりあえず……

「おい！ その金髪の女の子！ すぐにここから離れろ！」

俺はフェイトを逃がそうとするが…… クロノが

「駄目だ。その女の子達は僕と一緒に来てもらう」

一応、管理局の仕事はするのかよ!? ならしかたない。

「そんなことさせるかよ! 一応くてかげん>してやる…… く
らえ、舞朱雀!」

俺は肘のブレードをのびしクロノに向かって突撃した。

そして、クロノを四方八方から切り刻む。最後に全体重をのせて
一刀両断にした。

「うわあああああ」

クロノは悲鳴を上げて吹き飛んだ。だが、なんとか空中で体制を
持ち直した。

まあ、もう飛んでるだけで精一杯だろうけどな。

くてかげん>掛けていても舞朱雀をモロに食らったんだ。

バリアも貼らずにな。無事な方がおかしい。

「よ、よくもやったな……」

クロノはそう言って俺とまだ戦おうとする。その負けん気だけは驚嘆に値するな。

だが、それが強がりなのは誰が見ても分かるぞ。かなりふらふらしてるしな。

「もう止めておけ。勝負はついた」

さすがに大怪我させるのは可哀想なので俺はクロノに忠告した。

「な！？ まだ僕は負けてな「クロノ、そこまでよ！」」

不意に女の人の声がクロノの声を遮った。

聞こえて来た方に振り向くとスクリーンが空中で発生していた。

そしてリンディ・ハラオウンが映っていた。

九話 クロノ……お前って奴は……（後書き）

本当は他の機体でクロノを苛めるつもりだったんですが、ジ・インスペクターの影響でソウルゲインに……

まあ、それはおいといて今回でた精神コマンドの説明です。

<てかげん>・・・相手のHPが0になる時にHPを10だけ残す。
自分の技量が相手より高い時のみ発動

ちなみに本作ではバリアジャケットを破壊せず、意識を奪わずに戦闘力だけを奪う効果です。（もちろん、技量が相手より高くないと発動しない）

では！

十話 三十六計逃げるにしかずってな(前書き)

今回も戦闘はありません。

十話 三十六計逃げるにしかずってな

ジーク side

声の聞こえてきた方に振り向くとスクリーンが空中で発生していた。

そしてリンディ・ハラウンが映っていた。やっと、出てきたな。出てくるならそろそろかな、と思ってたんだ。

フェイトはクロすけを苛めてる間に逃げたみたいだし俺は……

「あんたは誰だ？」

俺は画面に映っているリンディ・ハラウンに尋ねた。

まあ、知ってるけどな。普通は知ってたらおかしいので聞いた。

「時空管理局所属艦アースラの艦長リンディ・ハラウンです。」

「母さ……艦長！ こいつらは公務執行妨害で！」

クロノがリンディに報告する。

まだ、言うかこいつは。だいたい、ここは管理外世界だろうが！ 外国で日本の法律が通用するか？ それと同じだろうが！

そう言いたい気持ちを俺は何とか抑えていた。

「クロノ、先に無茶苦茶なことを言ったのはあなたよ。彼はまだ何もしてなかった」

「でも、こいつは！」「クロノ！」「……はい」

クロノはリンディに黙らさせられた。

でもこいつ絶対自分が悪いと思ってないよな。だってあきらかに俺を睨みつけてるもんな。

まあいい、とりあえず五月蠅い奴が黙ったからな。

「リンディさんですか？ 管理局員なんですよね？」

俺はリンディに話しかけた。

「ええ、そうよ」

リンディの返事を聞きながら俺は考えていた。

今はまだ、管理局に入る気はないからな……

だからアースラの中に行くと原作が少し変わってしまう。

俺としてはまだ、この時点での原作変更は困るからな。

未来が変わってしまうかもしれないからな。

過去では小さいことが変わるだけでも未来では大きな変更になる可能性もある。

こいつは……

「今のは正当防衛ですよ。そちらがいきなり公務執行妨害とか言っただけです。逮捕しようとしてきたんですから」

「確かに今のはこちらに非があります。そのことの謝罪もしたいですし、私たちが今いる場所、時空艦アースラに来てください。その子達もね」

「やっぱし、巧みな話術だな。うまく誘導してなのは達を協力させただけのことはある。」

「知っていなければ知らず知らずの内に引つかかっていたかも。俺はクロノを瞬殺したんだからな。」

「クロノ以上の戦力になりえる俺をアースラの戦力に引き込もうとしないわけがないか。」

「正直、口論では勝てないかもしれないのでここは逃げるか。」

「いえ、正当防衛ならいいんです。謝罪なんていりませんから。では、これで失礼します」

「ちょっと、待つ」<迅速>「」

「リンディが言い終える前に俺は目にも止まらぬ速さでそこから離れて家に戻った。」

その後 家にて……

「ふう、危なかった。危うく原作が変わる所だったよ」

いや〜 逃げ切れてよかったよ。

捕まったら面倒くさいことになってたからな〜

俺はそんなことを考えていたら

「……マスター一つ大事な話があるのです。聞いて下さい」

ソルが話しかけてきた。だが、あきらかに普段と雰囲気が違う。

口調も頼みごとではなく命令になってるし……

「何だ？ ソル」

俺も普段よりまじめに聞き返した。雰囲気から察すると結構大事な話みたいだからな。

「実は……」待ってください。そこからは私が説明します」「

ソルの話を遮った声の聞こえた方向を見ると、俺に能力を与えた説明係のミラが立っていた。

「あなたは……ミラさんですよ？」

俺は以前にこの女の人　ミラさんにあつた時のことを思い出す。
そういえばあれからまだそんなに経つてないんだよな。

「覚えていただいております。実はあなたにこの世界における大事なことを隠していたんです。それを今から教えるためにここに来ました」

「大事なこと？　異物以外にもまだ何かあるんですか？」

「いや、正確に言うと異物と関係があります。そしてあなたがなぜ神の代行者に選ばれたかも説明します」

ミラは凄く真剣な面持ちで話し始めた。

十話 三十六計逃げるにしかずってな（後書き）

今回出た精神コマンドの説明です。

<迅速>・・・本来のその機体の移動力に一度だけ4マス分足す。

本作ではスピードが二倍になります。ただ、戦闘中に使ってもフェイトの真・ソニックフォームの様にスピード自体が上がるわけではなく加速力が上がり普段のスピードよりも短い時間で遠くに行ける。敵から距離をとる時などに使う。簡単に言うとカーレースで最初からフルスピードで走っている状態でスタートできる。

次回、ジグの最後の能力（一つじゃないですけど）と秘密にされていたことがわかります。

それでは！

十一話 平行世界の存在（前書き）

スパロボOG ジ・インスペクター 最高！

十一話 平行世界の存在

「まずは異物について説明します。異物とはこの世界とは違う世界から来ると以前聞きましたよね？」

「ええ。それで異物はこの世界を無茶苦茶にするとだから出現したら退治してくれと」

ミラの言葉に俺は肯定の意を示した。そして異物について知っていることを言った。

「その異物はこの世界と似ている、しかし全然違う世界。極めて近く限りなく遠い世界から来ています」

へ？ 極めて近く限りなく遠い世界？ それって確かスパロボA Pの話で出てたよな。

ようするに平行世界ってことだったはずだ。ってことは……

「じゃあ、異物はこの世界の平行世界から来ているのか？」

「そうです」

なんてこった…… 他の世界って言うからどこかの次元世界とかかなあって思ってたのに

でもよく考えたら他の世界って言うってたもんな。地球なんて言う

てないもんな。

ってことはあの場合の世界とは全ての次元世界が入ってたのか……

「でも、待てよ。なんで異物は平行世界からわざわざ来るんだ？」

「それはその異物たちはこの世界の平行世界に転生した男、ベルク・ロンドによって生み出され、その男の命令でこの世界や他の平行世界を襲っています」

「転生者？ それって俺と立場が似てるな」

俺は神の代行者だけど転生したことに変わりはないからな。

「似ていますが、違うものです。で、その男……ベルク・ロンドは、神の手違いでまだ寿命が残っていたのに死んでしまったんです。なので神が特別にこの世界の平行世界に転生させました。あなたと同じように特別な能力を与えて……」

「俺の他にも転生者がいたのか。だがなんで他の平行世界を襲うんだ？」

そう聞くとミラは凄くばつの悪そうな顔になった。しかし、口を開けた。

「ベルクは前の世界で人を何人も殺して指名手配されていた超重犯罪人なんです。しかも殺人目的は特に何も無い無茶苦茶な男だったのです。しかし、神の手違いで死なせてしまった手前、何もしいわけにはいかなかった…… だから転生させました。ベルクが更

生することを信じて……」

そんな男が更生するとは俺は思えないなあ。神はそんな男でも信じるんだな。

でも、他の世界を襲っているということは……

「ベルクは更生しませんでした。いや、それどころか新たに得た特別な力でその世界を無茶苦茶にしました。そしてそれだけでは満足せず自分の能力で他の平行世界を攻め始めました。もちろんこの世界にも。そしてベルクの暴走の被害を抑えるために神は世界を守る力が弱くなりました。それを補うためにあなたを神の代行者にしたのです」

そんな事情があつたなんて…… しかし……

「でもなんで俺なんですか？」

俺は率直な意見を述べた。神の代行者にされた時は少し取り乱していたので考えにいたらなかつた。

だが、冷静になって考えれば、俺が神の代行者に選ばれる理由がわからない。

別に俺じゃなくてもいいんじゃないか？

「それは…… あなたが小さな女の子を車に轢かれるのをかばっ

て死んだからです。他の人を命がけで助ける…… そんなことが出来る人こそ神の代行者にふさわしいと思っただからです」

な、何だ……

俺ってそういう風に死んでたんだ…… なぜか俺、死んだ直前のこと覚えてないし……

「でも今まで何で話してくれなかったんです？ 何か隠していた理由があつたんですか？ 正直、こんな大事な話なら最初から話しておいて欲しかったんですけど……」

「神はベルクの件で人を完全には信じられなくなったのです。だから、あなたが本当に神の代行者として働いてくれるか。それを確認するまで話せなかった…… 本当にごめんなさい」

そう言っつてミラは頭を下げてきた。だが、こんな理由なら納得せざるを得ない……

俺だつて神の立場なら簡単には信じられない。一度信じて裏切られたんだからな。

そう考えると特に隠されていたことへの怒りは沸いて来なかった。

「顔を上げてください、ミラさん。しかたないことですよ。俺は気にしてません、なので話の続きをお願いします」

俺がそう言つとミラは少し申し訳なさそうに顔を上げ話を続けた。

「わかりました。話の続きですが、ベルクはこの世界を集中的に狙う決断をしたみたいでこれから異物は強くなり、作戦を立ててきたりいきなり複数の異物で世界を攻撃してきたりするはずです。今までの力だけでは足りないこともあるでしょう。なので新たに力をあなたに託すことにします」

「新しい力？」

これ以上、さらに力が手に入るのか…… 嬉しいんだけど敵も強くなるんだよなあ。

なんか、複雑な気分だ……

「ええ、では託します」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、ミラは俺に力を与えたよ
うだ。

俺は虹色の光に包まれた。そして光が消えた。

だけど、特に力がみなぎったりするわけでもなく、普段と変わら
なかつた。

「これであなたは新たな力を使える資格を得ました。……正直、
関係のないあなたを巻き込んでしまってもうしわけないと思っ
ています。でも私たちにできることはこれくらいしかありません。これ
からもこの世界をよろしくお願いします」

そう言って俺に一礼してミラは光に包まれ消えていった。

十一話 平行世界の存在（後書き）

能力はまだ使うことは出来ません。
あしからず

十二話 説得は事前にやっておくべし(前書き)

どうぞ。

ようやく全ての話の編集が終わり投稿できました。
ではどうも。

十二話 説得は事前にやっておくべし

ジークside

ミラの話が終わりしばらく経った。

「なかなかへビーな話だったな……」

俺は呟いた。まさかこんな複雑な事情があるとは……
だが、俺の今の一番の悩みの種は

「でも、俺、新しい能力貰ったはずなのに使い方知らなくて使用できないんだけど……」

これだ。異物を倒したりするのにこれから必要になってくる能力なのに……

「マスター話を聞いていましたか？ 使う資格を得ただけでマスターが努力して発動できるようにしないと意味ないですよ」

ソルの言葉に俺は気づいた。
そういえば確かに能力を使えるようにしたとは言ってなかったけど……

「ってことは俺はまだ自分の能力がわからないのか？」

「そういつことになりますね」

なんてこつた…… いったいどんな能力を使えるようになったか
知りたかったのに……

「まあまあ、マスター、気を落とさずに。すぐに使えるようになりますよ！ マスターがちゃんと努力すれば」

ソルが落ち込んでる俺を励ましてくれた。
まあ、そうだよな。落ち込んでても仕方ないよな。

「よし！ 今からプレシアの所に行くぞ」

俺は提案した。いや、流石に原作どりの説得では無理だろうからな。

スパロボでも原作で死ぬキャラを助けるには事前にルート選択と
か説得が必要だからな。

「今からですか？ 「ああ」……分りました」

ソルは俺に確認を取ると空間を歪曲させてゲートを俺の前に発生
させた。

前に違法研究所に行く時に使った物だ。

「これを通ればプレシアの所ですよ」

「よし、行くか！」

俺はソルをセットアップして剣士のバリアジャケットを纏いゲ
トの中に入った。

～時の庭園～

「な！？ あなたどうやってここに入ってきたの！？」

俺は現在、プレシアが原作でもたれていた椅子のある部屋にいる。ゲートがそこに繋がってたからだ。だけど運悪く？ プレシアが椅子に座っていた。

そして俺を見て叫んでいた。

「あなたがプレシア・テストロッサですか？」

俺はプレシアに話しかける。

「なんで私のことを知っているのかしら？」

プレシアは少し冷静さを取り戻して俺に聞いてきた。

「企業秘密です」

「言いたくないならいいわ…… 消えなさい！」

プレシアは俺に電撃を打ち出した。

「食らってたまるか！ 水護陣！」

俺の周りにバリアが発生して電撃をはじいた。

「!?!?」

「俺に自分の攻撃が簡単に防がれたことに驚いているようですね。でも残念ながらあなたの攻撃はいくらでも防げます。でも俺はあなたと戦いに来たんじゃないです。あなたを説得しに来ました」

「説得？ ジュエルシードを集めを止めるとでも言うつもり？」

「いえ、ちがいます。あなたの娘、フェイト・テストロッサのことです」

俺の言葉にプレシアは表情がかなり不機嫌そうになった。

「あんなの私の娘じゃないわ。私の本当の娘は「アリシア・テストロッサですよね？」……どうしてその名前を知っているの？」

「そこはどうでもいいです。でも、もしアリシアが生き返ったとしてあなたがフェイトを娘として扱ってない状況を見て、どう思うでしょうね？」

「……………」

「答えられないようですね。……まあ、いいでしょう。誰も今すぐに結論を出せとは言いません。……でもそのことをよく考えてみてくださいね。……取り返しがつかないことになる前に……」

俺はそう言い残し今までずっと出現させていたゲートを再び通っ

てここから去った……

十二話 説得は事前にやっておくべし(後書き)

次回もなるべく早く投稿するよういたします。

十三話 死神の使いやすさと弱点(前書き)

つ、疲れた……

この話考えるのに普段の一話つくる時間の倍以上かかりました・・・
話は長くないのに！

十三話 死神の使いやすさと弱点

ジークside

俺は現在、なのはの親御さん達が経営している喫茶 翠屋に行くため歩いている途中だ。

アニメで見たときもケーキ美味しそうだったし

それになのはの母親の……名前思い出せない……はパティシエでフランスやイギリスで修行したらしい

なので、すごく楽しみだ。しかし、あと少しで翠屋に到着というところで……

「マスター大変です！ 残りのジュエルシードが全て暴走したようです！ あと異物も発生しました！ 発生した場所はジュエルシードと同じ所ですが」

「はあ！？ 何でだよ！？ 原作では明日の予定だろ！？」

「マスターが少しだけ原作介入したので少しだけ未来が変わったようですね」

「いや、確かに介入したけど……ほんの少しだろうが！」

「諦めてフェイト・テストロッサを助けに行かないと全て水の泡になりますよ」

……くそ、フェイト助けて時の庭園から戻ってきたら終わっただけで、さっさと行くってやるぜ！

俺は近くの海岸に走り、

「行くぞ、ソル！ セットアップ！」

俺は光に包まれた。光が消えると俺は黒を基調とした装甲、刃がビームの大鎌を持っていて蝙蝠の翼の様な物が四枚ついている機体ガンダムデスサイズヘルになった。

「どうですか？ 今回はタイミングをはかって出るのが難しいと思いましたので姿を隠すことが出来る能力を持つ機体にしましたよ」

へえ〜 思ってたより結構、考えてるんだなこいつ

「よし、じゃあ行くか……つてあれ？」

俺は飛んで海上に出ようとするがそこであることに気づいた。

「そういえばデスサイズヘルって空飛べたっけ？」

「………すみません。そこまで考えていませんでした………」

「なんだと！？ やばい！？ 間に合わないじゃないか！？」

間に合わなかったら全て水の泡……… 俺はソルがさっき行った言葉が頭に浮かんだ………

やばい！？ ど、どうすれば！？ お、落ち着け、落ち着け俺………俺は少し落ち着いて考え始める。

「そうだ！ 強化パーツが使えるんだ！ フライトユニットを装備すれば飛べるはずだ！」

俺はこの状況を打破する方法を思いついた。

「ナイスアイデアです！ マスター！」

ナイスアイデアって…… こいつ全く反省の色が見えない……

「まあ、今はそんなこと考えてる場合じゃないか…… ソル、装備してくれ！」

「お任せください。フライトユニット、インストール…… 完了しました！」

ソルがそう言うと、俺の体が浮き上がった。確かに完了してみたんだ。

これならいける！ 俺はフェイト達が今、ジュエルシードと戦っている場所に飛んできた。

俺は現在、海上を飛んでいる。ハイパージャマーで姿を消している。

海中のジュエルシードが竜巻となって暴走しているため、思ったより前に進めない。

なのは達のいる場所だけが危険だったんじゃないのか……

「っと、アブナー！」

俺は雷の直撃を受けそうになった。

当たっても、たいしたダメージはないだろうけど当たらないに越したことはないからな……

「マスター、高町なのはが転送されてきました！」

「ってことはそろそろか…… 見えた！ あれだな！」

俺は一匹の犬 アルフと三人の人影を見つけた。

さて、じゃあ行かしてもらおうか！

俺は人影の見えた所に向かった。

なのは達のいる所に到着すると6つの竜巻がユーノと犬？ の子

エーンバインドで捕まえられていた。

俺は姿を消すのをやめて、なのは達に近づいた。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる！ だから今のうち！

二人でせーのでイツキにふうい「おつと俺も手伝わせてくれ」…

…え！？ だ、誰ですかあなた！？」

「俺はジীগだ！ そんなことよりジュエルシードを封印するぞ

！ なのはもその金髪の少女もいいな？」

「は、はい！」

「俺は右端をやる。残りはお前たちにまかせた！」

俺は右端の竜巻に近づいた。そして……

「こちら、ジグ！ 斬って斬って斬りまくるぜ！」

竜巻を大鎌と一緒に横薙ぎに斬った。

「竜巻なのに斬った感触が残るとは……」

まあチェーンバインドで捕まえられる時点でおかしいけどな。

すると、竜巻は消えた。まあ、俺が斬ったのは異物だからな

何も残らないのも別におかしいことじゃないけどな。

俺、前に海中から一つ、ジュエルシールド手に入れたからなあ……

一つ多いつて簡単にわかったぜ

そう、思っているとなのは達がいる方角から爆発が起きたのが見えた。

あっちも終わったか……

俺はなのは達の所へ向かった。

十三話 死神の使いやすさと弱点(後書き)

いや〜 実は今回の話は私の苦い経験を元に作ったんですよ！

スパロボAPで飛んでる敵に集中狙いされた時のあの悲しみ・・・
AP持つてる人ならわかってくれますよね？

では、また

五万PV突破！

ヴェ「どうも、作者のヴェルク・ネオです！ タイトルどおり、この小説が5万PVを超えました！

この小説を始めるまではまさか5万PVに到達するとは予想もしてませんでした。これもひとえにこの小説を読んただいて読者様たちのおかげです！ 本当にありがとうございます」

ジ「でも、この小説最初に投稿した時に比べて明らかに文の書き方とか違うんだが……」

ヴェ「……この小説を書き始めてから小説の書き方を学んだからなあ……」

ジ「お前、よくそんなにこの小説書き始めたなあ…… しかも最初は毎日投稿とかほざいておいて出来てないとき結構あるし……」

ソ「その上、投稿してからはしばらくして誤字、脱字や表現の間違いに気づいてはれないようにこっそりと直してますしね。私の今の台詞も一度直しましたし」

ヴェ「そ、それは内緒だったのに…… ああ、そうですよ！ 直してますよ！ 別に悪いことじゃないでしょうが！」

ジ「こいつ逆ギレしやがった……」

ソ「見苦しいですね……」

ヴェ「こっちはこれでも大変なんだぞ！ この話には何の機体を

使うのが適してるかな？ とか次の話には何の機体が適してるかな？ とか！」

ジ・ソ「考えてるの機体だけじゃん（じゃないですか）……」

ヴェ「五月蠅い！ しかも、なのはの無印編はあまり見てないから内容がうる覚えなんだよ！」

ジ「……つつかそんな話、今するべきじゃないだろ。少し落ち着けよ」

ヴェ「がはぁ」

ジ「グはヴェルクにポディーブローをかました。クリティカルヒット！ ヴェルクは倒れた。」

ソ「倒しちゃってよかったですか？」

ジ「問題ないだろ。こいつが起きる前にこれ終わらせるとするか。」

ヴェ「そ、そうは、問屋が、お、おろさんぞ…… <ト根性>！」

ヴェルクは体力が全回復した。

ヴェ「不死鳥は炎の中から、蘇える！」

ジ「……なんか名台詞を汚された気分だぜ……」

ヴェ「まあ、そんなことはさておき「スルーかよ！」……この小

説をこれからも

ン」「どいぞよるこへ

ジ」「……お願いします！

五万PV突破！（後書き）

これからも特別編は台本形式でいきます。
感想を何回か書いてもらったカミサマ様、ロボット様ありがとうございます
ございます

この場をかりてお礼させていただきます

十四話 ダブル死神の力（前書き）

ただの思いつきです。

十四話 ダブル死神の力

ジークside

俺がなのはとフェイトのところを向かおうとした。

すると、海から一本の青い光が上がりなのはとフェイトの間を通った。

そして、光が収まると五つのジュエルシールドが宙に浮いていた。

「……このあと、確かプレシアの魔法で雷が落ちて来るんだよね……」

「はい、そうですね。どうします？ 雷からフェイト・テスタロッサをかばうんですか？」

「いや、ここはようすを見る」

「わかりました」

話し終わると桃色の雷が落ちてきた。

「母さん!？」

フェイトは驚いてるな。しかし、やっぱりプレシアって凄い魔導師だよな。

体弱ってるのにこれだけの魔法を使えるとは……

万全の状態だったらドンだけ強い魔法使えるんだろっ？

そう考えていると第二射の雷が落ちてきたが……

「きやああああ」

当たったのはなのはだった。

「あれ？ おかしいですね。原作ではフェイトに落ちるはずだったんですが」

「いや、これでいい！ プレシア・テストロッサ……少し見直したぜ！」

説得の効果が出たみたいだ。よかった、これなら助けられるかも

「なのは！？」

ユーノが叫ぶ。なのはが海に落ちていく。

「おっと、危なかったな」

俺は海の上にホバリングするのと変わらない高さまで降りてなのはが海に落ちる直前で抱きかかえた。

「す、すいません。ジークさん、ありがとうございます」

「気にするな、なのは。自分で飛べるか？」

「はい、大丈夫です」

なのはは自分で飛んで俺から離れた。

だけど、さっきのダメージが残ってるみたいでふらふらしている。

この分じゃ飛んでるだけで精一杯だな、と思っていると魔法陣がなのは下に発生してなのは消えた。

ユーノもいなくなってるからたぶん、転送魔法でなのはと一緒にアースラへ戻ったんだろう。

俺はそう結論をだした。そして金髪の女の子　フェイトの方を向いて

「その金髪の女の子、えっと……名前を覚えてくれないか？」

名前を聞いた。まあ、知ってるけどな。それでも、一応聞いとかないとなあ。

「……………」

「おいおい、名前くらい教えてくれないんじゃないか？」

「……フェイト・テストロッサ」

「フェイトか。俺はジーク・クラインだ。よろし「ぎゃおおおお！？なんだ！？」」

俺が宙に浮いているジュエルシードの所にフェイト以外にもう一つ何かがあった。

それは四本足全てに鉤爪があり、両肩にも顔のある黒い狼だった。

「な、なにこれ！？」

「まずい！　フェイト、今すぐそこから離れる！」

俺がフェイトにそう言った瞬間、狼は緑の炎を口からはいた。フ

エイトは間一髪でそれを避けた。

緑の炎を吹く狼……まさかあれはデジモンのケルベロモン!?
もし本当にケルベロモンなら厄介だな……よし、ここは……

「おい、フェイト手伝え！ あの狼を倒すぞ！」

「……………」

「あんたの助けなんていらナイよ！ 私たちで「無理だな！ お前もフェイトも結構、魔力も体力も消耗してるだろ！」……っつ！」

「あの黒い狼を倒さないとジュエルシードを手に入れるのは至難の業だぞ。協力した方がいいんじゃないか？」

「……………わかった」

よかった、協力してくれるみたいだ。しかし、あれも異物か……
狼の姿なのが幸いだな使い魔とでも思ってるだろうな、フェイト達。

「よし、俺が援護するから好きに動け！ 食らえ！ バスターシールド！」

俺は左腕から棺おけのを想像させるデザインの盾を黒い狼に向けて飛ばした。

だが、盾はあっさりと避けられる。だが……

「はあああああ！」

避ける方向でフェイトが待ち伏せしてバウディッシュのビーム

刃で黒い狼を切り裂いた。

「おっと、まだだぜ！」

俺は頭部に内臓されたバルカンを撃った。すると実弾ではなく細かいビームの玉が出た。

実弾兵器は禁止されてるからか？ まあ、いいか。むしろ好都合だ！

それは黒い狼に直撃して動きを鈍くした。

「よし、とどめだ！ 行くぞフェイト！」

俺はフェイトに呼びかけた。だけどフェイトから返事が返ってこない……

「おい、返事くらいしろよ」

「……わかった」

俺とフェイトはそれぞれ縦と横に大鎌で黒い狼を切り裂いた。

「ぐぎやああああ」

黒い狼に深い十字の斬り傷ができて、黒い狼は消滅した。

ふう〜 思ったより弱かったな。

しかし、自分で言うのもなんだが、凄い息のあった攻撃だったな。スパロボの合体技みたいだったな。

……デスサイズクロス…… って感じの名前だろうな、もし実在してたら。

両方とも死神で大鎌だしな。

「さてと……ジュエルシールドだが……俺たち二人で分けないか？」

俺はフェイトの方を向き、そう言った。

「ごめんなさい。それは無理です」

「そうだよ、それはあたしたちがいただくよ！」

「……そうか。分かった。なら全部持って行け」

俺の返答にフェイトは以外そうな顔をした。

「いいんですか？」

「ああ、別に俺は要らないからな」

いけすかない管理局に渡すよりフェイトに渡したほうがいいだろう。

どうせ、ジュエルシールドをかけて決闘するのは変わらないだろうからな。

多ければ多いほどいいんだから。

「わかりました。じゃあ、貰っていきま」誰だ！？ お前は！？」

俺はジュエルシールドの方に向けてさっきと同じ盾を飛ばした。

そこにはクロノがいてジュエルシールドをこっそり回収しようとしていた。

クロノは盾に直撃して気絶したみたいでそのまま海に落ちていった。

まあ。自業自得だろう。
俺はフェイトに向きなおした。

「また、何か来るまでにさっさとジュエルシードを持ってここから離れる」

「はい」

「わかったよ」

そう言い残して俺はハイパージャマーで姿を消した。フェイトもここから離れたみたいでアルフともども姿が消えていた。

ん？ クロノ？ もちろんそのまま放置したよ。

俺は漁夫の利を狙うような卑怯な奴は嫌いだからな。

俺は翠屋に向けて進みだした。

十四話 ダブル死神の力（後書き）

一応、スパロボの合体技を想像して作りました。
でもいい名前が思いつかなかった・・・なんだよデスサイズクロス
って・・・

ちなみに敵としての異物ではいろいろなアニメの敵を出します。
スパロボ参戦作品以外にアニメからも出します！

理由はそのうちに本編で明かしますので（でも、勘のいい人ならわか
かると思いますが）

ちなみにケルベロモンをだしたのは地獄の番犬と呼ばれているので
死神にあうかなあという理由なので深い意味はありません。

能力説明第二弾！ っっていうてもほとんど精神コマンド……（前書き）

今回、ネタをいくつか入れてみました。

探してみてください。少し改造してますけどね。

能力説明第二弾！ っていうてもほとんど精神コマンド・・・

ヴェ「どうも、作者のヴェルクです。今回はジークの一番強い能力の精神コマンドについて説明させていただきます」

ジ「お前、また出てきたのか…… こんなんより本編書けよ……」

ヴェ「いやね、精神コマンドを作中でいきなり使って、使用した話が終わったあとで説明しても、その場でわからなければ困るでしょ」

ジ「建前はいいから、本音は？」

ヴェ「いちいち、使った話が終わるたびに書くのめんどくさい…… っってしまった!？」

ジ「へえ〜 そんな理由なのか。お前、ちょっと反省しろ。ゲート発動！」

ヴェ「謀ったな！ 謀ったな、ジーク！ って、へ!？ ウワアアアア!？ (マリオ風に)」

ジークはゲートをヴェルクの足元に発動した。ヴェルクはゲートに落ちてどこかへ飛ばされた。

ソ「ゲートってあんな使い方もできるんですね」

ジ「普通は無理だけどあいつの警戒力と回避力の低さがあるか

ら可能なんだ。普通じゃ簡単に回避される。さてと……まあ、せつかくだから説明するとするか。ちなみに今から説明するのはこの作中での効果だからな。そこんところよろしく」

ソ「まずは使用したことのある<直撃>からです」

<直撃>・・・一度だけ発動者の狙った敵の防御技能（例：AMF、プロテクション ATフィールドなど）が発動不能になる。

最初から発生させている盾などで防ぐのも不可能。防ごうとした瞬間、盾などは一時的に消滅する。

ただし、攻撃で打ち落とすなどは可能（ただしその時の攻撃の効果は無効、単純な破壊力だけになる）。回避も可能

敵と自分の大きさにどれだけの差があっても関係がなくなる。（例：そこらにいる小さいありの噛み付きが人間に噛まれたのと同じにする）

うまく使えば元の機体の力よりも強い攻撃が可能。

たとえば地球を攻撃目標にしてツインバスターライフルを撃てば地球の半分くらい消滅できる。

複数の敵を狙うためには威力を分散しなければいけない攻撃の威力を分散せずに出来る。

（ディバインシューターを五発だして敵五体に一発ずつ当てても一体に五発あてても与えるダメージが変わらない。）ただし、変身魔法などは無効にされない

変身魔法の場合、変身した物の効果は発動しないが防御力は変身した姿が適応される。

たとえば、フリーダムが相手ならフェイズシフト装甲は発動しないが防御力はフリーダムの防御力が適応される。

ちなみにこれでゴルディオンクラッシュャーを相手に当てると相手がどんな能力を持っていても発動しないので光になって消える。

ジ「説明長いな」 しかもバリア無効とかこの世界じゃそれだけで反則級じゃん……」

ソ「次からののはとりあえず、近いうちに出す予定の精神コマンドです」

<熱血>・・・一度だけ発動した時に装備しているバリアジャケットの最強技の威力を二倍にする。他の技は二倍には出来ない。

<集中>・・・敵の攻撃と敵の動きがこのコマンドを使う前の10分の7のスピードに見える。

<鉄壁>・・・自分の食らうダメージが4分の1になる

<必中>・・・自分の攻撃が一度だけ必ず当たる。ただし、バリアなどで防げる。<直撃>と組み合わせた場合、攻撃で粉碎するか防げなくなる。

<ひらめき>・・・相手の技を一度だけどんな攻撃でも必ず避けれる。一定時間の間、効果のある攻撃などの場合(たとえば自分の世界に閉じ込める、時間を止めるなど)の場合は自分に影響のある効果を無効化する。

<必中>、<ひらめき>は一度、発動すると、一分間使えない。

<ド根性>・・・怪我やバリアジャケットの損傷が一瞬で直る。
体力は回復しない。

ジ「とりあえず、こんなもんじゃね？」

ソ「そうですね。じゃあ、終わりま「待て！ やらせはせん！ やらせはせんぞ！ 最後の挨拶をやらせはせんぞ！！」「……………どうやって戻ってきたんですか？」

ヴェ「ふっふっふっ、会いたかったよ、神の代行者の諸君。どうやって戻ってきたかって？ それは根性だ！」

ジ「俺が一応、戻ってこれるように飛ばした世界にゲートを発動していた……………けど、まさか自力で戻ってこれるとは……………後で向かえに行こうと思っていたのにな」

ソ「マスター、案外、作者に優しいですね」

ジ「違う。こいつもその世界の異物になりえるからだ。」

ソ「じゃあ、その世界で死んだらどうしてたんですか？」

ジ「放置」

ヴェ「俺は死なない！俺は生きる！生きて、この小説を書き続ける！というよりもちょっと作者をいたわってくれてもいいんじゃない？」

ジ・ソ「いたわる気なんてまったくないな（ありません）」

ヴェ「ひどい!? く、俺にもっと力があれば……こいつらをこらしめるのに……」

ジ「諦める」

ヴェ「誰か……力をくれ…… プリーズ、ヘルプミー……」

ジ「……これからこの小説をよろしくお願いします」

ヴェ「あ、こら！ 勝手に終わるなよ、おい！」

能力説明第二弾！ っていってもほとんど精神コマンド……（後書き）

ネタは見つけられましたか？

次回は、たぶん本編です。

アンケート

ヴェ「どうも、ヴェルクです」

ジ「次は本編って後書きで書いていたはずなのに何で本編じゃないんだ？ 返答によっては……」

ジークは大鎌をどこからかとりだした。

ヴェ「ま、待て！ 実は今後のストーリーの展開の候補が二つあって、決められないから読者様からアンケートを取らせてもらうと思ってるんだ。このアンケートでこの作品の行方がほぼ決まると言っても過言じゃないんだ！」

ジ「何で前回到聞かなかったんだ？」

ヴェ「忘れてたんだYO！」

ジ「お前……かなり反省し「待て、アンケートを取るんが先だ」……しかたない。三分間待ってやる」

ヴェ「アンケートは、strickersでのジークのポジションです。あれ？ まだ全然決めなくても大丈夫じゃね？ と思うでしょうがこのポジションでA'sからの話も変えなければいけないじゃね？ ってことに気づきました。なので今から取ります。ではアンケートです」

1・・・管理局サイド、機動六課に入って管理局を内部から潰していく。（スパロボ風にいうと原作改良ルート）

2・・・反管理局サイド、スカリエッツィと協力して管理局を外から潰す。（スパロボ風にいうとIFルート）

の二つです。ただし、どちらにしるスカリエッツィとは協力します。

ちなみに1と2の大きな違いは、1ならジークのバリアジャケットのスパロボ版とティルス版の使用頻度がティルスよりになる。（ちなみに現在は8：2くらいですが1ルートだと6：4くらいになる）

裏でこっそりとスカリエッツィと協力する。

2なら、なのはたちと敵対する。バリアジャケットは今と同じ頻度で使う。

ヴェ「こんなもんかな」

ジ「完全にどっち選んでも原作とは変わるな」

ヴェ「あと、この小説、基本的にはお前の一人称で話を進めてきたけど、そのうち他の登場人物からの視点で書くことも多くなるから」

ソ「私も二回ほど短い視点があったただけですしね」

ヴェ「もし、アンケートが一票も来なかった場合は作者の独断で決めさせて頂きますのであしからず。あと誰かこんな小説ですがコラボしてもいいって人いませんか？ コラボしてみたいんです。どうか、よろしくお願いいたします」

ジ「さて、次回は本編なんだろうな？」

ヴェ「次回こそは本編書く！ 武士に二言……いや三言はない！」

ジ「よし、でも今回本編じゃなかったんでかなり反省してもらおうか」

ヴェ「……………<迅速>！」

ヴェルクは高速でジーグから逃げ出した。

ジ「あ、おい！ 待て！」

ヴェ「三十六計逃げるにしかずだ。さらばだ！」

ソ「…………アンケートよろしく願いします」

アンケート（後書き）

あとプレゼントも受け付けてます。贈ってくだされば、出来るだけなんらかの形で作中か特別編で使います。

十五話 違法研究所の悲劇（前書き）

アンケートは15日の24:00まで受け付けてます。

十五話 違法研究所の悲劇

とある平行世界)

「まさか、ケルベロモンまでやられるとはな……少しは骨のある奴がいるみたいだな。俺が潰しに行つてやるとするか。はははははははは！」

その男　ベルク・ロンドは笑いながら呟いた。

「おまちください。ここはあれにやらせてみましょう」

その男の近くにいた青髪の男がベルクに意見した。

「何？ あいつにか？ そんなことしなくても俺が殺してきてやるさ。あん？ まさか、お前この俺が負けるとでも思ってたのか？ ナイル！」

「いえ、そうではなくあれがどれくらい戦闘能力があるか。そしてどれだけの時間戦えるか、試して見たいのです」

「ちつ、ならしかたねえか。しゃあねえな、今回はやめておくか」

「ありがとうございます。ではあれを行かせますので」

そう言つて男　ナイルは去つていった。

「おもしろいことになってきたな。せいぜいやられんなよ。誰かさんよ、お前は俺の獲物になるんだからよ！」

ベルクはそう言いはなつて持っていた酒の入っているボトルに口をつけた。

ジークside

俺は今、とある次元世界の違法研究所の前にいる。
フェイトとなのはの対決までの間、違法研究所潰しをばげむことに決めたのでな。

なので、またいつも通りにゲートで来たぜ！
だけど、以前はほぼ無意味だったからなあ……
今回はちゃんと違法研究してるかなあ？

……待てよ。違法研究してることを望むのは駄目だろ……

「マスター、ぼーっとしてないで行きましょうよ」

はっ！？ 思わず考え込んでしまった。

「悪いな、ソル。じゃあ、行くか！」

「ええ」

俺たちは研究所に入っただけでいこうとしたら……

ドッカーン！！！！

中からかなり大きな爆発が起きた。

「なんだ！？ いったい何が起きたんだ！？ ……いや、ここで話しててもしかたないか。行くぞ、ソル！！」

「待つてください、マスター、セットアップしてから行きましょう。何かあるか分かりません！」

「そうだな！ ソル、セットアップ！！」

俺は剣士のバリアジャケットを装備した。

俺達は研究所に入っていた。

入ってしばらく進んでいたら、白衣を着た研究員らしき奴が仰向けに倒れていた。

「おい！ 何があっただんだ！？」

「……………」

研究員はうんともすんとも言わない。

「おい！ 起きろ！！」「マスター！ その男をよく見てくださ
い！……」

男をよく見ると倒れている場所に血だまりができていて、体をひ
っくり返すと白衣も血で紅く染まっていた……

「もう死んでいます……」

「何か事故でもあったのか！？ それとも「マスター！ 落ち着
いてください！！」もつとよく見てください！！！！ 明らかに何か
で斬られた跡があります！」

よく見ると確かに何かで斬られた跡があった。

「だけど、斬られてから少し経ってるみたいだな……血が固まり始めている」

「マスター！ 先に進みましょう！」

「あ、ああ！」

俺達はさらに奥に進んだ。その途中で何人もの白衣の人間が死んで倒れていた。

そして、奥に進むにつれて死体の数は多くなっていった。

「どうやってたら、こんなことになるんだよ!？」

「……まさか!？」

「どうした!？ 何か心当たりでもあるのか!？ ソル!？」

「たぶん「グワアアアア」!？ マスター!」

「ああ！ すぐ近くだ！ あの部屋からだろう」

俺は既に見えているドアを指さして言った。

俺はドアを突き破って部屋に入った。

「これは……」

「酷いですね……」

少し広いその部屋には何人かの研究員の死体が辺りにちらばっていた。

いや、もう人の形を残してはいないから研究員の死体だった物と
いったほうがいいだろう。

俺はその部屋で立っている人影を見つけた。

「お前か！ お前がこいつらを殺したのか！？」

「……………」

「答えろ！」

その人影はこつちを向き近づいてきた。その姿を見て俺は驚愕した。

「お、女の子だと！？」

そう、その人影は殺した人の血で顔が一部赤く染まっている女の子だったのだ……

十五話 違法研究所の悲劇（後書き）

ヴェ「始めてシリアスな話を書いた……」

ジ「ずいぶん、中途半端に終わったな」

ヴェ「あそこで区切らないとかなり長くなりそうだったから……」

ジ「つつか、お前にしては早く投稿できたな。珍しいこともあるもんだ」

ヴェ「この話は当初から決めてたから早く出来たんだ。」

ジ「この小説って行き当たりばったりでかいてたんじゃなかったんだな」

ヴェ「まあ、一応、大きな流れは決まってるよ。それではまた次回で」

ジ「つつか、お前とつとう後書きまで出てきたな……」

清浦刹那様、感想とアンケートにご協力いただきありがとうございます。
います。

プレゼントも近いうちに使わせていただきます。

十六話 違法研究所の悲劇 第二部（前書き）

アンケートが現在1と2が一票ずつなんで17日の24:00まで延長します。

十六話 違法研究所の悲劇 第二部

俺は人影を見て唾然とした。その人影は女の子だったからだ。

髪の色は桃色で髪を降ろして腰くらいまで伸びていて肩の辺りで二本にまとめている。

頭の後ろには血で紅く染まったりボンを二つつけている。

服も大部分が血で染まっていた。

顔立ちも整っている。しかし、何か違和感のある顔だった。

「お前か？ こんな酷いことをしたのは！？」

「……………」

俺はその少女を問いただしたが返事は返ってこない。

「答える気がないなら力づくで聞かせてもらおう！」

俺は鞘から剣を抜いてその少女に接近して肩に向けて剣を振るった。

もちろん、峰討ちだ。殺すつもりはまったくない。

よし！ 当たる！ 俺がそう確信した瞬間……

キン！ という音が周りに響いた。

俺の剣はその少女がいつの間にか持っていた桜色の刃を持った大剣によって防がれた。

「何！？」

な！？ いつの間に出したんだ！？

俺はいきなり剣が現れたことに驚き、後ろにジャンプして、距離をとった。

そして、一息はいて呼吸を整え少し落ち着きつつ剣を構えなおした。

「いつの間に出したんだよ、その剣？ それでここの研究員達を殺したのか？」

「……………」

「やっぱ、返事なしかよ……………なら行くぞ！」

俺は再び、少女との距離をつめて剣で斬りかかった。

しかし、またもや剣で防がれて今度はつばぜり合いになった。

俺は少女の顔を睨み付けた。だが…………

「お、お前……………」

俺は少女の顔を近くで見えて驚愕した。

そうか……………何でか変な感じだと思ってたが……………感情が全くない無表情なんだ！

虚ろな目をしているし、まるでこれじゃあ、ロボットじゃないか

……………

そんなことを思っていると少女は力の押し合いでは不利と感じたのか後ろに跳躍して距離をとった。

いきなり、抵抗力がなくなったので俺は前のめりになりこけそうになった。

その間に少女は俺から離れていた。

「……………桜花刃、弐式」

少女はそう言い放つと、持っていた大剣が消えて、代わりに刀身が桜色に光っている二つの日本刀がいきなり、どこからか姿を現した。

その柄を掴み、二つの日本刀を持って構えた。

「二刀流になったのか、厄介だな……　だがこれを捌ききれるか！」

俺は剣に炎を纏わせて少女の前に躍り出た。

「くらえ！　殺撃舞孔剣！」

俺は少女に剣と蹴りを交互に使い攻撃した。
もちろん、手加減する余裕はない。だが……

「……………八重桜の舞」
少女は言った。

すると少女は俺の攻撃をどこからどのタイミングで来るかが見えているみたいにひらりひらりと簡単に全て回避した。

しかも、回避運動はまるで舞をしているかのような動きでだ。

スピードでは俺が明らかに勝っているのに当たらないだ！？
なら、こつだ！

「これならどうだ！　秋沙雨！」

俺はまるで剣が分身したと錯覚するくらいのスピードで連続突きを放った。

「……乱れ桜の舞」

少女は今度はさつきとは比べ物にならないようなスピードで俺の連続突きを全て避けた。

俺は正直、シヨックを受けていた。まさか、至近距離の秋沙雨まで避けきるとは……

秋沙雨は至近距離では一番決まりやすい攻撃なんだぞ!?

それが決まらないということは俺の攻撃は至近距離では決まらないじゃないか!?

俺は再度、後ろに跳び、距離をとった。

そして、少女の攻撃に対しての迎撃体制をとった。しかしそれは意味をなさなかった。

「……建物の崩壊を確認。撤退します」

少女は俺から走って離れてこの部屋を出ようとする。

「逃がすk「マスター！ 私たちも撤退しましょう！ この研究所はもうもちません！」

「……クツ！ しかたないか、分かった……ゲート発動！」

俺はゲートに入った。そして、ゲートが消えた瞬間、研究所は轟音をあげながら崩壊していった。

十六話 違法研究所の悲劇 第二部（後書き）

ヴェ「どうも」 ヴエルクです」

ジ「何か今回俺、無茶苦茶、かませ犬てきな感じなんだけど……」

ヴェ「少女が強かったただだから安心しろ。次回は新しきでできたオリキャラの紹介だから」

ジ「また、特別編かよ……」

オリキャラ説明

ヴェ「新しいキャラが三人出てきたので能力説明などです。あとジークの能力の補足説明します」

ジ「俺の能力の説明は終わったはずじゃなかったか？」

ヴェ「いや、実はバリアジャケットのサイズが機体によって大きく変わるんだ。でも、これを言うときだいたい場所によって出せる機体に限りが出てくるから……ぎりぎりまで言いたくなかったんだ」

ジ「ってことは次はでかいサイズの機体を使うのか？」

ヴェ「いや、まだ先だよ」

ジ「言ってることが矛盾してないか？」

ヴェ「新キャラの説明をしとかないとわかりづらいと思ったんだけど、あんまりこういう能力とか人物紹介ばっかじゃいやだから」

ジ「本音は？」

ヴェ「これはガチだ！ ということで説明いきます！ みんな、なぜなにジークがはじまるよ」

ジ「ネタにはしらずにさっさと始める」

バリアジャケット補足説明……全項25メートルを超える機体か

らはその機体の10分の1のサイズのバリアジャケットのなります。たとえば全項105メートルのイデオンなら約10メートルになる。

ジ「でかいな……」

ヴェ「そうだな、噛ませ犬」

ジ「お前……どうやら命を無駄に散らしたいようだな」

ヴェ「俺、別に自殺願望もってないから、さて次はオリキャラの説明です」

ジ「この説明が終わったら潰す！」

ベルク・ロンド

神に強大な力を与えられた転生者。

自分が転生した世界を支配するだけでは飽き足らず、他の世界の支配しようとしている。

容姿というか性格とか全てほぼガンダム00のアーリー・アル・サイエス

ナイル

ベルクの手下。一見、ベルクに忠誠を誓ってるように見えるが……

容姿はブリーチの藍染惣右介（眼鏡つき）。基本的に温和で思慮深い。

高木美咲

虚ろな目をした機械のような少女（ガンダムSEED DESTINYのシードかした時の目）

容姿はスパロボ学園の瀬戸咲弥

必要なこと以外全く喋らない。

武器は二種類のフォルムを持つ剣 桜花刃。

一つ目のフォルムは大剣 セブンスサマーになる。イメージは

TOW2のカノンノの剣

二つ目のフォルムは二振りの日本刀になる。

どちらのフォルムも刀身は桜色に光っている。

技は基本的に花関係。

八重桜の舞・・・舞うように敵の攻撃をひらりひらりと避ける。

敵の次の攻撃を予測できるようになる。その代わりに回避スピードは落ちる。

乱れ桜の舞・・・八重桜の舞とは対象的に自分の回避スピードを上げて避ける。

前者はがむしゃらに攻撃してくる敵、後者は老獪な戦術を使ってくる敵にたいして使用することが多い。

ヴェー「とりあえず、こんなもので他の攻撃や能力などは出てきたときに説明します」

ジ「説明終わりだな。覚悟はいいな？」

ヴェー「甘いな！ 今回は秘密兵器があるのだ！ 来い！ イデオーン」

イデオンが現れた。ヴェルクはイデオンのコクピットに吸い込まれた。

ヴェ「ふっふっふっ、今回こそは勝てる！ 踏み潰してやる！」

ジ「ぐっ！？ まずい！？ ……なんてな！ スモールライト！」

ジ「グはスモールライトを取り出した。

ヴェ「な！？ そ、それはまさか……」

ジ「ご名答！ 小さくなりやがれ！」

ジ「グはスモールライトを使った。イデオン（INヴェルク）はそこらの蟻と同じ大きさになった。

ヴェ「そ、そんな！？ そんな馬鹿な〜！」

ジ「さあ。覚悟はいいよな！」

ヴェ「じ、慈悲を……」

ジ「そんなもの、お前にかけるくらいなら、お茶漬けにかけるわ」

ヴェ「ぎゃあああああ！？」

十七話 自分の中の弱さ

ソルside

マスターと私はゲートを通って家に帰ってけっこうな時間がたった。

でも、マスターは未だに塞ぎこんだままだ。

ここは私が励ましてあげなければ！

「マスター、落ち込んでもしかたがないですよ」

「……あんな少女に簡単に攻撃が避けられたんだぞ……落ち込まないほうがおかしいだろ……」

「落ち込んだら解決するんですか？ それならいくらでも落ち込めばいいと思いますけど解決などしないと私は思いますよ」

「俺だって頭では分かっているさ。でも、そう簡単に切り替えられないんだよ……」

これは結構、重症ですね…… まあ、確かに塞ぎこむ気持ちはわかりますが……

でも、ここは厳しいことを言うても立ち直りさせなければ！

「マスター、少女に攻撃が避けられたのはマスターが弱いからです！ いや、少し語弊がありますね。

正確に言うとその時のマスターは精神的に負けてました。動きや攻

撃がすごく単調でただ突っ込んでいっただけです！」

「……………それでも負けたことに変わりはない。俺の力不足だ」

力不足だとは認めてるんですね。ならここは一発ガツンと言っとしましよう。

「……………この際なので言わせてもらいます！ マスターは神の代行者になった時に貰った能力に頼りすぎです！ たとえ、強大な力を持つていても使いこなせなければそれは意味がないんです！ 自分の力を出し切って負けたわけじゃありません。それなのにそんなに落ち込んでどうするんですか！」

マスターならこれで立ち直ってくれるはず……………そう信じて私は言った。

ソル side out

ジーグ side

俺が落ち込んでいるとソルが話しかけてきた。どうやら、俺を励まそうとしているらしい。

でも、俺はそう簡単に立ち直れなかった……………頭ではソルの言うこととは分かるけどな……………

だけど、俺はソルの言葉を聞いた。

「……この際なので言わせて貰います！（中略）それなのにそんなに落ち込んでどうするんですか！」

俺は今の言葉を聞いて気づいた。確かに攻撃は避けられた、それは凄く悔しい

でも俺は全ての力を出し切ったわけではないし、ましてや力を使いこなせてもいないんだよな……

なのに負けてこんなに落ち込むのが馬鹿らしくなってきた……

「ありがとうな、ソル。気を使わせてごめんな」

「いえ、これも私の役目ですから」

本当にありがとうな、ソル。俺は心の中でつぶやいた。

「よし、決めた！俺は強くなる！もう誰にも負けないように強くなつてやる！」

「その意気です、マスター」

俺はもうこんな悔しい思いはしたくない。だから強くなってみせる！

すると、なぜか俺の中から力がみなぎってくる。だが、俺はいきなり強烈な頭痛に見舞われた。

「ようやく、力を発現させたみたいだな、ジীগ」

俺の頭の中で聞き覚えのある声が響いた。誰の声だったかな？

俺は頭痛に苦しまされながら考えた。

「俺だ。アクセルだ」

そうだ！ この声どこかで聞いたことがあると思ったらアクセルの声だ！

でも、何でアクセルの声が頭に響くんだ？

「それはお前が自分の弱さを認めたからだよ。だから以前に神からもらった力の使用ができるようになったんだ。自分の力にうぬぼれる奴に強い力は使いこなせないんだな、これが」

「なあアクセル、それってどんな力なんだ？」

俺、未だにどんな力か分からないんだけど……

「お前以前、俺を召喚したろ。あれがいつでも、どんなところでも出来るようになったんだよ」

「あれは俺が召喚したんじゃないぞ。あの部屋の力で……」

「違う。あの部屋はお前の能力の使用許可をしただけだ」

「……ってことはアクセルを召喚したのは俺なのか？」

俺は自分の中で話を聞いての結論を出した。

「ああ。真正銘お前の力なんだな、これが。まあ、これからもがんばってくれ。俺も呼ばれればいつでも力になるし、他の奴らも手伝ってくれるだろうからな。じゃあな！」

アクセルが言い終わると頭痛が一瞬で消えた。

「ソル、アクセルを召喚したのは俺の能力だったのか……」

俺はソルに聞いたのだした。

「……はい。そうです。それに実はあの部屋も壊れてはいません。騙っていてすいませんでした」

「あの部屋壊れてなかったのかよ……まあいいや。この能力も使って俺は強くなってみせる」

「私ももちろんお手伝いします」

決意を新たにするジークだった。

十七話 自分の中の弱さ（後書き）

ヴェ「なんか一昔前のアニメみたいだ……」

ジ「お前が考えたんだろうが」

ヴェ「まあ、それは置いてとつとつ神から使用許可を与えられた力の一つが発現したな」

ジ「一つつてことはまだあるのか？」

ヴェ「まあ、一応あるよ」

ジ「まだ、あるのかよ……」

10万PV突破とアンケート結果（前書き）

更新が凄く久しぶりに感じた・・・

10万PV突破とアンケート結果

ヴェー「どうも、ヴェルク・ネオです。アンケートが決まりましたので発表します。ジャカジャカじゃかジャカジャカーン！ 2の反管理局サイドに決まりました！ アンケートにご協力いただきありがとうございます。もし一票もこなかったらどうしようと思ってきましたので」

ソ「本当にアンケートに協力いただいてありがとうございます」

ヴェー「ちなみに更新ができなかったのはテストだったんで書けませんでした。皆様、本当にすいません」

ジ「にしても、まさかそのテストの間に10万PV行くとは・・・こんな駄文で」

ヴェー「自分でも全く予想してなかったからアクセス見て驚いた。そして清浦刹那様、デステイニープラン様、門矢光様、感想ありがとうございます。清浦刹那様より、天のゼオライマーを デステイニープラン様よりビッグザム、デストロイ（変形VER）、ヴァイサーガ、ソウルゲイン、インパルスガンダム（全シルエット付き）、ストライクガンダム（全ストライカーパック付き）を門矢光様より零式斬艦刀、ミネルバ（デステイニー、レジェンド付き）、クロガネ、ダイゼンガー、ヴァイサーガ、デイス・アストラナガン、ローレライの鍵、ディムロスをいただきました」

ジ「ヴァイサーガが二機来たな、それに始めてロボット以外が来たな。ローレライの鍵、俺がもらっぞ」

ヴェ「もともと、お前に渡された物だし全然問題はない。そしてお前はここで死ぬのだ！ ジーグ！」

ヴェルクは天のゼオライマーを起動した。

ジ「ゼオライマーだと!？」

ヴェ「恐れる、おのけ、モビルスーツの性能を生かせぬまま死んでいけ！」

ジ「なら俺、モビルスーツ乗ってないんだがな。 お望みなら！
来い、ガンダム！」

ジーグはインパルスガンダム（フォーシルエット）を呼び出した。

ヴェ「そんな機体で何ができるというのだ？ 冥王の名のもとに消え去るがいい！ 食らえメイオウ攻撃！ …………… ってあれ？
なぜ次元連結システムが発動しないんだ？」

ジ「乗ってすぐに発動したらスパロボでく気合>なんていらねいだろ！ 喰らえ！ エクスカリバー！」

インパルスは剣をとりだしてゼオライマーを貫いた。

ヴェ「ば、馬鹿な!？ だが、ただでは死なん！ お前の魂も連れて行く！」

ジ「そんなことできるものか！」

ヴェ「こちらには自爆スイッチがある」

ジ「お前も死ぬぞ！」

ヴェ「おおー！ 死なばもろとも！ あ、ポチツとな！」

ジ「・・・ゲート発動」

ゼオライマーは大爆発した。跡には何も残らなかった・・・

ジ「ふう〜 危なかった。え、何で生きてるかって？ ゲートで爆発する直前に逃げたんだよ」

そんなの卑怯だ〜（天の声）

ジ「何か聞こえた気がするが・・・まあいいか、今後この駄文をよろしく願います」

これから何話かは特別編はありませんので（天の声）

十八話 一部終しか見れなかった……

俺は現在、海の上を飛んでいます。エ？なんで海の上かって？
それは少し時が遡り……

（約三十分前）

「マスター！ ジュエルシードの反応が多数出現しました！」

「何だと！？ ジュエルシードが多数出現だと！？」

ソルのいきなりの言葉に俺はかなり驚かされた。
だが、ここで一つの疑問が生まれた。

なのは達が既に全てのジュエルシードを封印したはずなんだが……

「……ソル、そのジュエルシードは暴走してるのか？」

「え？ ……暴走してませんね。なんででしょうね？」

「いや、だってもう全部なのは達が封印して……」

……待てよ、封印されたジュエルシードが多数出現するのって確か……

そつだ！ なのは達が自分たちのジュエルシードを賭けて決闘するところか。

だから、ジュエルシードが暴走せずに出現したのか。

なんだ、そんなことか……ってそんなことですかませられることじゃないだろ……！

「マ、マズイ！　なのは達の決闘が始まってしまっ！　あれを見逃すわけにはいかない！　行くぞ、ソル！」

「え？　は、はい。わかりました」

そして人気のない海岸に到着して

「ソル、セットアップ！」

〜三十分前終了〜

そして、今に至るというわけだ。

だけど、決闘が始まってからしばらく経っているので間に合うかどうか分からない……

せめて、あの全力全壊……いや違うか、全力全開だけでも見届けなければ！

まあそれにしてもだ……少し言いたいことがある！

「なんで、いつも予定より早く原作が動くんだよ！？」

本当に予想を遙かに上回るスピードで原作が進むんだぞ！？

本来ならまだクロノ、もといKYが出てくるころだぞ、時期的には。

俺は独り言のつもりで叫んだが

「それはマスターが介入したからであって自業自得です」

予想外にも回答が返ってきた。

「……………凄く的確な答えをどうもありがとうございます……………」

正論なだけに反論できない……………、俺がうつむいていると爆音が聞こえた。

音のした方角に黄色の魔力光を見つけた。

「なあ、あれってもしかしなくても……………」

「フェイト・テストロツサの最強魔法ですね」

「よし、魔力光の発生した方に行くぞ」

何とか間に合いそうだな。よかった、本当によかった！ 魔力光の見た場所に全速前進だ！

なのは達から少し離れた戦いが見える位置に到着するとフェイトがバインドで拘束されていた。

そして、なのはが足元の桃色の魔方陣に魔力を収束させて球体を作っていた。

魔王砲撃……………いや、まだ悪魔砲撃か？ をチャージ完了させたところだった。

なのはは左手で持っているレイジングハートを頭上に掲げ

「これが私の全力全開！ スターライト、ブレイカー！！！」

勢いよく魔力で出来た球体に振り下ろし、桃色の極太光線を発射した。

フェイトはなすすべなく光線に飲み込まれてそのまま光線は海に

ぶつかり、そこら一帯の海水を弾き飛ばした。

……何もできない相手にそこまでやるか、普通？

まるで水爆が爆発したみたいだな。

これできのご雲ができれば水爆となんら変わりないな。

非殺傷設定がなかったら間違いなくあの世行きだな、これ。まったく……末恐ろしいな。

そんなん考えてる内に海に落ちたフェイトをなのはが助け出した。

「ずっと見てるのもあれだし、俺らも行くかな」

「わかりました、マスター」

俺はなのは達のもとへ向かった。

「なのは！」

俺はフェイトを抱きかかえているなのはに声をかける。

なのはは俺に気づいてなかったので驚いて俺の方を向いた。

「ふえ！？ ……も、もしかしてジীগさんですか？」

「ああ、そうだ。流石に三回目ならわかるか」

「また、姿が変わってますね……」

なのはが俺の姿を見て言った。

そう、俺は上半身は青、下半身は白を基調とし、赤い羽根を二枚背中に生やして右背部に大型ビームソード アロンダントを収納した機体 デステイニーガンダムになっている。

「まあ、気にするな、俺は気にしない。それよりフェイトが気がついた様だが」

「あ、本当だ。フェイトちゃん、大丈夫？」

あんだけやつといて心配するくらいなら少しは手加減してやれよ……と言いたかったが水を差すのもどうかと思い自嘲した。
KYにはなりたくないからな。クロすけと同類になるなんて冗談じゃない。

「……うん」

フェイトが答える。うん、非殺傷設定って凄いな、本当。あんだけやられてすぐに意識を取り戻すんだから。

「私の勝ちだよな？」

「そう……みたいだね」

「フェイトちゃん、自分で飛べる？」

「うん」

フェイトは空を飛んでなのはから離れた。

これがあのシーンか……実際に生で見るとあれだね。なんか、そのほほえましいって感じが？

そして、バルディッシュが光り、ジュエルシードが周りに出現した。

「なのは、ジュエルシールドを回収してアースラに帰艦してくれ
いきなり某KYの声が聞こえてきた。そんなにせかさなくてもい
いだろうにやっぱKYだ、こいつ。」

そんなことを思っていると上空の雲行きが怪しくなってきた。黒雲
が上空に広がり、雲からフェイトの頭上に紫色の雷が落ちてきた。
本当にいきなりだな。まあ原作で見たことあるからどこに落ちる
か知ってるけど

「させるかよ！ ビームシールドだ！」

俺は左手甲から光で構成された六角形のシールドをだしてフェイ
トの頭上に回り雷をビームシールドで防いだ。

だが、その隙に出現していた全てのジュエルシールドが上空の雲に
飲み込まれてしまった。

……まあ、どうせKYが時の庭園の場所を探知するためのおとり
なんだろうがな。

すると、空間にいきなりリンディ・ハラオウンの姿が映し出され
た。

「なのはさん、ユーノさんよくやってくれました。あとはこちら
に任せて一度、アースラに戻ってきてください。その……えつと、
「俺がガンダムだ」ガンダムさんも一緒に」

なんでガンダムかって？ ただ本名を教えるのがなんとなく嫌だ
つたからだ。

「……わかった。いいだろう」

俺は今回は素直に従い、アースラに転送された。

十八話 一部終しか見れなかった……（後書き）

ヴェ「今回出た機体の説明をします」

デステイニーガンダム・・・ガンダムSEED DESTINYに登場。

この機体のコンセプトはどんな状況でも対応できる機体。なので接近戦でも遠距離戦でも特に問題なく戦える。

だが、若干、接近戦に重点が置かれている。

一応、ハイパーデュートリオンエンジンで実質、エネルギー切れが起こらないのだがアニメではエネルギーが起きた謎のある機体。

ジ「設定は結構、強そうだな」

ヴェ「元主人公の機体で最終回で瞬殺されるけどね」

ジ「……それは言うな。俺はスパロボZのIFルートこそが本編だと考えている」

ヴェ「それは俺もだ。さてと、ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様、うりあ様、感想ありがとうございます。清浦刹那様よりレーバティンを、デステイニープラン様よりデステイニーのバックパック、パルマ手袋（手甲部にソリドウス・フルゴール）、シヨルダーパーツ、レジェンドの背部プラットホームとビーム突撃銃、デファイアント改ビームジャベリンとソリドウス・フルゴール付きの手袋を

うりあ様よりベルゼルト、グランディード、クストウエル、リボルディングステーク、プラズマステーク、オクスタンライフルを頂きました。ありがとうございます」

ジ「機体だけでなく武器も結構来たな。そういえばオクスタンライフルって実弾もビームも撃てる万能な銃だよな」

ヴェ「確かそうだった気がする。使えそうなのもあるし、よかったじゃん」

ジ「まあな」

十九話 偽りの気持ちそして管理局は本当にめんどくさい(前書き)

今回も戦闘はありません

十九話 偽りの気持ちそして管理局は本当にめんどくさい

（時空艦アースラの艦内）

俺はフェイトとアルフともどもクロノとなのは、ユーノに案内されてリンディ・ハラオウンの所に向かっている。

あ、もちろんデステイニーのままだ。管理局相手に油断は禁物だからな。

俺はフェイト達と違って手錠は付けられてないがな。なんやかんやでリンディにいるブリッジに着いた。

「なのはさん、ユーノさん、お疲れ様。それから、フェイトさん？ 初めまして」

「……………」

リンディがフェイトに話しかける。だが、フェイトは黙ったままだ。

だが、俺はそれよりもリンディの後ろにあるスクリーンに映っている時の庭園が気になった。

管理局員がプレシアのいる部屋に到達している。

俺は聞こえないが今、リンディがなのはに念話でフェイトに母親プレシアが捕まるところを見せるのは忍びないとか話してるんだらう。

「フェイトちゃん、あっちに行かない？」

「……………」

だが、フェイトはなのはが部屋から連れ出そうとしても微動だにせずスクリーンの映像を見ている。

管理局員がプレシアのいる部屋に入り、椅子に座っているプレシアの周りを囲む。

「プレシア・テストロッサ、時空管理法および管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します」

その囲んだ管理局員の一人が言った。

そして何人かの局員が奥の部屋に走った。

「な、なんだこれは!？」

部屋の画像を見たクロノが叫ぶ。だが、それはしかたないだろう。その部屋は異様な雰囲気をかもし出していた。

そしてそれを際立たすかのようにその部屋の奥に少女が入った培養液の生態ポッドがあった。

「あれは……………フェイトちゃん!？」

なのはが声を上げる。そのポッドに入った少女はフェイトに瓜二つな少女だったのだ。

「私のアリシアに近寄らないで!」

その言葉とともに椅子に座っていたはずのプレシアがいきなりポッドの前に現れて紫電を放つ。

その雷撃が部屋全体に走り管理局員を襲つ!

「危ない！ 防いで！」

「ぐわあああああ」

リンディの忠告もむなしく管理局員たちは全員雷撃によって倒れ付した。

「いけない！ 彼らをすぐに戻して！！」

リンディが叫ぶ。

「時間がもうない……13個のジュエルシードでアルハザードにたどり着けるかどうかは分からない……でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてからの……悲しい日々を、この子の代役を立てて代わりにするのも……聞いていて？ フェイト、あなたの……ことよ」

「……………」

フェイトはプレシアに語りかけるかのように話した。フェイトは何も喋らない。

いや、喋れないんだろ。この状況を9歳くらいの少女が受け入れられるわけがない。

「最初にあなたにアリシアの記憶をあげた。けどあなたはアリシアとは違った。あなたは私がこの子を生き返らせるまでの代役だったのよ。代役は本物が生き返ればもう……用はないわ……」

「代役って……どういふこと……？」

「二十六年前の事故の時にね。プレシア・テストロッサは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの。そして、彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる……使い魔を超える人造生命の生成。死者蘇生の秘術。その時の研究につけられた開発コードがF・A・T・E……プロジェクト・フェイト」

なのはの疑問に答えたのは確か、エイミーという原作キャラだ。

「プロジェクト・フェイトか……死者を蘇えらすは禁忌だ、そして不可能だ！死者は蘇えつてはいけないんだ！」

俺はプレシアに叫ぶ。だが、プレシアは意に介さず話を続けた。

「不可能じゃないわ。………そこに完全ではないけど成功がいでしょ、ねえ、フェイト？ でも、あなたはもう……私の側にいなくていいわ。………どこに行こうと好きにきなさい」

フェイトはその言葉を聞き目が死んで倒れるところを危うくなのはが抱く。

その目には生気がない。死人の目だ。

だが、俺はプレシアを責めることが出来なかった。

なんで、そんなに悲しそうなんだよ……なんで目に涙を溜めながら言ってるんだよ！？

声もよく聞くと涙声になっている。さっきから言葉も凄く言いづらそうだ。

無理して言ってるのが俺の目からみれば明らかだ。

こんな状態の奴をどう責めればいいんだよ……

「なのはさん！ フェイトさんを医務室に！」

「は、はい」

なのははフェイトを抱きながらブリッジを出て行った

「庭園内に魔力反応を複数確認、いずれもAクラス以上AAクラスもいます、数は……何これ!? 測定不能なほど発生しています」

エイミイが叫んだ。床などから西洋風の武器を持った甲冑が数え切れないほど出てくる。

目が赤く光っているが中身は多分、何も入ってないただの操り人形だろう。

「プレシア! 何をするつもりだ!?!」

「旅立つのよ、忘れられた都、アルハザードへ。……その邪魔は誰であるうとさせないわ」

俺の問いにプレシアは答える。

次元震を起こして次元断層を引き起こすつもりなんだよな……

「……行くぞ! なのは! ユーノ! ……あと、クロノ」おまけみたいに言うな!」プレシアを止めるぞ!」

「待て! 君は信用ならない。ここにのこ」いいでしょう」母さ……艦長!?!」

俺の言葉にクロノが文句を言うのをリンディが制した。

「今は少しでも戦力が必要なので許可します。ただし、あなたには民間協力者とさせてもらいます」

な！？ そんな都合のいいことがあるか！？

そうやって俺をなし崩しの管理局に入れようとするのか！？

……魔力量を0にしてればよかったな。そうすれば力を隠せたのに……

「却下させてもらう。俺は管理局に入るのはたとえ民間協力者でもごめんだ！」

「……そうですか。ならクロノ！なのはさんとユーノさんと一緒に行きなさい！」

俺が民間協力者になるのを断るとリンディは間髪いれずにクロノにそう命じた。

クロノとブリッジに戻ってきたのはたちは時の庭園に転送された。

「俺もい「駄目です。管理局員以外の人をプレシアのもとに行かすわけには行きません」

「艦長！でも、クロノ執務官となのはちゃんたちだけじゃ力が足りません！」

リンディが俺が時の庭園に行くのを許可しないとエイミイがそう叫んだ。

原作よりも時期が早いだけおそらくプレシアの体が幾分かましなはずだから原作より戦力が多い可能性が高いな……早く行かなければまずいな、これは！

「俺は行く！」「なら民間協力者に……」「民間協力者にもならん！」

「そこまで言うなら自分で行ってください！ 行けるなら何も言いません！」

リンディは俺の頑固な態度に対し少し頭にきたみたいだ。だが俺はそのほうが好都合！

「その言葉、待っていたぞ！ ゲート発動！」

俺は自分の前にゲートを発動させた。

「自分で行けるんだから好きにさせてもらっせ。じゃあな！」

「ま、待ちなさい！」

俺はリンディの停止を気にせずゲートを通り時の庭園にたどり着いた。

～時の庭園～

「頼む！ 俺に力を貸してくれ！」

俺は時の庭園につくと同時に能力により機体呼び出して二手に別れた。

間に合ってくれよ！ 俺は心の中でそう呟きながら先に進んだ。

十九話 偽りの気持ちそして管理局は本当にめんどくさい（後書き）

ヴェ「……最近、題名が思いつかない」

ジ「しかも、俺ほぼずっとアースラの中だったしな」

ヴェ「そのぶん次回は暴れてもらおうから」

二十話 決戦！ 時の庭園

「喰らえ！ ビームライフルだ！」

俺は右手のビームライフルを撃ち水色の光線をプレシアの召喚した動く鎧の一体に当てた。

直撃した鎧は爆発してあとかたもなくなった。

「少しは進んでいるはずなんだが……全然、k yに追いつかないな……なあ、ソル。……俺もしかして道間違えた？」

「いえ、道はあつてます。ただ、ここに到着したのが遅すぎたので……」

「かなりの距離があるってことか……クソッ！ しかも敵が多い！ きりがないぞ！」

倒しても倒してもどんどん奥のドアから出てくるからな……

「もういい！ 管理局にあまり力を見せなくなかったが背に腹はかえられん！ <直撃>！ <必中>！」

俺は光に包まれる。

「これで敵が大勢いようと関係ない！ 喰らえ！」

俺は背部左部分からビームランチャーを取り出し赤いビームを放ち前方の鎧たちを薙ぎ払う。

照射時間の長いビームは俺の部屋にいた鎧の大半を破壊した。

「これで先に進めるな。行くぞ、ソル！」

「はい」

俺は奥の部屋に進んだ。

ジークsideout

なのはside

私は今、大勢の鎧さん達と戦っています。

ユーノ君とアルフさんも手伝ってくれてますが鎧さんは数が多い
うえに一体一体が強いので全然先に進めません

「なのはー！」

ユーノ君の声に振り向くと鎧さんが剣を振りかぶり私に振りおろ
そうとしていました。

……これは防げないよ……私は怖くて目をつぶってしまいました。
でも……

「サンダーレイジ！」

この言葉を聞いた瞬間、黄色の雷が私を斬ろうとした鎧さんに当たり私は助かりました。

私が雷の落ちてきた方向を見るとそこにはフェイトちゃんがいま

した。

来てくれたんだ！

フェイトちゃんは私の目の前まで下りてきましたが話しづらそうな顔をしています。

すると、私の前に普通の鎧さんよりはるかに大きい鎧さんが壁を壊して出てきました。

「大型だ……バリアが強い。……でも二人でなら」

「フェイトちゃん……うん！ う「悪いが三人だ」え！？ お兄ちゃん!？」

私は凄く聞き覚えのある声に後ろを振り向きました。

するとそこにはまるで天使のようなロボット？ がいました。なんとなく少しジグさんと似てる気がするの

「俺はお前の兄じゃない。……それより前方の敵に集中しろ」

前の鎧さんは肩に付けた大きな大砲をチャージしていました。

「俺が援護する。お前たちで奴を倒せ」

「「は、はい」」

私たちは彼の異論は受け付けられないかのような言葉につい返事をし
てしまいました。

……やっぱり声がお兄ちゃんにしか思えないの……本当はお兄ちゃんじゃないのかな？

「そこをどけ……！」

ロボットさんは両手に持っている銃の右手の方で光線を打ち出しました。

その光線は細かったけど鎧さんに当たった瞬間、凄い爆発が起きました。

凄い……私のデイバインバスターより強いかも……チャージなしであれだけ強いなんて……

「何をやっている？ とどめをさせ！」

「あ！？ ごめ………すみません………フェイトちゃん！」

「うん」

「サンダーバスター！」

「デイバインバスター！」

私とフェイトちゃんが打ち出した砲撃はひとつになり大きな鎧さんに当たって爆発させました

でも、それだけではおさまらず部屋の壁を容易に貫通してしまいました。

……少しやりすぎたかも……

なのはsideout

プレシアside

今、かなりの揺れがあった。原因はおそらくあの子ね……

「フェイト……来てしまったのね……なんで来てしまったの……
ここには来る気すら起こさないように話したのに……ねえ、アリシ
ア……」

私はアリシアになる可能性のある物に問い掛ける。

ここに来れば命に危険があるから断腸の思いであれらの言葉を言
ったのに……

やっぱり最後にあの言葉、言おうと思っていたとどめの言葉を言
わなかったのが原因かしら……

でも、あの言葉、あなたは私の娘じゃないだけはどうしても言え
なかった……

プレシアside out

ジークside

「クロノ、苦戦してるようだな？ 手を貸そうか？」

やっとクロノに追いついたぜ……ダメージはないが時間は凄くかかったな

「君は民間協力者になったのか？」

「なつてないな」

まあ、ぶつちやけ逃げてきたからな。あいつらも俺に何かする余裕がないから何もしてこないがな

「なら、君の力を借りることはできない。これは管理局の問題だ
「そのボロボロの体で一人で何が出来るんだ？」クッ！？ だがし
かし……」

こいつ俺があと十秒来るのが遅かったら鎧にやられてたくせによく言っな。

本当に威勢だけは感嘆に値するな……

「……協力するのが嫌なら俺の後ろについてこい。行くぞ！」

「ま、待て！ わかった、協力してくれ。ただし、僕の足を引っ張るなよ！」

「その言葉そっくりそのままお前にかえすぞ、クロノ」

本当に虚勢だけなら凄いな、こいつ。

「さて、とりあえず前の邪魔な敵を倒すか！ アロンドアント！」

俺は右背部から自分の全項をも上回る剣　アロンドアントをとりだして構える。

「叩き斬つてやる！」

俺は翼部分からピンクの光の翼をだし、普通よりもはるかにでかい鎧に突っ込み縦に一閃した。

「まだだ！」

さらに今度は横に斬る。そして一度後ろに下がり……

「これでとどめだ！ 覚悟しろ！」

アロンドアントを敵に突き刺した。アロンドアントは鎧を簡単に貫通し、敵を爆発させた。

「よし、邪魔者は破壊した！　行くぞ、k y！」

「誰がk yだ！」

プレシア！　お前の計画は俺が、俺たちが打ち砕く！

二十話 決戦！ 時の庭園（後書き）

ジ「……俺、思ったほど暴れてないんだが……」

ヴェ「デステイニーはどちらかというと一対一の方が向いてるから一対多数にはあまり向いてないからしかたない。清浦剎那樣、デステイニープラン様、ライ様感想ありがとうございます。デステイニープラン様よりウイングガンダムゼロカスタム、ガンダムナタク、ゴッドガンダム、フリーダムガンダム、ブラックフリーダムガンダムをいただきました。ありがとうございます」

ジ「今回出てきたやつこの機体が出てるな」

ヴェ「一応、機体の正体は明かしてないんだが……」

ジ「あんなメジャーなガンダムほとんどの人がわかる。しかも、声優ネタまでしたくせに」

ヴェ「やっぱスパロボと言えば声優ネタでしょ」

二十一話 決戦！ 時の庭園 中篇

なのはside

私はフェイトちゃん、アルフさんと別れて駆動炉のある部屋に着きました。

でも、そこには凄い数の鎧さんがいました。少し多すぎるの……でも、やるしかない！すると、ユーノ君が私の前に出ました。

「防御が僕がやるからなのは封印に集中」そんな時間はない、俺がやる」え！？こ、こんな大勢の敵相手に一人なんて無茶ですよ！」

ユーノ君の意見は……ロボットさん？に拒否されました。あれ？そういえばまだ名前を教えてもらってないの

「私はなのは、高町なのはです。すいません、あなたのお名前を教えていただけませんか？」

「……デュオ・マックスウェルだ」

あれ？この名前どこかで聞いたことがあるような気がするの……いつだったかな？……思い出せないや、きつと気のせいだね。

「デュオさん、私も無茶だと思います。こんな大勢の鎧さん相手には三人で協力しないと……」

「……時間がない。ここは俺に任せる。お前はその後、駆動炉を封印しろ」

「時間がないなら協力したほうが……」「駄目だ」な、なんでですか!？」

時間がないなら三人でやった方が早いに決まってるのに……
わけがわからないよ!？」

「お前たちがいると全力で戦闘できない」

「え!?! どういうことですか!?!」

「言った通りの意味だ」

そんな!?! ようするに私たちは邪魔ってこと!?!

デュオさんは確かに私たちより強い。さつきから大半の鎧はデュオさんが倒してる。

でも、私たちだって鎧さんを倒せるの!

最初はこのデュオさんのこと、お兄ちゃんと間違えちゃったけど
やっぱりお兄ちゃんとは全然違うよ!

お兄ちゃんだったらこんなひどいこと言わないの!

「それにお前たちはここに来るまでに魔力をかなり消費している」

「だけど一人じゃ危険ですよ! もしやられちゃったらどうするんですか! 死んじゃいますよ!」

「命なんて安いものだ。……特に俺のはな」

そ、そんな！？ 命が安い！？ 人の命が安いわけがないよ！
それにやっぱり一人でなんて危険すぎるよ。

「命が安いなんて！ それに一人でなんて「なのは、デュオさんに任せよう」「ユーノ君！？」」

「僕たちはもう余り魔力が残ってない。だからデュオさんが危なくなったら援護に行きます！ それくらいならいいですよね？」

「……好きにしろ」

納得させちゃったの。確かにあまり魔力が残ってないのは事実なの……

デュオさんはまだ余裕があるみたいだし……落ち着いて考えたらしかたないかな……

でも、危なくなったらすぐに助けに行くの！

「分かりました。でも、気を付けてくださいね」

「任務了解」

デュオさんは飛んで鎧さんたちに向かって行きました。

……本当に大丈夫かなあ

いつでも助けに行けるようにしておこう。

そう考えている間にデュオさんが戦闘を始めました。

デュオさんは翼から光の剣を取り出しました。

「いけるな？ ゼロ……」

鎧さんたちの集団に突撃していても簡単に鎧さんを斬り捨てて爆発させていきます。

しかも複数の方向から斬りかかってこられても簡単に避けて反撃で破壊して全く隙がありません。

……凄い。まるで敵の動きが分かってるみたいなの

「今、楽にしてやる。……ゼロ、奴らの動きを捉えろ！」

デュオさんは鎧さんの軍勢の中心部に両手の銃を撃ちました。すると軍勢の真ん中の部分にぽっかりと穴があきました

その穴にデュオさんは地面すれすれまで降りてしまいました。

危ない！ そんなところにいたら袋叩きにされちゃうよ！？

そんな私の不安を知ってか知らずか、かかしのようなポーズをとり両手の銃から黄色の光線を照射した。

その光線は鎧さんを飲み込むほど大きくデュオさんの左右の鎧さんを破壊して群れを真っ二つに割りました。

「す、すごい！ チャージなしであんなに強いのも凄いのにな、それを同時に二つもなんて……」

凄過ぎるよ……くやしけど今の私じゃ絶対にできない……

でも、それで終わりではなかったんです。

なのは side out

ユオ?side

デ

……やはり弱いな。これなら簡単に倒せる。

さっきまでは味方が近くにいたから使用できなかったが今はできる！

この世界は命令を聞くだけの人形を必要とはしていない。排除する！

「今、楽にしてやる。……ゼロ、やつらの動きを捉える！」

俺は敵機の群集の中心に両手のバスターライフルを撃ち敵を破壊し穴を作りその地表すれすれに降りる。

「出力最大……攻撃開始」

そして両手の銃　バスターライフルを左右に展開し、引き金を引く。

俺の左右にいた敵は一瞬で光線によって消え去った。

だが、まだ俺の攻撃は終わらない。

ライフルのトリガーを引いたまま体を回転させる。

俺の周り360度全てにバスターライフルの光戦がいきわたる。

三回転したところで回転を止める。俺の周りの敵は全て爆発して消え去っていた。

「任務……完了」

これであとは駆動炉を封印するだけだ……俺は必要ないな。

「じゃあな。「え！？ デュオさん！？」」

俺は少女の返事を待たずに光となって消え去った。

デュオside out

プレシアside

『プレシア・テストロツサ！ 次元震は私が抑えています。駆動炉ももうすぐ封印され、あなたのもとには執務官が向かっています。アルハザードは、そこに存在する技術はただの曖昧な伝説です！』

誰かが私に念話で話しかけてきた。おそらく管理局員だろう。

「アルハザードは存在するわ。ただそこにいけるかどうかはわからない」

『行けるかどうかも分からない場所に行くなんて……随分と分の悪い賭けだわ』

「言われなくても分かってるわ……それでも私は行かないと駄目なの」

そう、もうこれしかないのよ。私はこのままではもうじき死ぬだろう。

そしたらアリシア、そして……フェイトはどうなるの？

アリシアは生きてはいない。でも、フェイトは生きている。

でも、もう私はアルハザードに行くしか選択肢は残されていない。なら……せめてフェイトだけでも幸せに生きさせてあげたい。

でも気づくのが遅すぎたのよ。もうフェイトは私のせいで罪を犯している。

「そういえばフェイト……私の言うことを人形のように聞いて何も知らずにジュエルシードを集めたあの可哀想な子はどこにいるのかしら？」

フェイトの罪は私が一緒に持っていくのよ。私が無理やりやらせたことにしてね。

それが私があの子にしてやれる唯一の残されたことだから……

二十一話 決戦！ 時の庭園 中篇（後書き）

ジ「……俺、今回全く出てないんだが……」

ヴェ「そのかわり今回は出ずっぱりだ。清浦刹那樣、デステイニープラン様、ライ様、感想ありがとうございます。清浦刹那樣よりレーザーフォンを。デステイニープラン様よりガンダム、シャア専用ズゴッグ、ターンA、ターンX ストライクガンダム、イージスガンダムを頂きました。ありがとうございます」

ジ「なんか妙に今回のプレゼントは力の差が激しいな。レーザーフォンとターン二機はチート級なのに他はあまり強くないな」

ヴェ「でも、俺はターン系よりファーストの方が好きだ！ シャア専用ズゴッグは凄い機体だ！ なんせあのGMの見せ場をつくったんだからな。ぶっちゃけGMはあれシーン以外に記憶がない」

ジ「そして宇宙をも作り出せるレーザーフォンか」

ヴェ「こいつのBGMのヘミソフィアはかなり好きだなあ。あ、あ」と感想の制限を外したのでユーザー以外の人も感想をかけるようにしました。よければ書いてください」

二十二話 決戦！ 時の庭園！ 後編 そして……（前書き）

今回は自己最多の長さを軽く更新しました。

まあ、もともとの一話が短いのでそこまで長くないかもしれませんが、話がかなり強引です。

二十二話 決戦！ 時の庭園！ 後編 そして……

ジーグside

「そうよ……私は取り戻す。過去と未来を……こんなはずじゃないかった世界の全てを！」

俺は隣の部屋からプレシアの声が聞こえた。

そこか！ だが俺が突入しようとするのとKYが既に隣の部屋の壁を破壊してそこにいた。

……さっきまで俺の後ろにいなかったっけ？

「世界は何時だってこんなこはずじゃないことばかりだよ！
ずっと昔から……何時だって誰だってそうなんだ！ こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！
！ だけど自分の勝手な悲しみに他人を巻き込んでいい権利などこの誰にもありはしない！！！」

名台詞だな。確かに的を得た言葉だ、普通ならばな……

事情を知ってもそんな台詞が言えるんだろうか、こいつは。

プレシアも他人によって自分の世界を壊されたのだからな

「……それでも、とりもどすのよ。アルハザードでね！」

「アルハザードに行くなんてそれこそ雲を掴む様な話だ！ 奇跡でも起こらなきゃ無理だ！！！」

クロノの言葉に俺は少し疑問を持った。奇跡でも起こらなきゃ、か……違うだろ

「クロノ……奇跡ってのはな、自分の手で起こす物だ。初めから諦めていれば奇跡など起こらない。そういう意味では俺はプレシアを否定しない。諦めるよりはよっぽどいい」

俺はクロノを諭す。まあ考え方の相違だから言ってもあまり意味がないかもしれないが

「な！？ 君は何を言い出すんだ！？ 君はまさかプレシアの肩を持つのか！？」

「話は最後まで聞け、クロノ！ だが確かに他人を巻き込むのはおかしい。そして自分の娘を利用するなどなお悪い……だからけじめは自分でつける。なあ、フェイト」

俺はいつの間にかプレシアの後ろにいたフェイトに話しかける。
みごとにタイミングだな。そしてプレシアも気づいてなかったみたいだな……

後ろを見てかなり驚いてるな。

さて……どうなるかな。できれば原作どつりにはいかないことを望むか。

フェイト！？ 何時の間に……！？ ゲホッ ゲホッ また発
作ね……

私は手で口を押さえたので吐血が手にべったりとついてしまった。

「母さん！？」

そんな私を心配したみたいでフェイトが私のそばに来ようとする。
……まだ私もことを心配してくれるなんて……あんなにひどい
ことを言ったのに

でも、こちらに来させてはいけない……

アルハザードにたどり着ける可能性はもうないに等しい。あの子
を巻き添えにはできない……

「何をしにきたの……？ どこへでも行きなさい……あなたにも
う用はないわ」

私はフェイトを静止させるかのように叫んだ。

あの子は私の言葉に少し動揺しこちらに向かってくるのをやめた
みたいね……でも、私から目を離さずに口を開いた。

「あなたに言いたいことがあって来ました。私は……私はアリシ
ア・テストロツサじゃありません。あなたが代わりに立てた代役な
のかも知れません。だけど私……フェイト・テストロツサはあなた
に生み出してもらって育ててもらった……あなたの娘です」

フェイト……本当なら言いたい。あなたはアリシアの代役ではなく私の……私に自慢の娘だとでも、言うわけにはいかない。

ここで娘だと言ったらあの子はきつと私とアルハザードに行くと言っだろう

それだけは避けないといけない。アルハザードにはもう行けないのだから

でも、もう後戻りはできない……

なら、せめてフェイトに私を憎ませて少しでも私がいなくなったときの悲しみを減らそう

「だから、何？ あなたを娘とでも言えと？」

「あなたがそれを望むなら……それを望むなら私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る」

！？ フェイト……

「私があなただの娘だからじゃない……あなたが私の母さんだから」

フェイトが手を差し伸べるようにプレシアに向けて伸ばす。

私は……どうすればいいの……

私が苦悩していると先ほどからたまに言葉を喋っているロボットが声を発した。

「プレシア……止めておけ、お前のしようとしている事は無駄だ。いくらお前がフェイトと距離をとり嫌われようとしてもお前の心がそれをよしとしていない。フェイトもそれを分かっている……その証拠にお前は気づいてないだろうが目から涙があふれでているぞ」

私は顔に手を伸ばす。すると伸ばした手は濡れた。

嘘！？ 涙を流していたなんて！？

本当の気持ちを隠しきれてなかったみたいね……

「自分の気持ちを偽るのも時として必要だ。だが今、そうする必要はない。お前が死に掛けているのは知っている。だが、アルハザードは奇跡が起きても行けはしない。お前もそれは分かっているだろう？ フェイトのことを案じているのならお前の気持ちに正直になれ。それが一番フェイトのためになる」

私がフェイトの方を見るとフェイトは頷いた。

その目は私の本当の気持ちを知っているという強い意志を感じさせる目だった。

「母さんお願い！ 私に嘘の言葉じゃなくて本当の気持ちを教えて！……」

「もう自分の気持ちを偽れそうにはないわね……わかったわ、フェイト、あなたに本当の気持ちを伝えるわ……あなたは私の娘よ。アリシアとは違う、私の自慢の娘よ！」

私が言い終わるとフェイトは泣きながら私に抱きついてきた。

「フェイト……ごめんなさいね。悲しい思いをさせてしまった」

「ううん、私は今、母さんが私のことを娘と言ってくれたことが嬉しいの」

なんでもっと早くから気づけなかったのよ……アリシアはもう死

んでしまった。

それは紛れもない事実。でも、今の私にはフェイトがいるってね。時間がもつとあればよかったのに……そうすれば親娘として一緒に暮らせたのに……

プレシア side out

グ side

ジー

うん、母と子の仲直り？ 感動するな。

もうすぐこのときの庭園が崩壊しそうだが……あと少しぐらいは「取り込み中の所悪いんだが、もうすぐこの場所は崩壊する。プレシア・テストロッサ、あなたを逮捕します！ 無駄な抵抗はしないでくれ。次元断層を起こせない今、あなたのやろうとしたことは出来ない」

な！？ このKYが！ いや、CKYが！ 何でこんないところ……

アロンドントを一発ぶちかましてやるうか？ クロノ？
こんなに人にむかっていたのは初めてだぞ！

「……わかったわ」

プレシアはしかたなく納得した。

ありえん、本当にありえん。なんであの感動のシーンを途中で強制終了できるんだ!?

後で潰すか、こいつ。

「……………なら俺が転送してやる。ゲート発動」

俺はゲートを出現させて遅れてきたなのは達とフェイト、プレシア、CKYにゲートを通らせた。

そして最後に俺がゲートを通り、アースラに戻った。

あんまり戻りたくはないんだがな……

〜アースラの中〜

俺達はアースラに戻ってきて数日経った。

フェイトとアルフは護送室に監禁されている。

プレシアは体の問題から魔力リミッターをかけられた状態で医務室のベッドで寝かされている。

なのはとユーノはこの事件の功績が評価され表彰を受けている。

俺は特にお咎めなしでアースラにいる。だが、まだ姿はデステイニーのままだ。

もう、ぶっちゃけあまり正体を隠す必要はない……………どうせなのはにばらされるから。

でも本当の姿を見せるタイミングがなかったんだよね……
まあ、プレシアの病気を治すならなのは達が表彰されてアース
ラの管理局員が全て一箇所に集まっている今しかないな。
俺の力をあまり見せたくないからな。
俺は医務室に向かった。

くアースラの内部 医務室く

「よう、プレシア！ 気分はどうだ？」

俺はプレシアに話しかける。

まあ聞くまでもないけどな。あきらかに顔色が悪いからな。

「よくないわ。まあ当然よ、ただでさえ体が弱っていたのに体に
負担のかかる次元魔法を使用したんだから。もう体がもたないわ……
…私はもうじき死ぬわ……」

プレシアが辛そうに答える。

まあ、そうだよな。確かに死ぬな。このままではの話だがな

「お前はもう死んでいいのか？」

「いいわけないでしょ！ ……せめてあの子と少し暮らしたかつ
たわ。ちゃんとした母と子としてね……」

プレシアの答えはわかっていたから聞くだけ野暮だったか。まあ
いい。

「了解した。なら、助けてやる。ソル、一度バリアジャケットを解除してくれ」

「わかりました」

俺はもとの姿に戻る。

だが、その姿を見たプレシアが驚愕する。

「あ、あなたはあの時の！」

あ、そういえば一度押しかけたな。完全に失念してたな……主にKYへの怨念で。

「ああ、以前お前のところに押しかけたのは俺だ。ソル、セットアップ」

俺は青緑色を基調としたどこかの性格の悪い隠頭メガネが着ている軍服をモチーフにしたバリアジャケットを纏った。

そして俺の足元に魔方陣を発生させた。

「今、治してやる。しばし大人しくしている」

「無駄よ。治りはしないわ」

「無駄かどうかは受けてから決める。……全ての呪縛はこの名の元に無と消えよ！……リカバー！」

プレシアの体を光が包む。リカバーは本来ならば戦闘不能以外の状態異常を全て治す魔法だ。

そしてテイルズの魔法はなぜか本来の効果よりも強力になってい

る。

なので、たぶん治せるだろう。

「嘘……！？ 体がすごく楽よ……本当に治ったというの！？」

「ああ、治したぞ。どうだ、無駄ではなかっただろ？ あ、でもしばらくは体調が悪いフリをしといてくれ。俺が治したことがばれたら困る」

「どうして？ 見たところあなたは管理局員じゃないみたいだけど隠す必要があるのかしら？」

プレシアなら予想が付きそうなものだがな……
監理局の闇を知っているこいつならな

「俺は管理局には入りたくない。だが、不治の病であるお前の病気を治したのが俺だとばれてみる。管理局は俺を人体実験してでもどうやって治したかを調べるだろう。お前なら分かるだろう？」

確か、プレシアも安全を無視して実験させられたはずだからな。
たぶん、説明とかしなくても分かってくれるだろう。

「……そうね。管理局ならやりかねないわね……わかったわ。あなたに治してもらったことは黙っておくわ。ただ……」

案の定、分かってくれたか。そしてプレシアが言いたいこともだいたい想像がつく。

「分かってるさ。フェイトには俺がこっそり伝えておく。プレシア・テストロツサは死なないとな」

「恩に着るわ」

「いや、これは俺のわがままだからな。だが、このままだとおそらくお前は数百年牢獄に入れられることになるぞ」

原作でもフェイトに言っただけだからな。あの時は事情が事情だったから無罪だったんだよな。

プレシアだと無罪にはならない。

だからといって数百年も牢獄に入れられては出てくるまでに死んでしまう。

「わかっているわ。しかたないことよ……覚悟はしているわ。せめて私が生きているという事実だけでもフェイトを悲しませずにすむわ」

プレシアは悲しそうに呟いた。

……こんな悲しい結末なんて酷すぎるだろ。元はといえば管理局の責任なのに

くそ！！ 管理局め！ ……ん？ 待てよ？ プレシアの裁判は管理局が裁判するんだよな

「なあ、お前がこうなったのは元はといえば管理局の責任だからそれを全面的に押し出せば罪を結構軽く出来ないか？ それにお前は凄く反省してるみたいだし、囑託魔導師にでもなればさらに軽く出来ると思うが？」

プレシアが事件を起こした原因は管理局にもあるはずだ。

安全性を考慮されずに半強制的にやらされた実験のせいでアリシアは死んだんだ。

あきらかに管理局に非があるだろう。

「無駄よ。私は囑託魔導師にはなれないでしょうね。それにいくら管理局にも責任があると言っても証拠がないわ。裁判は管理局員が行うのよ。管理局員はほとんどが管理局は正義の組織だ……そう思っているのよ。……信じるわけないわ」

プレシアは絶望的な表情を浮かべた。

もう諦めているのだろう。だが俺は簡単には諦めないぜ。

プロジェクト・フェイト、なんて計画に運命を定められるなんて納得いくわけがない。

「……絶望に浸るのはまだ早いんじゃないか？　俺がお前の罪を少しでも軽くしてやる！」

プレシアは俺の言葉を聞いて驚いたみたいだ。

「話を聞いていたの！？　無理だって言ったじゃない！」

「無理かどうかはやってみないとわからないもんだ。俺が奇跡を起こしてやる。それまで少しの間、信じて待っててくれ！　だいたいはアルハザードへの生き方を見つけるほうが証拠を探すより難しいと思うぞ、俺は。そんなことが出来たんだ、なら人一人の罪を軽くすることくらい可能なはずだ」

プレシアは俺の言ったことに半ば呆れていたが

「わかったわ。駄目でもともとだし……お願いしてもいいかしら？」

俺に頼み込んできた。何か、駄目でもととってというのが気分悪いが……今は何も言わない。

「大船に乗ったつもりで待っていてくれ。そろそろここから出ないとまずいかな。表彰が終わりそうだ」

俺は胸を張って言いつつ再び、デステイニーの姿になる。

「じゃあな」

俺は医務室を出ていった。

～アースラの中 ブリッジ～

俺がなのは達を探しているとリンディ、クロノと一緒にブリッジにいた

さて、いつまでもこんなところには居たくないしなのは達を連れてさっさと帰るとするか

俺はなのは達の近くに行き

「なのは、ユーノ、地球に帰るぞ」

と発言した。もうこんなところはうんざりだ。

だが、思わぬところから反論が来た。

「無理よ、今はまだ次元震の余波があるから空間が安定してないのよ。おそらく帰れるのは5日後くらいね」

5日？ 原作じゃ1日のはずでは……ジュエルシードの数の差で威力が上がったのか。

「アースラが到着するのなんか待つ気はない。転送魔法で帰らせてもらう」

「話を聞いていたの？ それともあなたの頭が弱いのかしら？ 空間が安定しないのに転送なんか出来るわけないでしょう！」

頭が弱いだと…… ハラオウン一家はブレイなことを言いまくる最悪の家計だな

フェイトが家族になるところなってしまうのか…… なんとかしても家族になるのは阻止しないと

こんな奴が三人なんて考えただけでもいらいらする。

「お前のものさしで人を図るな！ お前とは魔導師としてのレベルが、いや次元が違う。俺は空間が安定しないくらいで帰れないお前ほどレベルは低くない」

フツ、リンディは顔は笑っているが心の中ではハラワタ煮えくり返っているんだろうな。

ざまあみやがれ。自分でやられればどれくらいむかつくか教えてやるつか！

「まあそういうことだ、無能の艦長。さて、無駄な話だったな。

なのは、ユーノ、帰るぞ。ゲート発動！」

目の前にゲートを出現させる。もちろん地球とつながっているぞ。

「どうだ？　ちゃんと繋がっただろ？」

俺のしたことにリンディは開いた口が塞がらない様だ。

まあ、この世界の常識では実現不可能だろうからしょうがないか。

「何も言うことはない様だな。さらば「待ちなさい！」……いいたいことがあるのか？」

リンディは身だしなみを整え、背筋をピンと伸ばし口を開いた。

「……正直な話、あなたがいなければプレシアを逮捕するどころか、私たちはやられていたでしょう。あなたは民間協力者ではないので表彰は出来ませんが、感謝の意を表します。ありがとうございます」

な！？　俺は今、リンディを怒らせたところだぞ。なのになんてこんなことが言えるんだ！？

リンディに真剣に感謝されて俺はかなり困惑した。

「……じゃあな」

俺はゲートを通った。続けてなのは達がゲートを通りゲートは消えた。

地球 翠屋の前

ゲートによってなのは翠屋の前に俺は自分の家に転送された。それからしばらくの間歩き、翠屋に到着した。

やっと、やっと、翠屋に来れたぜ！ どれだけ待ち望んだことか

……

事件が終わったら来るつもりだったからな。やっと入れ……ないよな。この時間じゃ……

既に時刻は9時を回っているからな。翠屋が営業しているわけないか……なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだよ……

「しかたないか。また、日を改めて来るとす」「君がなのはの面倒を見てくれたジークさんだね？」

えー!? 俺が声のしたほうに振り向くと高町士郎となのはがいた。どうやら、しばらくの間、考え込んでいたらしい

「話は聞いたよ。なのはのしていることを手伝ってくれたんだってね、ありがとう。何かお礼がしたいと思ってるんだが……先ほどの独り言を聞く限り、どうやら君は翠屋に入りたいみたいだね。なら、流石に今日は無理だが明日以降ならいつでも着てくれ。無料で注文していいよ」

……太っ腹だな。この人……まあ、いいや。ここはご好意にあやからせてもらうとするか。

「本当ですか！ ありがとうございます。じゃあ、また来ますね」

「ああ、待っているよ」

「では、また」

そう言い残し俺は帰路についた。

数日後

アースラがミッドチルダに戻る前に少しだけなのはとフェイトに別れを言う時間が与えられたらしいので俺もその現場に行った。そしてなのはとフェイトが別れを言った後前に念話をしフェイトにプレシアは死なないこととその旨の情報をフェイトのデバイスに伝えた。

ただし、俺の力で治ったわけではなくプレシアの力で治したということにした。

フェイトに俺の力を伝えると管理局にはれる可能性があるから伝えられないことに気づいた俺の苦肉の策だ。

それでも、フェイトは何の疑問も持たずに凄く喜んでいることだろう。

プレシア、カバーは任せた……管理局には何とかして誤魔化してくれ

「何か、少し罪悪感を感じる……」

「まあプレシア・テストロツサは助かるのは本当なんですから問

題ないでしょう」

「そうだな、ソル」

これでヴォルケンリッターが現れるまでは平和だな。

違法研究所を潰しておくか、いや、先に証拠を集めをしてそれから翠屋にでも行くか！

いろいろと今後の予定を考えているジークであった。

二十二話 決戦！ 時の庭園！ 後編 そして……（後書き）

ヴェ「無印編、完結！ やつと終わった！ これもこの小説を読んでもくださっている皆様、お気に入り登録してくれている皆様、感想をくださった皆様のおかげです！！ ありがとうございます！ してこれからもよろしくお願いします！！ がんばりますので」

ジ「がんばるとか言ってる割には話が普段の字数の三倍以上あるわりに最後の終わり方短いな、おい」

ヴェ「最後は若干妥協した。この話でなんとしても無印編を終わるつもりだったから」

ジ「手抜きするんじゃない！」

ヴェ「手抜きじゃないよ。しかたのないことだよ！ 清浦刹那様、ライ様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。清浦刹那様よりファイナルダンクーガ、ジェネシツクガオガイガーを、デステイニープラン様よりガンダムエピオンカスタム、トールギス？、ガンダムデスサイズヘルカスタム、ガンダムヘビーアームズカスタム、ガンダムサンドロックカスタムを頂きました。」

ヴェ「ちなみにデスサイズとエピオン以外はスパロボではカスタムでアニメではカスタムではなく改というプチトリビアがあります。まあでもどっちでもいいはずですが」

ジ「どうでもいいことは言わなくていい」

ヴェ「そして実はプレゼントからも出す機体を考えている自分がい

る」

ジ「お前……それじゃ出して欲しい機体を聞いた意味がないじゃん」
ヴェ「いや、もちろん出して欲しい機体にかいてあったのは極力だしよ。それとは違って送られた機体を見たときに、あ、この機体はここにいいんじゃないか、と思いつくことがある」

ジ「……こんな駄目作者ですがこれからもこの小説をよろしく願います」

ヴェ「って何、勝手に終わってんだよ！」

二十三話 人は、特に管理局は信じないほうがいい

くアースラの中 模擬戦室く

なんでこんなことになったんだろうか……

俺は現在あの忌まわしき呪われた空間 アースラの艦内の模擬戦用の部屋にいる。

しかも俺VSなのは、ユーノ、クロノという組み合わせだ。正直な話、まったく気が乗らない。

だが、なのは達は既にバリアジャケットを展開してかなりやる気があるみたいだ。

子供をいたぶるようなことはしたくない、……一人を除いて。

「なあ、やはりやめないか？」

「やめるなら、あなたの負けにして管理局に入ってもらいますよ」ブリッジで見ているリンディが通信してきた。

「それは却下だ」

管理局に何か入る気などない。というか入りたくないな。

「それならあなたがその三人に勝てば開放してあげるわ。勝てればね」

リンディが不適な笑みを浮かべる。

やはり、ハラオウン家の言葉を鵜呑みにしてはいけなかった……
そうすればこんなことにはならなかったのに……

（二時間前）

俺はフェイトが転送された後、今後の予定を考えていた。
すると、そこにいたのをどうやら見つけられたみたいでリンディ
が通信してきた。

「なのはさんから聞いたわ。あなたがガンダムさんの正体なんで
すってね、ジークさん？」

なのは……俺の正体をやはりばらしたか。
まあ、俺が口止めしてなかったのが悪い。
ばれるのは覚悟していたがそれでもやはり嫌な物は嫌だな。

「……そうだ。俺が、ジーク・クラインだ。……何の様だ？」

俺は不機嫌さを隠さずにむしろ前面にだしつつ答える。

「あなた、さっきフェイトさんのデバイスに何かを送ったわね？
重要参考人である彼女に勝手に何かを送るのは禁止されてます！」

「ここは地球だ。管理世界ではない、お前たちの法律など意味を
成さない」

「これ、前も言った覚えがあるんだが……」

「残念ね。フェイトさんのデバイスはアースラの中、つまり管理

局の法が適用されるの。よってあなたは犯罪者「貴様、いいかげんにしろよ。アースラを木っ端微塵にするぞ……！」ッ!？」

俺は殺気を込めた言葉で威圧した。

案の定、リンデイは俺に少し怯えたようだ。

ちなみにこれは脅しではない。

以前、家にとりつけたレクイェム、ジェネシスという超大型ビーム砲をいつでもアースラに照準をあわしている。

発射すればいつでもアースラは跡形もなく消える。

「ア、アースラを破壊なんて出来るわけがないわ」

リンデイは結構、動揺しているが俺に反論してきた。

だが、反論が前と同じだ。……学習能力がないな、こいつ。それでも、艦長かよ……

「前にも言ったはずだ。お前のものさしで人を判断するな」

「クツ!？ ……いや、いがみ合うのは止めましょう……私はあなたと喧嘩をするために通信してるんじゃないわ。あなたと交渉しに来たのよ。管理局に入らない？ そうすれば罪はもみ消してあげるわ」

「話し合いの余地などない。俺は管理局が嫌いだ」

話し合いなど俺が受けると思っているのか、こいつは？

だとすれば救いようがないな。

人生の貴重な時間を無駄なことに費やすとは……酔狂なやつだ。

「……ならこうしましょう」却下だ「話は最後まで聞きなさい。

あなたは確かクロノを憎んでいたはずよね？」

「……ああ」

しまった！？ クロノへの怨念が大きすぎてつい返事をしてしまった……おのれCKYめ！

「なら模擬戦をしてもらっわ。もし、あなたが万が一勝ったら、もう勧誘はしない。ただし、負けたときは管理局に入ってもらっわ。相手はこちらの切り札よ」

アースラの切り札？ ああ、クロノか。確かそんなこと言ったな、原作で。

「こちらにはメリットがない。却下す「メリットはフェイトちゃんとプレシア・テストロツサの罪の軽減よ。あなた罪を軽くしようとしてたでしょう？」何？ そんなことが出来るのか？」

俺は疑問を言葉にした。そんなことが出来るなら原作でもやってるはずだろ。

ということはおそらくそれは俺をだますための嘘だろう。

「報告書をでっちあげるのよ。もちろんあなたがうちの切り札に勝てばの話よ。負ければ罪は軽くはならないわ」

そうか！ その手があったか！ 盲点だったな。

それによく考えて見ればこれはクロノを叩き潰すチャンスだ。プレシアとフェイトの罪は軽くなり、CKYも叩き潰せる。

一石二鳥だな。これは利用しない手はない。

「……いいだろう。いつやるんだ？」

俺はリンディに肯定の意を表しながら聞いた。

「今からよ。もうすぐアースラはミッドチルダ方面に戻るため出発するのよ」

今からか…… このまま、翠屋に行こうと考えていたのだが……無理そうだな。

だが、フェイト達の罪を軽く出来るといふならばしかたないか。背に腹は代えられん。まあその鬱憤もクロノと言う名のCKYにぶつければいいか。

「わかった、今から行く。ゲート発動」

俺はゲートを発動してアースラの内部に到着した。

そこにはリンディとCKY。そして何故かなのはとユーノがいた。あれ？　なのは達はフェイトを見送って家に帰ったんじゃないのか？

「来ましたね。ではこれより、ジীগさん対アースラの切り札、クロノ執務官。そしてなのはさんとユーノ君がお相手するわ」

リンディの言葉に俺は困惑する。は？　何言ってるのこイツ？

「驚いてるみたいね。でも私は切り札はクロノだけなんて言っていないわよ。あなたが早とちりしたのが悪いのよ」

「……世界の悪意が見えた……お前は死ぬべき存在だ。よってここに裁きを下す」

俺がソルをセットアップしようとする

『そんなことをしたらフェイトさん達の罪は軽くないわよ』

リンディが念話で俺に語りかける。その言葉に俺は動きを止めた。こいつはいつか潰してやる。そう思いつつ、怒りを無理やり鎮めた。

「勝つたらフェイト達の罪は軽くしろよ」

「分かってるわよ……まあ勝てるわけがないでしょうけどね」

「何か言ったか？」

「なんでもないわよ」

何かなんでもないだ、ばつちり聞こえたぞ。

勝てるわけない？ 馬鹿だな、こいつは。終わった後どんな顔をしてるんだろうな。

〜回想終了〜

で今に至るわけだがまあ、とりあえずなのは達を倒してからゆっくりとクロノを潰すか。

クロノだけなら特に何の問題もなく潰して終わりなんだがな。

なのは達はどうしようか。怪我させない様にしないと。

「ソル、セツトアップだ」

「了解しました」

俺は黒を基調とし昔の日本の鎧を連想させる機体　ダイゼンガ
ーの姿になった。

「ソ、そんな馬鹿な!？　なんで大きさも変わっているんだ!？」

クロノが叫ぶ。そう、ダイゼンガーになった俺の全項は5メートル弱、普段の全項の三倍以上ある。

動揺してるみたいだな。だが、俺は手加減などしないぞ。

「準備はいいぞ。始めないのか？」

「……わかりました。模擬戦、開始してください！」

その合図とともにユーノとなのはが後ろに下がりクロノが向かってきた。

まあ、作戦的には当たり前だよな。

クロノが前に出て俺をかく乱してなのはの砲撃で沈める。ユーノはその援護。

だが、その作戦は俺には無駄だ。

「さてと、なるべく早く終わらせてやるぞ。くてかげん>>>直
撃>>>必中>>>」

俺はクロノが接近してくるのを無視してなのは達を狙うべく準備をした。

「そんな作戦は無意味だ。ダイゼンガーにはこのような武器もある！ゼネラル・ブラスター！！」

俺は肩についている砲身のような物から砲撃を打ち出し続ける。それはなのはとユーノに向けて一直線に向かっていく。

「クツ！？ 防いでみせる！ …… って防御魔法が発動しない！
？ ウワアアア！！」

ユーノが光線に飲み込まれる。だが、光線は未だ勢い収まらずになのはに向かっていき

なのはは声も上げれずに飲み込まれた。

俺が撃つのを止めるとなのはとユーノはなんとか立っている状態だった。

もう戦闘は無理だろう。

「なのはとユーノ、脱落だ」

「ま、まだやれるの！（やれます！）」

二人はまだやる気のようにだがとてもじゃないが無理だろう。少しでも気を抜けば、すぐに床に倒れふすことだろう。

「もう無駄だ、止めておけ。時には諦めも肝心だぞ………立っているので精一杯じゃないか」

俺が言うとなのは達は落ち込んだが

「「わかりました」」

そう言っつてその場に座り込んだ。

まあその場所なら戦闘に巻き込まれることもないだろう。

「さあ、覚悟しろよ、KY」

俺は啞然としているクロノに話しかけた。

二十三話 人は、特に管理局は信じないほうがいい（後書き）

ジ「何故、こんな中途半端なところで終わるんだ？ KYを潰したかったのに」

ヴェ「まあ次回のお楽しみと言うことで。清浦刹那様、デステイニープラン様、ライ様、感想ありがとうございます。清浦刹那様より電童、凰牙、データウエポンを、デステイニープラン様よりジエネシス、レクイエム、ソーラーシステム、ソーラ・レイ、グリプス2、カイラスギリ、メメントモリを頂きました。ありがとうございます。ちなみに既にジエネシスとレクイエムは家に設置しています。既にこの話で出しましたしね。他は宇宙に置いてます」

ジ「アースラのアルカンシエルとどっちが強いんだろうな」

ヴェ「ジエネシスとかの方が強いだろ。ちなみに今の所は脅しようなので打つかどうかは未定です。では」

二十四話 最悪の家系

俺は啞然としているクロノに話しかけた。

「さあ、覚悟しろよ、KY」

俺はそう言い放ちクロノの返答を待った。だがクロノは黙ったまままだ。

……頼むから降参とかいう興ざめなことはしないでくれよ。

俺は心の中で強く、強く願った。まあこの状況なら普通はしてこないよな。

……待てよ、KYならやりかねん。……ここは降参しないように差し向けるか。

「どうした？ なぜ返事がないんだ？ 降参するのか？ まあそれが正しい判断だな。たとえ何回戦ってもお前は俺には勝てない」

俺の言葉にクロノは怒りの形相をあらわにした。

「ふざけるな！ 誰が降参するか！！ お前なんか……負けるものか！！」

クロノは俺を倒す気満々らしい。力の差を理解できないとはな。愚かな奴……いや、俺がそうなるように仕向けたんだっただな。

「フツ、ならば行くぞ。そうだなハンデとして俺の装甲にバリアジャケットわらずかでも傷をつけられればお前の勝ちにしてやる！ お前にはちよつどいいハンデだろ？ いや、まだ欲しいか？」

俺はさらにクロノを挑発した。
KYは顔を真っ赤にして怒り狂った。

「ふざけるな！ ハンデなどいらぬ！ お前なんて倒して見せる！ 喰らえ、ブレイズキャノン！」

kyは自分の杖の形をしたデバイス S2Uを構え水色の魔力で球体を作り出し俺に放った。

さて、どうするか。避けるのは簡単だが、別に当たっても問題はないか……

力の差を見せつけるには避けない方がいいか。

俺は球体が目の前に来ても動かなかった。

俺がkyの攻撃に当たったために爆発が起こりあたりが煙に包まれる。

その中で一瞬、kyの勝ち誇った顔が見えた。

おそらく今の一撃で仕留めたと思っっているんだろう。

フツ、俺が無傷であることを知ったらどうなるか……楽しみだな。

「愚かだなkyよ……出でよ、参式斬艦刀」

俺の前に自分の今の全項をも超える黒い刀身をもった剣 参式斬艦刀が出現する。

俺はそれを手に取り何も無い空間に一振りする。

すると煙は一瞬で消え去り、俺に気付いたkyの表情が凍りついた。

「バ、馬鹿な！？ ブレイズキャノンが直撃したのに倒れてないなんて！？」

「お前のものさしで……いや、もういい。この力、その身にしか

と焼きつける！」

俺は斬艦刀を構えつつクロノに一步ずつゆっくりと、だが確実に近づいていく。

「く、来るな！」

kyは上に飛んで足元に魔法陣を発生させる。

そして数え切れないほどの水色の魔力でできた剣を周りに生み出す。

そして自分の持っている杖を掲げて

「こ、これならどうだ！ スティンガーブレード・エクスキュー
ジョンシフト！！」

その言葉とともに杖を振り落ろした。

俺に無数の剣が上から襲いかかる。

……この程度の技、避ける意味などないな。

そう考えた俺はクロノの方に近づくのをやめない。上から無数の剣が降り注ぎ襲いかかる。

だが、剣は俺に当たった瞬間、こなごなに砕け散る。

そして全ての剣は木端微塵になった。

「そ、そんな！？」

剣を撃ち終えたクロノがそう叫ぶ。

その表情は絶望に満ちていた。だがそれも当然だろう。
自分の最強の攻撃で傷一つ付けられなかったのだから。

「残念だったな。さて俺の剣でこの茶番に幕を下ろさせてもらおう」

俺は言いながらKYに一歩ずつ近づいていく。
クロノは俺から逃げるようにとどんと上に飛んでいくが天井にぶつかった。

「イタツ!? で、でもここならあの大きな剣で斬られることは……」

「甘いな。……まあかなり不本意だが、今は殺すわけにはいかん。一応はくてかげん>してやる……我はジীগ! ジীগ・クライン! kyを断つ剣なりツ!! 斬艦刀オオ……!」

俺の持っている斬艦刀はその言葉を合図に刀身が曲線を描いている独特の形状になった。

姿をとえるならククリ刀のような刀身に

「大! 車! りいりいん!!」

俺は叫びながら、その斬艦刀を高速でジャイアントスイングしてブーメランの様に回転させて投げつける。

斬艦刀は回転を帯びて寸分狂わずにkyに向かっていく。

「ナツ!? そ、そんな!? ウワアアアアアアアアアアアア!?」

斬艦刀は見事にkyに当たりkyは墜落して地面に叩きつけられた。

だが、ピクリとも動かない。
やりすぎた……わけはないか。

くてかげん>までかけて殺ったんだから……違うか、やったんだ

から。

『クロノ!? あなた! いくらなんでもやりすぎだとは思わないの!?!?』

静かになった部屋にリンディの声が響く。

「いや、全く思わない。むしろもっとやればよかったとは思っているが」

『な、なんて奴!? あなたはろくな死にかたをしないでしょうね!?!?』

お前が言うか……それに一応、加減はしたぞ。

身を引き裂く思いでな! 感謝してもらいたいくらいだぞこっちは!?!?

「その言葉、そっくりそのままお前に返す。そしてこの模擬戦は俺の勝ちだな」

『……確かにあなたの勝ちです……があなたはあきらかにやりすぎです! なので最初に提示した条件は撤回させてもらいます』

……やはりか。予測はしていたがなんという奴だ。人の心をこつも弄ぶとはな。

「何が撤回だ。最初から条件などただの餌で俺を絶対に負けさせようとしたくせによ」

『!?!? な、何を証拠にそんなことを言うの!?!?』

「お前……当初の予定ではフェイト達も模擬戦に加えるつもりだった。フェイトのデバイスに通信データが残ってたぞ。俺を倒すのに協力すれば自分達が罪を軽くしてやるってな。俺が必ず負けるように仕組もうとしたんだ。最初から報告書をでっちあげる気なんてさらさらなかったんだ。どうだ？ なにか反論はあるか？」

『……………』

リンディは何も言わない。いや、言えないんだろうな。ここまで計画を読まれるとは思ってなかったんだろう。いや、違うか。奴のシナリオでは俺はこの模擬戦に負けるはずだったからな。

そのシナリオの前では俺がたとえその情報を知っても負けるのだから関係ないはずだ。

……とらぬ狸の皮算用ここに極めりって感じだな。

「……約束は守ってもらうぞ。もしやぶるのであればこの船は永遠に終わらない旅に出ることになると思え」

俺は殺気を放ちそう言い残し、ゲートを発動させて地球に戻った。

〈家〉

「マスター、あんなんでよかったですか？ 約束守るとは限りませんよ」

ソルが家に戻ったら開口一番こんなことを言ってきた。

「守るさ。あの己の保身を一番に考えているリンディならな。それにもしやぶるならがちで排除する。アースラごとな」

「何でリンディ・ハラオウンが己の保身を一番に考えているんですか？」

ソルが質問してきた。俺はそれにこたえるために口を開く。

「だってあいつは時の庭園の時に自分だけ安全なところにいたんだぞ。俺が鎧を倒した跡にな。まあでも俺が一秒でも早くアースラから出たかったっていうこともあるがな」

「……………マスター」

「なんだ？」

「どんだけアースラ嫌ってるんですか？」

「少なくともこの世には必要ないと思ってる」

「そうですか……………」

ソルがため息をついた……………気がした。デバイスだから分からん。

二十四話 最悪の家系（後書き）

ヴェー、ジークのハラオウンへの怒りが予想以上だった件」

ジーク「いや、あれはこの世に存在してはいけないだろ」

ヴェー「どんだけ怒ってんだよ…… ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様、ジェス様、ルファイト様、NANAASI様、うりあ様、感想ありがとうございます。」

ライ様より夜天の書全データと治すために必要な機材一式を、清浦刹那様より、アウセンサイダーを、デステイニープラン様よりダイゼンガー、アウセンサイダー、スレードゲルミル、レクイエム中継ステーション×5（常時ミラージュコロイド）、ジガン・スパイダー、ローエングリングート（ローエングリン発射砲台×99999）、サイクロプス、グングニール、ニibelungを、ルファイト様よりクロスボーンガンダム（X1フルクロスまで）、七聖剣を、NANAASI様よりグランカイザー、グラン？、グランディーバ全機、フアントムシステム、プラネットを、うりあ4様より、Gビット、改造Gビット、ガンダムDX、Gファルコン、ガンダムエアマスター、ガンダムレオパルド、フリーデン（前期と後期）、アーケエンジエル、ナデシコC、マイクロウェーブ発生施設とその小型版（MS級の大きさ）をいただきました。ありがとうございます」

ジーク「アウセンサイダーが二機来てるな。まあダイゼンガーを単体で出したからだろうが」

ヴェー「アウセンは最強だ！ 主にBGMが」

ジーク「サルファじゃラスボスでも関係なかったもんな」

ヴェ「そして自分がスパロボの中でもかなり好きなグラヴィオンの機体 came た」

ジ「だけどあの機体は設定が結構チートだからな。星をも作れるんだっただけ？」

ヴェ「星創力で新たな星でも作れば……」

ソ「グダグダになってきたのでここでしめます。ありがとうございました」

ジ・ヴェ「なぜお前が閉めるんだ？」

二十五話 強敵現る 強力な助っ人 前編（前書き）

まさかの一日に二話投稿！

今回はロボット様の『魔法少女リリカルなのは〜OGS〜ようするにスパロボクロスだよ』とのコラボです。

まず始めに注意点を

ロボット様の方の神の設定が変わっています。
ここでは全ての世界を総べる神ではありません。その設定だとこちらの世界も神の管理に置かれてしまいますので
それとミラは神に近いですが神ではない存在です。

あと、ロボット様の神とカズマsideは私が書いた後、ロボット様に結構、直していただきました。

ではございぞー！

二十五話 強敵現る 強力な助っ人 前編

Mirside

「何も無い真っ白な空間（神）」

私は常に神の代行者となった彼 ジーグ・クラインの世界と彼の行動を見ている。

今までは特に問題なく異物を排除して原作を変えている。

でも、今出現した異物はこれまでとは違いすぎる。

力も能力もこれまでとは別次元だ。

もちろん彼でも時間はかかるが倒せるだろう。ただその時間が問題なのです。

……しかたないですね。ここはあのお方に力を借りた方がよさそうですね。

私は光の粒子となって消え他の場所へと移動した。

「何も無い真っ白な空間（OG）」

私は先ほど同じ何も無い無機質な白の空間に移動した。ただ一つだけ違うのは、

「おや？ 君は確かこことは違う次元の……」

白い衣を着たら歳前後の小柄な少年がいることだ。

「世界を総べる神よ。頼みがあつてきました」

ミラはその少年を神と呼び敬意を表して話す。

ミラは姿だけならこの少年よりももちろん大きいがこの少年はこのような姿でも幾億年も時を生きている神なのだ。

ミラはせいぜい10万年くらいしか生きていないので敬意を表するのは当たり前といえば当たり前だが5歳くらいの子に敬意を表するのはちよつとあれな光景である。

「ん？ 何？」

「実はこちらで強大な敵が現れました。こつちの神の代行者だけでは苦戦は必至です。なのであなたが転生させた人を援軍にして頂けませんか？」

ミラの言葉に神は首を傾けいくらか思考を巡らす。

「ふん。それは要するに私が転生させた私の娯楽のため主人公：青木タカヲことナンブ・カズマ、彼と君たちが作っている映画、そしてその主人公の共演、すなわちコラボというやつかい？」

「……少々語弊が生じてますがその通りです」

ミラが言う語弊。それは目の前にいる神との根本的な考えの違いにある。

ミラはジクが救い、助ける世界を愛している。それゆえにミラはジクが作る世界を救いたいと思ひ、この場に来た。

しかし、目の前にいる神はミラとは考えが全く違う。自分を退屈させないために転生者を作り、物語に介入させて、その様を見て楽しんでる。

そして神が口を開く。

「ああ、わかったよ」

「で、では！」

ミラは神たる人物が自分の世界を救うことへの協力に歓喜の声を上げる。

だが次の瞬間、神の口から出てきたのはとんでもない言葉だった。

「い・や・だ」

白き空間に響き渡る神の低い声。ミラの頭には突然、何か重たい石のようなものがのしかかる。

「そ、そんな……」

ミラの言葉をよそに神はケタケタと不気味にうすら笑いを浮かべた。

「どうして、私が君の世界を助けなくちゃいけないんだい？ 私は君にそんな義務も義理もありはしないんだよ？」

神と呼ばれる人物は、一瞬の希望を持たせておいて絶望の底にミラを突き落とす。

そんな……それではわたしは何のためにここに……

自分の世界が崩壊する様子がミラの頭に浮かんでくる。

ダメよ……それだけは絶対にダメッ！

「神よ、お願いします。私の世界を救うのにご協力をっ！」

神に否定されようとも、ミラは必死に自分の世界を救うことへの協力を求める。

「え〜、どうしようかな〜？」

対して、神は意に介さない様に、適当にミラの言葉をあしらっている。

「この通りです！お願いします！」

そして、ミラは手を地面につき、頭を垂れるようにして神に必死に懇願した。

…

……

……

しばし流れる静寂。

あれっ？

対峙し話している相手がなにも話さないことを疑問に思い、ミラ

が顔を上げる

すると

神はいつものまにかミラの目の前に立っており、唇を横に吊り上げながら不気味な笑みを浮かべていた。しかも、その顔をミラの上げた顔の寸前まで近付けて。

さらに、笑みは浮かべるも声は発せず、5歳という年齢には絶対に似合わない淀んだ瞳が不気味さを一層際立たせている。

そして大きく開かれた淀んだ瞳がミラを凝視していた。

「……」

ミラは言葉を発しなかった。いや正確に言うと発せなかったのだ。彼女の額や背中から出てくる冷汗が止まらない。

ミラが無表情を装っていわけではない。目の前にいる神と呼ばれる少年から発せられる恐怖に表情が凍りついてしまっているのだ。

だが、神の口からは、またもんでもない言葉が出てくる。

「う・そ」

えっ？

「協力してあげるよ。何より君のその表情が見れた。それに転生者が2人が活躍している様なんてなかなか見られないからね」

ミラは神の言葉によって安堵の表情を浮かべ、極度の緊張状態から解放された。

「ふう」

そのせいかミラは一息つく。
だが、神の心、いや考え方は脅威だとミラは思わせられる。

私が神に近い拳属の一人だとしても、彼にとっては遊び道具の一つにすぎないんだわ……

そう、ミラの考えの通り、神と呼ばれる少年はミラの恐怖に歪んだ表情を見たいがためにこのような茶番劇をしたのだ。只の自分の独占欲を満たすためだけに。

再び神がミラに話しかける。

「あ、でも条件が一つあるよ。彼らにはお互いに全く知らせないようにすることだ」

「な、なぜです？」

先程の恐怖からかミラは恐る恐る答える。

「最初にお互いを知ることもしないで、私達が勝手にネタばらしをしてしまえば面白くないだろう？」

ツ！！この人は！！

ミラは自分の世界を救いたいと思っているが、ミラの目の前にいる神にはそんな世界でさえ遊ぶための、自分の娯楽を楽しむための道具の一つに過ぎなかった。

そんな神に対してミラは無表情を装いながらも内心では憤りを感じ

じていた。

「では今から私が見ている作品の主人公ハンプ・カズマ君をそちらの作品に送るから、君は帰って、わたしにもこれから君が作り上げる作品が見れるようにしてくれ」

「わかりました……では」

そう言って、ミラは光の粒子になって消えていった。

「バイバイ」

神は消えていくミラに適当に手を振るだけである。

ブンッ

そしてミラが消えた後、神は宙にモニターを出現させ、言葉を吐いた。

「さあ、君は私にどんな作品を見せてくれる？」

ミラsideout

ジグside

〜家〜

俺は現在、飯を食べている。今は午後1時30分だから当然と言えは当然だろう。

何を食べてるか？ マーボカレーだ。俺の好物だからな。

え？ どうやって作った？ それは……

「マスター！ 異物？ が出現しました？」

飯を食っているとソルがいつものごとく異物の出現を知らせてきた。

ただいつもと違うのは

「何故、疑問形なんだ？ ソル」

なぜかは知らないがいつもの断定ではなく推定のような感じで言ってきたのだ。

しかもかなり自信なさそうに

「いや、この世界の生命ではないのは明らかなんですけども普段やってくる異物とは違うんです。よくは分かりませんが何かが決定的に違うんです」

何かってなんだよ？ 俺はそう聞こうとして口を紡いだ。

ソルも分からないと言ってるんだから聞いても無駄だろうっからな。

「しかたないか。どこに現れたか分かるか？ ソル」

「……聞いて行くのを拒否したりしませんか？」

「ああ」

ソルは何故か俺に場所をいうのを渋っているようだ。

いつも行ってるのになんで今回だけ言いたがらないんだ？

だが意を決して話してみたいだ。

「アースラの中「よし、行くのはやめだ。寝よう」「……こうなる

ことが分かってたから言いたくなかったんですよ……駄目ですよ。

異物を放っておくと世界が崩壊しますよ」

「せめてアースラが滅んでから行くってのはどうだ？」

俺はどうしてもアースラに行きたくないためにソルに提案した。

「なのはさん達もアースラの中ですよ」

「何……だと……ということは放っておくと……」

俺は答えが大方予想できるのだが一応ソルに聞く。

「もちろんなのはさん達もアースラごと滅びますね」

だよな……しかたないか。倒しに行くか……気は乗らないが

「ゲート発動」

俺はゲートを発動させてアースラに行った。

ジグ side out

リンデイ side

くそれと同時に アースラのブリッジく

「艦長！ この艦の内部に転送魔法が発動されました！」

エイミーがリンディに叫ぶ。

「どうせジークさんでしょ。放っておいてもここに来るわ」

だが、リンディはどうせジークが来ただけだから放っておけと命令する。

「でも、こんな転送魔法は見たことがありません！ おそらくジークさんとは違います」

その言葉にリンディは反応する。

「本当にジークさんじゃないのね？」

リンディはエイミーに確認をした。

「ハイ！ 違うと思います」

それに対しエイミーは今度は自信をもって違うと言う。

「わかりました」

リンディは艦内放送のためのマイクのスイッチをonにして

緊急事態発生！ 繰り返します、緊急事態発生！ 何者かがこのアースラに侵入したようです。クロノ執務官、なのはさん、ユノさんは至急模擬戦室に向かってください！

これで大丈夫でしょう。でも、どうやって入ってきたのかしら……
地球の周辺は物騒ね。

そう思いながら私は近くに置いてあるお茶を飲んだ。
ちなみにそのお茶は角砂糖を3個にミルクをたっぷり入れたもうお茶と呼んでいいのかすら分からない液体であった……

リンデイスイデアウト

「あれ？ 知らない天井だ　ここはどこだ？」

なんでこんなところにいるんだ、俺？　確か、家で寝てたはずなんだけどなあ

俺がなぜここにいるのか考えていると

緊急事態発生！　繰り返します、緊急事態発生！　何者かがこのアースラに侵入したようです。クロノ執務官、なのはさん、ユノさんは至急模擬戦室に向かってください！

この部屋全体に放送が響き渡った。

「え？　アースラって確か原作で……しかもクロノ、なのは、ユノって……ど、どうなってるんだ一体！？」

カズマは現状を把握できずに混乱している。
それもしかたないだろう。カズマもなのはの世界に転生したが時間軸が違う。

カズマの世界ではまだアースラは地球に来てすらいない。
なのにいきなりなのは達もアースラの中にいるなどという放送を聞いてしまえばパニックにならない方がおかしい。

「いたぞ！　奴が侵入者だ！」

カズマが困惑していると部屋に少年　クロノ　kyの声が響き渡る。

俺は声のした方向に振り向く。

ク、クロノ！？ しかも侵入者ってもしかして俺のことか！？
ん？ 後ろに後二人いるぞ。あれはまさか……

「なのは！ なのはじゃないか！」

俺はクロノの後ろに確かになのはがいることを確認した。
よかつた。これでここがどこかわかる。

「なのは、ここはどこなんだ？」

だが、俺が安堵できたのもつかの間だった。なのはのこの返事で俺は再び混乱する。

「あなた誰ですか？」

「は？ one more please」

「……えつと……」

なのはは俺の言うことが分からないらしい。

「も、もういち「もう一度言ってくれて意味の英語だ」！？あ
なたはだれですか？」

おれはいつの間にかなのはのすぐ後ろにいた茶髪の男に話しかけ
た。

「俺はジীগ・クラインだ。お前こそ誰だ？」

男から返事が返ってくる。ジーク・クライン？ そんな奴原作に
いなかったはずなんだけど

だが見たところ年上……高町恭也と同じ年くらいだろう。ここは
敬語で話しておこう。

「ナンブ・カズマです」

俺は自分の名前を言う。

その時になのはの方を見たがやはりなのははきよとんとしていて
俺を知っているそぶりなど毛ほども見せない。なんでなんだ？

だが、そのあと男 ジークが独り言のようにぼそりと言ったこ
とを俺は聞き逃さなかった。

「気のせいかな？ あいつの声がキラ・ヤマトに少し似ているよう
な……」

キラの存在を知っている？

この世界ではないはずの存在を知っている人間……これは鎌を
かけてみる必要があるな。

「あなたはなぜキラ・ヤマトについて知っているんですか？」

俺が聞くとジークは顔に動揺の色を走らせたが、すぐにもとの表
情に戻った。

「カズマ、ちょっと俺についてきてくれないか？ もしかしたら
お前は……」

ジークは俺について少しは知っているようなそぶりを見せた。

このまま、ここにおいても何も解決しなさそうだしここはあいつに

ついていくか……

ジークが空間を曲げて穴のようなものを作り出し入って行った。
それに俺も続いた。

二十五話 強敵現る 強力な助っ人 前編（後書き）

前回の感想は今回の感想とプレゼントは次回に一緒に書かせていただきます。

そして戦闘は次回です。

では

二十六話 強敵現る 強力な助っ人 後編

ジークside

（家）

俺はゲートを通り、家に帰ってきた。

後ろを見ると確かナンブ・カズマだっけ？ もちやんとついてきたようだ。

ちなみに通る前にkyが何か叫んでいたが聞こえなかったことにして無視した。

「立ち話もなんだからそこのいすに座ってくれ」

俺は応接室に案内して、4つあるの1つの椅子を指さしながら言った。

俺の言葉にカズマはその椅子に座る。

「何か飲みたいものとかあるか？」

「いえ、結構です」

俺の問いにカズマは否定の意を示す。

さてと、こいつが何者なのか聞き出すか……

予想はある程度はついているんだが……確認をとらなければ俺は真剣な面持ちになって口を開く。

「お前はいつたい何者だ？ なぜキラ・ヤマトを知っている？」

「……あなたこそ何で知ってるんですか？」

俺の問いにをカズマはさらに問いで返してきた。

こいつ……見かけよりも肝が据わっているな。

態度が堂々としている。こういう事態に何度か会っているみたいだしかも頭もよさそうだな。得体のしれない相手にむやみに自分の情報を与えないからな。

「質問を質問で返すのは感心しないが……まあいいだろう。俺が知っている理由か……説明がしづらいが簡単に言つとここに来る前の世界にあったアニメの主人公だからだ」

俺は事実を包み隠さずに言う。

お互いに隠し事のようなものがある場合はギブアンドテイクだ。お互いに隠していることを言うべきだと俺は考えているからな。

「俺は話したぞ。お前はなんでキラを知ってるんだ？」

俺はもう一度カズマに尋ねる。

するとカズマは何かを言いあぐねていたようだが意を決したよう
で口を開く。

「……僕も同じ理由です。もしかしてあなたも転生者ですか？」

やはりか……あなた“も”ということとは自分が転生者であるとい
う言及しているのと同じだ。

だが少し予想が外れたな。他の世界から来た異物だと思っただ
が……まあいい。

「正確に言うとは違いますが、転生者と言えば転生者だな。それとついでに聞くが、もしかしてお前って見た目は子供で頭脳は大人か？ 後、知ってることはお互いに全部言いあわないか？ これじゃらちが明かない。腹の探り合いはきらいなんだ」

さつきから年下と話してるとは思えないんだよな……子供とは雰囲気の違いすぎる。

それに本当にこのままじゃらちが明かない。

「そうですね。わかりました」

そうして俺たちは情報を交換しあった。

聞いたところ、カズマは一度死んで神になのはの世界に転生させられた。

その時の年齢は19でもといた世界はおそらく俺と同じ世界だろう。

そして、自宅で寝ていたはずが気が付いたらアースラの中にいた。しかもなのは知り合いのはずなのに何故かなのはカズマのことは知らなかったので困惑していたところに俺が来たということらしい。

あとカズマのいた世界ではまだアースラは地球に来ていたのでそれもカズマを混乱させる原因の一角を担ったらしい。

「そうか……おそらくそれは並行世界だろう。お前の転生された世界はこの世界と極めて近く限りなく遠い世界だ」

以前、ミラに並行世界の説明を受けたからな。

なのはの世界に転生者がいる世界も存在する確率は捨てきれない。

「僕は並行世界から来たってことになるんですか？」

「みたいだな。……あと敬語やめないか？ お前の実年齢は19なんだろ」

姿は年下でも一応はほぼ年齢は同じだから正直、こっちが気まずい。

少し罪悪感まで生まれてきたからな。

「……ならそうさせてもらうか」

「ありがとうな、カズマ。聞くが元の世界に戻りたいのか？」

「ああ、当然だ。俺はフェイト達を助けたいしな」

「そういえばお前の世界はまだプレシア・テストロツサ事件は起きてないんだよな。それならなんとしても帰らないといけないな。そうだな……ソル、変える方法はないか？」

俺がソルに話しかける。すると何故かカズマが喋った。

「ソルってお前のデバイスなのか？」

「そういえばまだ話してなかったな。こいつが俺のデバイスのソル・ジガンだ」

俺は右手に付けた腕時計 ソルをカズマに見えるように腕を上げる。

「初めましてカズマさん、ソル・ジガンと言います。以後お見知

りおきを」

「ああ、よろしくな。じゃあ、俺も紹介しとくか。こいつが俺のデバイス、ヴェーダだ」

カズマは首に付けている金色のネックレスに手をかけて話す。

「よろしくお願いします」

やっぱそれがデバイスか……なんで金色のネックレスなんかしてるのか気になってたからな。

デバイスなら説明がつくからな。

……って話が思わぬ方向に脱線しているな。話題を元に戻すか

「話がそれたな、結論を言おう。お前のいた世界には帰れるぞ、なあソル？」

「はい、先ほどの転送データであなたの世界の座標が分かりましたのでゲートを発動すればいつでも帰れます」

ソルの言葉にカズマの表情が緩む。

「それはよかつたぜ。帰れなかつたらどうしようかと思っていたからな。じゃあ帰してく」マスター！ 異物が出現しました！……
… 異物って何だ？」

カズマの話に横やりを入れたソルの言葉の中の「異物」という単語にカズマは反応した。

「異物っていうのは簡単に言うと他の世界からやって来て世界を

壊そうとする奴のことを指すんだ。その異物を倒すのが俺の役目なんだ!」

俺がカズマの疑問に答える。

「そりゃ大変だな。まあ頑張ってくれ」

「ああ、お前には悪いがしばらくここで待っていてく!?!? そんな!?!? 異物の強さが普段とはケタはずれの強さです!」何!?!?」

「この力では世界を滅ぼすのに一日もかからないでしょう」

な!?!? 一日で世界を滅ぼせるだ!?!? これは話してる暇はないな。

「悪いカズマ! 俺は今すぐに異物のところへ! 俺も行く!?!? ……いいのか?」

俺の喋っている途中にカズマが割り込んで話す。

「ああ、世界を滅ぼされたら俺が帰れなくなる。……それにこの世界のなのは達を見捨てたくないしな」

「すまないな。だがその方が助かる! 行くぞ!」

「ああ!」

俺とカズマはゲートを発動させて異物のところへ向かった。

く???)

俺とカズマはソルが異物の出現を観測した場所についた。そこはあたり一面が荒野、空は薄暗がり、まるで無限の闇が広がっているようだった。

そして、そこにいたのは黒と紫を基調とし、下半身は黒の獅子、両肩にはドリルが付いていて腹部には山羊の顔、周りには3つの人魂が浮いていて杖を持っているミノタウロスの姿をモチーフにしている様な機体 「カオス・レムレース」が存在していた。
しかも大きさは全長112、5m 実物大である。

マジかよ、こいつは確か次元力を限定的に操れるはずだ……

援軍を呼ばれるとまずい……敵が増えるまでに排除するしかない！

「カズマ！ こいつは」

「わかってる、カオス・レムレースだろ！ 敵が増えるまでに叩く！」

こいつの力を理解しているようだな……ん？待てよ、カズマってどうやって戦うんだ？

「お前も何かチートな能力をもらってるのか、カズマ？」

俺がもらってるんだからカズマが何らかの力をもらっていてもおかしくはないだろう。

というか力があまりにも弱すぎれば俺の足手まといになってしまう。カオス・レムレースには生半可な攻撃では通用しないからな。それなら

「安心しろ。俺には装甲展開アーモウオリューションつて言うレアスキルがある。この能力でスパロボの機体になれるからな」

スパロボの機体だと!? まさか俺と同じ能力とは……足手まといどころか十分すぎる戦力だぞ

「そうか……ならいい。行くぞ、ソル! セットアップ!」

俺は光に包まれる。そして、全身も蝙蝠のような羽も全てが黒、黒以外の箇所を探すほうが難しい機体 シュロウガとなった。

「来い、魂を獲する者よ…… コール、ソウルゲイン!!」

カズマは蒼の装甲が特徴の機体 ソウルゲインの姿になる。

どうやらレアスキルつてのは本当らしいな。デバイスであるヴェーダが起動しなかったからな

デバイスの意味あるのか? ……まあいい、今は目の前にいる敵に集中だ。

「行くぞ、合成獣カオス・レムレース! 天の獄がお前を待っている……!」

「ナンブ・カズマ……ソウルゲイン、出るッ!」

俺たちはカオス・レムレースに接近していく。
するとカオス・レムレースは杖の先端にあるパーツを分離させ
俺たちを襲わせた。

「クツ!? <集中>!」

俺は<集中>をかけて敵の攻撃をかわす。

カズマもうまく回避したようだ。

だが、くつついては狙われやすいな。

2対1の利点を生かすためにもここは離れるか。

「カズマ! 分散して戦うぞツ!」

「ああ、わかった!」

俺とカズマは左右に別れて行った。

ジークsideout

「さて、どうするか……ヴェーダ、あいつの情報はわかるか？」

俺は自分のデバイスであるヴェーダに走りながら話しかける。

ヴェーダは基本的に戦闘用ではなく補助魔法や敵の情報のためのデバイスだ。

常に本体である量子演算型コンピューター、ガンダム00登場の「ヴェーダ」とリンクしている。

なのでカオス・レムレースの情報を求めた。だが……

「すみません。ヴェーダ本体とのリンクが不可能になっているこの状況ではできません」

やはり無理か……本体は俺の世界にあるからな。流石に他の並行世界まではリンクできないということか。

「わかった、ならば自分の力で戦うのみだ！」

俺は両の掌に蒼いエネルギーを収束させていく。

「はあああああ……仕留める！青龍鱗っ！！！」

ソウルゲインの腕から吐き出された蒼い閃光がカオス・レムレース（以後レムレース）に直撃した。

……だが、大きさが違いすぎる。カズマはせいぜい2メートル程度の大きさである。

それにくらべてレムレースはそれの50倍以上の大きさ。まさしく巨人と蟻の戦い。

小細工な技など効くはずがないのである。青龍鱗が当たるもカオス・レムレースは微動だにしていない。

「やっぱり大きさが違いすぎるか……近づいて一番強い技をぶち込むしかないな」

ならば、これを使うしかないっ!!

「行くぜ……TRANS-AM!!」

カズマの装甲を展開中の機体「ソウルゲイン」はもともと蒼色の機体だ。

だが、カズマの声とともにTRANS-AMシステムによって、紅い粒子が渦巻く深紅の機体となる。

「これで一気に近づける、行くぞ!!」

カズマは先ほどとは比べ物にならない速度でレムレースに急接近。カオス・レムレースの懐に潜り込んだ。

しかし、まだジークは到達していなかった。

それはジークがレムレースの攻撃に戸惑っていたのもあるが、カズマが早すぎたのが一番の理由である。

ジークが来る前に分析も兼ねて、攻撃を加えていた方がいいな。

「喰らえいつ!!」

両腕に溜められた青白い気がソウルゲインの合わさった手の中で収束していき、球体の形を取る。

「はあああああ！白虎咬っ！！！」

レムレースの懐で青白い球体がさく裂し、爆発が起こる。

それによりレムレースはひるみ、杖から分離したパーツの動きが止まった。

その隙にジークはカズマのところ、すなわちレムレースの懐に潜り込んだ。

「悪いな、カズマ。ありがとう」

「ああ……問題はこいつをどうするかだ。大きさが違いすぎるから決定打が撃てない。しかも」

「回復技能がある………だろ？」

「ああ」

ジークと話している間に、レムレースはソウルゲインの白虎咬による傷をほぼ完全に回復していた。

いくらトランザム状態でもこのままじゃ時間がかかりすぎる。倒しきるまでにトランザムが切れれば、敗北は必至だろう。

俺はかなり焦っていた。このままでは勝機はないと、だが……

「安心しろ。一撃で倒す方法がある」

ジークの言葉に俺は衝撃を受けた。

ジークはこれだけ大きさの違う敵を回復の暇を与えずに一撃で倒せると言うのか？

「正直な話、こいつに近づくまでが問題だったんだ。この至近距離なら仕留められる。だが、そのためには俺たちが完璧に息を合わせて攻撃しないと無理だ」

ジークはそう言い終えると、俺の方を見た。彼は俺の答えを待っているのだろう。

なるほど、一人では確かに不可能だ……しかし、2人の力を合わせれば、ということか……
そして俺は口を開く。

「フツ、どうやら俺達と呼ばれたのは2人が協力し合い、奴を倒せということらしいな……いいだろう、ならばやるしかないっ！」

そして俺の言葉に応じてくれたようにジークは顔に笑みを返してくれた。

「ああ、頼むぜ！ <直撃>！ <熱血>！ ……行くぞ！ カズマ、合体攻撃だッ！！」

俺とジークはレムレースから少し距離をとる。

レムレースはダメージが完全になくならしく俺たちを近づけさせまいと迎撃体制をとった。

だが、先に仕掛けたのはジークが装着しているシュロウガだった。

「行け！ 黒き獄鳥！」

ジークは両肩、両腰から一体ずつカラス型の無人機を打ち出しレ

ムレースに向かわせる。

レムレースは杖から光線をだし撃ち落とそうとしたが、的が素早くさらにはいささか小さすぎた。

4機のカラスがレムレースに直撃して、レムレースがひるむ。

「リミット解除!!」

その隙にカズマはソウルゲインの力を全開にし、両手から無数のエネルギー弾を放つ。

レムレースの体の大きさが幸いしてか、放たれた全てのエネルギー弾がぶち当たる。

「魔王の剣……疾風の如く!」

さらには、ジグがレムレースに後ろから刀身が紅く剣ハディスプレイ
キャリバーを突き刺し、

「ハアアアアアア!!」

その巨体をなんと空中に持ち上げた。

普通なら考えられないことだ。

だが、今のジグとカズマには<直撃>のおかげでレムレースが自分の大きさと同じように扱えるのだ。

だから、今なら持ち上げるのもたやすいのだ。

「まだまだ!!」

今度はジグが空中に浮いているレムレースを乱舞攻撃で引き裂

き、闇でつくりだした魔法陣に閉じ込める。

「今だ！ カズマ！！」

「わかってる！ CODE：麒麟！！」

疾走していたソウルゲインがレムレースの懐で、伸ばした肘のブレードを使い全力で切り上げた。

「でいいやあつー！！」

その威力によりレムレースは魔法陣の呪縛から逃れ、上に吹き飛ばされる。

それと同時にカズマのソウルゲインは「麒麟」の余波からレムレースと一緒に飛び、レムレースよりも上空に位置を取る。

「ジীগ！ とどめだ！！」

「ああ！！」

ジীগのシュロウガはカズマが攻撃を行っている内に、自らの剣「デイスキャリバー」に大量に魔力を送り込み、デイスキャリバーの刀身には紅い魔力が伝わっていく。

さらには精神コマンド「熱血」を使っているのだ。その威力が尋常ではないのはもはや明白だろう。

ソウルゲインはレムレースの上から肘のブレードを振りかぶり、

「これが俺の」

シュロウガは下からディスプレイキャリバーを振り上げる

「俺たちの」

そして2人の攻撃がレムレースの懐で交差し、

「最強無敵の合体攻撃だアアア!!!」

レムレースは二人の必殺の剣によって斬り裂かれ、その威力には耐えられず、体を構成するパーツが消えていき最後の残った部分は爆発し、あとかたもなくなった

「ジীগSIDE」

「悪いな、ジীগ。俺はもう帰る」

カオス・レムレースを破壊して勝利の余韻に浸っていたがカズマがもう帰ると言う。

「もうか？」

「ああ、俺には自分の世界が、やるべきことがあるからな」

「そうか……分かった」

そして俺は改まり、カズマに向かって手を差し出した。

「俺のすべきことを手伝ってくれて、ありがとう」

「お、おう」

突然の握手にカズマはいくらか表情をほころばせ、俺の手を握り返した。

「俺も、ジクに会えてよかったよ」

「そうか……」

俺とカズマの目と目が合わせ向かい合う。

「ゲート発動。……さよならは言わない」

「またな」

「ああ、また会おう」

そうして、カズマはゲートを通り元の世界へと帰って行った。

二十六話 強敵現る 強力な助っ人 後編（後書き）

ヴェー「コラボ、なんとか書けた！」

ジ「思ったよりも更新が早い割には字数が多い……これはどういうことだ？」

ヴェー「出す機体が全て分かっていたら、これくらい！ さてと前回、前々回の感想のお礼をまとめてここで言います。NANASI様、DESTINYニープラン様、うりあ様、清浦刹那様、ライ様、ロボッツ様ありがとうございます。NANASI様よりフェアリオン（S&G）、ガオファイガー、ゴルディマーグ、ラッシュロッド（&ラッシュロッド用オーバーコート）、バルディオス、インサニアウィルスを絶賛培養中の試験管を、DESTINYニープラン様よりマークザイン、マークエルフ、マークアイン、マークドライを、うりあ様よりマイクロウェーブ発生施設×5、ガンダムヴァサーゴ、ガンダムアシユタロン、ガンダムヴァサーゴTB、ガンダムアシユタロンHC、ラフト克蘭ズ、カスタウエル、ベルゼルド、グランディードを、清浦刹那様よりソルヴリアス・レックスをいただきました。ありがとうございます」

ジ「気のせいかな、今回のプレゼントの機体は妙に火力に差があるな……特殊能力が火力かかってところか、にしても俺と同じ能力を持っている奴がいるとはな……世界は広いな」

ヴェー「お前はトランザムは出来ないけどな。ちなみにシュロウガの説明を少しばかり」

高い運動性と機動性を誇る漆黒の機体。

主武装として腕を剣に染み込ませることで魔力を解放する『魔王剣・デイスキャリバー』を持つ。
単騎で並行世界を移動できる呪われた機体。ぶっちゃけ黒いサイバスター……いや、違うか。

ヴェ「今回合体攻撃で使った技のモチーフはこれらです」

トラジック・ジエノサイダー……両肩・両腰から4機射出されるカラス型の無人機が連続体当たりで攻撃した後、突き抜けて締める。

ランプリング・デイスキャリバー……デイスキャリバーを突き刺して空中に持ち上げ、乱舞攻撃で切り裂く。最後は飛び散った闇で魔法陣を形成して捕らえ、爆発させる。

ジ「カオス・レムレースの姿は本編参照で、能力はこんな感じだ」

次元力により平行世界から同一存在を呼び出すことが可能でスパロボでは三機になることもある。さらに無から有を生み出すことによりカイメラの量産機を無限に呼び出すことも可能。

ヴェ「時間をかけるとどんどん増殖していくからまずかったです。ちなみにこの二機は技を出すときに魔法陣を発生させることもあります。特に今回出た杖のパーツを飛ばす技　インサニティ・インヴェイションはSTRIKESのブラスタービット……」

ジ「、ああ、なのはの世界に合う機体？　ということだ」

ヴェ「では」

没ネタ集とアンケート2

ヴェ「どうも、ヴェルクです。このたびこの小説が20万PVを突破しましたので久しぶりの特別編です」

ジ「今回は何をやるんだ？」

ヴェ「没ネタ集です。おもいつきり没ネタを暴露します。あとアンケート的なやつを」

ジ「なんだよそれ……」

ヴェ「実はまず始めにジグの名前は最初は和名でした。漢字を使うつもりでした」

ジ「じゃあ今の名前になったのは何でなんだ？」

ヴェ「カタカナの方がカッコいいような気がしたから。さて次です、無印編でジグ以外のオリキャラを出す予定もなかったです。出したのは……スポット参戦です」

ジ「そんな無意味なことをするなよ。しかもお前の技量でそんな無駄なことを考えるな」

ヴェ「無視無視、しかもジグにはテイルズの能力はなかった！もう設定が違いすぎるなあ。なんでここまで変わってしまったんだろうか……」

ジ「お前の無計画さのせいだろ」

ヴェ「まあ確かにストーリーとか全然決めてないけどね。書きながら考えてるから。……さて、ここからが本番です」

ジ「これまでも結構、驚いたんだが……」

ヴェ「ならば覚悟しろ。実は……プレシアはフェイトと分かりあった後、足元が割れて虚数空間に落ちていたはずなんですよね。その時にフェイトを突き飛ばしてね。そして当初の予定では落ちて行ったプレシアをこっさり助けるためにゲートを発動しつつ、自分は太陽の翼で次元崩壊を止める予定でした」

ジ「その場合、俺はどうなったんだ？」

ヴェ「少なくともアースラには死んだことにされるはずだった」

ジ「そのほうがよかった……それならハラオウンに会わなくて済んだのに……」

ヴェ「諦める。さらにジークは時の庭園でウイングガンダムゼロカスタム、ヒイロ・ユイを呼び、なのはと共闘しましたが本当はレジェンドガンダム、レイ・ザ・バレルでフェイトと共闘するところを書こうと思ってました。二人とも創られた人間です。レイがアースラで自暴自棄になっていたフェイトに“その命はお前だ、アリシアじゃない！”っていう予定でした」

ジ「もう聞くのもばからしくなってきたが、じゃあ、何故こうなった……」

ヴェ「実は高町恭也とヒロ・ユイの声優が両方とも緑川さんだったの知って、よし！ 声優ネタをやるうー！ と決めたからやっぱスパロボは声優ネタでしょう スパロボZでホランドが父さんになったらどう呼ばれるかでドロシーの“とうちゃん”にホランドが“その声で言うんじゃないやねえ！”は不覚にも吹いてしまった」

ジ「もういい……さてアンケートだ。……ソル、任せた」

ソ「全部、私にまるなげですか！？ ……はあ、分かりました……アンケートと言うのはA・S編でのマスターの立ち位置です。

第3軍として戦いに介入する、介入ルートか

ヴォルケンリッターと共闘する、夜天の書ルートです。

ちなみにどちらでも最終的な結末は同じです。 原作みたいなのは達と共に管理局に協力するルートはありませんのであしからず」

ジ「俺がハラオウン家の言うことを聞くなどありえない」

ソ「そういうことです。 介入ルートの場合は1を、夜天の書ルートの場合は2でお願いします。 それでは」

ジ・ヴェ「ま、また勝手に閉めやがった」

没ネタ集とアンケート2（後書き）

ヴェ「今回は投稿間隔が短すぎたので感想は次回にまとめて発表します」

ジ「またかよ……」

二十七話 お嬢様ってさらわれやすいよね 前編

ジークside

俺は前回に行き損ねた翠屋に向かっている。

ちなみに現在の時刻は3時30分。小学生なら家に帰っているであろう時間帯だ。

俺はなのはが帰っている時間帯に着くようにしている。

ほとんど面識のない人だけのところに行く。別にそれは店に行くのと変わらないからいい……

だが、ただで食へに行く……そこが問題だ。

正直、気まずい……高町家とはなのは以外とはほぼ面識ないし。

そんな状況で食べたなら美味な物も美味でなくなってしまう。

なのでこの時間にしたわけだ。

前回は行けなかったから2倍楽しみだ とか考えていると

「でもマスター、もしなのはさんがまだ帰ってなかったらどうするんですか？」

ソルが話しかけてきた。フツ、俺がそんなことを考えてないとも？

「大丈夫だ。なのは達が学校帰りに通る道で向かっているから。もし帰ってなくても途中で見つかるからな」

「そこまで考えていたんですか……」

なんかソルは予想外と言うような感じだ。

なんか釈然としないな。

「逆に聞くが俺がそんなことを考えてないと思ったのか？」

「はい。マスターはなんやかんやで計画を立てないでその場のアドリブとかで済ますところがありますから」

え？ 俺、そんなことあったか？

「プレシア・テストロツサの病を治すときとか計画してるように
案外、無計画でしたし」

まあ、どうやって治したかの言い訳を考えてなかったからなあ

まあ我ながらだいたい無理やりだったと思うが……

……まずい。反論できない……

「……言っな。ってあれ、なのはだ」

俺は200メートルくらい前になのはを見つけ、これ幸いと話を
そらす。

「高町なのはだけではありませんね」

俺の方でもなのは以外にあと二人少女がなのは達と話しているの
が見えた。

一人は金髪、もう一人は紫の髪の色で両方ともロングヘアである。
原作で見たことあるな……

「確か……アリサとすずかだったか。楽しそうに話してるな、こ
こで話しかけるのは野暮だな……ソルもう少し後に来るとするか」

俺は方向転換してなのは達とは逆の方向のもと来た道に戻ろうとするが

「マスター！ 高町なのは達が！」

その言葉に俺は再びなのは達の方へ向き直った。

すると俺が振り向き後ろを向いたわずかな間になのは達のそばにワゴン車が止まっていて、黒いヘルメットをかぶったやつらがスタンガンでなのは達を気絶させていた。

俺に見られていることには気づいていないようで気絶させたなのは達を抱えて車に乗せて自分達も乗り車を動かしてここから去ろうとする。

この時、俺は既にそのワゴン車の元に走り出していたが俺がたどり着く前に車を発進させた。

もちろんワゴン車は法定速度？ なにそれ、おいしいの？ って感じのスピードで走り去っていく。

俺ももちろん追いかけてようとしているが……無理だな。おそらく120キロは出ているしな……

「……さて翠屋に行くか」

「現実逃避しないでください！」

「そんなこと言われてもなあ…… どこに行ったか分からないのにどうやって追いかけるんだ？」

俺はソルに尋ねる。いくらチートでも俺の能力には普通のワゴン車を索敵出来るような能力はないしなあ……

街中でセットアップするわけにも行かないから追いかけれない

し……
あ、これはつんだな。

「誘拐ならどうせ身代金目当てだろ。確かなのはと一緒にいた二人はお嬢様だったしな……金を受け取ったら生きて帰ってこられるだろ」

俺はそう結論を出し、この旨を伝えに結局、翠屋に向かおうとしていたら一枚のポスターが電柱に張ってあった。

ポスターの一番上に書いてあるタイトルにはこう書いてあった。

《最近、隣町で身代金目当ての誘拐事件が発生！だが、犯人は約束された金額を受け取ったにもかかわらず人質の子供を殺害した》

俺はそれを見て固まる。

「……これは冗談抜きでやばいかもな」

「……ええ」

俺達は呆然と立ち尽くしている。

このポスター一枚で俺の考えた解決法は一瞬で崩壊した。

「……や、やばいぞ！？これは！？いや待てよ？もしかしたら同一犯ではないかもしれない」

俺はほんの少しの希望を持ち呟くが

「……ポスターの本文に《犯人は犯行時に黒いヘルメットを着用

俺は生まれてこの方ここまで大きな声を出したことがないんじゃないかって言うほどの声で叫ぶ！

そんなことしたら本末転倒とか言うレベルの話じゃないだろうが

「……あ、そういえばそうですね。犯行を抑えることだけ考えていましたのでそれ以外のことは考えてなかったです」

俺の言葉にソルはレクイエムの発射を思いとどまったようだ。
か、間一髪……俺、いつかこいつのうっかりで殺されるかもな……

「あ、でもワゴン車は見つけましたよ。目的達成です」

怪我の功名だな…… まあとりあえずこれ終わったらソルには一度お灸をすえないとな。

「まあいい。でどこだ？」

「ここから40キロ先にある、今は無人の廃墟と化している建物です」

「廃墟か……近くに人は住んでいるのか？」

「いえ」

なら問題ないか。背に腹は変えられん。

大事になる前になのは達を救出しないと。

俺は目的地に向かって走り出す。

「勇者のサイボーグの力なら！」

俺はそう叫び、人間とは思えない速度に加速した。

（廃墟）

俺は40キロをわずか五分でたどり着いた。
ん？ どうやったかって？ 勇者の力さ。
走るスピードなら新幹線にも渡り合えてたからなあ、勇者王は。

「さてどうするかな。魔法は使えないし機体になるのも無理だからな」

「え？ なんですか？」

「一般人に魔法を使ったら存在がばれるだろ。機体も同じ理由だ」

「あ、そうですね」

少し考えれば分かる物だと思うがな。
だが、どうするかな。もし銃など持っていれば生身では多少不安だ。

しかたない。あれで行くか……あれならばても犯人が馬鹿ってことにもなるだろう。

「ソル、セツトアップ」

俺は光に包まれた。

ジーク side out

なのは side

「あんた達、こんなことしてただで済むと思ってるの!？」

アリサちゃんの叫び声が部屋の中に響いた。

私達は気がつくところかの部屋の中にいました。

そこには三人の男の人がいました。

しかも、私達は両手両足をロープで縛られて身動きがとれないの

……

もしかしてこれは……誘拐!？」

「あん？ ウルセエなあ、ただで済むと思ってるわけないだろ！

お前らは金持ちのお嬢様だからな。身代金がたっぷりもらえるぜ」

「そ、そういう意味で言ったんじゃないわよ!」

男の見当違いの答えにアリサちゃんは食って掛かります。

こんなときでもすごく強気なアリサちゃんは凄いとありますが
ここはおとなしくしていたほうが……

「なあ、少し大人しくしろよ」

「嫌よ!」

アリサちゃんは男達の言うことなど聞く気は全くないようです。
そんな態度に腹を立てたのか部屋の隅に座っていた人が言いまし
た。

「お前ら何をしてるんだ？ 早くその小娘を黙らせる!」

「は、はい。リーダー!」

どうやら、隅に座ってる人が一番偉いそうです。

「三人いるんだ、一人殺せば大人しくなるさ」

え？ 今、この人なんて言ったの!?

「な、なら間違つて連れてきたこいつだな。……まあどうせ最後
には全員殺すけどな」

「ああ」

男達は私を見て、言いました。

そして拳銃を取り出し引き金に指をかけ

「じゃあな」

引き金を引いて私を撃とうとしました。
そんな、こんなところで私死んじゃうの!?
私は怖くて目をつぶりましたがその時!

「た、大変です!? え、得体の知れないきぐるみのような物が
「ふもー!」ウワアアアア!」……」

男の人が腰につけていたトランシーバーからこんな声が響きました。

「おい!?! どうした!?!」

男はトランシーバーに叫びますが返事は返ってきません。

その場に少しの間、静寂が訪れましたが
ドッカーン! という音によって破られました

その音は部屋にあったドアが何かによって壊されたときの起きた
音みたいです。

なぜならこの部屋に一つあったはずのドアのあった場所にぽつかりと人が通れるほどの大穴が出来ていたからです。

「な、何者だ!?!」

男の一人が穴の開いた方向に叫びます。
すると……

「ふも、ふも、ふも、ふもっふ〜!! (俺か? 俺はお前達を潰しに来た男さ!)」

ふも、ふもとかわいい声を出すよくわからない茶色の何かが出来

した。

ネズミ？ 犬？ なんだろう、あれ？

私はひとまず助かったことに安堵しつつその何かについて考えて
いました。

二十七話 お嬢様ってさらわれやすいよね 前編（後書き）

ヴェ「前編、後編になってしまった。なぜこうなった……」

ジ「お前が書いたからだろ」

ヴェ「痛いところをつくな、お前は。ロボット様、うりあ様、ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様、海人様、NANASI様 感想ありがとうございます。」

ロボット様より真ゲッタードラゴンを、うりあ様よりアルトアイゼン、ヴァイスリッター、シュゲルトゲーベル、エクスカリバー改を、NANASI様よろシロウガ、カオス・カペル、サイバスター、ヴァルシオーネ、ヴァルシオン、グランゾン、NANASI様よりヒュッケバイン008L、ゴッドシグマ、フェイクライド、リユースナイトゼファアを頂きました」

ジ「OGの機体が多いな」

ヴェ「ちなみに今回出た機体？ みなさまもうお分かりですか？」

ジ「ほとんど全ての人が分かると思うぞ」

二十八話 お嬢様ってさらわれやすいよね 後編

ジークside

俺は一つ一つしらみつぶしに部屋を探し回っていた。

そしていくつかの部屋に反応があったが、誘拐犯の仲間と思しき人物だったのでスモークグレネードを部屋に投げ込み混乱している間に気絶させた。

それを繰り返して、俺は最後の部屋のドアの前にいる。ここにはなのは達がいるはずだ。

だがサーモグラフィには六人の熱反応がこの部屋にある。あと三人、誘拐犯がいるのか。

まあいい。なぎ倒すのみだ！俺はバズーカを取り出し、

「ふも〜！ ふもつふ！（投入開始だ！ 碎け散れ！）」

ドアに打ち出した。ドアは轟音をあげて木っ端微塵に碎け人が通れるほどの大きさの穴が出来た。

俺はバズーカをしまってそこから部屋に入る。

「な、何者だ!？」

誘拐犯の一人 Aが俺に向かって、いやおそらく音のしたほうに叫んだ。

見ると

ふ、誰かって？ それは

「ふも、ふも、ふも、ふもっふ〜！！（俺か？俺はお前達を潰しに来た男さ！）」

俺は答えたが…… 今度は誘拐犯の一人 Bが悲鳴に近い叫び声を上げる

「な、なんだよこいつ!? あいつら何をしてるんだ!? ……ま、まさかこいつに仲間が全員やられたのか!?」

「ふも、ふもっふ、ふも！（察しがいいな。その通りだ） ふもっふ、ふも、ふもっふ！（諦めて投稿しろ!）」

俺はパニック状態になっている誘拐犯達に忠告する。
これで投稿してくれば御の字だが……

「お前ら……早くその目障りなかわいいやつを捕まえろ」

俺の子某を打ち砕くように部屋の端にいたおそらく誘拐犯のリーダーであるう人物 Zが呟いた。

その言葉でAとBは落ち着きを取り戻し

「「は、はい、リーダー!! ……ってかわいい!?」」

二人は従おうとしてZの言葉の中の「かわいい」というキーワードに反応する。

流石はボン太君……ラウ・ル・クルーゼをも和ませたかわいさだな。

「ちっ、ミスったな……まあいい。そいつを捕らえろ!」

「了解！」

AとBは俺に銃を向けて引き金を引いてきたが……鈍いな。俺はそれをあっさり避ける。

AとBは俺を見失ったらしくあたりを見渡している。
チャンスだな。生かさせてもらう！

俺はAとBの後ろに気づかれぬ様に回り込み

「ふも、ふも、ふもっふ〜！ ふも！！（悪いがしばらく眠って
もらおう！ 覚悟！！）」

Aの腹に高速の連続パンチを叩き込み、

「ふも〜！（くたばれ！）」

飛び上がりながら顎にアッパーを食らわした。それによりAは空中に1メートルくらい浮き地面に叩きつけられた。
気を失ったようでピクリとも動かない。

「ふも、ふも〜。ふも、ふも、ふもっふ！ ふもっふ、ふもふも
！（もう一度、言う。諦めて投降しろ。命まではとらない！」

俺は味方が一瞬の間にやられて呆然としているBに語りかける。

「こ、このままじゃやられる！？ く、喰らえ！」

俺の話を聞かず、銃を取り出し、俺に向けて撃ってきた。

だが、打ち出された弾は全て俺の体に当たったが少しだけ弾丸の跡を付けて無力化し地面に落ちる

「ふも、ふも、ふもっふ！（話を聞かないなら、覚悟してもらおう）」

俺は黒い棒のような形状をした物　スタンロッドを取り出し

「ふも、ふもっふ、もっふる！！（邪魔だからおとなしくしていろ！）」

Bを叩く。スタンロッドからの電撃がBを気絶させたようでBは崩れ落ちた。

「ふもっふ、ふもっふ、もっふる？ ……ふも！？ ふも、ふもふもっふ！？（残りはお前だけだぞ。さあ、どうする？ ……つていない！？ どこに行った！？）」

俺は辺りを見回すが、この部屋どころか建物から動いている反応が感知できない

……逃げられたか。……まあいい。とりあえず当初の目的は達した。

「ふも、もっふる、ふもっふ？（大丈夫か、怪我はないか？）」

なのは達の方を向いて話しかける。

「な、何こいつ！？ 話、私達をどうする気！？」

アリサが俺にかなり棘のある言動で叫ぶ。

なのは達もとまどっているようだ。……無理もないか……

「ふも、ふも。もっふる、ふも。（別にどうもしない。助けに来た、ただそれだけだ）」

なのはたちの警戒を解くために話したが

「ふも、ふも言っていないでちゃんと喋りなさいよ！」

アリサの言葉により俺はふもふも言ってるだけだということに気づく。

……失念していた。こいつ、ボン太君語しか喋れないんだ。ボイスチェンジャーをOFFにすれば話せるか

「ふも！ ふも、ふもっふ、もっふる、ふも、ふも（ソル！ ボイスチェンジャーをOFFにしてくれ）」

「ふも……ふも、ふも、ふも、もっふる……（すみません……何言ってるのか分かりません……）」

え？ ま、まさか……ソルにも通じないのか！？ というかソルもボン太君語だと！？

ま、まずい……どうするか……
しかたがない……こうなれば！

俺は決心してなのは達に近づいていく。

「！？ こ、来ないですよ！？」

アリサが叫ぶ。見ると三人とも俺の接近に怯えて、目に涙を溜めているという、俗に言う半泣き状態になっている。
すまないな……こうするしか方法がないんだよ。

女の子を泣かすのは心が痛むがこんなところに放っておくわけにもいかないしな。

俺は一瞬でなのは達の後ろに回りこみ、スタンロッドで縛っているロープを引きちぎる。

「「「え!?!」」」

三人は俺の行動が予想外だったみたいで驚きの声を上げる。俺はそれを気にせずバズーカを取り出し

「ふも、ふも！（破壊する!）」

再び壁に向けて発射した。

ドツカーン!!!

壁は轟音を上げ穴を開けた。

俺はその穴の前に行き

「ふも、ふも、もっふる、ふもっふ（さあ、ついて来い。ここから出るぞ）」

三人に手招きした。そう、これが俺の策、ジェスチャーだ！

すると三人は一塊になり話し合っているようだ。

できれば従って欲しいだな。出なければ無理やり連れていかないとならなくなる。

考えている間に相談が終わったようだ。なのは達はこっちに歩いてくる。

どうやらついてくるみたいだな。こいつは重畳。

「ふもゆふ、もつふる、ふも、ふも（よし、ついて来い。行くぞ）」

俺達は穴を通りいくつかの部屋の壁をバズーカでぶち破って進んだ。

その間に気絶から目覚めたやつが何人か俺に攻撃してきたがもちろん無駄だ。俺はそいつらにバズーカの弾をプレゼントしてやった。

あ、ちなみに非殺傷設定だぞ。実弾兵器なのに非殺傷設定になっていたのは驚きだ。

普通は無理なはずなのにな。ボン太君、恐るべし。

そして……とうとう外に出れた。

だが、そこで待っていたのは……

「動くな！ 少女達を解放し武器を捨てて頭の後ろに回せ！」

百人はいるであろう大勢の警官と自衛隊が銃を構えて待ち構えていた……え？ まさか、俺が犯人扱いされてるのか！？

「ふも！？ ふも、もつふる、もつふる！（違う！？ 俺は犯人ではない！）」

俺は講義の言葉を上げるが

「何をふも、ふも言ってるか！ 既にお前がその少女達を誘拐したのを見た目撃者通報が入っている！ おとなしくお縄につけ！」

は！？ そんなばかな！？ ……まさか！？ さっき逃げられた犯人のリーダーか！？

「投降の意思はない様だな……！」

自衛隊員や警官たちが一齐に攻撃する準備をしている。

まずいな……いくらボン太君でもこんなに大勢でも、しかもあたり一面を囲まれていては……

しかたがないか……これは使いたくなかったが……

「ふもツふ！ ふもふもふもふも！（こうなれば！ 最終手段だ！）」

俺は頭にアンテナをつけ叫んだ。

「！？ な、何だあれは！？」

俺から最も離れた位置にいる警官の一人が叫ぶ。その声で警官の大多数が後ろに振り向くと

「……………ふも〜！……………」

そこには隊列を作った黒と灰色のまだら模様のボン太君 量産型ボン太君が大量にこちらに向けて突っ込んできていた。

警官たちはみなその異様な光景に我を失って固まっている。

「……………な、何だあれは………ぼうつとしてる場合か！？ こちらに突っ込んできてるんだぞ！？ まあただの着ぐるみだが………まあいい発砲を許可する！ 蹴散らしてしまえ。……………撃てー！！！」

指揮官が我を取り戻し叫ぶ

「……………りよ、了解……………」

「!?!? やつを逃がすな!?!」

俺に発砲しようとする。させるかよ!

スタンロッドを取り出し指揮官に叩きつける。

「ソ、そんなばかなことが……ただの着ぐるみの集団などに……」

「ふも、ふも、ふも、ふも。 ふも、ふも、ふも。 ふも!)
貴様は一つミスを犯した。敵の戦力は過小評価しないことだ」

俺はスタンロッドを喰らって意識が朦朧としているであろう指揮官に話しかける。

「な、何言ってるのかわかんねえ……」

そう言い残し、指揮官は気絶した。

俺はそのままこの混戦を利用し何とか逃げ延びて家に帰った。
もちろんなのは達は置いてきた。警察だから大丈夫だろう

〜一日後〜

俺がテレビをつけると

『昨日の4時30分ごろ海鳴市の今は廃屋となっている建物で誘拐事件が発生しました。犯人はネズミとも熊ともとれる着ぐるみを着ていました。警官たちが包囲して逮捕しようとしたところ、おそらく仲間の今度は色が違う着ぐるみを着た集団が警官達に襲い掛か

り銃撃戦となりました』

「…………マスター」

「なんだ？ ソル」

「もう魔法を使ったほうがよかったんじゃないですか？」

「…………それを言うな…………」

まさかここまで大事件になるとは…………

魔法で雷でも落としてさっさと終わらせたほうがまだよかったか
もしれん…………

超自然現象で終わった気がする…………

二十八話 お嬢様ってさらわれやすいよね 後編（後書き）

ジ「なんでこんなことになってしまったんだ……」

ヴェ「それがボン太君クオリティ！！ 清浦刹那様、謎様、うりあ様、門矢光様、ライ様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。うりあ様よりアーバレスト、M9ガンズバック（マオ機とクルツ機）、かなめのハリセン、ステルスガオー、ドリルガオー、ライナーガオー、ギャレオン、ステルスガオー？、プロウクンガオー、プロテクトガオー、ストレイトガオー、スパイラルガオー、ガジェットガオーを、門矢光様より真ゲッター、新ゲッター、ブラツクゲッター、真ドラゴン、サイバスター、グルンガスト参式斬鑑刀装備、アルトアイゼン、ボン太君、量産型ボン太君を、デステイニープラン様よりア・バオア・クー、アクシズ、リーブラ、ヤキン・ドゥーエ、メサイヤ、コロニー型外宇宙航行母艦ソレスタルビーイングを頂きました」

ジ「アーバレストにM9……ボン太君がいると使えなかった……」

ヴェ「さてと次回はそろそろA・Sに向けて少しは進もうと思ってる」

ジ「本当か？」

ヴェ「気が変わらなければ」

ジ「信用できないな」

ヴェ「では」

二十九話 先のことを見越して計画を立てよう

「……そろそろ動きださないとな」

もうすぐアースラと言う名の呪われた船が地球に帰ってくる……
あとたったの90日しかない。それを考えると凄く憂鬱になる。
どうしようか……

え？ まだ90日もあるって？ できれば今後一切、会いたくない
んだから90日なんて短すぎる。

もういつそのこと沈めようか…… と愚痴を言っても仕方ないか。
そろそろ下準備に入らなければな。アースラが来て動きづらくなる
前にな。

「そろそろはやてを助けるために動き始めないと。行くぞ、ソ
ル」

「いいですけど……」

ん？ 何か歯切れの悪い返事だな。

「どうした？」

「いえ、具体的に何をするんですか？」

「何をするかって……この時期に出来ることなんてはやてと面識
を持っておくことぐらいだろ」

ヴォルケンリッターが出てきてないしな。

「……そうですね。なら同年くらいの姿になったほうが都合がいいかと」

……確かにその通りだな。この姿で話しかけたら壁を作られそうだな。

向こうも喋りづらいたろうしな。ここは姿を変えておくか

「わが身を偽りの姿に変えよ……フェイクパーソナル。こんなもんでどうだ？」

「問題ないかと思います」

「そうか。なら行くとするか」

俺は姿を変えおそろくなのは達と同年くらいの姿になり、市立図書館へ向かった。

おそろくはやてはそこにいるだろう……いなかったらその時はそのときだ。

～市立図書館～

図書館に入つてとりあえず一言、静かだな。

やはり時間帯的にも人の数がまばらだ。さてとはやてはいるかな？

俺が探すこと5分、車椅子に乗っている少女　八神はやてが本棚の上の方にある本をとろうと手を必死に伸ばしていた。

だが、届きそうで届かない……　車椅子って悲しいな。

俺ははやてのそばに行き

「ほら、お前がとりたい本はこれだけか？」

はやてが取るうとしていた本を代わりに取った。

はやては一瞬、戸惑っていたが俺が同じ年くらいなのもあったのか

「あ、おおきに。じゃあ、あとあれもお願いするわ」

初対面なのに砕けたような言い方で話す。まあそのほうがいいんだがな。

はやてが一冊の本を指差す。

俺はその本を取り、さっきとった本と一緒に渡した。

はやては申し訳なさそうに受け取った

やはり車椅子は不便だな……少し高いところだと届かないからな。

「ごめんな。助かったわ」

「いや、別に礼を言われるようなことはしていない」

「いややなあ、助かったから言ってるんや」

「そうか……なら分かった」

はやては予想以上にいい子みたいだな

どっかの執務官とは大違いだ。はやてのつめの垢でもせんじて飲ませたいな。

「あれ？ でも何で君、こんな時間にここにいるん？ 学校は？」

あ、そうか……今の時間帯は小学生は学校に行ってるな……

考慮に入れてなかったな。どう誤魔化すかな。

「俺は……ちょっととある事情で学校で休学中だ。そういうお前はどうかんだ？」

だいぶ無理があるというか、もはや説明になっっているのかも怪しいがとりあえず答え、聞き返す。

「私は病気で足が悪いから休学してるんよ」

……車椅子でも学校って行けなかったっけ？ まあいいか。

「そうか……それは気の毒だな。足は良くはならないのか？」

俺は原因も治す方法も知っているが一応、聞いた。

「リハビリすればよくなる可能性があるらしいねんて。だからがんばってるんよ」

病気が……本当は呪いなんだがな……

ここで全て真実を言ってやれば信じるだろうか？

……いや、言うべきではないな。ちゃんと未来には直るんだ。

世の中には知らなくていいこともある。

「そうか、がんばれよ」

「うん、おおきに……えっと……なんて名前なん、君？」

「ん？ 俺か？ 俺はジ……」

そこで俺はあることに気づき言葉に詰まる。

「何でそこで止めるん？ ジの後が何か気になるやんか」

はやては俺の名前の続きを聞きたがっている

だが、俺は今、凄くあせりながら自分の名前を必死に考えていた。ま、まずい！？ 姿を変えても名前を変えなければいずれなのはにばれる。

はやてとなのはが面識持つのはいつかは忘れたが……

そうすればあれよあれよと言う間に呪われしハラオウン家に伝わってしまう。

そうすれば俺の計画は失敗してしまう……ジ、ジのつく名前……何かないか、何かないか！？

ハッ、あ、あれだ！ あれしかない！

「……ジューダスだ」

「ジューダス君？」

「……ああ」

だいぶ無理やりだがしかたがない。とっさに思いついたのがこれだ。

無理やりだな……でも、はやてなら信じてくれないだろうか……俺は一縷の期待を持っていた。

「私は八神はやて言います、これからよろしゅうな、ジューダス君」

い、いい子だ〜 KYとは違いすぎる……もう生物学的に違う気

がしてきた

「よろしくな、はやて」

こうして俺ははやてと面識を持ち、これからも図書館にたまに行つてはやてとの親睦を深めようと思いつながら家に変える途中……

「マスターも因果な偽名にしたものですね」

「因果だと？ どこがだ？」

あの時はとりあえず最初にジのつく名前で思いついたのがあれだけだったから言ったわけで意味とかそういうの全く考えてなかったんだが……

「ジューダスは裏切り者って意味があるんですよ。高町なのは達を騙し、敵になる、マスターのこれからの予定を皮肉った名前だと思つてたんですが……違うみたいですね」

「ああ、違う」

まさかそんな意味があるとは……まさかその名前の意味から正体がばれたりしないよな……

と言うかファミリィネームも考えないと駄目だな。

とりあえずなるべくぼろを出さないようにするか……まあ最後にはばらすんだがな、と考えていると

「異物出現しました」

ソルが呟く。最近出てこなかったのにな。

まあいいか。試したいこともあるしな。

「街中だけと付近に人は見当たらないから問題ないだろう。ゲート発動」

俺はゲートに入った。

二十九話 先のことを見越して計画を立てよう（後書き）

ジ「今回やけに短いな。しかも特に何もしてないし」

ヴェ「……うるさい。一応本編進んだ」

ジ「あれで進んだって言うのか？」

ヴェ「進んだんだ！！ デステイニープラン様、ライ様、清浦刹那様、うりあ様、感想ありがとうございます！！」

ジ「逃げたな、こいつ」

ヴェ「デステイニープラン様よりキングゲイナー、ラッシュロッド（ストップコートあり）、エンペランザ、パワーゴレーム、メックスブルート、リオンネッター、ドミネーター、全てのオーバーマン（オーバーデビル以外）の能力を得ることが出来る薬（能力の切り替えも可能）を、うりあ様よりシャイニングガンダムとコアランダーを頂きました。ありがとうございます」

ジ「オーバーマンの能力を使える薬って……何でも出来るな……」

ヴェ「何気に反則的な能力持つてるやつ多いからなあ。時を止めたり心を読んだりとか……でもオーバーフリーズは出来ないのか……」

ジ「流石にそれまで出来たらチートするだろ。あとシャイニングガンダム……シャイニングフィンガーソードくらいしか記憶にないな……」

ヴェ「スパロボなんてゲームによっては最初からゴッドガンダムだからなあ。扱いがあまりよろしくない……まあ、それでもウイングガンダムよりはましか……そして次回の更新はもしかしたら遅くなるかもしれない」

ジ「何故だ？」

ヴェ「テストが近い!!」

ジ「嘘をつくな。それだけで遅くなるとは思えん。お前は基本的にテスト一日前でも夜しか勉強しないからな。本当はなんだ？」

ヴェ「……スパロボLを買ったからです……」

ジ「開封する前に書け!!」

ヴェ「そんな殺生な!?!?!?!? ……まあ、なるべく早く更新しますの……」

三十話 人の話はちゃんと聞きましょう

「あれか……ってレオーだよなあれ」

俺は異物が発生した場所で見たのは獅子をイメージとしたグレーの二足歩行の機体である。

「そうですね。レオーに該当します」

カオス・レオーの量産機か。まあカオス・レムレースとかに比べれば楽でいいな。

試したいことの相手にもちょうどいいだろう。
相手が弱いに越したことはない。

「よし、ソル、セットアップ」

俺は光に包まれ、その光が消えたとき赤と黒を基調とした服を着て、鞘に入っている式本の刀「火燐・地禮かりん ちらい」とショットガン「柎樹ハリウッド」を設置した「護業しごぎょう」という独特の武器を持っていた。

「やはり出来たな。無限のフロンティアにバリアジャケットも。こいつは重畳」

そう、この服装はNAMCOXCAPCONや無限のフロンティアに登場した有栖零児の服装そのままだった。

あ、でも俺の額に傷はないぞ。流星にそこまでは再現されないみたいだ。

「何でその姿になったんですか？ 普通に機体になったほうが強いですよ」

「理由があるのさ。なのは達と敵対する時のことを考えてみる」

「……………すみません、何も分かりません」

このデバイスは……………先のことを考えないからな。少し考えれば分かりそうなもんだが……………

立案だけしといて後はまる投げだからな、いつも。

……………しかたないか。俺は飽きれながら口を開く

「スパロボのバリアジャケットは独特すぎる。たとえ顔がわからなくても間違いなく正体が俺だとわかるからだ。それじゃあ偽名使っても意味ないだろうが」

「それならテイルズのバリアジャケットを使えばいいじゃないですか」

俺が説明するとあろうことかソルが反論してきた。

「テイルズのバリアジャケットは力不足だ。精神コマンドが使えないからな」

「別に精神コマンドなくても高町なのは達くらい倒せるじゃないですか」

「いや、異物は原作の重要なところではたいてい出てきている筈だ。相手がなのは達だけならもちろん余裕だが異物相手となると今

の俺じゃ精神コマンドなしでは以前のカオス・レムレースみたいなのがでてきたら歯が立たない」

いや、流石にあれ並みの敵が出てこられたらかなりしんどい。テイルズの術じゃ無理、威力が違いすぎる。秘奥義クラスじゃないとあまり効果が期待できない。

秘奥義をぼんぼん連発できるわけじゃないしな……

それにあの時はカズマの力を借りて、なおかつく直撃>を使って倒したからな……

「そうですか……」

「そうだ、行くぞ!!」

俺はレオーに接近する。

するとレオーはこちらに気づいたようで両目を不気味に赤く光らせた。

そして両手のクローの爪をこちらに伸ばして攻撃してくる。

「無駄だ！ 地禮・春雷の型!!」

俺は護業から稲妻を纏った地禮を抜いて襲い掛かる二つの爪を居合いの要領で切り払った。

これ以上この攻撃は効果がないと判断したのかレオーは爪を元に戻し、俺に肉薄してくる。

レオーの両手のクローと俺の日本の刀がぶつかり合い火花を散らした。

スピードは思ったより早いな。レオーはスーパーロボット系なんだがな。

だが、力なら俺の方が断然上だ。

「はあああああつ!!」

俺は二本の剣に同時に前に力を入れ、レオーを俺の前に弾き飛ばした。

もちろん、弾き飛ばしただけで終わるつもりはない!

「二丁・樹金道!!」

右手で護業から柎樹を取り出し、さらに左手で金色の拳銃、ゴールド金に持ちレオーに向けて連射する。

「!?!?!?!?!」

レオーからAI特有の音声がかえってくる。

俺が撃つのを止めるとレオーは黒い煙を出してところどころがシヨートしている。

かろうじて立っている状態だった。次の一撃で決めれるな。

「覚悟しろ! 火燐・舌の型!!」

炎を纏った火燐でレオーを横に一閃、そのまま火燐を振り上げ

「これで………終わりだ!!」

地面ごと叩ききるつもりで振り下ろした。

俺は火燐を鞘にいれレオーに背を向けて呟く。

「これぞ全てを断つ一刀なり………成敗ッ!!」

なんかむかつく話し方だな。

「何で俺が悪なんだ？」

わけが分からん。そんなことを言われるようなことをした覚えはないぞ。

「いやいや、言わなくても分かりますって。基本的に実弾兵器ですもんね。無限のフロンティアの武器は、高町なのはたちも恐れて戦えなくなりますよね」

……そういうことか。言われて見れば確かにそういう働きもしてくれそうだな。

なのは達は心のどこかで非殺傷設定があるから自分が負けても死なないと思ってるんだろうしな。

もし、拳銃を向けたら死への恐怖に動けなくなるんだろうか……
まあ、あれでも一応、小学生だからな。しかたないといえばしかたないか

「非殺傷設定できるから大丈夫だ。俺は一人を除いてなのは達に大怪我を負わせるようなことは絶対にしない」

「そうですか。結局、高町なのは達を恐怖させるためですか」

「違う。だいたいそれだとフェイトとか地球出身じゃないやつはおそらく拳銃など知らんはずだが」

「……納得しました。高町なのはを恐怖させるための武装ですね」

こいつはまだ言うか……俺の話など知るかって感じだな。……ま

さか

「なあ、俺がさっき言った理由、覚えてるか？」

「え？ 何にも聞いてませんよ」

ソルから何それって感じの返事が返ってきた。

こ、こいつ、俺の話、聞いてなかったのかよ！？

「やはり帰ったら少しばかり仕置きが必要だな」

「え？ 誰にですか？」

「お前しかおらんだろぅが！！」

「な、な、何ですか！？」

自分の胸にでも聞いて見る！！ ……聞いてなかったら知るわけ
ないか。

俺は怒りをあらわにしつつ帰路についた。

三十話 人の話はちゃんと聞きましょう(後書き)

ヴェー「どうも、思ったより早く更新できたと自負しているヴェルク・ネオです」

ジ「確かに早いな」

ヴェー「スパロボはまだまだあまり進んでないがな」

ジ「機体を強化してないからだろ」

ヴェー「だって好きな機体がまだ仲間にならないんだよ!! もうほとんど主人公機は仲間になっているのに……」

ジ「それも含めて早く進めってことだ」

ヴェー「うう、ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様、うりあ様、感想ありがとうございます。ウイングガンダム、ガンダムデスサイズ、ガンダムサンドロック、ガンダムヘビーアームズ、シエンロンガンダムを、うりあ様より、ハガネ、クロガネ、大量のサイコフレーム、ガンバレルストライク、ストライクノアール、メビウスゼロ、メビウスx6、ササビーを頂きました」

ヴェー「今回のプレゼントはガンダム系メインですね。そういえば今回のスパロボはマジンガーかなり強いですよ。逆にリアルロボ無双は難しくなってますね」

ジ「マジンガーがすごく装甲が高いからな。でもお前はそのマジンガーを一撃で破壊されてゲームオーバーに」

ヴェ「言うな……そしてさらに主人公以外の機体も優遇されてます。特にラインバレルは強い。ヴァーダントとかハインド・カインドとかね。特にヴァーダントは最初からかなり改造されていたから射程以外は弱点がほぼない」

ジ「これまでだと主人公以外のキャラは主人公に劣る傾向があったからな。まあ、デスサイズヘルやゴットシグマグラヴィオンは除くが」

ヴェ「あの二機は下手をすれば主人公より強かったなあ。では」

ジ「終わり方が強引だな」

三十一話 三度目の正直 いざ翠屋へ 前編（前書き）

ヴェ「まず初めに、私はとら八を知りません。なので美由希や恭也や士郎の口調がおかしいかもしれませんがご了承ください」

ジ「知らないのに書くこととするなよ」

ヴェ「……………では、本編へどうぞ」

三十一話 三度目の正直 いざ翠屋へ 前編

「家」

「いざ、行かん。翠屋へ!!!」

俺は宣言した。

「何ですか、マスター？ 朝っぱらから」

ソルがいぶかしげにたずねてくる。まあ時間が時間だからしかないか。

今、現在午前6時30分 結構早起きしたからな。

「いつも、翠屋に行くとなんやかんや妨害が入るだろ？ それはきつと、なのはがいる時間帯に無理して行こうとするからアクシデントとかに遭遇するんだ。なら早めに行っておけば大丈夫って寸法だ。気まずいが背に腹は代えられんからな。どうだ、この俺の計画？」

「……この時間に普通の喫茶店が開いてるとお思いですか？」

「……さあ、行くか!!!」

「誤魔化さないでください!」

……しまったな。俺としたことがこんな少し考えれば分かる様なことを計算に入れてないとは……

まさかソルが指摘できるくらいのことも気づけんとは……げに恐ろしきは翠屋の魅力か……

しくじったな、だが俺はそれくらいで計画を断念するつもりなど毛頭ない！

「少し待てば大丈夫だ、それだけで翠屋に入れるなら安い物だろ」
なぜか異物は朝は基本的には現れないからな。一番、無難な時間帯だ。

理にかなってるはずだ。そうだ、そうなんだ、きつと。
計画のデメリットを排除しメリットだけを意識させ自分に言い聞かす。

「喫茶店の開店時間って最低でも9時過ぎですよ。何時間、待つつもりですか……？」

「3時間ぐらいか？」

「ドンだけ待つんですか!？」

「気にするな、俺は気にしない！ さて行くか」

俺は部屋から出ようとす。

「待ってください！ せめてあと一時間半くらい後に行きましょ
うよー!？」

ソルが叫ぶが俺は足を止めずに

「妥協したくないから却下」

と呟く。

「妥協とは言わないでしょ、これは!?!」

ソル、五月蠅いな。俺はなんとしても翠屋に行きたいんだよ!

「人間、手段のためには目的を選ばないのさ」

俺はソルを諭す。もう、これで反論してこないだろう。

実際、ソルは反論できずに黙っていた。よし、いくとするか。

俺がドアノブに手を掛けたその時

「それって極悪非道の悪役の台詞ですよ……」

それを聞いた俺のドアを開けようとドアノブに掛けていた手が止まる

ソルがその言葉を言ってから俺は反論できずに辺りにしばらく、静寂に包まれた

「……………」

カチャリ

俺は無言でその静寂に包まれた部屋を出るためにドアノブを回した。

「俺は悪役でもやられ役でもない」

半分は自分に言い聞かすためにそう呟き、部屋を出た

「本当にすいませんでした、マスター！ 許してください」

翠屋への道中、ソルが何度も何度も必死に謝ってくる。

正直、うざい。まあ翠屋に行けるんだし、別にそこまで腹を立てたわけでもないから許してやるか。

「分かった分かった。許すから」

「本当ですか！？ ありがとうございます！！」

ソルが大きな声で叫んだ。

馬鹿が！？ 俺は急いであたりを見回す。誰もいないか……よかつた。

「お前は馬鹿か！？ こんなところで叫ぶな！ 周りに人がいなかったからいいようなものの、もし誰かいたらどうするつもりだ！」

「？」

俺は小声でソルを叱り付ける。すると、ソルは申し訳なさそうに

「申し訳ありません……」

と言う。なんか、さっきからこいつ俺に謝ってばかりだな……流石に可哀想だな
こいつも反省してるみたいだしあんまりしつこく言っても意味ないか。

「次からは気をつけろよ」

「はい！！」「ソル」あ……気を付けます」

やっぱりこいつは反省してないのか？ デバイスだから表情が分からん

く翠屋く

「着いた！！ とうとう着いた！！！！」

「たかが喫茶店に来ただけでしょ」

た、たかが喫茶店だと……こいつは。

「普通の喫茶店ではない。翠屋だぞ、あの翠屋なんだぞ！」

「………そうですか」

ソルはもうどうでもいいという感じで返事してくる

お前の言葉を返したのに何だその態度は

「おい！！ ソル！！ なんだその態度だ」おや、ジーク君じゃないか。おはよう」

え？ 俺が振り向くとほつきを持っている高町士郎がいた。

「あ、どうもご無沙汰しております。おはようございます」

俺はあわててあいさつ返しをする。

「どうしたんだい、朝から大声を出して？ 誰かと喋っていたよ
うだけど」

………何て答えればいいんだろう。ソルのことを紹介するわけには
いかないし

俺が返答に詰まっていると

「まあいいか。翠屋にやってきたのかい？」

「あ、はい。そうです」

俺はあわてて返事をする。助かった………この人、やはりいい人だな。

「弱ったな。翠屋はまだ開けてないんだ」

まあ、当たり前か。俺も待たないと駄目なのを分かった上で来たんだし

「いえいえ、あくまでこの近くで待っています」そうだ。私も今から、一度、家に戻るから私の家の中で待っておくといいよ。うん、それがいいな」え？ いや、ご迷惑では……」

普通に迷惑だろ。知らない人様の家に上がりこむなんて俺は遠慮して断ろうとしたが

「いや、遠慮なんて要らないよ。少し待っていてくれ」

そう言って土郎は翠屋の中に入っていき、それからしばらくして出てきた。

どうやらほうきを置いてきたようだ

「さあ、行こうか」

土郎は歩き出した。俺はそれに釣られるように歩き出す。

まずい……乗せられてるな……でも、ここで断ったらご好意を無碍にすることになるな

しかたないか……俺は諦めてそのまま土郎についていった。

〔高町家〕

「着いた。ここが私達の家だよ」

俺は一つの家の前に立ち止まる。思ったとおりに他の家に比べて土地が広いな

流石は道場持ちの家だな

「どうしたんだい？ 早く入りなよ」

と考えているうちに土郎さんが門のドアを開けていた。

「あ、すみません」

俺は土郎についていくように高町家に入った。

「あ、おかえりなさい。ってあれ？ その人、誰？」

玄関で靴を脱ぎ、おそろくりビングであろう部屋に入るとそこには、身長160センチくらいでメガネをつけた三つ編みの少女高町美由希がたずねてくる

「前になのが言っていたなのはがお世話になった人だよ」

土郎が答える。

「あゝ あなたですか。私は高町美由希です。家のなのはがお世話になりました」

それを聞いた美由紀が丁寧に挨拶して来る。

「俺はジグ・クラインです。なのはさんはいい子でしたので私はたいしたことはしてませんよ」

実際、手が掛かったのはKYだしな。俺はなのはのたいしたことは何もしてない

「謙遜なさらなくてもいいんですよ。あの子から聞いてますから……ありがとうございます」

美由希が頭を下げる。……本当にたいしたことでないんだけどな

「さてとじゃあ、私はまた翠屋に行くから……美由希、翠屋の开店時間になったらジグ君を翠屋に案内してくれ」

「うん、わかったよ。じゃあ、後でね」

そう言い残し、土郎は翠屋に戻っていった

え？ 俺、誰も知り合いいなくなっちゃった……
イツキに気まずさが倍増してくるな……

「ジグさん、どうですか？ ここにいてももしかたないですし家には道場があるのでそこに行きませんか？ そこには恭ちゃん……私の兄もいますし」

俺の今の気持ちを知って気を使ってくれてのか美由希が話しかけてくる

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

「こっちはですよ」

俺達は道場へ向かった。

く高町家 道場く

ヒュッ ヒュッ ブン

何かを振っている音が聞こえる。

俺たちが道場に着くとそこには木刀で素振りをしている身長170後半くらいの身長青年 高町恭也がいた。

恭也は俺達のこと気づいたようで素振りを中断し俺たちのほうを向く

「どうした、美由希。ん？ その男は誰だ？」

恭也は俺を見て言う。

まあそりゃいきなり自分の家に知らないやつが入っていたら気になるよな。

「この人は前になのはが言ってたお世話になった人だよ。恭ちゃ

ん

「へえ、君が……高町恭也だ。よろしく頼む」

「ジーク・クラインだ、こちらこそよろしく頼む」

俺と恭也はお互いに自己紹介をする。

そして恭也が美由希の方を向き

「で何でお前たちはここに着たんだ？」

「ジークさんが翠屋が開くまでの間、何もすることがないから。ここに来れば恭ちゃんもいるし」

「そうか……ジーク、木刀を振ったことはあるか？」

恭也は少し黙り込んで考えた後、俺にそう尋ねてきた

「いや、木刀はないな」

真剣やアロンドントなら振ったことはあるがな

「そうか、ならどうだ？ 一度、振って見ないか？ 美由希！」

「はいはい、ちょっと待っててね……………取ってきたよ、はい、どうぞ」

美由希が道場の奥から木刀を取ってきて俺に渡す。

……まあ、たまには木刀で素振りするのもいいか

俺はそれを受け取り、振ろうとすると

「素振りの仕方、分かるか？」

恭也が話しかけてきた。

今更、素振りの仕方分からないんじゃないかとつくに異物に負けてるって

といつても普通の素人が振り方を知ってるとは限らないからな俺は普通じゃないがな

「大丈夫だ、問題ない」

俺は木刀を振り上げ

「ハアツ！！」

イツキに振り下ろす。ブン！！ という音が道場に響く………思ったより軽いな。

まあいつももっと重い武器で戦っているからな

「ジীগ」

「ん？ なんだ、恭也？」

俺が木刀の重さについて考えていると恭也が話しかけてくる

「お前、本当に素人か？」

「いや、一応、素人ではないかな？ 剣道は出来ないが剣術には多少の心得がある」

剣道は全く知らんが、テイルズの術を使えるからな。剣、使う技もあるからな。

「そうか……なら一試合しないか？」

恭也が再び、少し考えた後、俺に提案してくる

「無理だろ。俺、剣道のルール知らないし」

全く分からんぞ、俺は。まず胴着の付け方からして分からん。試合うんぬんかんぬん以前の問題だからな。

「安心しろ、公式戦じゃないんだ。自己流でいいし、防具もつけないでいい」

恭也は俺のそんな考えを消去する言葉を言う

……自己流でいいのか。なら別にやぶさかではないな、どうせ暇だし

それに俺が生身でどれくらい戦えるのかも分かるしな。暇つぶしにもなるし、自分の実力も計れる。一石二鳥だ

「いいだろう」

俺は了承の返事を言う。

恭介とジークが向かい合って話している横で美由希が

「恭ちゃんの気持ち分かるよ。あんなに速く剣を振れる人なんて父さん以外に見たことないもんね」

ジークにも恭也にも聞こえないような大きさでぼそりと呟いた。

三十一話 三度目の正直 いざ翠屋へ 前編（後書き）

ヴェ「まず初めに一言、更新が遅れてすいませんでした！！ テスト期間だったのとスパロボⅠやってたので更新できませんでした」

ジ「今回は特に何もしていないのにいつもより字数が長いというおかしい現象が起きているな」

ヴェ「なんでだろう、さつさと書き終えて、試合を書くつもりだったのに…… 清浦刹那様、ライ様、デステイニープラン様、うりあ様、若輩侍様、感想ありがとうございます。デステイニープラン様よりラインバレル、ヴァーダント、ハインド・カインド、デイスリーブ、ペインキラーを、うりあ様よりハロとトリイを頂きました」

「ハロ、ハロ」

ジ「ハロのおかげで今後は我が家も明るくなるな」

ヴェ「くそ広い豪邸に一人暮らしたもんな、お前」

ソ「私もいますよ」

ヴェ「ラインバレル勢……あとタリスマンがいればファイナルフェイズがそろったのに……」

ジ「お前、スパロボⅠのファイナルフェイズで鳥肌だったもんな」

ヴェ「あれはやばいでしょ。すごいよかった。スパロボⅠで一番の名場面だと思う。ここのBGMの使い方は神だ！！ しかもファイ

ナルフェイズはタリスマンを仲間にしたらいデオンスードと同じ9999の威力を誇るといふ素晴らしい技なのさ」

ジ「お前、ダンクーガノヴァの技を最高って言ってたよな」

ヴェ「まさかあれを上回るほどの長さとは思わなかった。アニメではどうなんだろうかと気になって見て見たらスパロボLの再現度の凄さを痛感した」

ジ「それにくらべてEVAは……」

ヴェ「参戦（笑）でした。では」

三十二話 三度目の正直 いざ翠屋へ 後編

今、俺と恭也は距離をとって向かい合っている。そして俺は一本、恭也は二本の剣を構えている。

……何故に二本？ 剣道って確か一本しか駄目じゃなかったっけ？

あれどう見ても普通の長さの木刀だよな。

……本当になんでもありなんだな。

ならこちらも本当の自己流で行かせて貰うか

「コホン、では今から恭ちゃんとジীগさんの……これって試合になるのかな……まあいいや、試合を始めます。コホン……スタート！」

美由希の合図と共に試合？ が始まった。

その瞬間、俺の右手に持った剣と恭也の忒本の剣が何度かの剣戟の後、ぶつかり合う。

力は拮抗しているのでつばぜり合いになるが……

「先手必勝！ 牙狼撃！！」

俺は左手からアッパーカットを繰り出す。

恭也は危うく後ろにジャンプし、牙狼撃は空を貫く。

「速いな……この一撃で決めるつもりだったんだがな」

俺は少し距離をとって立っている恭也に話しかける

「ジীগさん！ これは剣術ですよ！いいんだ、美由希」……分かった」

だが、返事は恭也ではなく、美由希から帰ってきてその文句を恭也が途中で止めた。

「どうやら、俺の技に不満があるようだ。」

「いや、確かに剣術勝負でアップパーカッツは……駄目なのか？
いまいち、分からん。二刀流の時点で駄目な気がするが」

美由希の文句を恭也が止める。

「どうやらお前の剣は我流らしいな」

「ああ、誰にも習わずに編み出した技だ」

編み出したのは俺じゃないがな。

まあ、我流の剣士の技だから嘘は言っていないぞ

「そうか。俺は永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術の師範代だ」

「な、長いな……って師範代なのか？ その年で？」

「ああ」

「凄いな……俺と大して変わらない年で師範代とは……」

御神流だか、なんだか知らないが師範代になってるとはな

まあ、不意打ちの牙狼撃を避けれる技量から納得できるが

弱いなら自分の力が凶れないからさっさと終わらせようと思った
が……

「凄いな、それは。……と感心してる場合じゃないな。行くぞ、

恭也！」

俺は恭也に向かって走り出す。

「貫く！ 瞬迅剣！！」

距離が縮まりあと少しで剣が届くというところで滑るよう加速し恭也に向かって鋭い突きを繰り出した。

「ハアッ！」

その突きは恭也のクロスした忒本の剣の接合部にて止められてしまった

そのまま、再び拮抗する

「やるな、恭也！ まさかこの突きを受け止めるとは、ってウオツ！？」

と喋ってたら恭也に押し戻された。

「お前こそ、ここまでの突きが出来るとはな……だが、勝つのは俺だ」

そう言った瞬間、恭也は俺の目の前で剣を振るっていた

「！？ ぐ、なんてスピードだよ……」

俺は危うく、それを剣で受け止めるが恭也は二刀流だ。

もう一本の剣が俺を襲う！

俺は一瞬の判断で片手で恭也の剣を受け止めながらしゃがむ。

剣は俺の頭の頭上で空を切る。

「今だ！ 飛葉翻歩！！」

恭也が剣を振るったその刹那、俺は滑るように恭也の後ろに回る……これは出し惜しみしていたらこちらが負けるな。

一般人？ 相手にこの技は気が引けるが……こいつなら問題ないだろう

「危なかつたぜ……だが、これでお終いにしようぜ！」

俺はそういつた瞬間、恭也に一太刀を浴びせた。それは剣でガードされたが……

「閃け、鮮烈なる刃！ 無辺の闇を鋭く切り裂き！」

そのまま恭也の後ろにいや、四方八方に一瞬現れては消え、一瞬現れては消えていると錯覚するようなスピードでそれを繰り返しさらに切り刻む！

「クツ！？」

「仇名す者を微塵に砕く！ 決まったあ！！ 漸毅、狼影陣！！」

その言葉と共に俺は恭也の喉元に木刀を突きつけていた。

「見事だ……俺の負けだ」

恭也は観念したようでのその一言と共に俺は突きつけていた剣を下ろす

ちなみに俺が喉元に剣を突きつけるまで全ての斬撃は紙一重で防がれていた。

あの技をほぼ防ぎきるとは……人間業じゃないな。

その技を出す俺？ 既に人間じゃないから

「え？ どうなってるの！？ ジーグさんが消えてからその後が、全く分からないんだけど」

「さっきの状況を見れば分かるだろ……俺の負けだ」

未だ、事実を把握出来てない美由希に恭也が教える。

「嘘！？ 恭ちゃんが負けたの！？ ……信じられない」

「そんなことより俺はお前が一瞬で俺の目の前に移動したことが信じられないんだが」

美由希が驚愕しているのを無視して俺は恭也に尋ねる

あんなの無理だろ。チートならともかく普通の人間があんな速度だすなんてありえんだろ

「あれは御神流の歩行術、^ハ神速^ダだ。簡単に言うると自分の身体能力のリミッターを外して高速で移動出来るようになるんだ」

あのスピードはそれでか……御神流、恐るべし

「俺も聞きたいんだが戦闘中によくあんなに喋れるな。技名を言

ってるんだろっが……そのうち舌を噛むぞ」

言わないと発動出来ないんだよ……
でも絶対に舌をかむことはないがな。

「それも含めて俺の剣術ってことで納得してくれ」

「……そうか。なら何も言わないでいよう」

「悪いな」

いや、親子そろっていい人たちだな。

「え？ ってことは恭ちゃん神速使って負けたの!？」

「「え？ まだそこかよ!？」」

美由希は未だに事態をほとんど把握してないみたいだ……

一応、美由希も剣道しているんじゃないか？

あれか、趣味程度のアマチュアってやつか。ならしかたないか

「お前も御神の剣士だろ……見えなくなったら神速くらい使って
見る」

え？ 美由希も御神なんたら剣士なのか!？

しかも神速、使えるってことはかなりの強さだよな……
人は見かけによらないな……

「うん、そうだね。あ、もう翠屋の開店時間になるよ」

「本当か!？」

「うん」

俺は美由希に確認を取った。

「どうやら事実らしいな……とうとう、ついにあ、あの翠屋へ……
行けるのか!!!」

「よし、今、行こう、すぐ行こう!!」

「あはは、ずいぶん楽しみにしてたんだね」

「ああ! 翠屋のケーキは美味だと評判だからな」

俺は美由希に答える

「たまに翠屋のシュークリームは美味だという噂話が聞こえるし、
そうでなくても原作ですごく美味しそうだからな。」

「家のお母さんはパティシエだからね、あ、恭ちゃんも行く?」

「いや、俺はいい。二人で楽しんで来い」

「分かった。留守番よろしくね」

そう言い残し俺と美由希は剣道場を後にした。

そして剣道場に一人残った恭也は

「まさか御神の剣が一对一で負けるとは……俺もまだまだ鍛錬が
必要だな」

そう呟いていた。

く翠屋く

「遂に、とうとう、ようやく……この時が来たく!!!」

俺は翠屋の前でそう叫んだ。周りに人がいないから叫んだんだぞ。流石に大勢の人ごみの中で叫ぶ勇氣はない

「じゃあ、中に入ろうか」

「ああ！」

ということで俺は無事、翠屋に行き、ケーキやシュークリームを頼み、その後一悶着あったが、無事に家に帰れた。

く家く

「ハ口、ハ口、ジーク、おかえり！ ジークおかえり！」

「ああ、ただいま、ハ口」

俺が帰宅すると某ガンダムで出てくる赤ハ口が待ち構えていた。
いや、ただいまといえる人……じゃないが、言える何かがあるっ
ていいものだな。

「ハ口、ハ口、連絡あつたよ、連絡あつたよ」

「……なんて言ってた？」

ハ口の言葉を俺は級に真面目になって聞き返す。

「ハ口、ハ口、当初の目標が限界、当初の目標が限界」

やっぱりか。まあいいか、上等、上等。

「分かった。次に連絡してきたらもういいと伝え」その必要はな
いんだな、これが「……アクセルか」

俺の言葉を遮るようにソルから特徴のある言葉使いの男 アク
セル・アルマーの声が響く。

「悪いな、ジーク。やはり、プレシアの罪は懲役10年くらいま
でにしか軽く出来なかった」

「いや、むしろ懲役10年に出来たことが凄いと思っぞ。どうや
ったんだ？」

「お前からの管理局の汚点情報を上に流したのさ」

あの情報はやはり役に立ったか、良かった良かった。

「あとお前にとっては悪いニュースだ。アースラがあと一週間でそちらにつくぜ」

……今、何と言った？ いや、気のせいだ、今は気のせいだ、きつと気のせいだ

「すまん、聞こえなかった。……もう一度、言ってくれるか？」

俺は現実逃避しつつ、万が一の聞き間違いを祈りつつ、聞きなおす

「現実逃避もいとこだぜ、それ。アースラがあと一週間で地球に来るんだ」

「嘘だ！！」「いや、本当なんだな、これが」その情報どこで仕入れた！？

「管理局に潜入してる時に、少し小耳に挟んでね。何でも、フェイトの罪はお前が言う原作よりも軽くらしいぜ。プレシアが罪をかぶったのと情報のおかげでな。だからだろう」

そうか……フェイトやプレシアの罪が軽くなったのは嬉しいが、その代わりにアースラが……

「これがハイリスクハイリターンですね」

「少し意味が違うだろ、ソル」

はあゝ まあしかたがないか……諦めよう。

「こんなことって……まあいい。いや本当はよくないが……アクセル、すまなかったな。管理局に潜入してもらって」

「いや、俺は潜入任務は慣れている、気にしないでくれ。それにお前の情報操作のおかげで特に障害もなく入れたからな。お前こそ俺がずっと召喚されてたから強敵と戦うときなんか、困っただろ」

「あときは他の世界から援軍がやってきたから」

「そうか……まあ何事もなくてよかったぜ。じゃあな」

その言葉の後、アクセルからの通信が途切れた。

三十二話 三度目の正直 いざ翠屋へ 後編（後書き）

ジ「この展開、無茶苦茶じゃね？」

ヴェ「いや、そうじゃなかったらあの時、三機体用の合体技してるし」

ジ「そういうことじゃなくてだな」

ヴェ「まあ、そこはご愛嬌。ライ様、清浦刹那様、うりあ様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。うりあ様よりkosmosを、デステイニープラン様より斬機刀、ガーベラストレート、シシオウブレード、参式斬艦刀、タリスマン、マスタツシユマンを頂きました」

ジ「マスタツシユマンってソウルゲインだよな」

ヴェ「でもこれはありえないほど強くしているチートゲインらしい。能力的にはこれ一騎あればカツ・コバヤシ以下のパイロットレベルでもこれ一騎でたとえhardでも余裕で全てクリアできる」

ジ「どんなチートだよ……」

ヴェ「ちなみに今回、家にいたのは以前、うりあ様から頂いたハロです。色は勝手にジークが赤く塗りました」

ジ「通常の三倍の性能に改造したからな。そういえばシャア専用ザクって本当の性能はザクの3倍ではなく1.3倍なんだ」

ヴェ「でもシャアのパイロット技術をあわせるとそれくらいは絶対いくから問題なし。そしてライ様、コラボありがとうございませした」

ジ「あっさり負けたけどな」

ヴェ「いや、妥当だと思うが……でもお前のチート能力は精神コマンドだけじゃないんだよな」

ジ「あゝ 一応、あるな。使ったことは……あるか」

ヴェ「さて、そろそろいいかげんA'sに投入しようと思う」

ジ「来てしまったか……」

ヴェ「でもその前にまた設定集を投稿するかな」

ジ「また精神コマンドだろ……」

ジ「それ以外にもいちおう書く予定です。では」

能力説明第三弾

ヴェ「ということで設定集パート3です」

ジ「いきなりだな。というか以前言った精神コマンドも全然使ってないだろ」

ヴェ「それはA'sでほとんど使っただ。そしていつも出だし考えるのに時間が掛かるからもういいやって妥協した」

ジ「おい」

ヴェ「さてとではまずは精神コマンド説明です」

<加速>・・・自分のスピードが二倍になる。<迅速>は移動スピード、<加速>は戦闘中の動作全てが二倍になります。

<自爆>・・・自分の纏っているバリアジャケットを爆発させ味方相手問わずダメージを与える。

防御不能。体力の多い機体、ようするにスーパーロボットの方が威力が高い。

大きさも関係しでかいほうが威力が高い。

ちなみに自爆した後、ジグは怪我一つしていない

<不屈>・・・例え、どんな攻撃だろうと一度だけ相手の攻撃をかすり傷一つのダメージで済みます。

バリアや盾などの防御技能がある場合それすら無効。

もちろん相手の攻撃付属効果もつかない。

たとえ真つ二つに割れようと消滅させられる攻撃だろうと関係ない

< 勇気 > . . . < 熱血 >、 < 加速 >、 < 直撃 >、 < 不屈 >、 < 必中 > が一度に掛かる。

< 信頼 > . . . 味方の体力を 30% 回復する。バリアジャケット込みで

ヴェ「こんなもので」

ジ「で他にも何かあるって言ってたよな」

ヴェ「ああ、ジーグの強化パーツ付け放題の能力のことです」

ジ「やっぱりそれが。この世界では運動性がスピードになり、照準値が命中率になるんだ」

ヴェ「これで分かる人もいらつしやると思いますが、ジーグはサイコフレームをつけまくれますのでいくらでもスピードを速く出来ますが……」

ジ「が……何だ？」

ヴェ「今のジーグのパイロット技術がしょぼすぎて音速ぐらいまでしか速くできません。あ、ちなみにこれはガンダム基準ですので元がガンダムより速い機体はガンダムが音速になるくらいは上昇します。照準値も装甲値も同じである程度で止まります」

ジ「俺の今のパイロット技術ってどれくらいなんだ？」

ヴェ「カツ・コバヤシ以下」

ジ「な、なんだと……」

ヴェ「でも安心しろ。機体があまりにもチートだから、カツ・コバヤシのネモやカミーユのZガンダムがいくら来ても物の数ではない」

ジ「カツ・コバヤシ以下、カツ・コバヤシ以下、カツコバヤシ以下……」

ヴェ「あ、落ち込んだ」

ソ「しかたがないので続きは私が、マスターの最終手段<自爆>ですが、機体によっては大きさの割りに威力が高い機体がいくつかあります。特にイデオンで自爆したら世界が滅びます」

ヴェ「サルファのイデオンend的な感じ。ただイデオンは破壊されただけで銀河壊します。まあイデオンが破壊されるのは、ほぼありえないです。なぜならジークは長期戦に強いです。底力L9や見切り、ガード、seedなどあります。特にイデオンのイデバリアは体力が限界に近いほど強くなりますからあと少しで破壊されるなんてところになると惑星を軽く破壊できるような技じゃないとダメージ与えられなくなります。といってもジークが全ての能力を発動しているときに限りますが」

ソ「ちなみに内緒話ですが、作者がイデオンがそう簡単に破壊されるような性能だったら怖くて出せないというのがこのチート能力の背景にあります。実際にサルファでもあまり前には出してませんでした。後、フリーダムなどの核をエネルギーにしている機体も通

常より威力が高いです。以上、能力紹介でした。では「待て、まだ終わってないぞ」マスター、立ち直り早いですね」

ジ「まだ結構、気にしてるがな……最後に一つ、ライ様からソルの擬人化プログラムもらったのでA's
では擬人化させようと思う」

ヴェ「面白そうなんで」

ソ「私ですか？」

ジ「お前が擬人化か……というか、お前って男？ それとも女？」

ソ「機械にはそんな概念ないですから」

ジ「人格コピーは男だから男か？」

ヴェ「そうとは限らない。作中では明記してないがあの人格コピーにはミラの人格も入ってるから。入ってなかったらいきなりナイフを刺すようなことを平気でするような奴になるぞ」

ジ「あれは心臓に悪い」

ソ「……否定できませんね」

ヴェ「まあそれもA'sに入ってからというところで。では」

能力説明第三弾（後書き）

ヴェ「まあ、こんな感じで。あ、ちなみにこれは予約投稿なので1月14日0時に書いてますのでそれ以降に感想を頂いた人の感想は次回に書かせていただきます。ご了承ください。ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様、若輩侍様、感想ありがとうございます。ライ様、清浦刹那様、デステイニープラン様よりハロ（Gジエネの機体）、サイコハロ、ゴッドハロ、ライブ専用ザクウォーリア、ハロウィン（頭がジヤック・オー・ランタンの顔）を頂きました」

ジ「丸い悪魔か……Gジエネは知らないがハロは知っている。でもハロウィンってwww」

ヴェ「N2爆雷装備しなおかつ、ラミエル並みの加粒子砲を備えているそうだ……」

ジ「大量虐殺兵器になりかねんな」

ヴェ「これでさらにお前の家への侵入は困難になったな」

ジ「……EVAのATフィールドでも侵入が難しくなった」

ヴェ「さて次回からとうとうA's編です。では」

俺は現在、図書館に姿を以前と同じ、ジューダス？に変え、向かっている。

理由は……まあ言わなくても誰でも分かるだろう。
わざわざ、姿まで変えてるんだから。

「何で、図書館に行くんですか？」

と思つてた矢先にソルの言葉だ……

「……冗談で言ってるのか、それともジョークで言ってるのかどつちだ？」

「どつちも同じ意味ですよ、それって。ちなみにどちらでもありません、真剣に分かりません」

……さっきの言葉訂正、ソル以外分かるだろう。何で分からないんだ、こいつは？

「俺が姿を変えていくところなど一つしかないだろ」

「遊園地ですか？」

「そうそう、子供に姿を変えて子供料金で遊び放題……って何言わせるんだよ!？」

「長いノリ突っ込みでしたね」

「誰がさせたんだよ、誰が!！」

まずい、乗せられてるな……たく、こいつは。

「はやてに会いに行くんだ! それ以外にあるか」

「ああ、そういうことですか」

ソルが納得したように喋る。

……ああ、じゃないだろ。はあく……つてあれ?

既に図書館が前にあるぞ!? 何時の間に……

「喋ってる間に、図書館の前に着きましたね」

「……そうだな」

俺達が図書館に入ると、以前、来たときは違い人が思ったよりも多く混んでいた。

既に夕焼け空が広がる時間帯なのもあるんだろうな、前は朝だったからな

辺りを見回すと、車椅子に乗ったはやてとそれを押している女の人を発見した。

俺ははやてに近づき

「よう、はやて。調子はどうだ?」

「あ、ジューダス君やないか」

と何気ない、挨拶をしていると

「あら？ はやてちゃん、その子はお友達ですか？」

金髪で優しそうな顔つきの若い女の人のはやてに話しかける。
確か、ヴォルケンリッターのシヤマルだったよな。

「私のお友達のジューダス君や。前にここで助けてもらってん

た」
「そうなんですか。はやてちゃんをどうもありがとうございま

れ、前も言ったよな……」

「いや、お礼を言われるような大したことはしてませんよ……こ
れ、前も言ったよな……」

「……まあ、いいか……であなたははやての……」

そこで俺は口ごもってしまふ。

……これは母親と言つべきか、お姉さんと言つべきかどっちなん
だろつか……お姉さんでいいか。

「お姉さんですか？」

「いえいえ、違います
私ははやてちゃんの親戚のシヤマルで
す」

何か、凄く機嫌よさそうな返事が返ってきた。
やはりお姉さんでよかったか。

「へえ、そうなんですか。よろしく願います」

俺は一礼する。

「いえいえ、こちらこそ」

シヤマルもやはり悪い人ではなさそうだ。

しかし、ヴォルケンリッターとどうやって協力にこぎつけるか……自分の行動が本意だろうがなんだろうが主のためなら騎士の誇りすら捨てる。

それがヴォルケンリッターだ……いや、待てよ。別に全面的に協力じゃなくてもいいか。

一番手っ取り早い方法で行きたいしな。少し警戒心を持たれるが仕方ない。

だが、どうやってはやての家に入るかが問題だな……

「そや！ いいこと思いついたで。前に助けてもろたお礼したいからジューダス君、今日、私の家にご飯食べに来てくれへん？」

……渡りに船とはこのことか。グウレイト！！

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおう」

「よっしゃ、じゃあ決まりや！！ 腕によりをかけて美味しい料理作るわ」

はやてが凄くやる気マンマンみたいだ。

「私もお手伝いしますね」

「シャマルはちょっと今日は遠慮しておくわ。私が招待したんやから私が作らないと」

「え、そんな」

はやてが断つてシャマルは落ち込んだ。

別に手伝ってもいい気がするがな……はやては優しいんだな。

ちなみに俺がその会話のやりとりをはやてがシャマルに迷惑をか
けたくないと思っただけで少し悲惨なことになるのだが、それ
はまた別の話である。

〜八神家〜

俺達は一つの家の前で止まる。ここが八神家らしい

「じゃあ、遠慮なく入ってな。ただいま〜！」

はやてがドアをシャマルが空けている間に俺に話し、ドアを開け
てもらい玄関に入った

「では、お邪魔します」

俺もそれに続いて入ると

「はやて！ おかえり！」

赤毛で三つ編みの少女が元気よくはやてを出迎えた。
年ははやてくらいか…… とうかヴェルケンリッターの一人、
ヴィータだったな。

「ん？ そいつは誰だ？」

ヴィータが俺の方を向き、いぶかしげに聞いてきた。

「この子はジューダス君、お客さんや」

「ふん。ところではやて、今日のご飯は何だ？」

はやての言葉で俺が誰かが大体分かったのかはやてに今日の献立
について質問した。

いや、違うな。あれは俺のことが分かったんじゃないけどどうでも
いいんだろう。

「今日はお客さんも来てるから色々作るんや。もちろんヴィータ
の好きなもんもあるよ」

「ホントか！？ やった！！」

つてな感じで午後7時過ぎになり、

桃色の髪をした凜とした雰囲気を漂わせたポニーテールの女性が
帰宅してきた。

あれがシグナムか……そこに寝ている狼 ザフィーラの4人……
いや、3人と一匹か？

まあそれでヴォルケンリッター全員集合か。

はやてたちとご飯を食べている間中、俺はそんなことを考えていた。

でその後、雑談をし他愛のない話をしていると既に夜11時になっ
っていた。

「それでな、ってもうこんな時間やん!? ごめんな、ジュー
ダス君。私、話に夢中になってもうこんな時間なんて考えてなかつ
た……」

「いや、別に問題はない。それよりはやての方こそそろそろ眠そ
うだが?」

話が終わったことで気が抜けたのか、はやては目がショボショボ
していた。

いや、もちろん原因は俺がとあることをしたからなんだがな

「あれ? ほんまや……」

ドサツ

座っていたソファに倒れる。……計画通り。

「あらあら、はやてちゃん、お友達と話しすぎて疲れて寝ちゃつ
たみたいね。ジューダス君もそろそろ帰らないとまずいわね。私
が送っていきますね」

「その必要はない。闇の騎士、ヴォルケンリッターよ」

「「「「!?!?」「」「」

俺の発した言葉の「ヴォルケンリッター」っていう単語に全員が反応する

「……貴様、その言葉をどこで知った」

シグナムが静かに、だが、力強い言葉遣いで俺に問いただす。

「さあな」

「そんなの聞く必要はねえ！！ あたし達と闇の書のことを知ってる奴を帰すわけにはいかねえ！！」

ヴィータが自分のデバイス グラーフアイゼンを発動し手に取り、俺を叩きつぶそうとする。

「悪いがそれは予想済みだ。オーバースキル、重力！！」

「！？ く、なんだよこれ。体がうごかねえ！？」

「クツ！？ この体を縛るような力はいったい！？」

ヴィータとシグナムがそれぞれ叫ぶ。

俺は今、オーバースキル「重力」をヴォルケンリッターの上に発生させ動きを束縛している。

セットアップすらしていないこの状態ではこの重力の中で動くのはおそらく不可能だろう

仮に動けたとしてもそのスピードは恐るるに足らない速さだ。

「これは俺の能力……とは言わないか」

一時的にオーバースキルが使えるようになる薬を飲んだだけだからな。

この薬に感謝だな。おかげでセットアップしなくてもヴォルケンリッターを抑えられるんだからな

「なんでこんなことをするんですか、ジューダス君!? あなたははやてちゃんのお友達でしょ」

「俺の目的か? ……それは」

俺はシャマルの問いに答えるように口を開こうとした

三十三話 A' S編始動 闇の騎士（後書き）

ヴェ「ということでしょうかA' S編です。なかなか長い道のりだったな」

ジ「他の作者様の小説と比べてもかなり遅いと思うぞ」

ヴェ「まあ、書くの遅いですから……あと皆様に一つお願いしたいことがあります」

ジ「頼むようなことあったっけ？」

ヴェ「実ははやての一人称は関西弁なのに「うち」ではなく「私」なんです……関西弁で書いていると知らず知らずのうちに一人称が「うち」になってしまっていて……でもはやての一人称は全て「私」です。もし「うち」になっていたら私と思って呼んでください。お願いします」

ジ「お前が治せば問題ないんじゃないか？」

ヴェ「違和感がないからまったく気がつかないんだよ……清浦刹那様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。デステイニープラン様からアンリミテッドイマジンガンダム、ヴィシャッセイバーガンダムを頂きました」

ジ「両方ともデステイニープラン様の書いていらっしやる小説の主人公の乗っているチート機体です」

ヴェ「なんかガンダムのいいところをくっつけた感じかな」

ジ「お前、感想が来たことに驚いてたもんな」

ヴェ「いや、まさか能力説明で感想を頂けるとは思ってたんだけど……本当にありがとうございます」

ジ「ちなみに今回俺がオーバースキルを使えるのはデスティニープラン様から頂いた全てのオーバースキルが使えるようになう薬を使用させてもらってます」

ヴェ「実は今回の話を書くところで自分の文才のなさを改めて痛感したんだ……」

ジ「いつも感じてるだろうが、なのに今更、何で改めて感じるんだ？」

ヴェ「いや、なのはの2次小説って基本的に主人公ハーレムが多いからジীগもハーレムにしようかと思っただが……これがなかなかすごく難しい」

ジ「当たり前だ。他の作者様ができることでもお前には無理だ」

ヴェ「挑戦は続けますがハーレムは全く期待しないでください。おそらく無理です」

ジ「駄目作者が」

ヴェ「精進します……では」

三十四話 協力体制？

「俺の目的か？ ……それは」

俺はシャマルの問いに答えるように口を開こうとした

……今からやろうとすることは人として最悪なことなんだろうな、きつと。

だが、これ以外にいい方法は思いつかなかった。ならばこうするしかない

「闇の書の破壊とその主の抹消だ」

「な！？ それは、はやてを……はやてを殺すってことじゃねえか！？ ふざけんな！！ そんなこととしてみる、あたしがお前をぶちのめしてやる！！」

俺の言葉に最初に反応したヴィータが俺へ声を荒げ叫ぶ。

「ふざけたことじゃない。これまでに闇の書によって犠牲になった者がどれだけいると思うんだ？ そしてこれからも犠牲は増え続けるだろう。後の憂いは断っておくべきだ……これ以上の被害が出る前にな。それにお前が俺をぶちのめすのは不可能だ。主が死ねば闇の所は新たな主の下へ転移する、もちろんそれにお前も強制的についていくことになるんだからな」

「クッ！？」

「理解したか？ ソル、セットアップ」

俺はヴィータを尻目に剣士のバリアジャケットを展開する。
そして腰についた鞘から剣を引き抜きはやての喉元にあてる。

「や、やめて!?! はやてちゃんには手を出さないで!?!」

シヤマルが悲鳴を上げて懇願する

「このような状況でやめてと言われて止めるやつを俺は見たこと
がない」

俺の返答にシヤマルの顔が青ざめる。

いや、俺もこういう状況だったらおそらく言っただろうが……

冷静に考えれば、普通はやめないって思うよな……頭では分かっ
ていても言ってしまうんだろうな。

……さっさと終わらせるか。

俺は剣を振り上げ

ブン!

はやての首を両断した。

ヴォルケンリッターたちは皆、啞然としていた。いや、現実？を認めたくなかったのだろう

「は、はやて……はやてー！！」

最初に我に返ったヴィータが悲痛な叫び声を上げる。

ヴェルケンリッターは全員、顔が絶望の色に染まった……のか？
ザフィーラがいまいち分からない

だが、もう十分だな。俺の計画通りだ

パチン！！

俺が指を鳴らすと共にヴォルケンリッターにのしかかっていた重
力が解け、はやての周囲の空間が歪み、変わっていく。

そして歪むのが収まった後、普通に寝ているはやての姿がそこ
はあった。

もちろん首は繋がっている。

「……！？」

「IT'S A NIGHTMARE……今まではただの悪夢。
現実じゃなかったのさ。安心しろ、俺ははやてを殺す気や闇の書の
破壊など、いやどうしようという気すら毛頭ない」

俺がリアルにそう簡単に人を殺せるわけないからな。

「ふ、ふざけんな！！ 何が毛頭ないだ！！ そんなの信じられ

るわけがないだろ!!!」

ヴィータが俺の言葉に怒っている。まあ当然か。いきなり悪夢でしたとか言ってもそりゃ怒るか

「何かする気ならすでにしている」

「よくもそんなことを」ヴィータ、少し落ち着け「ザフィーラ！
？ でもこいつは!？」

「確かにこの少年の言うとおりだ。……その気なら主はやての命は既に亡き者にされているだろう」

シグナムによって諭されたヴィータは不満みたいだが

「……チツ」

軽く舌打ちし静かになる。

「でも、闇の書のことでももはやてちゃんのことでもないなら……
…ジューダス君、あなたの目的は何なの？」

「俺の目的……それは友人として、はやてを闇の書の呪縛から救う事だ。今回の行動はお前達にそれを伝え協力するためだ」

「何が協力だ!? ふざけんな!! 協力するって言うならなん
で最初から言わねえんだ!!」

「……俺だってそうしたかったさ。だが、今のお前達、特にお前
が俺の言うことに素直に従うと思うか？ 自分の性格を考えろよ。」

有無を言わず、俺を倒そうとするだろ」

原作でもなのは達の話を全く聞いてなかったからな。だからこうするしかなかったんだよ……

「グッ……」

どうやら凶星の様だ。だが、やはり俺のことを許す気はないみたいだな

まあ当然か。大事な人を目の前で疑似的なものとはいえ殺されたに等しいんだからな

「お前達が俺のことを信用できないのも分かる。だから俺ははやてを救いたいという証拠を今から見せる。ソル、バリアジャケットを変更しろ」

「了解しました」

俺は光りに包まれ、魔導師のバリアジャケットに包まれる

「何をする気だ？」

シグナムが俺に聞いてくる。

「はやての呪いを解く」

「！？ そんなことが可能なのか！？」

「黙って見ている、シグナム。……全ての呪縛は……以下省略、リカバー！」

はやての体が暖かな光に包まれる。

「まさか……闇の書を完成させなくても主はやては救われるのか……」

「いや、残念だがそれは無理だ」

俺はシグナムの希望を壊す言葉を口にす

「呪いを解いてもまたすぐに呪いが発動し再び囚われる。根本的に解決するにはやはり闇の書を完成させる以外に方法はない」

「……そうか」

シグナムは俺の返答を聞き俯く。闇の書の呪い……本当に厄介だ、完成させる以外には救う方法はないとは……

だが、逆に完成すれば助ける方法はあるということだ。

「安心しろ。完成させればはやては助かる。俺も手伝おう」

「お前の助けなんていらね「分かった。頼む」……何でだよ、シグナム……こいつのことを信用するのか!？」

ヴィータは俺を仲間にしようとするシグナムに感情を爆発させる

「今は少しでも早く闇の書を完成させなければならぬ。人手は大いに越したことはない……ヴィータ、お前とて主はやてを助けたいんだろ?」

「……少しでもおかしなそぶりをみせたらぶちのめす」

どつやら、一応は納得してくれたみたいだ。

こうして紆余曲折あったが何とか俺はヴォルケンリッターと協力
することになった

三十四話 協力体制？（後書き）

ヴェ「……やってしまった。すみません」

ジ「誤るなら書くなよ」

ヴェ「真剣にこれ以外でヴォルケンリッターとお前を協力させる方法が思いつかなかった……」

ジ「……そうか」

ヴェ「デステイニープラン様、ライ様、清浦刹那様、若輩侍様、感想ありがとうございます。デステイニープラン様からオーバーコート改、オーバーヒート薬を、清浦刹那様からマークザイン、マークゼクスを頂きました」

ジ「ファフナーか……」

ヴェ「アニメは見てないがあれはリアルロボだよな？」

ジ「どうした急に？」

ヴェ「いや、どう考えてもファフナーはサイズMのリアルロボなんだがサイズは45MだからLよりのMだし、後半でスーパーロボ的な技に同化によって変化するし、敵のフェストウムがスーパーロボット系みたいに人間じゃないからさ」

ジ「言われて見れば……どうなんだろうか」

ヴェ「分からない……ちなみにオーバーコート改は魔力が持つ限り何を受けても壊れない。オーバーヒート薬は魔力を一定時間無限にするため相性抜群だな」

ジ「俺の<鉄壁>と組み合わせればチートだな」

ヴェ「元からチートだろ……では」

三十五話 闇の書の蒐集

俺は現在、闇の書完成のため、とある世界にてリンカーコアを蒐集している。

八神家でヴォルケンリッターと一応の協力体制を作ってから一週間が過ぎた

魔導師を襲うわけにもいかずしかたなく他の世界の生物からリンカーコアを集めてるんだが……

その生物達はでかい、少ない、しぶといの三点セットなくせにリンカーコアはちっとも集まらないんだよ!?

「……なあ、ソル、ザフィーラ……ばれないように一人くらい魔導師、襲って見ないか?」

「……お前が魔導師からは蒐集するなど言ったのではなかったか?」

「それにどうがんばってもばれないようにするのは無理ですね」

「……冗談だよ……」

俺の妥協案? は、ザフィーラとソルの二人によって粉々に打ち碎かれる

え? なんでザフィーラがいるのかって?

ヴォルケンリッターの中では俺を一応は信用してくれている唯一の男だからだ。

……今は獣形態だけど

他の騎士は俺に対して一定の距離を保っている。

まだシャマルとシグナムはましただが、問題はヴィータだ

……あれから一言も喋ってない

「だが、確かに闇の書の蒐集が進まないのも事実か……」

「まだ20ページですからね」

そう、一週間かけてたつたのに20ページ……このままでは66ページ完成させるまで33週間……約8ヶ月もかかってしまう原作とは違い、呪いを一時的に解くことは可能なので時間的余裕はあるんだが……それでももってあと6ヶ月。

このままでは間に合わない。……もうぶっちゃけ異物とか出てきてくれたらなあ

カオス・レムレースよ！ なぜ、もう少し後にこなかった!？

あいつ一体でページ全部埋めれるのに……はあ

「……もういつそ俺のリンカーコアを蒐集するか？」

「いいですが闇の書にインディグナイト・ジャツジメントやワールド・デストロイヤーをを連発されますよ」

「……無理か」

流石にあんなのを連発されたら敵わん

「なら地道に集めるしかないですね」

「はあ」

ソルの言葉に俺はため息をつく。

「だが、話を聞いたがやはり信じられんな。闇の書は偽りの名で真実の名は夜天の書……しかも完成させても暴走して主はやてが救われないとは」

現在進行形で落ち込んでる俺にザフィーラが聞いてきた。

この言葉で分かると思うが、俺はザフィーラにだけは事実をありのままに伝えた。

闇の書のバグに完成したらどうなるかなどを、ザフィーラだけにザフィーラ以外には言っていないぞ……どうせ言っても信じてもらえないから

「信じられないだろうがそれが事実だ。信じる信じないはお前の勝手だが、お前が完成させた後、記憶がないのがその証明になっていると俺は思うがな」

「……………」

ザフィーラは答えない、いや答えられないようだ。

「さてとできれば後一体くらいは狩っておきたいな。少しでもページを埋めないとな」

と言いながらソルを見る。

ここでタイミングよく異物が現れればご都合主義なんだが……そう甘くはな

「異物があらわれました」

ご都合主義万歳！！

「どこにだ！」

「この世界です」

「よっしゃー!」

俺は超ご都合主義展開の歓喜の声を上げる

「異物出現はよくないことですから喜ばないでください」

ソルが俺を諭してくる

いやね、この状況で喜ばない方が難しいから異物なら最低でも2
0ページは固い!!

さあ、何が出てくるかな、できれば強い奴がいいな。それだけペ
ージも埋まるからな

「こちらに向かっています」

その言葉に俺は辺りを見回す。すると北の方向から点のような者
がこちらに近づいてくるのを視認した。

その点は近づいてきているようでどんどん大きくなっていきそのシ
ルエットが見えた

……あの特徴的なシルエット、どこかで見たことあるような……
さらに目を凝らすと

全身が白で三つ首、一対の翼で空を翔る龍 青眼の究極竜がそ
こにいた……

「じゃ、社長の嫁！？ いや、究極嫁だと!？」

「これまでの生物とは発している力が違う……強敵だな」

分かってますよ、ザファイラさん。一応、遊戯王原作中で最高攻撃力のモンスターですから

「ザファイラ……ここは俺に「私に任せてもらいましょうか」……は？ 何、言ってるんだ、ソル？」

俺は何の脈絡もなくいきなり突拍子もないこと言ってきたソルに間の抜けた言葉で返す

「いえいえ、せっかく擬人化できるようになったんですからその性能テストもかねて戦闘してみようかと、幸い、テストには申し分のない相手ですし」

「どうしても?」

「はい」

「……わかったよ」

「ありがとうございます」

俺に礼を述べ、俺の手首に付けていたソルが光り出し、その光は俺の横で人間の形を象った

その光が消えるとそこには男の子とも女の子ともとれない中性的な顔立ちをした赤色のショートカットの……誰かがいた

「お前、ソルだよな？」

「はい」

「……率直に聞くが……男か？ それとも女か？」

「いや、デバイスに性別なんてありませんって」

「……何か軽くごまかされた気分だ……でもどっちなんだろうか、気になる〜！」

「さてと、では行ってきました……とよく考えたら私がないとマスターはほとんど何もできませんね」

「確かにな。これじゃあ実戦では使えないな」

「改良の余地がありますね。まあそれは今後の課題として、では……バルゴラ・グローリー……！」

ソルの体が青の装甲で包まれ、V字状の翼とアンテナを持ち、この機体の象徴ともいえる古代生物を思わせる武器　ガナリー・カパーを持った姿　バルゴラ・グローリーとなる

「何でその機体何だ？」

「そうですね、一言で言い表すと呪いですかね」

「呪い？ それってどういう意」では、テストを開始します「おい！ 待てよ！」

俺の制止を無視しソルは青眼の究極竜のもとへ飛んでいった

「おい……大丈夫なのか？ お前が普通から逸脱した魔導師なことは知っているが……」

「……今回は俺にも分からん」

これで破壊でもされたら洒落にならないよな……

俺は臨戦態勢を取っているソルを遠目に見ながらそう思っていた。頼むから破壊されなくてくれよ……

ジグSIDEOUT

ソルSIDE

ふむ、近くで見るとやはり大きいですね

まあ大きさが全てではありませんが

しかしこの体格差ではどこを狙いますかねえ

私もマスターみたいにく直撃でも使えれば楽なんです、ない

ものを言っても仕方ありませんか

「さてそれでは栄光の星が究極の竜を倒させていただきますよ、ブイ・ストレイターレット」

その言葉と共に私はガナリー・カーバーから回転をかけた弾丸を打ち出した。

三十五話 闇の書の蒐集（後書き）

ヴェー「冬期講習や部活の合宿や大掃除で書く時間がとれなかった……
……やっとソルの擬人化が書けた……でも今年中に後二話投稿する予定だったのに……」

ジ「何とか時間をひねり出せよ……ソルが性別がどっちか分からないのはお前がはやてを声が変わった状態で始めてみたときに男の子か女の子が分からなかったことか思いついたんだよ……」

ヴェー「はやてのバリアジャケットはなのは達に比べてわかりづらい。あと青眼の究極竜も関係してますよ。この二つのキーワードで私はやてを何で三鷹が分かる人、あなたはすごいです」

ジ「しかもお前、まだソルの擬人化時の服装とか全く決めてないだろ」

ヴェー「いや〜 服装と無頓着なんで何がいいのか分からなくて、まあそれはさておき、清浦刹那様、デステイニープラン様、若輩侍様、花粉様、感想ありがとうございます。清浦刹那様からダンクーガを、デステイニープラン様からブリッツガンダム、ネブラブリッツガンダム、ガンダムアストレイゴールドフレーム天・ミナ、ガンダムアストレイミラージュフレーム・セカンドイシュー、ガンダムアストレイミラージュフレーム・サイドイシューを頂きました」

ジ「ダンクーガか……」

ヴェー「出そうとは思ってるんだけどマックスゴッドかファイナルかでかなり迷ってる」

ジ「どちらも出せばいいんじゃないか？」

ヴェ「いや、以前に聞いた出して欲しい機体もどんどん出していき
しそれに同じような機体だから出すとしたら一話で新旧同時に出す
つもり」

ジ「あつ、そう」

ヴェ「あと誰か、ソルの服装考えてもらえませんか」

ジ「お前、ソルの容姿とかろくに何も説明してないのにそれは無茶
だろ……」

ヴェ「やっぱり駄目か……まあそれはさておき、これが今年最後の
投稿になりますのでここで。コホン、あと一日ですが皆様、良いお
年を」

ジ・ソ「良いお年を」

三十六話 暴走（前書き）

ヴェ「遅れましたが新年、明けましておめでとつございます」

ジ「お正月スペシャルとかないんだな」

ソ「この駄文で何をするんですか？」

ジ「それもそうだな」

ヴェ「酷い！？ …… まあ何も思いつかなかったのも事実だからな
あ」

三十六話 暴走

私の打ち出した弾丸は青眼の究極竜（以降、究極竜）に直撃し、その体に傷を作る。

ただ、これではやはり倒れませんね。まあこちらもこれで墮ちるとは思ってませんが

などと考えていると、究極竜の三つ首の右の首が口から光線を放つて来ました。

私はそれを右に動いて回避します。

そしてそのまま、三つ首から光線を右に左にと回避しつつ近づき

「この機体で当たるわけにはいかないんですよ。今度はこちらからです、ヘルブ・ストライク」

ガナリー・カーバーを銃口を後ろにし肩に担ぎ、究極竜に向かって急降下し、その勢いのままにその腹に叩きつける。

「ギヤアアア!!!」

少し腹が凹みましたか。

「追撃します」

ガナリー・カーバーの銃口からからいびつな形をした鎌の形をしたビーム刃が展開される。

私は究極竜の腹をその鎌で十文字に斬り付ける。

そして少し後ろに下がり、銃口からビーム刃を消し、実体剣を展開させる。

「体格の大きい敵との戦いは一部分への集中攻撃ですよ。ナウテ
イラス・カーバー」

後ろからジェットを噴射させて加速し、その剣を再び腹に突き刺し、切り裂く。

究極竜にその斬撃によって、腹に深い傷を負わせる。

「キシヤアアア!？」

究極竜はそのかなりのダメージにより悲鳴を上げる。
その隙に私はジェットを吹かし、再び、距離をとり

「これでとどめです」

ガナリーカーバーの目と後ろのレンズがそれぞれ紅と黄緑に不気味に光り、上部分のパーツが開き、古代魚が口を開けた様に銃口が大きく開き、次の一撃のために桃色の光が溜められていき

「ザ・グロリーリスター、フルバースト!」

その言葉と共に銃口に球体上に溜められた光から超出力の極太ビームが発射される。

究極竜も三つの首が全て光線を発射し、それらが一つに束ねられ私のビームとぶつかりますが……

「残念ですが威力が違います」

大した拮抗もせずに私の光線が究極竜の光線をいともたやすく打ち勝ち、そのまま究極竜を飲み込んだ。

そして爆発し、私の放った光線の粒子がきれいに煌きながら落ちてきました。

これで終わりですね。そう考え、私がマスターの所へ戻ろうとした瞬間

上からの光線に飲み込まれ、装甲が破壊され、光線が止むと同時に擬人化時の姿で地面に倒れ伏した。

「……これは」

私が倒れながら何とか上を見ると、そこには先ほど倒した三つ首竜とは違う機械でできた竜。

あれは……

「青眼の光竜……ですか」

信じられない力ですね……先ほどの究極竜などとは比べるのさえ、愚かしいまでの力の差。

……究極龍の方が力自体は強いはずなんです

が、そう考えていると光龍が私のそばに下りてきて、口に光を溜め始めました。

「……万事休すですね……」

諦めて私が目を閉じようとした瞬間

「邪魔だ、幻竜拳……！」

その言葉と共に光龍が吹き飛びました。
そして光龍が飛ばされていなくなつたところを見ると

右手が血で染まりさらに地面にまで滴り落ちているのに顔色一つ
変えないで立っているマスターの姿でした。

「……大丈夫ですか？」

本来ならこちらが言う台詞ではないような気がしますが

「……行くぞ、ソル」

「無視ですか、まあいいですけどね。ありがとうございます」

私は擬人化を解き、通常のデバイス形態に戻り、地面に落ちる。
それをマスターは右手で拾い上げ、左の手首につける。その時、
私の体は血で赤く染まりました。

もちろん私を左の手首も血がつかまりました。どうしたんでしょうか
ねえ。

……右手が痛くないだけでもおかしいのにわざわざ、私に血がつ
くようにつけるとは

「何で、血がつかないようにつけないんですか？」

「血……？ なんの事だ」

「……右手から滴り落ちているでしょ」

「……？ まあいい、セットアップ」

私の言葉を無視ですか。まあいいですけどね

マスターは光に包まれ、光がどんどん巨大化していく。

光が20メートルの高さになり、はじける。

そこには全項20メートルで黒色をした直立腕組みの体制をとっている人型の巨大ロボ　ガンバスターがいました……って

「これは流石に強すぎると思いますよ？　この惑星が軽く崩壊しますよ」

「バスタートマホーク……！」

マスターは私の言葉を無視して、両肩からトマホークを取り出し、一本にくっつけ、両刃形態にし、後部のジェットを吹かし、光龍に一瞬で肉薄し、片方の翼の付け根を切り裂き、翼が落ちる。

「キシヤアアア!？」

光龍は片方の翼でまともに飛べていないですがそれでも逃げようとする。

「……………逃がさない」

それを許さない様にマスターはもう片方の翼もトマホークで切り裂き、光龍は飛行能力を失って、地面に叩き落ちる。

マスターはそのそばに下りて

「……バスタービーム」

額から光線を発射し、それに直撃した光龍は凍りつく。

流星は反則機体ですね……簡単に終わりましたね。

と思っていたらさらにマスターはジェットを吹かし、かなり高く上がりました。

と同時に足裏にキヤタピラのカッターが発生し、回転しだす。

この技はまさか……

「スーパーイナズマキ」それを発動したら本当に惑星ごと破壊しますよ!?!?!」

私が必死にその技を阻止しようとしては

「キック」

マスターは急降下し光龍目掛けて、急降下キック……そんな生易しい物じゃないですけどをやってしまいました。

このままでは惑星が崩壊しますね……しかたありません。

「緊急解除!?!」

私はマスターの装甲展開を解除するプログラムを発動し、なんとか光龍に当たるギリギリで装甲を解除し最悪の事態は免れましたが……これは問い詰めないといけませんね。

「マスター、なんで惑星ごと破壊しようとしたんですか? もう勝負はついていたでしょう?」

「……こいつがお前を破壊しようとしたからだ」

え？ 私を破壊しようとしたから？ ……何かマスターも暗いし、
問い詰めれるような雰囲気じゃないですね。しかたありませんか……

「今度からこついうことはないようにしてくださいね」

「善処する」

善処するって……何か不安ですが……まあいいでしょう。

「さっさとこの光龍をページに変えて戻りましょう」

「ああ、ザフィーラを呼んで来るとするか」

こつしてページが100ページ埋まり、戻りました。

〜家〜

「残りページは後、544ページですね」

「ああ」

「ところで昨日のマスターは何だったんですか？」

「さあな」

誤魔化しますか……本当のことを教えてくれればいいのに

「（言えない……ソルが破壊されそうになってから絶対に破壊させはしないと向かった後、意識が曖昧だったなんて言ったら心配かけそうだし、何より恥ずかしいから言わないで置こう）」

三十六話 暴走（後書き）

ヴェー「ガンバスターは設定がスパロボの中でもトップクラスでチートすぎる」

ジ「アストラナガンとかに比べたらそつちが強いんだろうか」

ソ「今回の戦闘は巨大怪獣対巨大ロボットです……ガンバスターは十分の一でもガンダム並の大きさですのでマスターの大きさは20メートル……大きいですね」

ヴェー「機体説明を少し

ガンバスター……二人乗りの全項200メートルの巨大ロボ。縮退炉というエンジンで動いている。亜光速（光速の80〜90パーセントの速度）で動ける。技は一番弱い技ですら、一発一発がブラックホールを発生させるバスターミサイル。しかも撃ちまくる。ただしスパロボでは半端なくらい設定が弱体化している。まあ弱体化させないとアクシズでも破壊できるからストーリーが成り立たなくなるからしかたないですが」

ジ「追加説明でガンバスターは本当は地上ではあまりその力を発揮できないんだが強化パーツで補っているんだ。ちなみに縮退炉は他にはグランゾンが付けています……それを二つつけるってすごい豪華だよな」

ソ「バスタービームはマイナス一億度の光線です……絶対零度を軽く下回ってますね」

ヴェ「まさしくチート機体にふさわしい機体だ。清浦刹那様、ライ様、デステイニープラン様、Laptop様、感想ありがとうございます。います。デステイニープラン様から
デिकासテス、グレイターキン、ドルーキン、ガルガウ、シルベル
ヴィントを頂きました……全部分らないorz」

ジ「……全てはお前の知識不足が原因だ」

ヴェ「まあそうだけど……次回はデステイニープラン様とのコラボ
です」

ソ「それにかこつけてさっさページを埋めようとするんですね」

ヴェ「yes！ さっさとストーリーを進めないと」

ジ「では」

三十七話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 前編(前書き)

今回は連ザ様ことデステイニープラン様とのコラボです
タイトルは深く気にしないでください

三十七話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 前編

ミラ SIDE

「何も無い真っ白な空間」

現在、私は椅子に座ってお茶を飲みながら一服しています

私はたまに神の代行者こと神は……いや、今はジーク・クライン
でしたねを見守っています

どうやらしっかりと役割を果たしてくれているみたいで安心して
います

……流石に惑星を破壊してたら少しお仕置が必要かなと思いま
したが……

今回はソル・ジガンがうまく機転を利かせて止めたようなので今
回は何もしないでおきましょう。

……もしかして私が何もしてないんじゃないかと思ってる人い
ます？

これでも常に、この世界に他の者が入ってこないか見守ってるん
ですよ

本当にまずいと思ったなら援軍呼んだこともありましたし

「と、また出たようですね……今回くらいなら別に大丈夫でしょ
う。何か、妙に大量に出てきましたが……質自体はそこまで高くな
いので……」
「……ってもう一人出現!？」

一度に二回もこの世界に来るのはあの男の能力では不可能はず……
……何で!?! どうして!?!

私がありえない事態に混乱していると

「それはたぶん俺のせいだ」

誰かから音声通信が……ってこの声は

「ゼウス様ですか。あなたのせいというのはどういう意味ですか？」

「俺の手違いでそちらに一人間違えて送ってしまった……」

「……そういつことですか。確かにあなた様なら普通に送れますよね……」

よ、よかった……本当によかった、もしあの男が何回も連続して異物を遅れるようなことになったら……考えるのも恐ろしいですね
私は胸をなでおろします

「そこでだ！！ その間違えて送ったのは関 俊政という名前なんだが君の世界の異物とやら倒すのを協力させてくれ」

……まあ確かに戦力が増えるのはありがたいですし、今回の敵は質はともかく量が多いので彼も始めての戦い方で苦戦するかもしれませんからね。でも

「よろしいんですか？ あなた様ならすぐに戻すことも可能なのでは？」

「うむ。こちらに非があるのでな」

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

さて、となると彼に連絡しておきますか。
前回はあの神の性格のせいで伝えられなかったですが今回はちゃんと伝えておきましょう

MISSED OUT

ZIGSIDE

とある世界の荒野

俺は現在、異物が出たとかでとある世界にいる。

ちなみに闇の書を持っている。……こっそり、はやての家から拝借してきたのは内緒だ

泥棒ではないぞ。ちゃんと返すからな……せつかく異物が現れて、ページが埋まるチャンスを逃すわけにはいかん

「今回は妙に異物が多いですよ。しかも二箇所で見えています、挟撃されないように気をつけて下さい。ただし面倒くさいとかで前回みたいに惑星を破壊しようとするのは止めてくださいね」

……お前が出なければあんなことにはならないさ。だが、そんな

こと恥ずかしくて言えないので

「大丈夫だ。前は少し舞い上がったただけだ」

「舞い上がったどころか。凄く不機嫌というか怒りを感じましたが……まあ触れないでおきましょう」

……もしかしてばれてる！？ いや、それはないな。うん
俺がそう考えていると

『どうも、ミラです』

ミラが通信してきた……珍しいな、いつもなら俺に全部、任せてるのに

「どうしたんだ？ 珍しい？」

俺が意外そうに聞くと

『実はですね。そちらに異物以外にも転生者が間違えて贈られてきたんですよ』

とすごく気になる単語を言ってきた

「転生者だと……カズマか？」

『いえ、あの少年ではありません。それは『そこからは俺が説明しよう』そうですね、じゃあゼウス様、お願いします』

「ゼウス？ 誰だそれ？」

『「このことは違う平行世界の魔法少女リリカルなのはの世界の神です」』

『そうだ。そしてその転生者と言つのはせき関俊政としまさという少年でな。俺のミスで送ってしまったのだ。そこで！君の仕事を少し手伝わせてくれ』

俺の仕事？ 異物退治か。戦力が増えるのはありがたいが……

「その俊政とやらは強いのか？」

俺が一番、気になるのはそこだ。弱ければ、特に今回は敵が人海戦術で来ることが予想できるから足手まといになりかねないからな

『それは大丈夫だ！俺が保障する』

ゼウス殿が自信たっぷり言う

神がそこまで自信をもつて言うなら大丈夫か

「分かった、じゃあその俊政に会って話す……いや、もうそちらから話を通してきてくれるのか？」

『スマン、まだだ。なにぶん、時間がなかったのでな』

「通してないのかよ……じゃあ俺が俊政とやらに会ってから話してくれ。その方が早い」

そうやって俺は勇者王のスピードで俊政とやらの元へ駆け抜けた

俊政SIDE

えー 俺は現在、どこか分からない場所にいる
見渡す限り、荒野……

「とりあえず一言、ここは一体どこなんだああああ!?」

『落ち着け、シン』

俺の胸に付いている俺のデバイスである少し変わった形をしたで
ある白色のバッジ フェイスバッジからレイが話しかけてきた
そうだ、レイなら何故、俺がここにいるか分かるかも

「レイ、ここがどこか分かるか？」

「済まない、俺も分からん」

なんとお!? レイでも分からないとは……

『だが、ここにも意味がないことだけは分かる』

「確かに……とりあえずここから動くとするか」

俺が歩き出そうとすると

「お前が俊政か？」

誰かに名前を呼び止められ、思わず振り向くと177くらいの男の人がいた

……ってあれ？ 何か、俺の顔を見て驚いてるんですけど

「し、シン・アスカ!？」

「!?!?!?!?!」

な、何故、その名前を!？

『それは俺が説明しよう』

この聞き覚えのある声は

「ゼウス様ですか!？ ここはどこですか!？」

よかった……知り合い？ がいた

『済まない……』

「…What?」

意味不明……あれ？ これ前にもあったような

『じ、実はだな……俺の手違いで、君をほかの世界に飛ばしてしまつてな……』

「…What?」

はい？ て、手違いで俺を他の世界に飛ばしただと！？
ゼウス様、手違い多いな……

「お、俺は守達の世界に戻れるんですか？」

戻れなかったどうしよう……非情にまずい
頼むから戻れると言ってくれ！ 頼むから！！

『それは大丈夫じゃ。ちゃんと戻れる、しかし！』

よ、よかった……俺はまだ帰れるんだ……こんなに嬉しいことはない……

でも、しかしって何？

「しかし？」

『俺の手違いで他の世界の神に迷惑をかけてしまったのでそのいる少年と共に敵を倒してくれ。後はジীগ殿、お願いします』

「ああ。と言うわけで手伝ってくれ」

さつき、俺のことをシン・アスカと言った男の人が話しかけてきた

『シン、どうするんだ？』

「ここは手伝おう、そのほうがよさそうだ」

それしか変える方法はなさそうだ

『そうか、分かった。なら俺もそれに従おう』

「悪いな。と自己紹介がまだだったな、俺はジーク・クラインだ。よろしくな」

この人はジーク・クラインって言うのか

「俺は関 俊政って言います。よろしくお願いしま」ちょっと待て、お前は転生者だろ。転生する前は何歳だったんだ？」……高2でしたか？」

「なら、敬語はいらさないから普通に喋ってくれ。そのほうがいい」

「分かりま……いや、分かった」

俊政 SIDE OUT

ジークSIDE

転生者だからまさかとは思ったがやはり、見た目は子供、頭脳は大人だったか

見た目も声もシン・アスカ以外の何者でもないんだが身長が20センチくらい低いからな

しかし、俊政のフェイスバッジからする声……完全にレイ・ザ・バレルの声だよな
聞いて見るか

「なあ、お前の胸に付いているバッジなんだが」

「これはフェイスバッジですよ」

いや、それは分かってる。俺が聞きたいのはそうじゃなくてだな

「いや、そうじゃなくてだな……その声はレイ・ザ・バレルにか思えないんだが」

『俺はレイ・ザ・バレルだ』

俊政のつけているフェイスバッジから声がする
何でデバイスにレイ・ザ・バレルが？ もしかして……

「疑似人格コピーか？」

『気にするな、俺は気にしない』

レイから質問の答えになってない言葉が返ってくる
この口調……確かにこいつはレイ・ザ・バレルだ。
でもな

「俺は気になるんだよ」

「そんなことより異物を倒しましょう」

俺がレイのことを気にしているとソルが諭してきた
確かに正論だな

「今の声はどこからだ？」

俊政が当たりをきよろきよろと見渡す。流石にわからないか

「今のは俺のデバイス、ソルだ」

「よろしくお願いします、レイ・ザ・バレル、関 俊政」

俺は俊政に腕時計であるソルが見せつけて話す

「あ、ああ、よろしく」

『よろしく頼む』

俊政とレイが愛想よく返してくる。さてと

「じゃあ、異物を倒しに行くか」

「ところで異物って何なんだ？」

俊政が聞いてくる。まあ確かに始めて聞く奴には分からないよなでも説明が少し面倒くさいんだよな……省略でいいか

「簡単に言うと倒すべき敵、それだけだ」

間違っではない。省いてはいるが

「たとえばどんなのが出てくるんですか？」

「そうだな……青眼の光龍とか青眼の光龍とかカオス・レムレースとか」

「カオス・レムレース！？ それってスパロボZのラスボス！？

あと青眼の光龍を二回言ったし、二体だけなのか？」

……しまったな。青眼の光龍への怒りがまだ残ってるみたいだな
というか俊政はスパロボZを知っているのか……

他には何がいたかな。そうだ、あいつがいたな

「レオーとかケルベロモンとかかな、ちなみにレオーはスパロボZのやつだ」

よくよく振り返って見ると多種多様だよな……共通性があまりない気がする

「そうなのか……共通性があまりない気がする」

「俊政……それは俺も思ったところだ。ところでお前もスパロボZを知ってるみたいだな。ずばり聞こう。SEED DESTINYはスパロボZのIFルートの方が」

「公式ルートだ」

「やっぱりそう思うか！ あれには感動したよなようやくシンが運命を切り開いた」

「コホン」

俺と俊政の話がヒートアップしそうなところでソルが咳払いする

「そういうのは異物を倒してからにしましょう」

「分かったよ……俊政、後でじっくり話そう」

「ああ。じゃあ、行くか」

俺と俊政が歩き出そうとすると

「あ、北を見てください」

ソルの言葉で北の方向を見ると

緑、緑、緑、緑、緑、緑……

大量のザコ？、いやザク？がいた……と他にもまだいるなん？
あれはまさか……

「武者ガンダムと武者ガンダムMK-?!?」

俺と俊政の声が重なる。俊政もガンダム無双を知ってるのか

「奥を見てください、村がありますよね。どうやらそこを狙ってるみたいですね」

ソルの言葉で目を凝らすと確かに奥に民家がある。

……あそこに自分達の陣地を作る気か……完全に無双だな

「なら早く行かないとな。俊政、お前は新幹線並みのスピードで走れるか？」

「無理だな、セットアップしてついていく。レイ！ セットアップだ!!」

そういえば俊政の能力って何だ？ 俺の予想が正しければおそろくは……

『了解だ!!』

「『セットアップ!!』」

レイと俊政が同時に叫び、俊政は赤と黒の光に包まれる

そして二人の光が消えて、俊政は青を基調とした以前に、ジীগ

がプレシアを助けるときに使った機体、 デステイニーガンダムになる

やっぱりしか、シン・アスカにレイ・ザ・バレルだからなと考えていると俊政が、いやデステイニーが震えているのに気が付く……どうしたんだ

俺が俊政に近づくと

「……うおおおおおお！ My favorite機体再びキターー！！！」

いきなり俊政が大声を出し、光の翼を広げて喜びをあらわにする

「いや、何で自分がセットアップしたくせに喜んでるんだ」

『シンは自分でなれる機体を選べないからな。以前もデステイニーになってこのように喜んだことがある』

そういうことか 俺はレイの説明で納得したが……
使い勝手の悪い能力だな……水中戦でストフリとか出たらどうするんだろうか

「まあいい。じゃあ行くぞー！」

俺はダツシユ、俊政は空を飛び異物の集団に向かった

ジークSIDEOUT

三人称SIDE

村のすぐそばでザクの集団がマシンガンを構えて発砲準備をしている

全部が発射すれば村は壊滅するだろう

「ヤレ」

武者ガンダムが村にマシンガンを構えているザクに指令を出したザク達が引き金を引こうとしたその時

「待てい!!」

どこからともなくした声にザクは引き金を引くのを止め、辺りをきよるきよると見回す

「地上に悪が満つる時、愛する心あるならば……熱き魂悪を断つ……人、それを真実と言う」

「ダレダ!?!」

武者ガンダムが叫びながら、振り向く。

そこにはがけの上にいる、ジーク・クラインの姿があった

「貴様らに名乗る名前はない!!」

ジークが返答を叫ぶ

「キサマは……ザクヨ、ヤレ!!」

武者ガンダムMK-?の言葉で数体のザクがジークへとマシンガンの照準を合わせる

だが、ジークは全く、回避する様子を見せない

数体のザクが引き金を引く指に力を入れようとした刹那、水色の閃光がザクのマシンガンを打ち抜く

「!?!?!?!?!」

ザク達が上を向くとそこには光で構成された翼で空を翔ける青の機体デスティニーガンダムがあった

そう、俊政のビームライフルが火を噴き照準を合わせたザクのマシンガンを破壊したのだ

「天よ地よ、火よ水よ……我に力を与え給え……パァァイルフオ
オオメイシヨオオオン!!!」

その言葉を合図にジークの体が光に包まれ、そして光がはじける
その時ジークは赤を基調とした人型の戦士　バイカンフーへと
その姿を変える

「覚悟してもらっぞ!!!」

その言葉と共にジークは崖から飛び降りた

三十七話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 前編（後書き）

ヴェ「どうしてもコラボは字数が多くなるなあ。まあ筆？ が進むからいいけど」

ジ「結局、二部構成か……しかも最後のあれは何だ？」

ヴェ「どうしてもコラボのときは自分のお気に入り機体を出してしまっなあ」

ソ「そうじゃないでしょう」

ヴェ「だって、バイカンフー出すのには必須でしょ！！ ライ様、デステイニープラン様、清浦刹那様、laptop様、感想ありがとうございます。デステイニープラン様からアストラナガン、ビルトシュバイン（ツイン・マグナライフル装備）、RIGUN、RIGUNパワード、RIGUNリヴァール、ヴァルク・ベン、量産型 ガンダム、ベルグ・バウ、デイス・アストラナガンを頂きました」

ヴェ「さて次話も頑張らねば」

ジ「頑張ったところでだろ」

ヴェ「デステイニープラン様、これでよろしいでしょうか？」

ジ「まだ後編があるのに聞くことじゃないだろ」

ヴェ「とりあえずここまででおかしいところがあつたら遠慮なく行

っつくだわい。直じまものので」

三十八話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 後編(前書き)

損傷率とかは連げ様の方のルール？ です

三十八話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 後編

ジークSIDE

ロム・ストールの決め台詞を言い終え、バイカンフーとなり俺は崖から飛び降りる

やってみたかったんだよな、これ。

俺は地響きを立てて、着地し右手を高々と上げる

「天空宙心拳、しよおおお雷ッ!!」

俺の掲げた右手に空から雷が落ちてきて、それを俺は右手に纏う

「サンダー・クロウツ!!」

その右手でザクを掴む。電撃の奔流に耐えられず、ザクは一瞬で爆散する

「これが天空宙心拳の力だ!!」

俺が雷を纏った右手を見せ付けるように言う

「あんまり、ふざけないでください」

俺のさっきまでの行動にソルが文句を言ってきた。
流石に調子に乗りすぎたか。

「分かったよ……さてと、こいつらと武者ガンダム二機を同時に相手するのは得策じゃなさそうだな……俊政!!」

俺は既に地上で降りてきて、武者ガンダムと剣でつばぜり合いをしている俊政に叫ぶ

俊政は武者ガンダムをつばぜり合いの状態から吹き飛ばし、俺の方を向く

「呼んだか？」

「ああ……悪いがそのまま武者ガンダム2機を押さえといてくれないか。その間にザクを倒すから」

「わかった。任せろ!!」

アロンドイトを構えながら、了解の意を示す

よく考えて見たら、俊政一人で武者ガンダム2機共倒せるんじゃないか…？

まあ、その方が俺は楽だからいいか

俺はザクの集団に突撃した

ジーグSIDEOUT

俊政SIDE

「てやあっ!!」

俺は武者ガンダムに背部の左ウエポンラックから大型ビームランチャーを取り出し撃つ。

赤い光線が武者を襲ったが

「ムダダ」

身を固めて防がれた

『敵、損傷率…0%。全くダメージは与えられてないぞ』

マジ？ 防御、固いな……流石は武者ガンダムにMK-？か……
どちらもボスキャラ並みの性能だな。ここは気をつけていかない
だけで、あいつらにも弱点がある、致命的な弱点が！

「行くぞ、レイ!!」

『了解だ、シン!!』

その言葉と共に俺は両肩からビーム刃でできたブーメラン フ
ラッシュエッジ2を取り出し、武者ガンダムに向けて投擲する。

「ムダダ」

武者ガンダムはそれを右に避けて回避する
その動きに合わせて俺も右に動きながら

「まだだ、こいつをくらえ!!」

右手のビームライフルの引き金を引く
だが、武者ガンダムは再び身を固めて防ぐ

「ムダトイツ!?!?!?!」

「敵、損傷率:約30%。残り損傷率:約70%」

武者ガンダムは後ろから戻ってきたフラッシュエッジ2によって
ダメージを受け怯む。

さらに俺がその隙にビームライフルを撃ち、ダメージを受ける
やっぱり、後ろは無防備だった。

そしてダメージによって動けない武者ガンダムを追撃しようと再
び、ビームランチャーを撃とうとしたところ

ドツカーン!!!!!! と凄い爆音が響く

何だ、一体? ジーグは大丈夫なのか……と、まずはあいつを倒
さないと

俺が気を取り直して、引き金を引こうとする

「これで(ピキーン)!? クソツ!?!」

ニュータイプ有能力で脳裏に衝撃が走り、MK-?の死角からの
攻撃を感じ取り、振り向く

MK-?が俺に向けて突進してくる姿が見えた

「キツカレタカ、ダガヤラセハセン」

「クツ!? お前も、お前達も!!」

もう一機の武者ガンダムであるMK-?が俺に切りかかってきて俺は攻撃を防ぐため、武者ガンダムへの攻撃を中断せずをえず、アロンドイトをすばやく取り出し、MK-?の剣とアロンドイトがぶつかりあい火花を散らす

「負けるかつ!!」

「カクゴセヨ」

俺がMK-?とのつばぜり合いに勝って、MK-?を前に吹き飛ばす

MK-?は立ち上がったがスパークを起こしているみたいで動けないみたいだ

チャンスだ!!

「このっ!!」

俺は光の翼を展開し、ビームライフルから水色の閃光を放ち、ダメージを与えつつ、接近しMK-?をアロンドイトで突き刺し、そしてビームランチャーを取り出し銃口をMK-?に押し当てる

「うおおおおっ!!」

超近距離、いやゼロ距離からビームランチャーを発射する
その威力によってMK-?は吹っ飛び、地面に倒れる

『敵、イエローロック。損傷率……80%。残り損傷率……20%』

「よっしゃー！ このまま行くぜ」サンダースマッシュ！」「あ」

その言葉と共に倒れていたMK-?に雷が炸裂する

『敵、損傷率……0%』

今の雷撃でMK-?の損傷率が0になり爆発した

俊政SIDEOUT

ジークSIDE

俺は右手の剣から雷撃を放ち、MK-?を破壊した
何で、あいつは敵が倒れている絶好のチャンスに攻撃しなかった
んだ？

まあいい。俺は俊政に近づいた

「え？ もうあの集団のザクを倒したのか？」

まだ時間にして2〜3分しか経ってないからな……

「いや、あいつら。俺が数十機破壊したあたりで勝ち目がないと
悟ったのか全機、自爆してきたんだ……まさか、自爆してくるとは
思わなかったから回避できなかったぜ」

「ザクって軽く見積もっても400機くらいいたぞ……大丈夫な
のか？」

俊政が少し心配そうに聞いてくる

「大丈夫だ、ダメージは全くない」

『ジグ、やせ我慢ではないようだな。だが、確かにお前は回避
できなかったと行った筈だ。ダメージが全くないのはおかしくない
か？』

レイが鋭い指摘を行ってくる。流石はレイ・ザ・バレルだな、こ
ういふところに気づくあたり

「俺はスパロボの精神コマンドが使えるからな。一度だけ全ての

攻撃をかすり傷ですますく不屈を発動したんだ」

「スパロボの精神コマンド使えるだと……ということは必中とかも使えるのか？」

「ああ。使えば必ず当てることが出来るぞ」

「さらにく直撃も組み合わせれば狙ったターゲットとのサイズ差やフィールドとかも無効にできます」

俺の説明にソルが付け加える

「便利だな。羨ましいな」

俊政にいわれて見れば確かに無茶苦茶、便利だよな……あまり使っていないが

「キサマラ、コロシアイのサナカでムダバナシトはズイブンとヨウダナ」

武者ガンダムが話しかけてきた。

「余裕だなんて言われてもなあ」

「その通りだからしかたないよな」

「フザケルナ！ ナラバ、ワレのチカラをミセテヤル」「お前じや役不足だ」「……キサマラ……モウユルサンー!!」

俺と俊政の本心の言葉に切れたみたいでこちらに突進してくる。

力の差も分からないとはな……どうせも分かってて逃げても破壊するからこのほうが楽か

「よし、せっかくだから最後までらいスパロボでいうと、合体攻撃で潰すでしょうぜ」

「分かった。レイ、行くぞ！」

「了解だ、シン」

その言葉と共に俊政がそらを翔け、武者ガンダムの後ろに回り、ビームライフルを発射する

後ろが死角の武者ガンダムはそれを喰らい、怯む。

その隙に俺と俊政は武者ガンダムを挟む様に肉薄し

「奥義を受ける！ ゴットハンドツ！ スマアツシュ！！」

「パアルマ！ フィオキーナアアアア！！」

俺と俊政が武者ガンダムを間に挟み、俺は右腕から強力なショートアツパーを、俊政は光の翼を展開し右手の掌に内臓された小型ビーム砲を輝かせ、右手をおもいつきり叩きつける

「ガアツ！?!?」

二つの衝撃に挟まれたことで二つの衝撃は逃げ場をなくし、武者ガンダムは吹き飛ばされない

だが、そのダメージは想像に難くないだろう。少なくとも俺は絶対に対に受けたくない

「天空真剣極意……二刀一刃！」

「こいつでぶったぎってやる!!！」

俺は狼と流星の紋章から剣となった二刀の柄を繋げ合わせる
俊政はアロンドイトを取り出す

「はああっ！ 運命両断剣!!！」

「これで終わりだああ!!！」

俺と俊政が同時に剣を振るい、俺はジャンプして、俊政は空を翔
けてそこから離れる

それと同時に武者ガンダムは爆散して跡形もなくなった

そして俺達は勝利の余韻を感じているのである

「よし、勝った!!！」

「しかし、俊政……何でお前はmk-2が倒れているときに追撃しなかったんだ？」

「え？ それは『異物とやらは倒したみたいだな。よし、送り返すぞ』もう少し話をしたいんですけど駄目ですか？」

俺と俊政が話をしているとゼウス殿が間に念話をしてきた。

「俺ももう少し話したいんだが」

『そうさせてやりたいのは山々なんじゃが、俊政の世界でも敵が現れての今、二人が戦ってるんじゃ』

「守と平和が？」

『うむ』

「守と平和って誰だ？」

「俺の友達だ……見過ごすわけには行かないな。ジীগ、済まない……俺は……行くよ」

「そうか……まあまたいつか会えるだろ。その時にでも話すとするか。じゃあな」

「ああ」

『では戻すぞ』

そう言い残し、俊政は消えた

『迷惑かけて済まなかったの』

「いや、迷惑どころかかなり助かった、俊政にありがとうと伝えておいてくれ」

『了解じゃ。ではな』

そういつてゼウス殿も通信を切った。なんとも慌ただし別れだったな

まあでも生きていればまた会えるだろ……

そう考え俺は戻ろうとしたが

「し、しまった!? り、リンカーコアの収集を忘れていた!？」

「全部、木っ端微塵ですよ」

「……くそ」

はあ、あいつら全員……いや、武者二機だけでも収集していたらどれくらいページ埋まったんだろうか

そう考えつつ、落ち込みながら俺は帰路についた

三十八話 共闘、これが運命を切り開く剣なり 後編（後書き）

ヴェ「今回の合体業を運命両断剣トリプルブレードと名づけ」

ジ「そんなくだらない名前をつけるな」

ヴェ「いやっぱりくだらないか……最初はこれぞ運命を切り開く二刃なり、成敗！！ ってさせようと思ってたけど自重してよかった」

ジ「……言葉もないぜ」

ヴェ「水橋様、清浦刹那様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。デステイニープラン様よりロム兄さんのスーツを頂きました」

ジ「これを着るのか？」

ヴェ「さあ、あと第二次スパロボZ発売によって最近テンションが凄く高い私です！！ ちなみにこの駄文では二部作のアニメなら前半が参戦決定したらジークは後半の機体にもなれるようになります！ やつとダブルオーがこの駄文で出せる！！ですが……」

ジ「ああ……実は俺の一番でかい機体ははんぱなく跳ね上がったんだろ」

ヴェ「ああ、超天元突破グレンラガンが……wikiによると宇宙よりでかい……」

ジ「俺はその10分の1の大きさか……言葉もないな……」

ヴェー「……この駄文に出せるんだろうか。あ、あとちなみに以前、私が活動報告で言ったスーパーテロリスト対戦が叶って嬉しいです。できれば宇宙船艦ヤマトも……無理か。デステイニープラン様、こんな感じでよかったですでしょうか？何かあれば言ってください。直しますので、では」

三十九話 並行世界からの刺客 前編（前書き）

今回は結構、急展開です

三十九話 並行世界からの刺客 前編

〜とある平行世界〜

一人の男が巨大な画面の前で椅子の座って、キーボードを叩いている

いやはや、最近妙に破壊される傀儡の多いこと、この上ないですね。

あの方はそれを喜んでおられますが私としては少し不愉快ですね。しかもそれが一人に……軍隊とかならまだ分かるんですがね。

私はそう考えながら、キーボードを巧みに操り計算していく。

と私は一秒ごとに転々と画面を変えていくスクリーンに写ったとあるデータの画像に気づく

おや？ これはこれは……興味深いですね。いいことを思いつきましたよ

「これなら彼を倒せようが倒せまいがどっちに転ぼうと私が得るのはメリット……おい！」

その呼びかけと共に私の後ろに少女が一瞬で現れる。

「さて、君にはこれからこの男と戦ってもらおう。今回は殺しても構わないからね。まあできれば生け捕りにして欲しいがね」

「……………」

私の言葉を聴き終えてすぐに少女は画面に目を通し、データを覚

えている。

……さあ、彼はこの哀れな傀儡人形と化した少女をどうするのかな。

「私は正義の味方気取りの奴は嫌いなんですよね。だからやっっちゃってください」

「……………」

少女が言葉を言い終えた瞬間、消えた。

本当に最後まで話を聞いているんですかね……

さて今回は興味深い実験になりそうですね。フッフ

俺は現在、パソコンのキーボードを叩き、ソルの戦闘AIを作っている

……正直、いらなと思うんだがな。俺一人で十分に勝てるのにな

「マスター、飲み物をお持ちしました」

擬人化し、上は白の服、下は青のスカートに胸にも青のリボンをした服装をしているソルがお盆の上にティーカップを乗せてやってくる

「ここにおいてくれ」

俺は自分の横にあるキーボードの横の空いているスペースを指で指す

「こぼして私につけないでくださいよ」

何で、ソルがこんなことを言うのか分かる人は少ない、というかほぼいないと思うので説明しておく。

こないだ、ソルが戦ったときに俺がセットアップできなくなるのは不便ということが判明した。

そのためにソルが擬人化をしつつ、俺がセットアップする方法を考えた。

その結果が、本体とは別に擬人化の肉体を出現させ遠隔操作するという考えだ。

これがうまくいって、俺を含めれば最高で三体までの機体を同時に呼び出せるようになった……でもやはり俺はあまり納得してはないがな。

別にソルが戦う必要は全くないんだがな。別にソルが頼んできてるだけだしな。

そう考えながらキーボードを打つ手は全く止まらない。
……俺も甘いな……はあ。
俺は思わずため息をつく

「ため息をつくると幸運が逃げていきますよ」

このため息はお前が原因の一角を担っているんだがな……

「お前はもう少し、言動を何とか……」

そこで俺の話を遮るようにピピッという電子音が響く。
一体、何だ？俺がそれを確かめたが……

「……嘘だろ？何だ、これは？」

俺は思わずそう呟いてしまった。

さっきの電子音は一見普通のメールだった。一見は
しかし、俺は自分のメールボックスを持っていないはずだ。俺は
開く前に不振に思いそのメールを調べた。

すると世界中のありとあらゆるメール機能を持った電子機器に届
けられていることが判明した……

「サイバーテロか？でもそれでは俺のコンピューターにメール
を届けるのは不可能なはずだが……」

俺のコンピューターは今のパソコンとは一線を画く品物だ。

例えるなら最低でもザク？とガンダムくらいには差があるはず
だ。

ちなみに俺は面倒くさいのでメールは全てシャットアウトしてい
る、

もしメールが送られるときがあるとするればそれはジャック
された時くらいだ

たとえ世界中にコンピューターを総動員しても俺のコンピューターをジャックすることは不可能だ

だが、実際にこの不審なメールは送られてきた。

何故だ？ 俺がかなり考えていると

「開いて見てはどうですか？」

ソルが提案してきた。

……確かにこのままでも進展はなさそうだな。虎穴に入らずんば
虎子を得ずか

「よし、じゃあ開くぞ。ソル、ウイルスが入ってくるかもしれない
から迎撃体制を」

「完了しています」

俺はその言葉に頷き、メールを開くと……

裁きを受けたかの地にて哀れな桜の傀儡が君を待つ、我は別世界の
住人なり

と言つ一文。

「何ですか、これ？」

「おそらくは何かの暗号だ。そしてこれは俺を狙つてのメールだ
るじ」

「世界中にばら撒かれているのに何でマスターを狙つての暗号な
んですか？」

「まず、こんなことが出来る奴はこの世界にはいない」

俺のパソコンにハッキングできる奴はいない

「となると他の世界の奴の犯行だ。だが、次元世界でも一番性能
がいいのはおそらく管理局……だがそれでもこちらより性能が高く
ない。そうなるかと並行世界しか考えられない」

「でもそれだけだと別にマスターを狙つてとは言い難いのでは？」

「ああ、そこで暗号の登場だ。まず、裁きを受けたかの地だけで
はどこかは分からない。だが、桜の傀儡となると俺には一つだ
け想像出来るものがある」

……あんまり思い出したくはないがな

「何ですか？」

……分からないのか。まあしかたないか

「違法研究所で技名に全て桜がついてた、死んだ目をした少女だ」

「それって無理やりじゃありませんか？」

まあ確かに無理やりだろうな、ここだけなら

「そして次の裁きを受けたかの地が来るわけだ。……虐殺の起きた以前の違法研究所だ。そしてご丁寧に異世界の住人とまで言っている……ここまでフィットし、そして奴らは俺のオーバーテクノロジーを知っている」

俺のバリアジャケットの機体は完全にオーバーテクノロジー以外の何物でもないからな

「……行くんですか？」

ソルが俺の行動をたぶん予測して聞いてくる

「……ああ。あいつを俺は許しは……いや、まあいい。行くぞ」

俺はゲートを発動し、以前の忌まわしき過去であり、自分の弱さを実感した場所へ向かおうとする。

しかし、俺には一つだけ納得できないものがあつた。

……なぜ哀れな傀儡なんだ？ 普通は自分のことを傀儡、何ていうか？

まさか……いや、考えすぎか。

俺は自分の中で思いついたことを否定する様に首を振り、ゲートをくぐつた。

〔違法研究所跡地〕

「……酷いな」

俺は違法研究所のあった場所を見て啞然とする。

既に研究所は崩壊し、残骸の山となっている。

……あの時、もう少し出るのが遅れていたら生き埋めだったかもな
俺が残骸の山を見ていると

「おやおや、やはり気付いて来てくれましたか。流石は正義の味方ですね」

俺の後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには空中にSOUND ONLYと映ったスクリーンとあの時の少女がいた。

なめてんのか、こいつは？ SOUND ONLYならスクリーンの意味がないだろ

「いえいえ、なめてませんよ。こうしないとこちらからは見れな

いんですよね」

その言葉に俺は愕然とする。

まさか、心が読まれたのか!?

「いえいえ、心を読んだのではなくてただの予測ですよ。まあ正解かどうかはあなたの表情でわかりますがね」

……心じゃなくて考えが読まれたのか。そういう能力じゃなくてよかったと喜ぶべきかそれとも俺の単純さを悲しむべきか……まあ今はそれどころじゃないか

「……何故、俺を呼びだした？」

俺は一番、気になっていることを聞く

「あなたが私達の傀儡の破壊活動をしているのが少し不愉快なのと実験ですね」

すると律儀に答えが帰ってきた。普通は隠すもんだと思うがなまあそれはいい。だが

「実験だと？」

……実験って何をするつもりだ？ まあ、ろくなもんじゃないのは分かるが

「正義の味方がこの哀れな傀儡をどうするかですよ……フッフ」

哀れな傀儡ってこの少女のことか……まさか!?

「まさか……改造して操ってるのか？」

自分の予想が外れることを願いつつ俺は聞いた

「フッフ、正解ですよ。この傀儡は催眠術や洗脳の類で操ってるんですよ」

俺の予想を肯定する言葉が返ってくる
ということはあの時のあれは……

「そうですよ。虐殺はこれが望んでしたのではありませんよ」

また、考えていることが読まれた、いや予想されたのか……むか
つくな

「さて……これを聞いて、あなたはこれをどうするんですかねえ。
正義の味方が罪のない少女を殺すわけにはいかないですよねえ。さ
あ、殺しあつてもらいましようかね。やりなさい！」

その言葉と共に少女は以前と同じ、刀身が桜色をした大剣 桜
花刃を構える。

……クツ、催眠術で操られているなら気絶させて

「あ、そうそう気絶させようとしても無駄ですよ。痛覚とかは戦
闘にいらぬものは感じないようにしてますので」

俺の考えをあざ笑う様に言葉が響く。

……ここはあれしかないか。だが、俺に出来るだろうか……いや、
違うか、出来るかじゃなくてやるんだ！

「悪いがお前の思い通りにはさせない！ ソル、セットアップだ
！！！」

俺の体が光に包まれ、真っ赤なカラーリングをし、両肩にサウンドブースターを付けた機体 VF-19改 ファイアーバルキリー・サウンドブースター装着となる。

「行くぜ！ 洗脳だか催眠術だか知らないが俺の歌を聴けえええ
！！！」

三十九話 並行世界からの刺客 前編（後書き）

ヴェ「兄貴〜！！！」

ソ「いきなり何を叫んでるんですか、この人は？」

ジ「グレンラガンを見ていたらしい」

ヴェ「私のところでは映らなかつたので見れなかつたんですがスパロボ参戦ということとでACEPをほつぱり出して見てたんですが……こんないい作品あつたとは……まあまだ9話までしか見てないですが」

ジ「……お前の感想などどうでもいい」

ヴェ「酷い！？ 水橋様、清浦刹那様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。デスプラ様より3バカのカードをいただきました。それと皆さまに言いたいことがあります、ソル頼む」

ソ「私ですか……この駄文がおそらく次で40万PV突破しそうでさらに次回で50部になります。ということでは何か記念的なものを……と考えているそうなんですけど何も思いつかないので誰かいい案ないですかというもの凄く他力本願なお願いです」

ヴェ「出来ればいいですのでご協力の方をよろしくお願いします」

四十話 並行世界からの刺客 後編（前書き）

今回は書いてる途中で自分も若干分けわからなくなってきました…
…

四十話 並行世界からの刺客 後編

「こいつで行くぜ！ HOLY LONELY LIGHT!!」

俺からHOLY LONELY LIGHTという曲のBGMが
流れ出す

それと同時に少女が俺に斬りかかってきたが

「24時間うごめく街を」 TONIGHT TONIGHT
駆け抜ける」

歌いながら俺は少女の斬撃を回避する

「非常階段 瞳の群れが」

少女は俺に更に連続で斬りかかってくるがそれでも少女の斬撃を
回避しつづける

その間も俺はずっと歌い続けている。

「戦闘中に歌ですか……」

SOUND ONLYが言葉を発してきた。

どうせこいつには意味のないことをする馬鹿とでも考えているん
だろうな、だがな！

「やりますね。まさか私の予想を外すとは……」

……何！？ ……流石にこれは予想外だ。

「乱れ桜の舞、激……！！」

少女のスピードが加速され、斬撃のスピードが上がるが

「そうはさせないんだな、これがな」

俺は右手から銃を取り出し、撃つ

その弾丸を避けるために少女は俺から離れる。

だが、その弾丸が地面に刺さり、そこから俺の歌が流れ出す

「残念だな、これは弾がスピーカーなんだよな」

そんな感じで少女の斬撃の嵐をかわし続ける。

そして戦闘が始まり、2、3分ほどたった時

「……！？」

少女が剣を地面に落とし頭を抑え、人形のような顔が歪み斬撃が止む。やっとか

「おや？ そういうことですか……残念ながらこっちは計算のうち何ですよね」

その言葉と共に少女の表情が再び、感情のない人形に戻る。

「何だと？ 俺の歌の効果が無くなっただと？」

「聴覚を消せば、その歌も無力ですよ。残念ですねえ」

もはや俺と勝負できるような状態じゃない
少し、罪悪感を感じるが洗脳を解くためだ、我慢してくれ！

「……いい加減にしなさい!!」

SOUND ONLYが声を荒げ少女は倒れ伏せる。

……まだ、曲は終わってないんだがな。

「あなたのその予想外の行動には驚かされましたが……残念ながらこれでお別れです。最終システムを作動しました」

少女は起き上がり、剣を頭上に掲げる。すると少女の包むように球体の膜が出来る

何だと！？ 俺の歌で気絶したなら洗脳は解けているはず……なら、これは最終システムによるものか

「最終システムだと？ 何だそれは？」

俺は教えるわけがないと分かりながらも問いたです。すると

「最終システムとは一度限りの超博打技ですよ。当たれば、どんな敵で一撃、外れれば発動者、ようするにこれは死にますね」

こいつ、どういっつもりだ！？ 何故、俺にわざわざ言う必要があるんだ!？

「そりゃ言うておけば、正義の味方であるあなたはこの技を避けられないでしょう？ 避けたらこれが死ぬんですから」

……また、こいつ俺の考えていることを読みやがった。だが、今

はそれどころではじゃないな。

どうすれば……いや、待て。スーパーロボットの装甲ならば耐えられるか……

「フフフ、いくらあなたの装甲でも無駄ですよ。今からの技は装甲など関係ない消滅の力ですから」

……消滅の力などスパロボにはかなりあるんだよ！ そしてそれを普通に耐えられるんだよ！

「消滅の力？ それすらも俺の装甲は耐えることが出来る……！」

「いえ、無理です！ マスター……！」

俺の言葉をソルが否定する。何でだよ？ 消滅だろうが何だろうが俺の装甲は……

「まだ5分経ってないので装甲が変えられません……これで受けても大丈夫だとは思えません」

あ……確かに。これじゃあ無理だ……いや待てよ。見つけたぜ。助ける方法をな……！！

「残念だったな、俺にはどんな攻撃だろうと……例えこの世の物全てを破壊できる技であろうと無効にできるんだよ……！」

「はあ、まあいいでしょう。やりなさい」

SOUND ONLYは俺の言葉に呆れたのかてきとつに返事して命令する

少女の剣が禍々しい黒へと変色し、形も一定の物を保てなくなつておりなんともいびつな形になっている

……あの剣、やばいな。凄いエネルギーを感じるぞ。残念だが奴の言ったことははったりではないらしいな

「だが、俺は屈しない。＜不屈＞だ！！」

「桜花、刃……リミ……ット……リリー……ス。桜華……斬、一輪桜」

もはや、普通に喋るのも苦しそうにとぎれとぎれになりながら言葉を発し、剣が天に伸びていく。

そしてそれがイツキに振り下げ、俺を斬り裂いたが……

「残念だったな、俺の勝ちだ！！」

俺には傷一つしか付けられなかった。そして禍々しい剣は折れた。

「へえ、残念ですね。でもこれでチェックメイト。私の勝ちです」

「何！？」

いきなりこいつは何を言ってるんだ？ 諦めたのか？

「見なさい」

その言葉につられて少女を見ると、球体の膜の中が無重力なのか倒れているのに落ちずに宙に浮いている少女の姿があった……

「正義の味方が哀れなこれを救えなかった、あなたがその剣を壊

したせいで消滅の力が暴走して重力や空気を消滅させた。そのせいでこれは死ぬんですから。これはあなたにかなりの精神ダメージを与えますよね？」

……何だと？

「お前……外せば死ぬって言ったよな。……騙されたのか」

「騙す？ それならこんなにうまく言えないですよ。砕かれても死ぬんですよなんて私は言ってますよ」

……こんな見え透いた罠に引っ掛かってしまったのか……

「でも生体反応はまだあります！」

何！？ ならば

「まだ死んでないのか、ならこの空間を破壊してやる！！」

「破壊してた瞬間、この空間は収縮してあとかたもなくなるんですよね」

俺のしようとしていることを無駄だと言わんばかりに言ってきた

「どうせそれも嘘」それは本当みたいです、マスター「クッ」

……要するに破壊した瞬間には少女を外に出しておかなければならないのか……そんなことが可能なのか……

そつだ、転送すれば！

「ソル、転送を使うぞ」

「あの空間内では機体は破壊の力や防御の力はともかくそれ以外の類の力はそれ自体には力がないので全てほぼ例外なく消滅します……無理です」

「おやおや、じっとしていいんですか？ 始まりますよ、暴走が」

その言葉と共に球体の膜が急激に大きくなっていく。俺たちを包もうとするかの様に

まずい!?!?

「クツ、しかたない。一時離脱だ!」

俺は変形し戦闘機 バトロイド形態となりその場から離れるが膜は今だに俺を追ってくる

少しの間、上に飛び、振り切ったところは宇宙だった……

そしてその膜は惑星を消滅させたみたいで宇宙空間にたたずんでいた

マジ？ こんな……諦めるしかないのか？ いや、まだだ！ 考えろ、考えろ、考えろ!!

空間転移や転送は無理、攻撃で破壊するのも無理……
八方ふさがりだな……どうすれば

「もう諦めることだね、そして正義の味方などというくだらないことなど止めるんだね。遅かれ早かれそれが君の運命だったのさ」

……運命だと？ そんなものに屈するわけにいくかよ

集中するんだ！！　そして考えるんだ！！

「……一つだけ方法がありました」

「何だ！？　答える！！」

俺は藁にもすがる思いでソルに尋ねる

よく考えたらここでソルの言葉がおかしいことに気付くべきだったのだが、今の俺にそんな余裕はなかった

「転送も空間移動も破壊も駄目……ならマスターが中に侵入し、少女を救出し、出る瞬間に破壊するんです」

「それだ！！」

ソル、ナイスアイデアだ！！　これならいける！！

「ですが……残念ですが無理です」

「何でだ？　俺なら簡単じゃないか」

ガオガイガー級なら余裕なはずだ。たとえ消滅のエネルギーだって

「もう……時間はありません。あの膜の中の……生体反応は……もう……ありません」

俺は少しの間、ソルの言葉の意味が分からなかった……いや、理解したくなかったのかもしれない

この時何故か、俺は誰かに見られている様な気がした……どこかにsound onlyが隠れているのだろうか？

きつとこれも絶望によって起こされているものだろう

「フッフ、現実には漫画の様に甘くはないんですよ。人にはそれぞれ運命があるんですよ、それに縛られているんですよ。逆らう術はない。これがあなたとあれの運命だったんですよ」

SOUND ONLYが勝ち誇ったように諭す

……俺は運命なんか屈したのか？

いや、運命は屈するものじゃない。

逆らう術がない？ そんなわけあるか！ 運命は切り開くものだ！

考える、運命を切り開く……

……あるじゃないか！ 運命だろうが何だろうが逆らう方法が！！

「バリアジャケット、変更だ」

俺の体が光に包まれ、一回り大きくなり、紫をした少し変わった機械の鳥の様な高機動ユニットを付けた黒の機体 高機動型ブラツクサレナとなる。

この機体はタイプワープをも可能とする反則機体。これなら！！

「俺は……運命など物理的に逆らって見せる！！ ボソソジャン駄目です！！」……ソル、お前の言いたいことは分かる。だがこれしかないんだ」

「時間移動はタイムパラドックスが起きる可能性が高いです！！

そうすればマスターは時間軸から消えてしまいます!!」

タイムパラドックスか……もし俺が過去の世界で少女を助けた後、過去の時間の俺がそれに気付いたら、過去の俺はタイムワープする必要がなくなる。そうすると今の俺も過去の世界に行く必要がなくなるので行かなくなる。だが、そうすると今度は少女を助けたはずの俺はいなくなる。そんな感じで矛盾が生じて時間軸から俺が消えてしまうそれがタイムパラドックスだ……こんな説明で分かる人はいるんだろうか？

簡単に言うと過去を変えると、時として自分が消えてしまうと考えてください(かなり暴論でなおかつ間違いもあります) BY
作者

「覚悟の上だ、もし今ここでやらなければ俺は命が助かっても心が死ぬんだ。やらないで後悔するよりやって後悔したいんだ!!」

「……なら、もう何も言いません。私もマスターを信じます、生きるも死ぬも一緒です」

「……悪いな、ボソソジャンプ発動!!」

俺は粒子となって消えた

再び、目をあけると宇宙空間にいたが、膜が広がり始めたところだった。

「……成功した……」

「時間軸、場所共に完璧です！ 今ならこの機体の速度なら……マスター！！」

「分かっている！ ディストーションフィールド、最大展開！！ ディストーションアタック！！」

俺の周りの空間をゆがませ、薄い球体の膜を発生させる。そしてそのフィールドごと消滅の力を持った膜にぶち当たる。

「なめるなよ！ 今の俺にこんなものが壁になるかああああ！！」
消滅の膜を貫通し、中に入る。

「マスター！ この中にいられるのは1分が限界です！！」

「ああ！！」

フィールドを展開しながら進むがやはり消滅の力は完全には防ぎ

きれないようだ。

高機動ユニットのいたるところが消滅し始めている。

「マスター、前を!!」

ソルが叫んだ。前を見ると少女がさらにもう1層の今度は殻の様な膜に包まれていた。

あれをぶちやぶれば……

俺はその殻に突撃し、ぶち当たり、

「勝負を仕掛ける！ 高機動ユニット、パージだ!!」

高機動ユニットを外し、そこから少し離れる。

すると外されたユニットが爆発し、殻が割れる。

そして、俺は少女をユニットが外れ、漆黒の機体となったブラックサレナのデイストーションフィールドの中に入れて、そのまま消滅の膜の外へ出るために進み、そして

「マスター、あれを破って外に出しましょう!!」

消滅の膜の元へついたがその時にはブラックサレナの漆黒の装甲もポロボロになっている。

膜も入った時よりも分厚くなっていた。

最後のひと踏ん張りだな……だが、やってみせる!

「俺は、いや俺達はこんなところで死んだりはしない!!」

俺は手に持ったハンドガンを捨てて、その膜を体当たりするかのよように殴りつけた。

その瞬間、俺を纏っていた漆黒の鎧は全て剥がれおち、中からピ

ンク色の人型機体 エステバリスカスタム・アキト機が現れた。
そしてその衝撃に耐えられず、膜に穴が開く。
その一瞬を利用して俺は脱出した。

その時に

「もう……時間はありません。あの膜の中の……生体反応は……もう……ありません」

と言っているソルの声が聞こえた。

そちらを見ると絶望している俺がいた……そういえばこの時に俺、確か誰かの視線を感じていたよな……

……もしかしてこの時に未来の俺は既に少女を助けていたのか？

「ソル、生体反応を調べたのは膜の中だけだよな？」

「はい」

記録データでこの時の宇宙の生体反応を調べてくれ」

「了解しました…… 3人いますね」

未来の俺と俺と未来の俺が助けた少女か……

「すみません、まさか宇宙に生体反応があるなんて思いもしませ
んでしたから……」

…… ややこしいな…… 要するに俺の時も未来の俺が少女を助けに
来ていて、さらに未来の俺もさらに未来の俺が助けに来ていて……
ややこしすぎてきりがなから止めよう

当初の目的は達成できたんだ、それでいいじゃないか。
うん、そうだ。きつとそうだ。

とか考えてたら俺が…… ややこしいな、過去の俺が粒子になって
消えた

「精神ダメージが大きすぎて発狂でもしましたか…… さてと私も
戻るとしま「待て」おや？ あなたは今どこかに行ったはず…… そ
れをどうやって助けたのですか？」

俺がSOUND ONLYに近づき喋りかける

SOUND ONLYはディストーションフィールドの中で気絶
している少女に気付いたみたいだ

「誰が言うか、じゃあな」

俺はボソソジャンプしその場から離れた

…… さてとこの娘、どうしようか……
とりあえず家に連れてかえるか……

四十話 並行世界からの刺客 後編（後書き）

ヴェ「今回の話がややこしかった人は拳手してください」

ジ「ややこしすぎるんだが……タイムパラドックスとか出すなよ」

ヴェ「だってこれを出さないと劇ナデでアキトがこんな感じにするかもしれないじゃないか」

ソ「そんなに完璧に過去移動出来るんですか？」

ヴェ「半分はご都合主義だ……ソルに演算ユニットがあることになってるから。水橋様、デステイニープラン様、ライ様、Laptop様、感想ありがとうございます。デスプラ様より熱気バサラが歌った曲全てが入ったCDをいただきました」

ジ「ファイヤーバルキリーが思ったより活躍しなかった気がする」

ヴェ「まあブラックサレナを出したからしかたない。私はブラックサレナは出ていれば必ずエース級として使いますし……まあ基本的に弱い時なんてないんですがかなり改造しますからね」

ジ「ACEPでも使ってるもんな」

ヴェ「ちなみにこれ書いててドラえもんはどうなるんだろうって思いましたよ、本当」

ジ「まああれは……ご都合主義だ。きつと」

四十一話 もはや単位の無駄遣い 前編

（家）

「……とりあえず、この娘をどうするかだ」

俺は少女の方を向いて言う。

家に連れて帰ってきてベッドに寝かせたはいいがどうすればいいんだろうか……今だに目を覚まさないしな

「私には分かりませんね。マスターが決めればいいじゃないですか」

……そんなこと、言っただってなあ。

決められないから聞いてるんだよ。

「まあとりあえず、目覚めるまではここに……」

と話していたら少女が目を開けた。……起きたな。

周りをきよろきよろと見渡している。

そして俺に視線があつた。

「あの………すみません。ここはどこですか？」

………予想はしていたがやはり洗脳時の記憶はないか。まあその方がいいだろうな。

「ここは………えっとまあ俺の家だ」

たぶん少女の世界じゃないだろうから異世界だろう。だが、そんなこといきなり言っても仕方ないからな。

「私はなんで、ここにいるんでしょうか？」

……念のために記憶を確かめるか。

「何も覚えてないのか？」

「……はい。自分の名前とあとこの子、桜花刃だけです」

首にかけてある鍵を俺に見せるように持つ

……本当に覚えてないのか。まあわざわざ嘘をつく必要もないだろうが。

「君は俺の家の前で倒れていた、だから助けた、それだけだ」

流石に本当のことを言うのは酷だからな、洗脳されたとはいえ虐殺までしたなんていうわけにもいかない

「……そうですか。ありがとうございます、ご迷惑をおかけしました」

そう言って立ち上がろうとする。

「……どこか行くあてでもあるのか？」

それを止めるように俺は話しかけた

「……ありませんけど」

まあそりゃそうだ。

「まあ待て、さっきまで倒れていたんだからもう少し休め」

「でも……」

「でも、じゃない。休め、無理したって何の得にも「異物が出現しました」……こんなときにかよ。まあいい、とりあえず俺が戻ってくるまでは休んでおけ。行く当てもないんだろ？ さてと、ゲート発動」

俺はゲートを出現させて中に入った

く 巨大な水の星く

……ゲートを出た先は水の中だった。

クツ！？ 早く水上に上がらないと息が出来ない！！

しかも喋れないからセットアップも出来ないじゃないか！？

俺が苦しそうにもがいていると

「マスター、息できますよ」

その一言……マジで？ 恐る恐る水を吸ってみると、水ではなく空気が口に充満した。

何故、水の中で呼吸が出来るんだ？

「当然ですよ、一応、マスターは神の眷属です。それが溺死するとか悲しすぎますよ」

……まあ言われて見れば納得できるような出来ないような。まあ助かったからいいか。

「！？ 後ろ、見てください！！」

俺がソルの言葉で思わず、後ろを振り向くと

家にいるはずの少女が溺れていた……何故？

「マスター！ 早く助けないと！！」

ハッ！？ そうだ、何故ここにいるかなど考えている場合じゃない！！

「ソル！！ 中に入れる機体になれ！！」

「え？ たとえば何ですk「何でもいい！！ 早くしろ！！」了解しました！！」

ソルが擬人化し、紅蓮色の装甲が展開され、全項がいつきに伸び8メートルくらいはあるであろう

形状は人型から頭をとって胴体の部分に顔とサングラスを付けた
1、5頭身くらいの機体 グレンとなった。
……だがな

「何で実物大なんだよ!？」

「そんな細かいことより早く!!」

グレンの口が開き、中の操縦室が姿を現す。

……何で水が入ってこないんだ? ……まあいいか

俺は急いで操縦室にのりこみ、操縦席に少女を座らせる、一息つく。

何か慌ただしいな……しかも衣服が水を吸って肌にまとわり付いて気持ち悪い。

「少女は大丈夫ですか？」

ソルの声が操縦室に響く。

「大丈夫だ。問題ない……ってこの台詞はまずいな」

まあ大丈夫だが……念のために回復魔法でもかけておくか？
と考えていると少女が目をあけ

「……」どこですか？

……手のかかる娘だな。

「ここはグレン……まあロボットのなかだ。で俺はお前に寝ていると言ったはずなのに何でここにいるんだ？」

俺の言葉の少女は困ったように愛想笑いをして

「……空間に穴が出来ていたからつい近づいたら吸い込まれたんです」

……そういえばあの後、いきなり水の中だったからゲートを閉じるのを忘れていたな。

俺にも責任があるか。

「……そうか。だが、ここまで来てしまったなら悪いが俺のすることにつきあってもらうぞ」

ゲートは一度、開くと10分くらい開けないからな。

「することって何ですか？」

……なんと言おうか。説明が難しいな

「まあとりあえず魔物退治とでも思ってくれ」

俺の言葉に少女はよくわからないと言つ様に首を傾げる。

「マスター、何か巨大な壁があるんですか」

そこにソルが話しかけてきた

「巨大な壁？ 迂回すればいいだろ」

そんな当たり前のことを聞くなよ……

「いえ……それが迂回するには大きすぎるんですよ。それにおかしなことに生体反応があるんですよ」

何？ 生体反応？ 壁にか？

「何かの間違いじゃないか？ スクリーンに映せ」

「了解しました」

そこには眼前に赤い壁。そしてそれはソルの言ったとおり俺達の行く手を遮るように全ての方向に地平線のように聳え立っていた。

「すごい……」

少女が感嘆の意を漏らす。

「何だこれは……ソル、一度攻撃して見る」

「了解しました。……私は普通はこんな風には叫びませんがまあいいでしょう……俺を誰だと思ってやがるキィイツクウウウウ！
！！」

ソルがその巨大な壁にと強力なとび蹴りを喰らわせる。

しかし、壁は微動だにしない。やはり無理か

「でも思ったより固くはな「何だ、てめえらは？」……え？」

ソルの意見を遮るように俺達三人意外の音が水中に響く。

「そんな大ききさでこの俺様に攻撃してくるとは覚悟は出来てるんだよなあ？ カウダ！！」

そんな声が再び水中に響き、眼前の壁がつごめきだす……おいおい、まさか

とか考えていると壁がこちらに向かってくる……まずいな

「ソル！！ 避ける！！」

「駄目です！ 範囲が広すぎます！！」

……そりゃそうだな。視界に見える限り全て壁だからな。しかたない

「回避する、くひらめき>!!」

俺のくひらめき>によってグレンを壁の一部に穴で通り抜けるかのうとく通りぬけていく。

「アアアン？ 確かに当てたと思ったがな……小さい奴はうつとうしいな」

……今の言葉で確信したぜ。こいつは……

「ソル、前に聳え立つのは壁じゃない。リヴァイアモンだ!!」

「リヴァイアモン？　なんですか、それ？」

俺の言葉にソルが疑問を投げかけてくる

「惑星をも飲み込めると言われている怪物だ！」

「そうですね……この機体じゃ勝てませんね。変更します？」

俺の返答を聞き、ソルが意見を言う。

それは俺もそう思う。だが……

俺は少女の方を見る。……機体を変えたら水中に放り出すことになるな。

……そういうことも考えろよ。それとな……

「俺は高みから人を見下ろす奴が気に入らないんだよ……こいつには少しお灸をすえてやる。ソル、俺も出る!!」

「了解しました」

グレンの口が開き、そこから俺は外に出る。

「ソル、セットアップ!!」

俺は光に包まれ、赤の装甲をし、ずんぐりむっくりの形をし、でかい顔に脳をむき出しにして、腕と足をつけたような一頭身の機体ラガンとなる。

「ハハハ!!!　何だ、その変な形の弱そうな奴は？」

水中に声が響く……このラガンを変な形だと？
こいつ……許せないな！！

「お目にお灸をすえてやる！！ ソル、行くぞ！！ あと、えつ
と……その女の子も身をかがめろ！！」

「え？ 何ですか？」

俺はその言葉には答えずに腕と足を収納し、顎の部分にドリルを
出現させ、ソルの頭をぶち抜いた。

ドリルはどんどんソルの頭の中に入っていく

「キヤア！？ ド、ドリルが！？」

操縦席の少女の頭の上まで貫通する。

そして以前の足と腕をぶち破るように新たに長くなった足と腕が
出、機械の翼が発生する。

そして最後に脳の部分に兜が発生し全項が20メートルくらいに
なる。

「おい！ 俺に合わせて叫べ！！」

俺が少女に叫ぶ

「叫ぶって何を！？」

「頭に浮かんだ言葉をだ！！ さあ行くぜ！！ 昨日の敵で運命さため
を碎き、明日の道をこの手で掴む！！ 宿命合体！！ グレンラガ

ン！！！ 俺を誰だと思つてやがる！！！！ …… つて何か言えよ！
？」

「だつていきなりそんなこと言われても！？」

俺の言葉に少女が講義する。

普通なら無理だが、俺が……いや、俺達になった機体 グレン
ラガンなら出来るはずだ！！ 多分

「アン？ もしかしてそんなんで俺と戦おうとも思つてんのか
？」

だが、リヴアイアモンは余裕を見せ付けている
まあまだ大きさが違いすぎるからな

「だがその余裕、いつまでもつかない？」

巨大な顔が出現しグレンラガンとなっている俺達を食った。
いや正確には飲み込み、中の操縦席に入れた。
そして俺は操縦席に座り

「ギガドリル！！ スピン！ オン！！」

前にある台の穴にドリルをぶち込む。

その時に台がひび割れ、穴にドリルが吸引される。

そこにあるのはグレンラガンをパイロットにして操縦する、人型
をして銀を基調とした機体

「因果も定めも突破して！！」

「えっと……命の叫びが銀河に響く!!」

「怒涛合体!! アアアクグレン、ラガアアアン!!!」

そう、その名もアークグレンラガン。

サイズも全項13キロというグレンラガンを全く問題にしない大きさである。が……

「だから、どうしたああ？ 所詮、その程度、俺が叩き潰してやる!! カウダ!!」

リヴァイアモンが叫び、再び眼前の壁がこちらに向かってくる。

しかし、今の俺には奴の全貌とはいかずともある程度までは奴の体を視認できる!

そうか……俺の前の壁は奴の二つに枝分かれしている尾の一つの先端だったのか。

体ならともかく奴の体格のわりに細い尾ならば

「来い!!」

俺はファイティングポーズをとり、周りにエネルギー 螺旋力

を纏い

「アアアクグレンラガン、フルパワアアア!!!」

左ストレートを向かってくる奴の尾にぶち当て、力が拮抗する

「何!？」

リヴァイアモンが自分の攻撃を止められたことで驚きの声を上げる。

「ただだぜ!! 時空裂断!!」

「え、えっと、バアアストスピニング!!」

「「パアアンチ!!」」

俺は奴の尾に右腕でアツパーパンチを食らわす。

その威力に尾の先端がちぎれる。

そしてそのちぎれた先端部は俺の螺旋状のエネルギーに飲み込まれる。

その螺旋状のエネルギーはなんと時空間の壁を砕き、奴の尾を時空の彼方へと吹き飛ばした。

「キサマアアア!!!!」

リヴァイアモンが怒り狂う。

「ここからお前に絶対的な力を見せてやる!!!!」

俺はそう叫んだ。

四十一話 もはや単位の無駄遣い 前編（後書き）

ヴェ「まず最初にグレンラガンのサイズはとある動画のグレンラガンのサイズの検証を用いています。あとリヴァイアモンのサイズは推測です」

ジ「適当だな……」

ヴェ「だってデジタルワールドを飲み込めるってことは惑星を飲みこめるのと動議でしょ。ちなみにそのサイズを検証すると口だけで1億キロくらいいいくらいです」

ジ「でかいな」

ヴェ「思っていないだろ、お前」

ジ「さあな」

ヴェ「水橋様、清浦刹那様、ライ様、L A P T O P様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。清浦刹那様から夜天光を、デスプラ様からレジエンドガンダム、クシャトリヤ、リボーンズガンダムオリジン、高機動型ブラックサレナ、夜天光を頂きました」

ジ「例え鎧を纏おうと……心の弱さは護れないのだ!!」

ヴェ「夜天光とブラックサレナの一騎打ちの台詞か」

ジ「あのシーンは好きだ」

「は」で「フ」

四十二話 もはや単位の無駄遣い 後編

「ここからお前に絶対的な力を見せてやる!!」

怒り狂うリヴァイアモンを尻目に俺が叫ぶ。

「何が絶対的な力だアア!! それは俺ダアア!!」

リヴァイアモンが吼える。

「弱い犬ほどよく吼えるよな」

俺はそれを挑発するように呟く。

「キサマラア!! 俺の尾の端を吹き飛ばしたくらいで調子に乗るんじゃないやねえええ!!」

リヴァイアモンが口から水色の光線を発射してくる。
その光線はもちろん半端なく大きい

「駄目、避けれない!？」

少女が悲鳴を上げるが

「<不屈>!!」

俺は不屈をかけ、超巨大な光の奔流に飲まれる

「グハハハハ！ 所詮はこれがお前らの限界だアア！！ って何だとオオ！？」

光の奔流が通り過ぎてもまだ健在している、いや、ほぼ無傷の俺達を見てリヴァイアモンは驚愕する。

「言っただろ？ 絶対的な力を見せてやると。……そういえば君の名前って何だ？」

俺は少女に話しかける。

「私ですか？ 私は美咲。高木 美咲です」

「そうか、わかった。ソル！ 高木！ いつきに行くぞオオ！！」

「「はい！！」」

再び、今回は飲み込む側だったアークラガンが飲み込まれる。そして黒を基調とし両肩にドリルをつけた人型の機体が姿をあらわす。

「友の思いをこの身に刻み……無限の闇を光に変える……！！ 天上天下！ 一騎当神！！ 超銀河アア！！ グレンラガン！！！！」

もはやそのサイズは高さだけならリヴァイアモンよりも巨大である機体。

その名も超銀河グレンラガン！！

「ば、馬鹿な！？ 俺に匹敵する大きさだと！？」

リヴァイアモンが俺のサイズに驚き声を上げる。

おそらくこいつは自分よりも大きい、いや自分と大して変わらな
い様な大きさの奴などいるわけがないと思っていたんだろうな。

その思い上がり……後悔してもらおう!!

「人間の力……見せて……やるぜ!!」

そう言っただけで俺がリヴァイアモンに近づいていく。

「く、来るなア!!!」

リヴァイアモンは巨大な口を開け、青き光線を連射してくるが
その光は俺に当たっても傷一つつけられない

「どうなってるの!?!」

「強力な螺旋フィールドが敵の攻撃全てを無効化しています!!」

「当然だ!!! そんなものが、効いてたまるかアア!!!」

俺が叫ぶ。そしてそれに答えるように顔と胴体部分についた小、
大、二つのサングラスが俺の前に飛び出し合体し、一つのサングラ
スとなる。

「グレンブーメラン!!!」

それを握り

「超銀河!!! 大! 切! 断!!!」

一気に投擲する。

それは回転しながらリヴァイアモンに向かっていき尾の部分を根元から切り裂く

「グワアアアア!? お、俺様の尾ガアアアアア!!!」

「まだだぜ!!!」

二つのドリルが肩から外れ、連結し少し変わった形のドリルになり俺はそれを装着する。

「覚悟しろ!」「マスター! 異物はリヴァイアモンじゃありません!」「はあ!? 何言ってるんだ、お前は?」

俺がドリルで奴を倒そうとしたところ、ソルがわけの分からないことを言ってきた

「分かる様に説明してくれ!!!」

「とりあえず、倒さずにリヴァイアモンの動きを封じてください!!!」

最初からそう言えよ!!! まあいい

「分かったぜ!!! <てかげん>すればいいんだろ? 超銀河!!!」

俺の右手からつながっている巨大ドリルが高速回転する。

「ギガアアアドリルウウウブレイクウウウ!!!」

そのまま、リヴァイアモンに突っ込む。

本来ならばドリルによってリヴァイアモンは粉々になるはずだが、
くてかげんゝの力でドリルは体の表面を削るだけである。

がその力は本来ならばリヴァイアモンなど粉々にする力である。
弱められていてもその力は恐ろしい物だろう。

「き、キサマアアア、許さん!!! 許さんぞオオ!!! ロスト
ルム!!!」

リヴァイアモンは尾が切り取られたことの怒りにぶち切れて本来
ならばまともに動けないダメージなのに自分の体に鞭撃って巨大な
口を顎が外れるくらいまで開け、全てを飲み込むかのごとく何もか
も吸い込んでいく。

その吸引力に周りの水がどんどん飲み込まれていく。だが!!

「馬鹿な!? なんでキサマは吸い込めねんだ!?!」

その吸引力をもろともせず俺は仁王立ちしていた。

「なめんじゃねえ!!! 俺を誰だと思っやがる!!!」

「グッ!?!」

だが、それでもリヴァイアモンは俺を飲み込もうと思っているの
か吸引するのをやめない

このままやるとあいつ死ぬぞ……

「マスター、倒すべき物はリヴァイアモンじゃありません！」

「そんなこと言ってもあいつが自殺しようとしてるんだが……」

「それでも可哀想だよ……それに元はと言えば私達から攻撃したんだよ!? 私達だって悪いよ!」

……確かに正論だな。

「だが、どうやってあいつを止めるんだ？」

「……それは……そうだけど。……それでも!」

俺は内部にいる少女を見る。

その目から強い思いがひしひしと伝わってくる……しかたないな

「分かったぜ、そこまで言うなら助けてやる! ウオオオオオオオオオオオ!」

俺はドリルで地面を掘るように水を掘ってこの巨大な星を脱出する。

そして俺達が今までいた星を見る。それはほぼ全てが水で中心の部分だけ黒い球体がぽつんとある。

……なんて巨大な星だよ。まあリヴァイアモンが泳げてる時点で半端ないのは分かっているが

……リヴァイアモンがまるで水族館の巨大な水槽の中のサメの餌の魚みたいだな。

でかいし、この星が全て水でできているから見えるんだが中ではリヴァイアモンが未だ、吸い込むのを止めない。

もはや意地なんだろうな……止めさせるの無理じゃね？

「分かりました！！ マスター、この星自体が異物です。この星を破壊しましょう」

ソルが俺に提案してくる。

「いくらなんでも無理だよ！！ こんな大きな星……破壊できるわけがないよ！！」

高木がそれに反論する。実際、俺達が入っていても自由に動き回れたくらいの大きさだ。

「ちなみに大きさを計りましたが……約、10京メートルです」

注) 数字に直すと10の17乗 100000000000000000
00000kmです。

ちなみに10に12乗が兆です BY作者

「……それってどれくらい大きいの？」

「大きすぎて例えても分からないと思いますよ……とりあえず光の速度でもこの星の直径の距離だけ進むには1万年くらいかかりますね」

「……光って一年にどれくらい進むの？」

「一年に約9億 5千万kmです」

「……とりあえずすごいということだけは分かったよ」

「それは何よりです」

「話は終わったな。じゃあ行くぞ!! あ之星を……破壊する!!」

ソルと高木の話が終わったところで俺が二人に叫ぶ。

「こんな大きな星を破壊するなんて無理だよ!!」

高木が俺の言葉を不可能と言う。

「じゃあ、リヴァイアモンを救うのは諦めるんですか？ あ之星の中枢に強大なエネルギー反応があります。そのうち、爆発を起しますよ」

ソルが高木を諭す。高木は反論できずしばし黙った……俺はどっちでもいいんだけどな

「不可能を可能になんて出来るの？」

「なめんじゃねえ！ 無理を通して道理を蹴っ飛ばすのがグレンラガンだ!!」

俺の体が光に包まれ、信じられないほど大きくなっていく。

そしてなんと前方の星の直径とほぼ同じ大きさとなる。

そこで光が消え、赤を基調とした装甲、そして体のいたるところに鬼のような顔があり、体を螺旋の炎で纏った鬼神となる。

「すげー……すげーすげーよ……」

高木が感嘆の言葉を上げる。
グレンラガンだから当然だ!!

「因果の輪廻に囚われよう」と!

「残した思いがトビラを開く!!」

「えっと……無限の宇宙が阻もうと!!」

「この血のたぎりが運命を決める!!」

「天も次元も突破して!!」

「力で見せるぜ!! 己の道を!!」

「天元突破!! グレンラガン!!」

「俺達を誰だと思ってやがる!!」

最後に三人の声が重なる。

天元突破グレンラガンがここに光臨した。

その力はあらゆる物理法則を無視するというとんでもない機体。

「行くぞ!!」

俺の叫びに呼応する様に俺の右手がドリルになる。

「助けて見せるよ!!」

高木の叫びで左手には……金魚すくいを使う虫眼鏡のレンズの部分を紙にした様なやつ　ポイが、そして宇宙空間に小さなボウルが出現する……

「つておい……天元突破にそんなもの持たすな!!」

「だって素手？　で触っちゃったら弱っちゃうよ!!」

それは金魚だろ……仮にもリヴァイアモンだから大丈夫だろ……そんな俺の気持ちを知ってか知らずかポイを惑星の中にいれて、

「えええええい!!」

リヴァイアモンを一気に掬い出す。いや、救い出す。

そして水の入ったボウルの中に入れる。

「やった!!」

歓喜の声を上げ、今度は金魚お持ち帰りよりの袋を出現させ。その中にリヴァイアモン入れて、ゴムを腕にかける。

……もう何も言うまい……

「……行くぞ!!」

俺は右手のドリルを高速回転させ、

「これで……碎けるオオオオ!!」

惑星の黒い球体の部分、コアのような場所にぶち当てる。

そのコアは俺のドリルの前に碎け散った。

「これが……螺旋の力だ！」

「……袋、腕にかけたままだとしまりませんね」

「言うな、ソル」

黒い球体が破壊されたためか、星が圧縮されて小さくなっていき、消滅した。

「で、こいつをどうするかだ」

俺はリヴァイアモンを見て、言う。

さっきからこいつは一言も喋らないで震えている……多分。

小さすぎて見えない。……虫眼鏡でも出すか？ ……天元突破が虫めがね持つ……いやだな

「あなたが飼えばいいんじゃないかな？」

高木が無責任にもそう提案してくる……ってかよく考えたら高木もまだ自分がこれからどうするか決めてないよな……

「俺は無理だ。まずデジモンが何を食うのとか知らないし、大体こんな奴、飼えるところがない。それに一匹で暮らすなんてかわいそうたる。仲間のいるところまで連れて行って逃がす。それが一番だ。……だいたい金魚すくいするならその後のことまで考えないと駄目たる」

「……ごめんなさい」

高木がうつむく。……あれ？ よく考えたらいつの間にか他人行儀な話し方じゃなくなってるような……まあいいか

「……デジモンに詳しい奴を知ってるからそこに行こう。いざとなったら押し付ける」

俺は高木をこれ以上を非難するのは可哀想だと思い、そう結論を出す。

「……押し付けるって……」

「あいつだから大丈夫だろ。ということで行くぜ」

俺はドリルで空間に割れ目を作り、そこに入った。

四十二話 もはや単位の無駄遣い 後編（後書き）

ヴェ「もはや単位の無駄遣い あとちなみにポウルとかは天元突破の能力の搭乗者の想像した得物を取り出すという能力からです」

ジ「……あれはない」

美「いいじゃない！ 別に！！」

ヴェ「……ちなみに天元突破が最強ではなく、実はまだあと一機あります。水橋様、ライ様、デステイニープラン様、感想ありがとうございます。デスクラ様よりヨルムンガルド、ソーラ・レイ？、デイベニダド、アマクサ、第6使徒ラミエル（！？）を頂きました」

ジ「何、この小さいラミエル？」

ヴェ「ペットとして私が貰った物」

美「……生きてるの？」

ヴェ「生きてるよ」

美「そうなんだ……」

ヴェ「で次回はライ様とのコラボです」

ジ「リヴァイアモンを押し付けに行くっていう理由で行くのか」

美「……失礼だよね」

「ウエ」では

四十三話 押し売り……いや、金は取らないから押し付けか（前書き）

今回はライ様とのコラボです。

四十三話 押し売り……いや、金は取らないから押し付けか

〜一真の世界〜

俺は以前、召喚事故で飛ばされたことがある。その時の座標に空間を破り、入った。

そして一つの小さな惑星があった。

よく考えたらあいつって普通の世界からは閉ざされた惑星に住んでいるんだよな……

俺はリヴァイアモンを宙に浮かして、

「あの惑星に降りるぞ」

グレンラガンに戻って、惑星に近づく。

……そのときだった

「……そういえば、服がびしょびしょで気持ち悪いんだけど」

……そういえば忘れてたな。確かに気持ち悪い。

とか考えてると

「マスター、螺旋力がなくなりました」

……グレンラガンの螺旋力がなくなった……

グレンラガンのエネルギーである螺旋力は搭乗者の気持ちが高ぶってるほど高まる。

だが、逆にネガティブな精神状態になると行動不能になってしまう

……今、俺達は少しネガティブな感じだ。ってことは……

「……………落ちるなあ」

飛行能力を失くし、惑星の大気圏を越えて地面に墜落した……

ジークSIDE OUT

一真SIDE

ドツカアアアン！！！！！

俺が家の近くで寝ていると、いきなり地響きと轟音があった。

「五月蠅いな……なんだ、一体？」

俺が音のした方向に向かうと……巨大な機体が墜落したみたいで巨大なクレーターができていた。

……何だ、これは？俺がクレーターの中心に座っている機体の方を見ていると

「よう、一真」

機体から聞き覚えのある声が聞こえた。

すると、機体の頭が外れて、そこに足と腕が生える。

……誰だ、こいつは？

と思っっているとそれを察したのか、そいつが輝きだして俺の見覚えのある奴へと姿を変える。

「ジグ・クライン、お前か……」

正体は分かったな。じなら次は何でこんなことをしたのかだ

「おい、何だ、これは？」

「墜落事故だ、済まない」

……墜落事故かよ。まあそれでもだ

「何はともあれこれを何とかしろよ」

俺はクレーターを顎で指し示す。

……ん？ さっきの機体の胴体部分が消えている……

そしてそこには少女が二人……いや、一人は少女か分からないな、
まあとりあえず二人いた。
まあそれはいいか

「とりあえず、元に戻せ。話はそれからだ」

— 真SIDEOUT

ジークSIDE

弱ったな……リヴァイアモンの面倒を見てもらおうと思ったのにな……これでは物を頼める様な状況じゃないな

……そう都合よくクレーターを直すような機体もないしな……待てよ、アストラナガンならいけるか？

だが、こんなことにあれを使うのもなあ

「ソル、このクレーターを元に戻したいんだが何かいい案はないか？」

俺の近くに来ていたソルに聞いて見る。……何も思いつかないんだからしかたないだろ

「アストラナガン等は……どうですか？」

……やっぱそれくらいしか思いつかないか。

俺が真剣にアストラナガンを使うか迷っていると

「私が直すよ」

高木がそんなことを言ってきた

「直すってこのクレーターをか？」

「うん！」

高木は満面の笑みを浮かべ、自信満々に話す。

……そんなに自信があるというならやってみらおうか

「じゃあ、頼むぞ」

「任せて！ 桜花刃、セットアップ！」

高木の手には桜色の刀身をした、二振りの日本刀が姿を現す。

……刀でどうするんだ？

「私に力を貸して……滝桜」

高木は両手の剣を真上に投げる。

投げられた刀は上昇が終わり、切っ先を地面に向けて落ちる。

そして、剣は地面にぶつかると、だが弾き飛ばされるわけではなく
吸い込まれていくように溶けていった

「私達が落ちてきたのはなかったんだよ……以前の姿へ戻って」

地面が強烈に光り輝き、思わず俺は目を閉じる。

光が止んで俺が目を上げると、クレーターは跡形もなく消えてい
た。

いや、それどころか周りの地面と同じように芝生が生えている。

……何をしたんだ？

「元に戻したよ！！」

高木が再び、満面の笑みを浮かべて、話しかけてきた

「ああ……ありがとうな」

まあとりあえず直ったからいいでしょう。

「よし、ということであれを見てくれ」

俺は空に写っている袋に入ったリヴァイアモンを指差す。

太陽よりも70倍くらいの大きさだから宇宙空間においても普通に見える

「……リヴァイアモンか」

流石は一真。知ってるなら話は早い。

「お前に面倒を見てもらおうと思って」「断る」……即答すんなよ。
お前、確か惑星を30個くらい持つてるだろ？」

「あんなにでかいのが入る惑星なんてあるか」

……言われて見ればそうだな。どうしようか。いや、何とかなるな

「すめる惑星はなんとかするから飼ってくれるか？」

「面倒くさいから却下」

……面倒くさいってな。

これはいくら言っても平行線だな。なら……

「模擬戦をして俺が勝ったら、置いていく。お前が勝ったら持つて変える」

「ことわ「それなら置いていくぞ?」……分かったよ」

今回は負けるわけには行かないな……チート機体でいくか
じゃあ、グレ……いや、流石に自重しよう。あれは模擬戦で使え
るような機体ではない

ここは劣化版? で行くか

「ソル、セットアップ」

俺は全項が5メートルほどになる。

そして白を基調とし、胸部と両手の甲にある球体が目立つ「つ」
つとした形状の機体 ゼオライマーになる。

「ゼロ、SET、UP」

「STAND BY READY」

一真もデバイスを起動し、黒く重厚な鎧を纏い。背中には、表は
白く裏地は青いマントをつけた。

「ソル、EWAC装置を付ける。偵察しろ」

「了解」

俺の頭に一真の能力や可能なことが全て情報として入ってくる。

「メガフレーム」

その隙を狙ってか一真が巨大な炎の球体を俺に向けて、撃ちだす。

だが、その炎は俺に届くことなく空中で爆散する。
まああれはあいつの中ではかなり弱い技みたいだからな。防げて当然だ。

一真も俺が防いだのを特に気にしてはいないようだ。

「次元連結システム……冥王の力、その目に焼き付けろ」

俺の周りには既に次元連結システムによって全方位にバリアが張り巡らされている。

このバリアによってメガフレームを防いだのだ。

「<必中>させる！ 防ぐ術はないぞ。 <熱血>！！ 次元連結砲！！」

俺は右手を掲げると甲についている球体が光る。
すると一真のいる空間で爆発が起こる。

「ツツ！？……何をした？」

いきなりの奇襲にも驚かずに熱くならず何をしたか俺に聞いてきた。

まあ大したダメージはないだろうが

「何をしたかと言えば、俺の攻撃エネルギーをお前のいる空間に送り込んだ」

「そうか、だがしかけが分かれば「俺の次元連結砲には未来予知のOmega-Gain-Forceは無駄だぞ」何？」
オメガインフォース

俺は一真がこれから俺の技への対策としてしてくるであろう未来

予知の能力を否定した。

「俺の<必中>は撃てば必ず当てるようになる技だ。たとえ未来が分かっても回避は出来ない。お前もあるだろう?」

「そういうことか、なら長期戦は不利だな……速攻で終わらせる、ガルルキャノン、グレイソードセット」

一真の右手が青い狼の頭に変わり、左手がオレンジの龍の頭に変わる。

デジモン好きならたいして知ってるオメガモンの武器か。

「ガルルキャノン」

右手の狼の口から砲身が出て、そこから氷の魔力弾を撃ちだしてきた。

流石にこれは防ぐのは無理だな、今のままなら

「なめるな! <鉄壁>だ!」

俺は<鉄壁>を発動し、相手の技の威力を四分の一にし、バリアで防ぎきる。

そしてすかさず、次元連結砲を撃ちだし、一真にダメージを与える。

……せこい勝負だな。これはもう止めよう

「一真、お互いに最強の技で勝負だ!」

俺はこのくだらない勝負を打破するために提案した。

一真SIDE

……くだらない勝負か。まあ俺からしたら動機からしてくだらないがな。

だが、確かにこのままだと拉致があかない、ここは乗るか？
いや。ここは

「時を止めさせてもらう。Alpha - Gain - Force」

アルファインフォース

俺は時間を止めた……はずだが未だに次元連結砲が発動している。
しかもあきらかにジークは動いている。何でだ？

「それは時間を止めるんじゃないでなくて正確には敵の記憶を巻き戻す技なんだろ？俺に精神や脳などに影響を与える技は効かないぜ。精神防御があるからな」

俺の疑問に答えるように答えが返ってくる。

そういうことかよ……面倒くさい能力だな

「俺はお前の技が全て分かるからな。必殺技に対して対策をとるのは当然だろ？」

それはそうだな。だが、能力が分かれていても回避しようのない物もある。

『 ZERO - ARMS : カムイ、セツト 』

俺の手元に2メートルはあるであろう大剣　カムイが現れる。
それを俺は掴み

「カムイ、リミッター70%解放」

そのリミッターをある程度、解除しあいつに接近していき

「邪魔だ」

バリアをいともたやすく破壊し、あいつを斬ろうとするが消えた
…… 転移魔法の一種か。

…… なら避けられない攻撃をするまでだ。

「カムイ、リミッター完全解放。　スサノオモン、能力取得」

俺はカムイのリミッターを完全解放する。

この剣はリミッターを開放すれば因果関係を無視し、振れば必ず
当たり、どんなものでも切れる剣となる。

俺はジグを斬るために剣を振るう。だが、もちろん殺すつもり
はない。

急所…… どこだ？　まあいいとりあえず、死なない様に斬る。

「それを…… 待っていた!!」

俺のその考えを知ってか知らずかあいつの叫びが響いた。

一真SIDEOUT

ジークSIDE

一真は奴の最強武器である、カムイを発動させて俺を斬ろうとしている。

だが、これこそ俺が待ち望んでいた瞬間だ。
俺は鉄壁を解除し、

「<ひらめき>!!」

<ひらめき>を発動する。本来ならその力は全ての攻撃を回避する力だ。

だが因果を無視する剣の前だと総合ダメージの4分の1くらいは食らってしまう。

しかしそんな能力は今は無関係

俺の腕が切り裂かれて別れを告げた

「何だと……俺は腕なんて斬ってないはずだが……」

一真が驚愕の声を上げる。だがそれも当然だろう。

俺は回避するためではなく、より大きなダメージを食らうために<ひらめき>を発動した。

<ひらめき>の力を逆に使い、奴の斬撃をより深く受けたのだ。

これが俺の力を使うための必要条件だ。

だが、片腕を失くしてはもちろん勝てない。

もちろんそれについての対策はある。

「次元連結システム発動……そしてバリアジャケット変更」

その言葉と共に俺の腕は一瞬で再生した。

そしてその瞬間に俺の体が光に包まれ、全項が倍ほどの大きさになり、伝説の赤い巨神と呼ばれた恐ろしい機体　イデオンとなる。

「伝説巨人イデオン、推参」

俺は高らかに宣言した。

四十三話 押し売り……いや、金は取らないから押し付けか（後書き）

ヴェ「……今回こそは一話で終わらせようと思っていたのに後編に続く」

ジ「いちいち長く書くなよ」

ヴェ「どうしても長くなってしまうのが私だから。水橋様、ライ様、L A P T O P 様、感想ありがとうございます」

ジ「……相手の能力が分かることがこれほどのアドバンテージとは思ってなかった」

ヴェ「いや、こちらの情報を相手に与えないで、こちらだけが相手の情報を全て持っていたら力の差もかなり埋まる。現にガンダムはそうだった……まさかインパルスとシンが性能もパイロット技術もかなりの差があるフリーダムとキラを圧倒するとは思わなかった」

ジ「でもあれはキラの迷いとかもあつたんじゃないか」

ヴェ「それでも普通に考えてキラが負けると思っ？」

ジ「……思えない」

ヴェ「それが情報の強さということだ。ちなみに偵察は相手の行動パターンなども解析する能力もあります」

ジ「逆にそれだけやっても倒せないって言うのがな……普通の敵なら勝てるはずなんだがな」

ヴェーチート同士の戦いはしかたない。とりあえずライ様どうでしょうか？ 駄目だったら言ってください。直します、ちなみに喧嘩用の惑星のことだけはノータッチでお願いします。ややこしいので「

四十四話 押し売り……いや、金は取らないから押し付けか

俺はイデオンとなる。

こいつの力は自分のダメージや生きたいという意志に比例して力を上げる無限の力。

今の俺は先ほどの斬撃でかなりのダメージを受けている。
ならば

「この力……<直撃>させる。無限力よ、イデオ……その力を見せる！！」

俺の右手から白い光の粒子がビームのように伸びて、出来た閃光の剣 イデオンソード。

この剣はその光（＝運命・因果律）に接触すると両断される結果を得ると解釈できるといわれるほどの力を持つ剣。

全てを両断する剣にもなり得る。

まあ流石に実際にそれほどの力は出せないがな……死ぬ間際に生きたいとか願ったり、暴走したら分らないが

「カムイ、リミッター完全解放。 スサノオモン、能力取得」

すると一真もリミッターを解除しカムイの刀身を天に向けて伸ばし、それが光の剣へと姿を変える。

これで勝負が決まる。俺はそう確信していた。

「イデオの力、受けて見ろ！ イデオンソード！」

「天羽々斬あまのはねはら！！」

俺達は同時に光の剣を振り下ろす。剣同士は拮抗するが……
少しずつ、だが確実に俺のイデオンソードが斬られていく。
……イデオンソードまで斬れるなんてとんでもない剣だな、本当。
だがその切れ味は分かっていたことだから驚きはなく、あきれる
だけだが。

俺は左手を一真の方向へ向ける。

「お前の剣が切れ味で勝るなら……こちらは二刀流だ!!」

左手からもイデオンソードが発射され、ビームのように一真に向
かっていく。

だが、俺の右手のイデオンソードに限界が来て、両断され、その
切っ先が俺に向け振り下ろされる。

そして二つの剣は両方とも相手に当たるすれすれの距離で止まっ
た。

「引き分けだ」

「ジグ、お前こうなるのが分かってただろ」

俺がさぞ当たり前の様に言ったからか一真が聞いて来た。

「……負ける気もしなかったが、勝てる気もしなかったからな。
これが一番、安全な策だったんでな。分の悪い賭けは嫌いだ」

どこかの鋼鉄の孤狼のパイロットのような真似は俺には出来ない。
……負けたらリヴァイアモンを持って帰らないと駄目だからな。
俺達は両方とも剣を消した。

「引き分けだから……そうだな、とりあえず一週間ほど置いてい

くから……」

俺が話していると

《……汝は我の意思に反する》

妙に野太い声が聞こえた。

「ん？ 誰か、何か言ったか？」

「俺も聞こえたが……お前の方から聞こえたぞ」

俺の方向から聞こえた？

《……事象の融合を破壊した者》

……どこだ？ どこから聞こえるんだ、この声は？

《……ゆえに破壊する義務がある。今後の脅威とならないために
……》

その言葉と共に俺は右手のイデオンソードが復活し、一真に向かうが

流石と言おうか、カムイでを出して防ぐ。

「何のつもりだ？ 引き分けなんだろう？」

一真が俺に問いたただすが……俺自身も戸惑っていた。勝手にイデオソードが復活し、右手が動いたんだ。さつきも俺にとってはずつけたんじゃない……ぶつかったんだ。

《我らには世界を守る義務がある……我は神なり》

すると今度は左手が勝手に動き、白き光が一真に向かっていくが、あいつは既に移動していたようで空を切る。

だが、無限力の力がどんどん上がっていく……これはまさか……

「ソル！ バリアジャケットの解除を！」

「何かしらの干渉で無理です……」

……しやれになってないぞ、これは。

「無限力が暴走した……一真、頼んだぞ……」

俺は全てを一真に託し、叫ぶ。人任せとか言うなよ……この場合、しかたがない

俺の頭の中には今、何でこんなことが起きているのかがほぼ分かっていた。

事象の融合を破壊した者、これは一真のことだ。

おそらく、あいつが以前、合成獣でも破壊したんだろう。

イデは事象の融合……要するに全ての物は一つになるべきと考えている。

サルファでも人類補完計画……全ての人を融合させることに賛成し、力を発現しなかった。

その考えに反する者には容赦はしない。それがイデだ。
この声はイデなのか？ ……これは考えてなかったな。
とか考えてると肩の砲座からミサイルが発射された。

ジークSIDE OUT

一真SIDE

無限力の暴走か……確かにさつさと倒さないと。
にしても事象の融合か……くだらないな、以前にもそういつのが
いたが

「パージシャイン」

俺を纏う様に邪悪なる者の攻撃を無効にする光の膜が出現する。
だが、ミサイルは膜をすり抜け、俺に向かってきた。

「……獸王拳」

俺は獅子をかたどった気を発し、ミサイルを破壊する。

「おい！ 一真、パージシャインは使うな！ 技の性質的に相性が悪い！！」

ジークが俺の使った二つの技が相性が悪いと叫ぶ。

「どういうことだ？」

俺がジークに敵のミサイルを回避しながら問いただと

「パージシャインは邪悪なる物の攻撃を無効にする……だが、イデは邪悪とは言いがたい力だ。……あと、カムイも駄目だ……今の状態だと破壊されたら世界ごと終わる」

……俺にどうしろと？ 生半可な攻撃は通用しない。しかもカムイは使わな……

それ以前に破壊するなって言われてもなあ……非殺傷設定の攻撃が効くのか、あれに？
試して見るか。

「デジタルライズ・オブ・ソウル」

俺は非殺傷で大量の魔力弾を打ち出すが、それらは全て、バリアによって打ち消される。

……面倒な注文だな、本当

「何か、他に方法はないのか？」

俺は次々と撃たれるミサイルを回避しながら聞く。
どうするかな……こうなれば時を戻るか？

「……ありますよ、一つだけ。他の無人の世界に連れて行けばいいんですよ」

俺がそんなことを思っているとソルが口を開く。
確かにそうすればこの世界に影響はないか。
だが、こんな巨体をどうやって連れて行けと？

「……ゲート、発動」

俺がどうするか考えていると空間に穴が開いた。
その大きさはちょうどあいつが入れるくらいの大きさだ。

「それに俺を押し込め。後は俺が何とかする！！」

分かりやすいな。ならば話は早い。
俺はカムイを再び、長い光の剣とし、あいつに向かって横切りにする。

それを防ごうとあいつの二本のイデオンソードがジャマをしようとするが

「暴走した力などに俺の剣が防げるか！！」

邪魔をしていた剣を両断し、あいつのバリアにカムイをぶつけそのまま、空間の亀裂に運んでいく。

そしてそれは到達する直前

「お前は来るなよ、後は俺が何とかするから」

……こういつときって何か裏があるんだがな。
だが

「ああ」

俺は一言返事で答える。

俺がそう考えているうちに空間の裂け目に吸い込まれていった。
どうするかは知らないが、何か考えがあるんだろう。

もう、俺に出来ることはないな。後はあいつの問題だ。

だが、そこで俺の頭に先ほどの言葉が脳裏によぎる。

事象の融合か……パーシヤインで防げないということは邪悪な
意思ではないんだろう。

あれはあれなりに世界のことを考えているのかもしれないな。

まあ、俺には関係ない。正しかろうが正しくなかりうが俺は俺の
道を行く、ただそれだけだ。

ジークSIDE

俺は転送された世界を見て、運がなかったと思った。
よりによって……俺の世界の宇宙とはな。

あの状態ではゲートを発動するのに必死で座標軸まで設定する余裕がなかった。

……この世界の神の代行者にされた俺がこの世界を破壊するわけにはいかない。

とりあえず、敵がいなくなったことにより、暴走は多少、収まっている。

しかし、いつ再発してもおかしくない。

そして再び、暴走すれば今度こそ止める術はない。

……最終手段だ。

「ソル、アストラナガンになって俺の存在をなかったことにしろ」

「!?!? 本気で言ってるんですか!?!?」

「……ああ」

もともと、俺はこの世界にはいなかった者だ。もし俺が元からいなかったことになっても

きつと代わりの奴が代行者になるはずだ。

「お断りします!!」

だが、ソルは俺の気持ちを知ってか知らずか反対してきた。

……俺だつて別に消えたいわけじゃない。だが、しかたないだろ

「……お取り込み中、失礼するんだけど、私が直そうか？」

「「はい?」「」

俺達の激しい口論をとめて、高木かこんなことを言ってきた。

俺達は思わず、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「淡墨桜」
シロクミツ

その言葉と共に球体の膜が俺達を包む。

あの時の膜と同じに見える。だが、消滅の力は俺を襲ってはいない。

「力を鎮めて……もう、あなたが倒したい人はここにはいないから」

その瞬間、俺の中のイデの力の暴走がなくなった。

……何が起きたんだ?

まあいいか、とりあえずはつと俺は一真に向けて、ゲートを応用

し、スクリーンを作る。
そこには一真の姿があった。

「一真、こちらは何とかなっただけ言っておく」

「そうか」

「所でだ、悪いんだが一週間くらいリヴァイアモンを預かってくれ」

「面倒くさいから「頼んだぞ」……」

俺はそこでゲートを消して、通信を切った。

……一週間経つても取りに行かないで置こうか

まあ、それは今はいい、問題は……

俺は高木の方を見る。

こいつだな……あの状態のイデを鎮めるなど単純な破壊力では不可能なはずだ。

能力を聞いてみるか？ いや、百聞は一見にしかずだな

「ソル、高木を偵察しろ」

「了解しました」

俺の脳内に高木の情報が全て入ってくる。

身長や胸のサイズや体重……どうでもいい情報がばっかだな、おいと、これか………は？

その能力を見て、啞然とする。

ははは………何だ………これ。

思わず、失笑してしまう。

とりあえず、リミッターを上げないとな……

四十四話 押し売り……いや、金は取らないから押し付けか（後書き）

ヴェ「まずは謝らせてください。実は前話の字数の関係上こんな
のになってしまいました。後半、コラボじゃなくなってるし……」

ジ「……最悪だな」

ヴェ「本当に申し訳ありません……」

ソ「ライ様、デステイニープラン様、水橋様、感想ありがとうございます
います。デスクラ様より、グレードゼロライマーとイデオン（笑）
をいただきました」

ヴェ「ライ様、本当に申し訳ありませんでした」

四十五話 龍……それは神聖なる生物……なのか？

「さてと……リヴァイアモンを取りに行くとするか」

昨日、イデが暴走してからどうやって飼うかを考えていたが妙案を思いついた。

一週間どころか1日しか経ってないがまあ早いに越したことはないだろうからいいか

「ゲート、発動」

俺は一真の世界に飛んだ。

（一真の世界）

俺が一真の世界に着くと、一真がいた。

俺が来るのを察知してか……それともたまたまか。

まあそれはいいか。

「約束通りに取りに着たぞ」

「……無理やり押し付けといて約束か？」

……予想はしていたけどやっぱ怒ってるか。

まあ、勝敗は引き分けだったからな……勝ってないからなあ

「それについては謝る。俺もどうやって飼おうかとかを考えていたんだ。一日だけですんだし許してくれ」

「はあ……まあ何でもいいが早く持って帰ってくれよ」

一真は面倒くさそうに答える

だが、まだ飼うには決定的なものが足りない。後は……

「持って帰るがお前も来てくれ」

ジークSIDEOUT

何で俺が行く必要があるんだ？

ジークが持つてきたんだから持つて帰るのも一人で行けるはずだ
る？

「いや、実はな……何を食べさせばいいか全く分からないんだ」

……そんなことが。

「俺が口頭で言うてやるから他の世界でとってこい、これで問題は解決だ。……しかし、どこにあんなでかい奴が住めるようなところがあるんだ？」

俺が率直な意見を言うつと

「リヴァイアモンが住める所は見つけた、そこでだ。リヴァイアモンの餌が自然に出来る生態系を創りたいんだ。協力してくれ」

……そういうことか。しかし、あいつが住めるような場所よく見つけたな。

「別にそんなことをしてやる義理はない」

「まあそうなんだろうが……そうなると今すぐには持つて帰れな

くなるんだが」

それは困るな。一分一秒でも早く、連れて帰って欲しいからな

「……しかたないか」

俺は嫌々、返事する。

「悪いな。よし、ゲート発動」

ジークは空間に穴を開きそこに入る。俺も入り、世界を飛んだ。

〈何もない世界〉

で飛んだところは空は白く見渡す限り巨大な海だけしかないところ

「一真、生態系を創るのにどんな奴がいるのか教えてくれ」

さっさと終わらせるかな。こんな殺風景な場所にいたくはないしな

↳ 4時間後↳

他の世界から連れてきたり、環境を整えたりして、何とか生態系は創れた……しかし、あれだな。

もはや大掛かりなら栽培魚業だな……

まあこれでやっと……とか考えていると

「この世界に異物が出現しました、マスター」

ソルが発した言葉の中のキーワードに反応する。異物？

「何だ、それは？」

俺が気になって聞くと

「簡単に言うところの世界に不必要な存在だ」

「ということとは破壊すればいいんだな？」

「ああ……ってよく考えたらあいつらと戦ったら、苦心して創った生態系が壊れるかもしれないじゃないか!？」

何？ んなことさせるわけにはいかねえな。
被害が出ないうちに倒すか。

「どこにいるんだ？」

「北の方向に見えていますよ」

俺達が北の方向に振り向くと

「メタルシードドラモンだと？」

50体くらいの翼のない機械で出来た金色の龍　メタルシード
ラモンが海上に体を半分ほど出しながらこちらに向かっていた。

何で、あんなにいるんだか……究極体だろうが

まあでもあれくらいなら俺一人でも余裕だな。でもまあ折角二人
なんだ

「行くぞ、ジীগ」

「ああ」

俺達は既にセットアップしており、俺はいつものアルファモンの
黒の鎧、ジীগは蒼を基調とし、二枚の翼は朱雀、左手には対極図
の描かれた盾をつけ、右手には如意金箍棒を装備している全項が5
メートルほどの機体　真・龍虎機になっている。

しかし、敵も味方も機械の龍か……

「ゼロ、ドラモンキラーを」

「了解だ」

俺の両腕には三本の爪が付いた黒い手甲　ドラモンキラーとなる。

これは相手が龍ならば絶大な威力を発揮する。

まあ、龍相手じゃなくても普通に強いがな。

二体の機械龍が集団の先頭を担って俺に突っ込んで来た。

「邪魔だ、失せろ」

二体の首をすれ違いざまに両断する。

そのまま、集団に突っ込み、ドラモンキラーを消し、

「パーガトリアルフレイム」

掌から紫の炎を出し、一気に5体を炎上させる。

……しかし、あと45、いやあいつも倒してるみたいだから……

まあ、それでもあと40体はいるな

一撃で終わらせるか。

「時間を稼いでくれ」

「何か策でも……まあお前が何もなしでそんなこと言うわけもな
いか。わかった」

その言葉を聴いて、俺は魔力弾を形成し始めた。

一真SIDEOUT

ジークSIDE

時間稼ぎか、まあこの機体ならば余裕だな
全てのメタルシードラモンが鼻先の砲台に光を集める。
奴らの向きからして半分は俺に、残りは一真に向けてだ。
だがな、

「時間を稼いでくれと言われたんでな」

右手の如意金箍棒を消し、盾を前に浮かし、印を結び、盾に力をぶつけ、そのまま俺は盾と共に駒の様に回転する。

そして、回転が終わると盾は二つの鏡になっていた。

「行け、武鱗甲!!」

二つの鏡が動き出す。その瞬間

「……アルティメットストリーム!!」

奴らのチャージが終わったようで光線を撃ちだしてきた。予想通り、半分は俺に来た。

だが、その光線は俺に当たらずにバリアである、念動フィールドによって防がれ、消える。

そして一直に向かっていった光線は俺の飛ばした二つの鏡によって跳ね返され、反射して、機動をそらした。

その間に一直は魔力を圧縮し続けている
……何か嫌な予感がするんだよな、あれ。

と考えてると一直が魔力を開放しようとする。
ちよつと待て……俺が近くにいるんですけど

「……<ひらめき>」

「ファイナルシャイニングバースト」

凝縮された魔力が一気に開放され大爆発を起こした。

その爆発は非情に、いや非常に強力で残っていた全てのメタルシードラモンを跡形もなく消していた。

ちなみに俺も巻き込まれそうになった……<ひらめき>がなかったら喰らってたな。

「なあ……俺のことも考えろよ」

「避けれたんだからいいじゃねえか。それに敵は全滅したぞ」

……あれか、結果が全てってやつか。

……結果を出しているからあまり言えないか。

俺も結局ダメージないしな

そう考えていると俺の目に予想外な物が写った。

「一真、あれを見る」

俺は一真の後ろを指差す。

そこには超巨大で雷を纏った白き龍　真・龍王機がいた……いつの間に

「でかいな」

「あれって確か万里の長城に匹敵する長さらしいぞ」

「……万里の長城の長さってどれくらいだ？」

「8851kmですね」

一真の問いにソルが答える。

……数値化するとあまり大きく感じないな。天元突破と比べるとなあ。

比べるのが間違ってるかもしれないが

とか考えてると竜王機の口に雷が溜められる。

雷撃か、そんな鈍重な攻撃が当たると思ってるのか？

俺は回避しようとするがそこであることに気づく

……待てよ。下は海、であいつの攻撃を避けると、角度的に海に

激突。

水は電気を通す。海水もそれは同じ。

あの雷撃が落とされたら……折角創った生態系、無茶苦茶になるよな。

一真もそれに気づいているようで回避行動を取っていない。

「防ぐぞ」

「ああ」

俺は相槌を打った

「念動フィールド、最大展開!!」

俺は念動フィールドを可能な限り、固くし

「テンセグレードシールド」

一真は両腕にブレスレットをつけて、シールドを展開する。

龍王は雷撃を放ち、それは俺達を襲うが二つの防御壁が阻む。

そして、雷撃は止み、龍王の電撃を防ぎきった。

もちろん、海には落ちなかった。

だがな……人の努力を無駄にしようとしたこいつは許さん。

「一真」

「……ああ、分かってる」

やっぱり同じ気持ちか、

「破邪の光よ、敵を撃て!!」

「ポジトロンレーザー!!」

俺は目から、一真は右手から光線を発射し、それは龍王の超念動フィールドを破って、直撃する。

「!?!?!?!?!」

「ここからが本番だ!百邪を討つため、四神の力、今ここに!!」

俺は武器を消し、両手に炎を灯し舞い踊る。

一真は両手を掲げ、周囲から光を集めるように魔力球を作り始めている。

「龍虎河車! 雀武周天!! 召喚、兜率八卦炉!!」

俺は龍王の真下に陣を召喚、そして龍王を転送する。

「乾! 兌! 離! 震! 巽! 坎! 艮! 坤!」

俺は呪文を唱え、兜率八卦炉を召喚する。

敵を円形に包むようにゼーレの皆様……じゃなくて8つの防壁が落ちてくる。

「真・龍虎王、奥義!! 四神真火八卦陣!!」

俺は全身が炎に包まれ、その炎から一つ、また一つと火の玉が兜率八卦炉の中に発射され、どんどんその数は多くなっていく。

そしてそれに比例して周りの防壁が円周上を回転していく。
兜率八卦炉の中にはそれら全ての火の玉が合体した巨大な火炎球
が出来る。

「ガイアフォース!!!」

一真も巨大な火炎球とも見えるようなエネルギーの球体を打ち出
した。

それは俺の作った火炎球の上に乗った。

そして、その二つの球体は合体して、兜率八卦炉に収まり、防壁
を超高速回転させ、爆発し、兜率八卦炉ごと龍王を破壊した。

俺は拝むように両手を合わせて、その爆発を空間ごと閉じた。

「さてと……それじゃありヴァイアモンを取りに行くとするか！」

俺はそう叫ぶと

「お前の力で転送できないのか？」

「一真がそう提案してきた……どうだろうか。試して見よう」

「よし、リヴァイアモン、召喚！！」

すると海に超巨大な陣が浮かんでそこから光の柱が天へと上がる。光が止むとそこにはリヴァイアモンがいた。

「……何事もやってみるもんだな」

俺が真・龍虎機の法術に関心していると

「じゃあ、俺は帰るぞ」

「一真がそう言うてきた……まあ頼みはもう終わったしいいか。」

「ああ、悪かったな。急に押しかけて」

「今度は面倒くさい様なことは持つてくるなよ」

「善処しよう」

「……パラレルモンの能力取得」

その言葉と共に一真は消えた。

さてと帰るか

「その前にリヴァイアモンのリンカーコアを取っておいては？」

「ナイスアイデアだな」

ということでした。リンカーコアを奪って帰った。

弱らないようにあまり取らなかつたがそれでもソル曰く……軽く
1000ページ分あるそうだ。

闇の書、完成できるな。

四十五話 龍……それは神聖なる生物……なのか？（後書き）

ヴェ「漢字の読み方は耳コピですので合ってるか分からない……と
りあえずそろそろA'Sを終わらせねば」

ジ「……まあぐだぐだしてるからな」

ヴェ「デステイニープラン様、清浦刹那様、うりあ様、感想ありが
とうございます。デスプラ様よりダン・オブ・サーステイを、うり
あ様よりマスタークロスを頂きました。今回のプレゼントには共通
点がある」

ジ「何だ？」

ヴェ「両方ともチートだ。ダンはKで半端なかったし、マスターは
APでやばかった」

ジ「しかし、やっと次話から話が進むのか……一体何話ほど進まな
かったんだ？」

ヴェ「11話ほど。まあ画くの楽しかったから。反省はしているが
後悔はしていない。あ、でも次回はまだ能力集です」

ジ「……龍王移山法」

ヴェ「あべし！？（山ほどの巨大な岩に押しつぶされる）」

ジ「……では」

能力説明第四弾

ヴェ「タイトル通りです。まずは高木の能力から。ジーク、頼む」

ジ「お前の言うことを聞くのはしゃくだが……まあ、いいか。ハアツ！（超巨大TVを殴りつけて腕をめり込ませる） エヴォリユダーの力、発動」

スクリーンに光が灯り、画像が映される。

高木 美咲

身長 157cm

体重 （本人のプライバシー保護のために写さない）

デバイス 桜花刃

能力・・・まずこのデバイスには二重にリミッターがかけられている。

リミッターなしの能力は以前に説明した2種類のモードと

日本刀の時のみ消滅の刃と化すことができる

消滅の刃は斬った部分がだるま落としのようにそこだけ消滅する。

だが、その特性からその状態では敵の攻撃を防ぎづらい。
剣の斬りあいも難しい（斬ったところが消滅するので相手の斬撃を防ごうとすると中が消滅して刀の先が飛んでくる、かと言って剣の頭を消滅させても大部分が残っているため斬られるから）

ヴェー「……面倒くさくなってきたので後はスパロボ風に書きます」

能力	
格闘	300
射撃	270
防御	10
技量	240
回避	380
命中	330

パイロット能力・・・斬り払い、消滅力（勇者とか炎的な機体の能力を上げるパイロット能力）

機体？ 能力

HP・・・5500

EN・・・450

運動性・・・180

照準値・・・180

装甲・・・500

能力 消滅の膜（小）、存在抹消（緊急回避）、EN回復（小）、HP回復（小）、精神弱者（敵からのP攻撃の効果が二倍）、リミットブレイク

性格 弱気

ヴェ「こんな感じ。消滅の膜（小）はなんにでも発動するフェイズシフト装甲。存在抹消は全HPの4分の1を消費して、いかなる攻撃も回避する能力です」

ジ「……防御低いな」

ヴェ「普通に戦ったらほぼ一撃、持って二発くらいしか耐えられない……マジンガーでもパイロット能力でリアルロボとスーパーロボの中間の能力になる。ってこれはネタバレか」

ジ「どうせ次回で分かるんだ。もう言ってしまえ」

ヴェ「……そうだな。美咲にもスパロボの機体を装着可能にします。限定的に」

ジ「詳細は次回。じゃあ、残りの能力も移そう」

リミットブレイク・・・気力140以上で発動。結果を自由にする能力を得る。有効範囲は美咲が作った膜の中。

これを使えば、例えば、相手が足を前に動かして、前に進んだを、相手が足を前に動かしたので相手は爆発して木っ端微塵になった、とかに変えられる。

他には自分が息を吐いたのでどこからともなくローエングリン砲が発射されたなど。

要するにほぼ何でも出来る能力。この中に入ったら最後、自分が動いてもその結果で死ぬことも考えられるので何も出来ない。相手の能力無効化の力が働いても、その結果も変えることが出来る。

ジ「……………」

ヴェ「チート？ な能力です」

ジ「……ちなみにこれは一応、外部からの幻想殺しとかなら一応、破壊は可能らしいが破壊すると……」

ヴェ「これ以上は言うな、流石に」

ジ「というか何でさっき疑問系なんだ？ 十分、チートだろ」

ヴェ「いや、私的にはこれは不完全チートだと考えている」

ジ「何でだよ」

ヴェ「……ぶっちゃけ、この能力は発動条件が厳しいから。ただ
でさえ、性格上、気力を上げづらい弱気。これでP攻撃で気力を下
げられたら発動できないし、しかもお前がリミッターなんて掛ける
から」

ジ「……………発動したら、P攻撃も効かないだろ」

ヴェ「発動出来たらチート。さて、折角だからジークの能力もス
パロボ風に」

格闘	・	・	1	8	0
射撃	・	・	1	8	0
防御	・	・	2	4	0
技量	・	・	1	9	5
命中	・	・	2	6	0
回避	・	・	2	3	0

能力・・・スパロボに登場する能力全部、強化パーツ付け放題、
援軍要請

ヴェ「戦闘が多かったので能力が上がり、カツ以下ってことはな

くなりました」

ジ「よし!!」

ヴェ「あと機体によってパイロット能力に修正があります。例えば、マジンガーなら格闘と命中と防御上がります。ストフリなら射撃と技量と回避に命中が上がり、防御が下がります。要するにその機体に適した能力へと変わります」

ヴェ「で最後に精神コマンド」

幸運・・・森羅万象全てが発動者の味方をする

ジ「一行で説明終わりってこれじゃわからねえだろ」

ヴェ「例えば、宝くじを10枚買ったら全てが3億円当たる……ではなくなんらかの手違いで一枚の価値が10億円になる」

ソ「その手違いが非常に気になりますけど……」

ヴェ「聞きたいか？ これ書いたら字数が増えるぞ。風が吹けば桶屋が儲かるって感じだから」

ソ「……やっぱりいいです」

ヴェ「他には自分の家がもし火事になったら雲ひとつなかった空が一瞬で曇り、半端ない量の雨がかき消す……ではなくボヤがおきた瞬間にたまたま家に忍び込んだ泥棒がそれに気づき焦って消火、そしてその後、泥棒も捕まる」

ソ「泥棒様、お疲れ様です」

ヴェ「敵が攻撃しようとした瞬間、人工衛星や隕石やメサイアやUFOが機動を外し大気圏内に落ちてきて、敵を襲うとか」

ジ「待て、それは色々とまずいだろ」

ヴェ「大丈夫だ、問題ない」

ソ「周りにははた迷惑な能力ですね」

ジ「……ある意味、これが一番チートだろ」

脱力……敵の戦意ややる気を根こそぎ奪う。

ヴェ「これを使うとSTRIKERSでヴィヴィオを救うために戦っていたなのも戦意を喪失して、ヴィヴィオを救うのを諦めます」

ジ「……………駄目だろ、それは」

ヴェ「でもこれはある程度以上の強さを持つ物や転生者やチートに対しては威力が上から三番目までの攻撃が使えなくなるに変わります」

ジ「どれくらい以上なら変わるんだ？」

ヴェ「ブラスターを限界まで開放したなのはを倒せる者くらいか
ら」

ジ「……少ないのか多いのか分からないな」

ヴェ「まあこんな所かな。何か、分からないところがありました
ら可能な限りお答えします」

能力説明第四弾（後書き）

ヴェー「さて、次回から本編を速さが足りてると言われる様なスピードで進めたい……でも無理そうです。しかも更新が送れそうです」

ジ「またか」

ヴェー「TOWが2月10日に発売なので……あと、皆様、知ってますか？ スパロボMXの主題歌であるVICTORYが日本代表が勝利した後、サッカーで流れたのを？」

ジ「結構、有名だと思っぞ」

ヴェー「あれが流れたときは我が耳を疑った……で、その後……」

ジ「日本の勝利した後のテンションの高さから夜中だというのに叫んだ」

ヴェー「……あれは近所迷惑だっただろうな。デステイニープラン様、ライ様、ロボッツ様、感想ありがとうございます。デスプラ様より、ラーズアングリフ・レイヴン、ランドグリーズ・レイヴン、シャツフルハートを頂きました」

ジ「ラーズアングリフというとOGよりAPを思いつく。アシユセイバーを選ぶと、敵になるがそれが弱くて助かった」

ヴェー「私のこの手が真っ赤に燃える！！ 勝利を掴めと轟き叫ぶ！！」

ジ「その台詞って確か、ガンダム無双でプルとミリアルドが強力して叫んでたよな」

ヴェ「あれで自軍フィールドと敵軍フィールドがぐちゃぐちゃになって面倒くさかった。では！」

四十六話 計画は早めに立てないと意味がない

〽海鳴町 上空〽

「どうだ、ヴィータ。見つかりそうか？」

「いる様な……いない様な」

「以前からたまに出てるあの魔力反応……あれを取ればかなり稼げるんけどな」

紅いゴシッククロリータの服装をしている三つ編みの少女 ヴィータと狼 ザフィーラが宙に浮いている

ヴィータは魔方阵を展開させて、索敵魔法を使っているようだ。

「こないだから時々、出てくる、妙に巨大な魔力反応……あいつが捕まれば一気に20ページくらいはいきそうなんだけどな」

「だが、本当にいいのか？ 魔導師から収集は極力避けるべきではないのか？」

「確かにそうかもしれない……でも、もうはやてにはあまり時間がないんだからしかたねえ」

「……そうか。なら分かれて探そう」

ザフィーラはそう言い残し、どこかに行った

ヴィータは焦っていた。ただでさえ、闇の書がはやてを蝕んでいる。

それなのにページ収集ははかどらない。それだけでも十分にもどかしいだろう。

だが、もう一つ、ヴィータには心ばかりなことがあった。

それはジューダスという少年の存在。擬似的とはいえ、はやてを殺し、自分たちの情報を何故かは分からないが知られている。しかもこちらはジューダスという名前以外はほとんど知らない。

確かにヴィータからすれば信用に値する人物ではなく、警戒すべき人物だろう。

……ジューダスが本当のことを言わないのはヴィータの性格のせいで本当のことを言っても信じないだろうと考えられたからなのだが。

「！ 見つけた！！」

ヴィータは探していた物を発見したようでそれがある方向へと飛んでいった。

〜ジークSIDE〜

俺は現在、エヴォリユダーの能力を使っている。
何故か、だと？ それは、俺がリヴァイアモンを海へと離して戻
ってきた後。

「高木、桜花刃を貸してくれ」

「どうするの？」

「少し調整するんだ」

「わかった、はい」

俺は高木から手渡しで桜花刃を預かった……さてと、じゃあやる
とするか

俺は高木の能力から調整という名目で桜花刃の機構を変えるため
にエヴォリユダーの力を使うのであった。

エヴォリユダーって便利だな、本当。コンピューターとか全く要
らないし。

すぐにプログラムを書き換えられるから

3時間後……

「よし、出来た」

「調整じゃなくて改造ですね」

「違う、これは改悪だ。お前のデータのうち、俺が絶対に使わないであろう機体を桜花刃に入れてリミッターにしたんだ。あいつの力の乱用を防ぐためにな」

「例えば、何の機体ですか？」

「……そうだな。男が使うと痛い機体、ヴァルシオーネとかアンジュルクとかか。まあコンセプト的にはペインキラーがぴったしだな」

「あれも改悪みたいな物ですね。そういえばデータを渡したらマスターはその機体にはなれませんけど私は関係ありませんよ」

「そうなのか。まあ、俺にはあんまり関係のない話だが。」

「さて、ここからが本題だ」

俺は真面目な口調になる。今から離すことは結構、重要な話だからな。

「何ですか？」

そんな俺の気持ちを露ほども知らないみたいでソルは軽い口調で返してきた。

「リンカーコアは全て揃った。ここで思うんだが、ヴォルケンリ

ツターとなのは達の邂逅を待たないで闇の書のバグを破壊すれば、
はやて達の罪は多少なりとも軽くなるはずだ」

「妙案でしたね。ただ残念ながら今はもう無理ですね」

俺の案をソルは過去ならば出来たと言ってくる。

「何で、今はもう無理なんだ？」

「既に現在進行形で邂逅していますので」

……なんだと？

「本当か？」

俺は嘘だったらしいなという希望を持って聞くが

「先ほどから二つの大きな魔力がぶつかり合っていて、それら二つは高町なのはと鉄槌の騎士の魔力反応です」

……あっさり打ち消されてしまった。

「タイムオーバーってわけか……というかそんなことになってる
なら言えよ……しかたない。ここまで行けば原作どおりに進める……
いや、多少は変えるか、現場に行くぞ。フェイク・パーソナル、
ソル、セットアップ！」

「了解です」

俺は姿をジューダスへと変え、黒のコートに帽子というか全体的

に黒が基調で所々に赤が少し混ざっている服装、腰にはリボルバー式の長い砲身を持つ拳銃　ロングトウームスペシャルを携えており、右手には銃口の下にブラスティング・ステーク（パイルバンカー）、銃床の上に刃を装備した複合マシンガン　ナイトファウルを持っていた。

要するにハーケン・ブラウンングの服装だ。

そして俺達は空を飛んで戦いの地へと赴いていった。

俺が現場に着いたらなのはとヴィータが戦っていた。

どうやら戦闘に夢中で俺のことは気づいてないらしいな。

……なのはがリンカーコアを奪われるところか。正直、もうこれ以上の魔力は要らないな。

だが、まあ奪ってもいいか。

多めにあっても損はないだろう。大は小をかねる。

過ぎたるは及ばざるが如し？　そんなの知らないな。

なのはがヴィータに向けて、5つの魔力弾を放つ。

介入するならここだな

「さあ、行くか」

俺の右手のナイトファウルが火を噴き、5つの魔力弾は一瞬で消え去った。

「邪魔するぜ、ヴィータ」

俺は全ての魔力弾が一瞬で潰されて、動揺しているのはを尻目にヴィータに帽子をとって話しかける

「お、お前は!？」

すると返事が帰ってきた。

「よう、ヴィータ。苦戦してるようだな手を貸そうか？」

「お前の助けなんているか!！」

即、断られた……まあ、どうせこう言うだろうと思ったがな。

「あれでもこんなことが言えるのか？」

俺は銃口をとあるビルの上に向ける。するとそこには魔方阵が出現していて、3人の魔導師と使い魔。

フェイト、ユーノ、クロノ、アルフが転送されていた。

「お前、俺の助けなしで1対5をやるのか？」

「チツ……私はこいつをやる。お前は他の奴を抑えてろ」

露骨に嫌そうだな、こいつ。まあいいか

「OKだ」

俺はヴィータにそう伝えて、フェイト達に接近し、

「よう。俺はジューダスだ」

帽子を取り挨拶する。

「誰だ、君は？ ……いや、あの少女の仲間の様だな。少し、話を聞かせてもらおうか。抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装の解除を」

4人に一齐に話しかけるとクロノが口を開いた。

だが、俺はその言葉に従う気はないぜ

「挨拶もしないのかよ、まあいい。断ると言ったらどうする？」

「力づくで聞くまでだ！！ ブレイズキャノン！！」

クロノが水色の少し巨大な魔力弾を発射してくる。

チャージ時間が短いわりには威力のある攻撃だな。だが、悲しいかな。

俺を倒すには役不足だぜ！！

「ロングトウームスペシャル！！」

俺は右腰に携えていたロングトウームスペシャルをとりだし、引き金を引く。

それはクロノの魔力弾を蹴散らした。

「何!？」

「いきなりだな。不意打ちのつもりだろうが……無駄だ! 喰らいな!！」

俺のナイトファウルが再び火を噴き、クロノに向かって何発かの弾丸が向かっていくが

「くっ!？」

クロノがプロテクションを発動し、バリアがそれを防ぐ。

だが、弾丸の威力は未だ衰えを見せず、バリアを撃ち貫いた。

そしてクロノに直撃……しなかった。とっさにユーノが黄緑のバリアを展開し、クロノを守った。

流石にバリアの二枚抜きには威力が足りないようで弾丸は全て消滅した。

まあ、ユーノのバリアが強力つてもあるだろうが

「あれを防ぐか。やるじゃないか」

「はあああああ!！」

「おっと」

俺が話しているとフェイトがバルディシユの魔力刃を鎌の様にして俺に詰め寄ってきた。

「俺が銃使いだと考えての接近戦か？　だが、残念だったな」

だが、俺はナイトファイルの刃を展開し、それを防ぎ

「俺は近距離も得意なんだよっ！！」

「!？」

バルディシユごとフェイトを前方へと吹き飛ばす。

そして追撃しようと銃口を向ける。

「ステインガブレード・エクスキュージョンシフト!!」

それを妨害するためか、無数の剣が襲い掛かってくる。

……まずはあいつから倒すか。

俺は無数の剣の雨を回避せず、むし自分から中につっこんだ。

「双覇龍の道着の前にはそんなもの……無駄だ」

俺は双覇龍の道着を^{インストール}装備しているため、常にダメージは10分の1になっている。

ただでさえ、威力を分散する攻撃がその力をさらに弱められればその威力はほばないに等しい。

剣は俺に触れた瞬間、砕け散っていく。もちろん、俺はダメージなど欠片もない。

そして剣の嵐を抜け、クロノに照準を合わせた。

「<くてかげん>はしてやるが今度は防げないだろ？」

俺は銃を連射する。弾丸はバリアを破り、クロノに直撃する。そのまま、俺は怯んでいるクロノに肉薄し、止めといわんばかりにナイトファウルのステークでぶっ飛ばした。

「どうだ？ ブラインドベットの味は……ってもう聞こえてないか」

クロノは前にあるビルにめり込んで、気絶していた。

先ほど吹き飛ばしたフェイトも同じように他のビルの上で倒れていた。

ユーノとアルフは気がついたらヴィータ、ザフィーラと戦っていた。

いつの間に来たんだ？

まあ、あいつらはたぶん、なのはを助けようとして、邪魔されているんだろう。

その間にヴィータがなのはのリンカーコアを招集し終わっていたみたいでなのはは気絶していた。

sh もちゃっかりとフェイトのリンカーコアを招集したみたいだ。

少し原作とは違うが……まあいいだろう。遅かれ早かれ盗られるんだ。

そろそろ潮時だろうな。これ以上は援軍が来る可能性もある。

《ヴィータちゃん、シグナム、ザフィーラ……それとジューダス君。目的は達したから逃げるわよ》

シヤマルから調度、念話が届く。

流石はヴォルケンリッターの策士だな。

全員、それに同意したようで空に向かって飛び立った。

……俺だけジャマー発動しとこう。追尾されたら面倒だ。

ということと解散し、家へと戻った。

「家」

「ジীগさん、私の桜花刃は？」

俺が姿を戻して、家に帰ると高木がおきなり尋ねてきた。
そつえば返すのを忘れてたな

「ほら」

「ありがとう。所で私が着れる服とかない？」

「お前が着れる服？ ……この家には俺の服しかないな。だが確かに必要だな。今日はもう遅いから明日、買いに行け……そうだ、ついでだからこいつの服も買ってきてやってくれ」

俺はソルを高木に見えるようにした。

すると、光が集まり、ソルが擬人化した

「私は別にこの服だけで十分ですけどね」

ソルは以前から着ている服を見ながら言う。

「流石に軍服と一着の服だけじゃ駄目だろ。ということと頼めるか？ 俺は服とかはさっぱりだからな。何が似合うとか全く分からないんだ」

「うん、分かった。じゃあソルちゃん、明日、一緒に買いに行こうね」

「そうですね、分かりました」

ちなみにこの会話で俺は

……ちゃんづけされてるがソルって女なのか？
と考えていた。

まあ、とりあえず、それはどうでもいい。

「ところでどこに行ってたの？ さっきまで魔力の反応があったんだけど」

……しかたない。後々、面倒くさいことになるよりも今、全て話しておいたほうがいいか

ということ俺がなのは達に関すること全てを話した。もちろん、異物についてはほぼノ・タッチ、悪の科学者が世界征服のための者と嘘をついた。

「……そうなんだ。よし、決めた！ 私も手伝うね！」

「いや、別に要らないんだが」

「居候するんだし、これくらいはさせて。それに人手は大いに越したことはないよ？」

それはそうだが……リミッター、かけたから力の暴走は大丈夫か

……

「分かった。なら手伝ってもらおう」

ということになった。そうだ、どうせ手伝ってくれるというなら

「なあ、お前ってアニメとか興味あるか？」

「アニメ？ ……覚えてないけど」

「なら一度、見て見る。お前の能力なら能力を知れば知るほど強くなれるからな」

本当にふざけた能力だぜ……アニメとか見て、新たな能力や技を見れば、それを使えるようになるから結果的に強くなれるなんてな。BLEACHでも見せて、鏡花水月を使えるようにさせるか。あれは色々使い道ありそうだし

俺はそんなことを考えていたのであった。

四十六話 計画は早めに立てないと意味がない(後書き)

ヴェ「デステイニープラン様、SRX、感想ありがとうございます。
デステイニープラン様より、サーベラス・イグナイト、ガラムレイ
ド・ブレイズ、メデイウス・ロクスを頂きました」

ジ「MXは途中までメデイウスがラスボスだと思ってたんだよな」

ヴェ「ああ、そしたらまさか、あいつとは思わなかった。後、サー
ベラスを後半まで無改造で進んでいた私がいる!!」

ジ「それでイグナイトに乗り換えるステージで三機のドラグナー共
々、残弾、EN共に空になって地上に降りてターン毎に5だけ回復
するエネルギーを使って地道にレーザーソードでなんとか全滅でき
たんだよな」

ヴェ「……あれは苦い思い出。後、世間は広いようですごく狭い
つてことを実感させられることができました」

ジ「ああ。……今回、初めて感想を書いてくれたのがリア友だった
んだよな」

ヴェ「私がこれを書いてるなんて言ったことないし、あっちも知ら
なかったから互いに驚かされた。……本当に世間は広いようで狭い
な」

ジ「まあそういうこともある……」

ヴェ「案外、皆様の周りにもこういう人いるかもしれませんよ」

ジ」……お前がたまたまだけだと思っぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9325n/>

神の代行者にされし者

2011年2月13日14時43分発行